

# Holy Kingdom Story

ゲソポタミア文明

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

鈴木悟（骨）が聖王国へ単独転移する二次小説

まあ何かと不遇な聖王国ですけども

せめて二次くらい：救いの一つや二つあっても良きにあらずや？  
つてな感じの作品です

# 目次

第1話	Where is this?	1
第2話	人は見かけによらない	12
第3話	デスナイト達の活躍?	29
第4話	聖王女はつらいよ	37
第5話	さまようネイア・バラハ	53
第6話	違うんです誤解です	65
第7話	何か忘れているような：	84
第8話	やっぱり忘れてた	99
第9話	ごめんね、カジツちゃん	115
第10話	// 漆黒の英雄 // 爆誕	136
第11話	安月給は辛いよ	156
第12話	気疲れモモン	168
第13話	漆黒聖典	185
第14話	天才姉妹の考察	202
第15話	PvP	216
第16話	オランダ・カンパノ	233
第17話	周りの動向	260
第18話	指名依頼	271
第19話	公道調査	290
第20話	I believe in you	300
第21話	亜人襲来	308
第22話	vs 豪王	323
第23話	想定外の遭遇	341
第24話	アダマンタイト級冒険者	361

第25話 アダマンタイト級初仕事

383

第26話 蒼の薔薇

399

# 第1話 Where is this?

DMMO—RPG《Yggdrasil》

それは西暦2126年日本のメーカーが満を持して開発した、仮想世界内を現実にいるかのように遊べる体感型ゲームだ。

ユグドラシルは北欧神話を大元とした世界観である。プレイヤーは人間種、亜人種、異形種など実に700種類にもなる豊富な種族から自身のアバターを作り、9つの広大な世界を自由気ままに探求し楽しむ事を最大の目的としている。運営側が余りにもゲーム情報を公開しない為、多くが不親切なほどに情報が無く、尚且つ馬鹿みたいな難易度や初見殺し要素が豊富であった為、プレイヤーからは「クソ運営」などと呼ばれる事は珍しくもない。

それでも『ユグドラシル』は世界中で絶大な人気と良くも悪くも数多の熱狂を生み続けていた。

深刻な環境汚染で空も海も大地も壊滅状態、巨大複合企業が国家を支配し警察組織は形骸化、治安悪化に凶悪犯罪の増加、富裕層と貧困層の超格差とまさに絶望郷。そんな現実、誰だつて目を背けたくなるに決まっている。

しかし、そんなユグドラシルも12年の時を経て、遂にサービス終了の日が迫ってきていた。



「よし、こんなもんか」

ユグドラシル最終日、1人の異形種プレイヤーが不気味な沼地のあちこちに打ち上げ花火を設置する作業をせっせとこなしていた。彼：鈴木悟は、アンデッド種のスケルトン系の中でも最上位種族、死の支配者のアバターを持つプレイヤーでHNは『モモンガ』である。

モモンガはユグドラシル最終日と言う事もあり、運営側が格安で販売していた花火を1万発購入。それをサービス終了10秒前で一斉

に打ち上げようと思っていた。

「本当ならみんなと一緒に最終日を迎えたかったんだけどなあ…」

寂しげな不満が思わず漏れてしまう。

ユグドラシルの過疎化に伴い次々とギルドメンバー達は引退した。理由は様々だがモモンガに彼らを引き止める事など出来なかった。彼らにはリアルでの生活があるし、家庭を持つ人だっている。何も無い自己中心的な自分の為に「残って下さい」などと言える筈がない。

ユグドラシルだけが唯一の生き甲斐だった。ブラック企業で稼いだ金も必要最低限の生活費だけを残し全て課金に費やした。貴重な休日も、くたびれた身体でも、食事や睡眠の時間も極力削り、人生の全てをユグドラシルに捧げたと言っても過言では無い。しかし、それももう終わる。鈴木悟という男は唯一の生き甲斐を失い、この滅亡しかけた世界と再び向き合わなければならなくなった。

「玉座の間で最期を迎えようと思ったけど、花火でパーツと華々しい形で終わるのも悪くないよな…まあ1人だけだ」

明日は四時起きかと考えている内にもうサービス終了10秒前になっていた。慌ててモモンガは花火の発射スイッチを起動させると、1万発の花火が次々と打ち上がり沼地に不相応な花を空に咲かせた。

「おおー流石に1万発は爽快だな！　　ハハハハ、結構綺麗じゃないか！」

想像以上の迫力と華麗な花火が空いっぱい広がる光景にモモンガは久しぶりに感動を覚えた。この光景を仲間達と一緒に眺める事が出来なかったのが残念でならないが今だけはその寂しさを少しでも忘れる事が出来るよう、モモンガは全力で楽しむことにした。

(楽しかったなあ……)

かつての思い出に浸りながら花火を眺めるモモンガ。少し心残りがあるとするればどうせ最期だからとタブラ・スマラグデイナのNPC アルベドの設定を『モモンガを愛している』と変更してしまった事だろう。

しかし、それももう直ぐ消える事となる。どうせ消えてしまうのだからちよつとした悪戯くらい問題無いだろう。

残り5秒前、モモンガは静かに瞳を閉じた。

5秒後には『NO DATA』の文字以外、真つ暗な画面が視界に映り込む事となる。

4…3…2…1…0

ユグドラシルは終了を迎えた。

◇

ゲームのフィールドではなく真つ暗な画面に『NO DATA』の文字が現れる…筈だった。だが、どういう事だろう、未だ視界にサービス終了を意味するその文字は現れない。流石に可笑しいと思つたモモンガがソツと瞳を開けると、そこには広大な丘陵地帯が星々煌めく夜空と共に広がっていた。

「…え？」

人は本当に驚いた時、思考が止まるという話をギルドメンバーの1人ぶにつと萌えが言っていたが、まさかここでそれが証明されてしまうとは思わなかった。サービス終了まで彼が居た場所は猛毒の沼地であつた筈なのにどういいうワケか全く違う場所へいつの間にか移動していたのだ。

「ま、まさか…噂に聞く『ユグドラシルII』か!？」

サービス終了まで

残っていたプレイヤーにのみ先行体験版を無料で提供とか!？」

どこぞの掲示板で何度も話題になっていた『ユグドラシルⅡ開発中』だが、何名かのプレイヤーが運営に確認したところなんの返答も無かったという。肯定はしなかったが否定もしなかったのだ。可能性はゼロでは無い。

(だが、何の告知も無しにそれは…いやでも、あのクソ運営の事だしなあ)

だとするとこれはとんでもないサプライズイベントだ。早速、この事実をギルドメンバー達へ伝える為、一度ログアウトしてから、各メンバーへメッセージを送ろうと行動する。しかし、どういうわけかログアウトが出来ない。

「どういう、事だ……?」

慌てたモモンガは今度はコンソールを開こうと指を動かした。しかし、コンソール画面は一向に現れない。骨の指が何も無い空間を虚しく動かすのみである。GMコールも強制ログアウトも試してみるが、全く機能する気配がない。ありとあらゆるシステムから完全に外されているように感じてきた。

いくら先行体験版でもここまで酷いなんて事はないだろう。この瞬間、『ユグドラシルⅡ説』がモモンガの頭の中から除外される。そうなるのとコレらの現象がゲームバグという可能性が高くなってきた。どうやら運営は最期の最期まで綺麗に終わらせてくれないようだ。

「はあ、いくらなんでもこれは無いんじゃないのか?」

怒りを通り越して呆れてしまうレベルだ。しかもシステムメニユーにすらアクセス出来ないという致命的なバグを引き起こして



しまっている。

「やれやれ……取り敢えず現在地の確認……は、メニュー画面も出ないから無理か。でも此処って、ユグドラシルには無かったフィールドだよ、な？」

モモンガは周囲をグルリと見渡す。彼は某ギルドには及ばないものの、ユグドラシルの全フィールドを見て回ってきたし、どんなモンスターが生息しどんな地形だったのかなど結構覚えてしていると自負している。

所々草木が生える程度の荒れた丘陵地帯だが、彼が今まで見てきたフィールドのどれとも一致しない光景だった。

それよりもずっと気になっている点がある。

草木や土があまりにもリアル過ぎるのだ。ユグドラシル各フィールドの自然はかつてリアルで生息していた自然界をかなり忠実に再現しているが、今モモンガの視界に入るそれらは明らかにユグドラシルのモノよりもリアリティが有り過ぎる。

「ん、コレは……に、匂いが分かるぞ!？」

モモンガは草木や土に手を触れたり、しゃがみ込んで嗅いだりしてみると間違いなく『触覚』と『嗅覚』が働いているのが分かった。仮想世界と現実世界を混同しない為の電脳法を思い切り破る違法行為だ。『触覚』に関しては元々ある程度機能はしていたがここまでリアルな触覚はない。

流石に運営が違法行為まで犯すとは到底思えないし、何より今直接『観て』『触れている』体験が明らかにDMMO—RPGの枠を大きく超越していると思えない。

そして、モモンガはある結論に至った。

これは夢幻で無ければ電脳世界でも無い……現実なのだ。恐らく地球ですらない。

「エエエエエエエエエエ!？」

絶叫を上げる死の支配者の声が、深夜の丘陵地帯の彼方まで響き渡った。

…とほぼ同時に感情が抑制される不思議な体験をする。

「……………ふう。ん？ 何だ今の？」

◇

冷静になれば異常もなんのその。取り敢えずモモンガは自分が今置かれている状況を確認する為の行動を始める。

「多分、さっきの感情が抑制された感覚は種族スキルの『精神作用無効』が自動で働いたんだろう。スキルが使えるという事は他のスキルや魔法も扱える可能性があるな」

早速、モモンガは会得している第一位階から第三位階までの魔法をその辺に生えている枯れ木や岩目掛けて一通り発動させる事にした。

「ファイヤーボール火球……………お、出来た」

正直不安だったが結果は大成功。他にも補助魔法も問題無く発動する事が出来た。第四位階以上も試してみたかったがエフェクトが些か派手になる魔法が多くなる為、今ここで試すのは控えるべきだろう。もしこの世界でモモンガの敵となるプレイヤーが現れた場合、自分の身を守るどころか逃げる事すら難しくなる可能性だつてある。

(レベル100とはいえ、結局は「アンデットの魔法使い」の役割プレイヤーに過ぎない。無論、ただでやられるつもりは毛頭無いけど、それでもガチ戦闘特化のプレイヤーに勝つのは難しい)

モモンガは自身の実力を理解している。強さを無視し浪漫を優先した職業構成である為、あらゆる神器級ゴツアイテムや課金アイテムを加味しても上の下、精々上の中と言ったところか。

「先ずは情報収集が先だな。《上位アンデッド創造》…  
アイボールド・コープス  
集眼の屍」

種族スキル《上位アンデッド創造》を発動すると、目の前の宙に白濁した無数の眼を持つ2m弱の浮遊するピンク色の肉塊が現れた。  
アイボールド・コープス  
集眼の屍は看破や探索能力に優れており、ユグドラシル時代でもそれなりに重宝したモンスターだ。特にこの未知の世界を探らせるには打って付けだろう。

「よし、スキルも問題無く発動出来るみたいだ。それじゃあ、安全確保の為に周辺の状況を見て回ってくれないか？ 何か発見したら直ぐに俺へ知らせてくれ。人でもモンスターでも何でもだ、いいな？」

創造主であるモモンガの命令に集眼の屍はブルブルと肉塊を震わせた。不思議と彼にはそれが使命感に燃えるヤツなりの返事だと理解出来た。「任せて下さい我が主人！」と言う熱意が心を通して伝わってくる事に戸惑いつつも「お、おう」と一応の返事は返した。

フワフワと上空へ移動する集眼の屍を見送った後、歩きながら移動を始める。

《飛行》フライを使ってあの星空を飛び回りたい衝動にかられるが、まだこの世界に何が潜んでいて、何が脅威となるかまるで分からない。

慎重に行動をするのが吉と考えるべきだろう。

「出来る事なら、敵対とかしたくないなあ」



モモンガは暫く丘陵地帯を歩き続けていた。幸いな事にこれと言って脅威と言える存在に遭遇する事は無かった。

「モンスターのレベルは大した事ない雑魚ばかりだったのは幸運だったな。いい盾役も手に入った事だし」

隻眼の屍を通して発見したモンスターを調べてみるとせいぜいレベル5〜10程度とかなり弱い。試しに〈火球〉や〈雷ライトニング撃〉を撃つてみたところ簡単に倒す事が出来た。ついでに殺したモンスターを媒体にして種族スキル『中位アンデッド創造』を使い、お気に入りモンスターの死の騎士デス・ナイトを5体ほど創り出した。

デスナイトは35レベルのモンスターで攻撃能力は25レベル相当とかなり低いが、防御能力は40レベル相当と実際のレベルよりも高い性能を持っている。また、他にも有能な特殊能力を持っている為、中位アンデッドと言えどもモモンガが現在愛用し続けているモンスターである。

（ここ）まで盾役のデスナイトが揃っていれば、ガチ構成のプレイヤーに遭遇したとしても最悪、逃げ切ることは出来るはずだ）

まだ油断はできない。ただ単に弱いモンスターとしか遭遇していないだけか、ここら丘陵一帯に生息しているモンスターが弱いだけなのか：もつとこの世界の知見を広めなければならぬ。

（〈伝言メッセージ〉を使っても誰とも繋がる気配が無い。連絡交換をしているプレイヤー同士なら妨害措置を受けていない限り〈伝言〉のやり取りは出来るはず。なのにそれが出来ない、という事は……………）

やっぱり俺1人だけなのかなあと半ば諦めムードで、丘陵地帯を歩き続けていると再び集眼の屍が何かを見つけたらしい。

また雑魚モンスタ―ならデスナイトを創るための良い媒体になる  
と考えていた。中位アンデッド創造は1日12体までと制限こそあ  
るものの、盾役は幾らいても困る事は無い。しかし、今度の獲物は少  
し違う。

「……………人間？」

ここから多少距離はあるが、集眼の屍は丘陵地帯を移動する1人の  
人間を見つけたらしい。その人物がユグドラシルのプレイヤーかど  
うかは分からないが、今のモモンガの姿はオーバーロードと言うアン  
デッドだ。常識的に考えて良い印象は期待出来ない。もし相手が『異  
形種狩り』プレイヤーであった場合、問答無用で敵対行動を取って  
くる可能性が高い。

モモンガは〈浮遊する視界<sup>フロートイング・アイ</sup>〉を発動。遠くから視界を飛ばし、こち  
らからも発見した人間の様子を伺う。

無論、対探知妨害対策に抜かりは無い。

基本中の基本である。

すると結構あっさりと覗き見る事に成功した。どうやら相手は何  
の探知魔法対策も施していないようだ。かなり不用心であるが、恐ら  
くプレイヤーでは無いだろう。初心者なら話は別だが、ある程度プレ  
イしている者なら探知魔法対策の一つや二つやっているのが当然と  
言っても良いからだ。

(見た目は盗賊職に近いかな？ 身を隠しながらの移動しているが片  
脚を軽く引き摺っている…ふむ、怪我をしているみたいだ)

かなり周囲を警戒しながら移動しているようだが、怪我の具合を見  
るかぎり中々の深傷みたいだ。装備品もかなりボロボロで生々しい  
血の跡が見て取れる。

「何か強敵と戦って逃げてきたのか。この辺にそんな強いモンス

ターって居たかなあ？」

モモンガはこのよく分からない世界に来てから何度かモンスターと遭遇しているが、よくてレベル10前後の雑魚ばかりだ。ただ単にまだ高レベルモンスターに遭遇していないだけかも知れないし、この人間が単純に弱過ぎるといいう可能性もある。

「しかし……何とも思わないな、コレは」

〈浮遊する視界〉に映る人間の傷を見ても特に何も感じない。普通の人間であれば何かしら動揺や恐怖感、「助けなきゃ」という考えが浮かんでくる筈なのだが、今の彼にはそんな感情は何一つ現れていない。

ただ「死に掛けている虫を見つけた」ぐらいの感想しか出てこないのだ。明らかに人としての感情が欠落している。本来で有れば恐怖心を抱くはずの自分自身の変化を冷静に受け入れてしまっている。

(………助けるべきか？ いや、もし敵だった場合どうする？)

伏兵はいないようだが、下手に此方の存在を教えない方がいいか？

彼を助ける事で恩を売り、この世界の情報を聞き出せる可能性があるあるメリットを考え………め、メリット、だど?)

今自分は損得勘定で助けるか否かを自然に決めようとしていた。明らかにマトモな人間が持つ思考では無いと実感する。何の違和感も感じていない事に違和感を感じ、何とも言えない気持ちになるが、この変化を受け入れてしまったては駄目な気がした。

(『モモンガ』の姿をしているが、俺は『モモンガ』じゃない………！)

モモンガは意を決して自らに言い聞かせるように呟く。

「俺は……『鈴木悟』だ！」

付近に〈転移門<sup>ゲート</sup>〉のマーカーを設置後、あの男性を救出すべくモモンガは〈転移門〉を発動させた。目の前に楕円形の暗黒空間が現れると、その中をデスナイトを引き連れて潜り抜ける。

〈転移門〉を抜けた先は先程までモモンガが居た場所と大した差の無い、荒れた丘陵地帯だ。ここから少し先に深傷を負ったあの男がいる。

集眼の屍から再び報告が届いた。

どうやら思ったより傷が深かったのか死に掛けているらしい。これは急がねばならない。

（最悪、逃げればいいだけの事だ。今は助ける事を優先せねば……でも、あの男——）

モモンガは〈浮遊する視界〉で見た男の特徴を思い出していた。

「凄ツツツく……眼が怖いんだよなあ……」

## 第2話 人は見かけによらない

◇

這々の体で周囲を警戒しながら丘陵地帯を移動する1人の男がいる。

「全く…俺ともあろう者が、何という失態だ…はあ…はあ…こりやあ、妻にまたどやされてしまうな…は、ははは」

彼は野<sup>レンジャー</sup> 伏の高度な腕を活かし、とある任務を遂行中であつた。しかし、思わぬ強敵と遭遇してしまい、命からがら何とか逃げる事に成功したものの、脚に深傷を負ってしまったのだ。

「はあ…はあ…くそッ、もう、力が…あ、あと少しだと、言うのに」

応急処置は施した、ポーションも飲んだが、傷は塞がらず思った以上に血を多く流してしまっていたのだ。視界は霞み、全身に力が入らず、寒気も感じる。もう体力の限界が近い。

ここまで敵の追手を振り切り、跋扈するモンスターたちに見つからぬよう注意深く慎重に移動していたが、深傷で仕方がないとは言え少し時間をかけ過ぎてしまったようだ。

男は近くの枯れ木に背中を寄せた。呼吸を整えようとするが呼吸の乱れは治らず、脈は段々と弱く早くなっていく、意識もボンヤリとしてきた。

「もう…ダメ、か」

自分は此処で死ぬだろう。職業柄まともな死を迎えられるとは微塵も思っていなかったし、常に覚悟を抱いて任務に当たっていた。死そのものは怖くは無い。せめて、奴らが自分の死体を見つけるよりも先に、部下たちが見つ付けてくれる事を願いたい。



もし、連中が先に見つけてしまったら、奴らの士気高揚は疑うべくも無い。最悪かつての長雨の中の侵攻により国土を蹂躪された悲劇が起きかねない。そうなれば我らの…聖王国の被害は計り知れないものとなる可能性が高い。

(最悪、要塞線が…破られる可能性もある…：な、何とか事態を…し、知らせねば…)

思考が上手く回らなくなってきた。いよいよもって最期が近づいて来たようだ。与えられた任務を遂行しきれなかった事は非常に悔やまれるが、それ以上の心残りがある。

「ネイア…」

脳裏に愛娘の姿がよぎり無意識に名前を呟く。

この任務に就く直前、些細な事で娘と喧嘩してしまった。今度の休みに仲直りの意味も込めて、久し振りにキャンプへ連れて行こうと考えていたのだが、それはもう出来そうにない。

その時、夜の帳が死に体の自分を包み込んだ。死に体とは言え、直ぐ目の前まで接近を許してしまった。どうやら失血による衰弱死よりも前に追手に殺られるらしい。

彼はせめて自分にトドメを刺しに来た敵の姿を拝むべく、ゆっくりと目線を上へあげた。そこに漆黒のローブを身に纏う異様な魔法詠唱者の様な何者かが佇んでいた。

「何だ…君は…？」

立場上、神官たちや従軍魔法詠唱者と関わる事も少なく無く、数える程度だが法国の者たちを見かける事もあった。しかし、今自分を見下ろしている漆黒のローブを纏う人物は彼が今まで出逢ってきた者達の中でも別格の雰囲気を持っている。

夜眼に関して強い自信があるのだが、意識が薄れる中では、ローブの下で影となっていている素顔までよく見る事は出来なかった。しかし、装備品も含め、明らかに只者では無い。

追手の連中では無さそうだが、かと言って油断ならない存在に違いはない。

「……怪我をしているようですね」

「え？…あ、ああ」

「治してあげましょう」

謎の魔法詠唱者はそう言うのと懐から赤い液体の入った小瓶を取り出し、蓋を外して此方へ手渡してきた。

「飲んで下さい。大丈夫、ただのポーションですから」

「ほ、ポー、シヨン…？　こ、コレが、か？」

「毒は入ってませんよ。さあ早く」

明らかに自分の知るポーションと違うが、穏やかな彼の口調と物腰柔らかなその態度から嘘を言っているようにも思えない。ここは自分の勘に賭けてみる事にした男は、恐る恐る小瓶の赤い液体を口に含み飲み干した。

するとどうだろう、死に至らしめていた深傷が瞬く間に治っていくではないか。

「こ、コレはッ？？」

あまりの治癒力と即効性に驚愕した男は思わず立ち上がり全身をくまなく確認した。何度見ても傷が綺麗に治っている。今自分の身に奇跡が齎されたのだと思った。

目の前の得体の知れない魔法詠唱者によって。だが、先程までの死に体が嘘のように意識も回復したお陰で、漸く、目の前の魔法詠唱者

を見ることが出来た。

「どうですか？ 痛みはありませんか？」

「だ、大丈夫だ。貴公が何者かは知らないが、危ないところを助けて頂き感謝す——」

漸くローブの奥にある素顔を見た瞬間、心臓が一瞬止まりかけた。その奥にあるのは老齡の御人か、はたまた老婆か、もしくは若輩か：そう思っていた。だが、実際は……

「アンデッド……！ え、死者の大魔法使いか!?？」

咄嗟に腰に備えていた短剣を取り出した。愛用の合コン成ボ長ツ弓トは距離的に使用が困難である為、瞬時に近接戦闘へ切り替えたのは日頃の鍛錬と経験の賜物である。

（クソツ、なんて事だ！ まさかこんな所にエルダーリッチが現れるなど！）

短剣には聖属性が付加されているが、スケルトン系のアンデッドに斬撃系の武器は些か効果が薄い。先の戦闘で道具を殆ど失ってしまった現状、勝てる可能性は決して高くない。

（隙を窺い……逃げるのが先決か）

男は迷わず逃げる選択肢を選んだ。

後は機を逃さず行動に移すのみ……しかし男は目の前のエルダーリッチの行動に目を見開いて驚いた。

エルダーリッチは此方を黙って見つめているかと思いきや、項垂れて視線を落とし顔を横へ逸らしたのだ。とてもこれから自分を殺そうとしているアンデッドが取る行動とは思えない。

もし殺す事が目的ならわざわざ治す必要など無いし、生氣のある状態から苦痛を与え殺すのが目的とも考え難い。そもそもあのアンデッドから敵意というものが何一つ感じ取れなかったのだ。

(このエルダーリッチ…何か変だ)

訳がわからない故に油断も出来ない。

一向に攻撃する気配の無い相手に困惑しながら構えていると、エルダーリッチが静かに喋り始めた。

「傷が癒えたみたいで良かったです。別に危害を加えるつもりはありません…つと言つても、こんなアンデッドが言つたところで信用出来ませんよね。私はこのまま去りますので、どうかお気を付けてお帰り下さい」

優しげでどこか寂しげな声で喋り終えたエルダーリッチは、そのまま此方を一瞥する事もなく踵を返し何処かへ去ろうとする。

この時、男は己自身を恥じた。

確かに彼は生者を憎むアンデッドだ。しかし、彼は何処か普通のアンデッドと少し違う。生者である自分を助けてくれたというのに、自分はアンデッドと言う理由だけで敵意を向けてしまった。

(愚か者!!?...パベルの大愚か者め!!?)

彼が危険では無いという確証はまだ無いが、敵であると言う証拠も今はない。

このまま彼を行かせてはならない…そんな気がした。

「ま、待ってくれ!!? す、すまなかった。そのお…失礼とは思いますが、貴公がアンデッド故に驚いてしまったのだ。頼む、どうか待ってくれないか。ちゃんと礼を言いたいのだ」

エルダーリッチは歩みを止めて、肩越しに振り向いた。だが、その視線は此方を向いていない。

「本当に感謝している……ありがとう」

男は深々と頭を下げ、感謝を述べる。

もはや彼が何者であろうと、自分の命の恩人であるという事実に変わりはない。この感謝の気持ちに嘘偽りは無いのだ。

礼を述べるとエルダーリッチは少しだけ此方に視線を向けてくれた。

「いえ……どういたしまして」

「私はローブル聖王国兵士長のパベル・バラハと申す。差し支えなければ……貴公の名を聞かせてはくれまいか？」

「そう……ですね……」

エルダーリッチは静かに剥き出しの骨の口から声を漏らした。

◇

瀕死の彼を下級治癒薬で治すことが出来た。ここまでは良かったのだが、その後が良くなかった……と言うよりも助ける前からもうアウトだったのだ。

「アンデッド……！ え、死者の大魔法使いか!?？」

（え？……あ）

骸骨素顔がモロ出しだったのだ。

初っ端から悟は大失敗をしてしまったのだから我ながら呆れてしまおう。

(あく……まあ、アンデッドだし、それが普通の反応だよなあ)

警戒しなければと言っておいてこの有様かよと心の中で悪態を吐く。しかし、最悪の事態にはならないようだ。

実は男と接触する前に彼のレベルを探知していたのだ。本職程正確では無いが大体のレベルを把握する事は出来る。男はレベル24と、今現在この世界で出会った者の中では1番高いレベルだが悟の敵では無い。

(身に付けている装備も何かしらの効果付与はあるみたいだけど……うーん、どれも中級あるか無いかのゴミアイテムばかりだなあ、って凄いな失礼な事言つてないか、俺?)

いかんいかんと口には出さずに反省していると警戒している男を改めて観察する。死に体の状態であったが今は完全に活力が戻っており、その眼を見遣る。

そして、堪らず眼を逸らしてしまった。

(怖い……あの眼メッツツチャ怖いイイイ!!?)

そう、凄く怖いのだ。ユグドラシルでも色んな怖くて不気味なモンスターを沢山見てきたが、アレはもうそれらの比ではない。

あの鋭く此方を睨み付ける眼がとにかく怖い。吊り上がった目尻と小さな黒目がより一層凶悪さを際立たせている。どう見ても軽く人を50人くらい笑いながら殺してそうな快樂殺戮者の眼光だ。

(だだだ駄目だ……いま、マトモに見れない)

恐ろしさのあまり思わず背中を向けてしまった。こんな時だけ『精神作用無効』が働かない、こんな融通の利かないスキルだっただろう

か？

(ただでさえリアルでも仕事以外基本コミュ障なのに、異世界に来て最初の現地人がヤクザ顔負けの強面オジサンはキツイってエエエエ!!?)

ここで悟は開き直すことにした。

最初のコミュニケーションは失敗したから、もう後はさっさと此処から離れて暫く人里離れた場所を探し、其処を拠点にして行こうと決めた。

(怪我也治した事だしもう大丈夫だろう。下手に関わるとかえって良くないかも知れないし…そ、それが良い！)

「うんそうしよう！」と思い立ったが吉日の勢いでその場から離れようとした。

「ま、待ってくれ!!?」

(は、はひい!?!?)

まさかあんな警戒している状態でいきなり声を掛けて来るとは思わなかった。心の中で裏返った変な声を上げてしまったが口から出なかっただけでも自分で自分を誉めてあげたい。

「待て」と言われたら待つしか無い。心情的に冷汗をかきながら彼の言葉を待った。

「す、すまなかった。そのお…失礼とは思いますが、貴公がアンデッド故に驚いてしまったのだ。頼む、どうか待ってくださいか。ちゃんと礼を言いたいのだ」

まさかの謝罪だった。

恐る恐る振り返る悟だが出来るだけ眼を合わせないようにする。幾ら圧倒的にレベル差があつても怖いものは怖いのだから仕方無い。相変わらず眼は怖いが幾分か優しいな雰囲気宿っている…：ような気がする多分。

「本当に感謝している…！ありがとう」

男は頭を下げた。

この行動にモモンガは彼を大きく誤解してしまった事に恥ずかしながら気付いた。彼はヤクザはヤクザでもちやんと義を重んじ、筋を通すヤクザだったのだ。

(フツ…：人は見かけによらないな)

恐らく彼も同じ事を考えている事だろう。確かに、ただのアンデッドではない…：最上位種の死の支配者がいきなり目の前に現れたら誰だって恐怖心を抱く事だろう。

「いえ…：どういたしまして」

「私はローブル聖王国兵士長のパベル・バラハと申す。差し支えなければ…：貴公の名を聞かせてはくれまいか？」

悟は驚いた。

何と目の前の男はヤクザでは無く(当たり前である)、歴とした職業軍人だったのだ。それも兵士長というかなりしっかりした役職を有している。

悟はパベル・バラハと名乗るヤク…：男に名前を聞かれた。

一瞬、『モモンガ』と名乗りそうになったが、自分はオーバーロードのモモンガに縛られない事を誓ったばかりだ。その名前を名乗る訳にはいかない。

だから答えた…：鈴木悟だと。



◇  
「そう…です…す、鈴木悟と言います」  
「スズキ…サトル？」

この辺りではあまり聞き慣れない名前だ。だが嘘を言っているようにも思えない。偽名ではなく、事実なのだろうがエルダーリッチが生前の名前を覚えていると言うのはパベル自身聞いたことがない。

恐らく彼はかなり特異なエルダーリッチなのかも知れない。

「成程。ではどのように呼べば良いだろうか？」

「名前が悟で苗字が鈴木なんです。でも、呼び方は…ふふふ、御自由にどうぞ」

「そうか。ではサトル殿で良いか？」

「ええ、構いませんよ。えっと…」

「ハハ、私も呼び方は何でも構いません」

「じゃあ、バラハ殿、で？」

「ええ、構いませんよ」

少しだけだが重い空気が和んだみたいだ。パベル自身、アンデッドとこうして会話するなど初めでかなり不思議な気分だ。しかし、全然悪い気はしない。

（このように自我を保つ穏やかなアンデッドもいるのだな…噂ではエルダーリッチの中には取引きと言う範囲であれば会話が可能な個体もいると聞いたことがある。だが、この御人は―）

とてもそんな姑息な個体と同種とは思えない。どちらかと言うと普通の人間と話している感覚に近いだろうか。

パベルが彼についてももう少し話を聞こうとした時、サトルが突然顔を横へ向けたのだ。一体どうしたのか尋ねようとしたが、その行動の

意味を瞬時に理解する事が出来た。

(何体か此方に向かって来ている!……14、いや15か……少し長居しすぎたか)

「バラハ殿……モンスターが此方に向かって来ているようです。数は15体」

「ツ! あ、ああ、そのようだ」

やはり偶然では無いとパベルは確信した。彼は自分よりも先に敵の接近に気付いていたのだ。レンジャーとして索敵に関しては人一倍の自信を持っていたパベルは、サトルとの会話中もしっかり周囲を警戒していた。

(サトル殿……やはりただのエルダーリッチではないようだ)

◇

悟は集アイボール・コープスの屍からの報告を受けていた。

四方八方から15体のモンスターらしき何かが接近している。

(そういえばバラハさん死に掛けてたし……そいつらにやられたって事か)

そいつらが何者なのかは不明だが此処で逃げ出すわけにはいかない。何よりやつと彼と交友関係が結べそうなのだ。ここで逃げてしまったらもう二度とそんな機会は訪れないだろう。

(尤もそんなつもりはさらさら無いけど)

気が付けばパベルと背中合わせの状態になっていた。緊急事態と云うのもあるのだろうが、会ったばかりの自分に、それもアンデッドである自分に背中を預けてくれた事がちよつと嬉しかったりする。

そこへ漸く、謎の集団が姿を現した。

「やっと追いついたと思ったら…何だあテメエ？」

「また新しい獲物が出てきたか？」

小丘の上から現れたのは長い毛の直立した山羊のような外見をした亜人——山<sup>パ</sup>羊<sup>ォ</sup>人<sup>ル</sup>だ。簡素な革鎧とあまり手入れされていない直剣を装備している。

「あん？ スケルトンが何でいるんだ？」

「構いやしねえよ、あの人間諸共やっちまおうぜ!!？」

「大方、あの人間が召喚したんだろうぜ」

先の2体を筆頭に続々と悟達を取り囲むように現れた。

「山羊人…チツ、囲まれたか…!!」

「…バラハ殿、此処は私に任せて貴方は逃げて下さい」

「ツ!!？ な、何を仰る!!？」

「貴方は何か用事があつて此処へ来たのでしよう？ 恐らくですが、きつと貴方の国にとつてとても重要な事でしょう。ならば、貴方は本来の役目を果たすべきです」

「しかし、サトル殿!!？ それでは貴方が——」

「ハハハハ、知り合つたばかりのアンデッドに心遣いは無用ですよ。それに私、ちよつとは腕に自信がありますから。さあ、行つてください」

「…この御恩…一生忘れません!!？」

パベルは下唇を噛みながら駆け始めた。彼の動きを察知した山羊人達は直ぐに回り込もうとするが、突然行手を阻もうとした2体が光弾に撃ち抜かれ地面に伏してしまう。

「ッ!!? かたじけない…!!?」

「何ッ!!? クソ、逃すなア!!?」

「追え追え!!?」

パベルは囲みが解かれたわずかな隙を突いて逃げ出した。山羊人達は1番の獲物を逃さぬよう全員で追い掛けようとする。

だが、追撃など悟が許す筈が無かった。

「おつと……お前達の相手は俺だ」

悟は〈飛行<sup>フライ</sup>〉を使い追撃しようとしてくる山羊人達の前に降り立った。そんな彼を山羊人達は獲物を逃した憎つくき敵を武器を構えながら睨みつけ、取り囲んで来る。

「クソ!!? スケルトン風情が邪魔立てしやがって!!?」

「その骨をバキバキに砕いて楊枝代わりにしてやるぜ!!?」

「おう、このスケルトンをさっさとブツ殺して追い掛けるぞ!!?」

あの人間は聖王国の大物だ、見事に討ち取ればバザー様がきつとご褒美を下さる事だろうぜ!!?」

「おうよ!!?」

「ぶっ殺せ!!? ぶっ殺せ!!?」

「ん? よく見りや、あのスケルトン結構良いモン着込んでじゃねえか? ギャハハハ!!? こりやあとんだオマケが出てきたもんだぜ!!?」

何とも耳障りな濁声と品の無い言葉に悟は段々と苛立っていた。ユグドラシルには居なかつたモンスターもとい亜人族に興味が無い訳では無いが、それを加味しても彼らの態度と言動は許容出来ないものがある。

「ギャハハハハ!!? 覚悟しろよくスケルトン!!?!!?」

「スケルトン、か……やれやれ、バラハ殿の方が見る目があるな」  
「ああ？」

「山羊人……とか言ったか？　お前達は2つ間違いを犯している」

山羊人達は悟の言っている意味を理解出来ず、互いの顔を見合っている。しかし、悟はそんなことなどお構いなしに話を続けた。

「1つ……俺はスケルトンでは無いし召喚されてもいない。そもそも  
〈魔法の矢〉使ったんだからタダのスケルトンなわけないだろうが。それからもう1つ……」

この時、山羊人達の中でも勘の鋭い何体かがある違和感に気付いた。

あのアンデッドの周囲の空間が揺れている……そんな気がした。そして、静かに放たれた最後の一言がその違和感を絶望に変える。

「俺がこの世界に来て初めて会話する事が出来た彼の命を……貴様らが狙った事だ」

怒気を孕んだ声質で静かに……だが確かに周りに聞こえる大ききで最後の1つを口にした時、急に黒い風が山羊人達を薙いだ。

その瞬間、山羊人達は今まで味わったことの無い身の毛のよだつような恐怖の疼きが全身を襲ったのだ。

全身の震えが止まらず、脚も動けない、悲鳴を上げること出来ない、冷汗が止まらない、ただただ今すぐにでもこの場から逃げ出したという途轍もない恐怖が全身を蝕んでいる。

「ここまで俺を不快にさせた代償は払って貰うぞ？　……塵殺だ」

ドス黒いオーラが目の前にいるアンデッドから溢れ出ている。その瞬間、彼らは悟った。

アレはスケルトンではない：『死』だ。  
自分を襲う『死』の権化なのだ。

「た、助…け——」

誰かが命を乞うべく必死に出した僅かな言葉。だが、そのような言葉が悟に届くはずもない。仮に届いたとしても彼は当然のように無視するだろう。

「<sup>ネガティブ・パースト</sup>へ負の爆裂…!!？」

悟を中心に光を反転した黒い光の波動が一気に周囲へ拡がった。その波動を受けた山羊人達は白眼を剥き、その場で力無く斃れた。不気味な静寂が辺りを包み込む。

悟を除き、この場にあるのは山羊人達の死体しかない。

「はあ……さて、どうするか。やっとコミュニケーションの取れる現地の人と出逢えたのになあ」

山羊人達のせいで結局パベルから色々聞きそびれてしまった。彼を追い掛けるのも良いが、先も言った通り彼は国から与えられた何かしらの任務に就いていたのは明白。故に下手に彼に絡む事はその妨げになりかねない。

「文句を言っても仕方ない、か」

悟はパベルが逃げた先へ顔を向けた。その視線の先にこそ、何も分らない世界で唯一知っている国がその先にある。

「ローブル聖王国、だったか？ 行ってみるか」

悟はパベルが所属しているローブル聖王国へ向かう事に決めた。当然、先程の失態を犯すつもりはない。今度はキチンと変装をして行くつもりである。

(格好は何が良いだろうか。このローブのまま仮面か何かを着けて行ってもいいが……『嫉妬する者たちのマスク』しかマトモに顔隠せるのが無いんだよなあ)

『嫉妬する者たちのマスク』とはユグドラシルでクリスマスアイテムの19時から22時の間、2時間以上ログインしていることで入手出来るアイテムだ。平たく言えば非リア充にとって不名誉なイベントアイテムで何の効果もない。

ソレを着ければ目立つだろうがいつもの装備でも問題なく街中へ入れるだろう。しかし、問題がある……悟自身のプライドだ。

「着けるべき、なんだろうが……何故だろう、此処で着けては色んな意味で負けな気がしてならない」

合理的ではないが此処は着けないでおこう。メリットデメリットで考えるモモンガではない、自分はしがない社畜……鈴木悟なのだ。

(しかしそうなる装備は限られてくる。どうすれば良いか……うーん)

これから向かう先はローブル聖王国……聖王国となればそこに居る騎士は『聖騎士』という事になるだろう……聖騎士と言えばモモンガの知り合いに1人居た。

そして、決意した。

彼を参考に自分もそうなろうと決めたのだ。

「ダーク・ウォリアー・悟……フッフ、悪くないネーミングセンスじゃな

いか？」

しかし、何処からか「やめとけ」と言う声が40人くらい聞こえた気がしたので名前に関しては不承ながら諦めることにした。



### 第3話 デスナイト達の活躍？



誰も居なくなったローブル聖王国東方の巨大丘陵地帯：アベリオン丘陵。緑豊かとは言えない所々荒れ果てた土地を闊歩する黒色の全身鎧を纏う騎士が5体いた。

死の騎士達である。

主人楯によつて創造された5体のデスナイトたちは、アベリオン丘陵で特に目的も無く一塊となつて彷徨い続けていた。しかし、彼らは決して悟に見捨てられた訳ではない。やむを得ず此処で待機しているのだ。

悟は既にアベリオン丘陵を発ち、此処から西方に存在するローブル聖王国なる場所へ向かっている。そこは人間の国である為、残念ながら姿を隠したり変装する術を持たないデスナイト達を連れて行く事は出来なかつた。

主人の為に身命を捧げ、盾となる事こそが彼らの使命であるが故に置いて行かれる事は本意では無いが、その主人から「待機」の命令が出ている以上、逆らうわけにはいかない。

デスナイト達が暫く丘陵を歩いていると遠目から人喰い鬼オーガとゴブリンの群れが現れた。向こうも此方の存在に気付いたらしく、醜悪な顔を更に歪ませると我先にと一目散に逃げ去ってしまった。

ゴブリン達が逃げ去る後ろ姿を見ていたデスナイト達は、思わず追撃と殺戮衝動に駆られそうになる。

生者を憎み、殺戮を楽しむ…全てのアンデッドが有する本能であり、無論デスナイトも例外では無い。「グルルル…」といつても獲物に飛び掛かる猛獣の如き唸り声を上げるものの、アンデッドの本能に抗い、決して攻撃を仕掛ける事はしなかつた。

ゴブリンの群れが見えなくなつてからデスナイト達は行進を再開する。

デスナイト達は主人より勝手な戦闘は認められていない。

—戦闘は飽くまで自己防衛に限る—

巫人やモンスターばかりだが、生者との遭遇はあのゴブリンの群れで既に6度目。しかし、未だに戦闘には至らず、全員が逃げ帰ってしまっている。デスナイト達にとつては主人の命令こそが絶対である為、違反をするなどある筈がない。

あわよくば自分たちに攻撃を仕掛けてくる絶好の獲物が現れないものかとデスナイト達は今日も仲良く行進するのだった。

◇

異変が起きたのは主人が人間の国へ向かってから数日が経過した時だった。デスナイト達は今日も今日とてアベリオン丘陵を闊歩し続けていた。獲物は未だ一度たりとも出逢えていない。

疲労が無ければ、休眠休息も必要としないアンデッドである彼らは昼も夜も関係無く歩き続けた。すると、彼らの視界に今までとは違う生者が現れたのだ。

全身鎧を纏った集団と鎧ではなく金属糸で編んだ衣服鎧を着た集団が共に移動している光景を見つけた。暫くその2つの異なる服装をした集団を眺めていると、何名かが此方の存在に気付いた。

何やら此方に指を差して叫んでいる。

どうせ今までの連中と同じように逃げるのだろうかと思っていたが、意外な事に2つの集団は此方に向かって来たのだ。

初めて遭遇する逃げずに向かってくる存在に少し期待感を抱きながらノコノコと近づいて来るのを待ち続ける。

全身鎧を纏った集団は剣と盾を構えながら包围網を仕掛けてくる。もう一つの集団は遠方から同じように取り囲む陣形を取りながら此方の様子を伺っていた。

「な、何だこのバケモ…いや、アンデッドは!?？」  
「こんなアンデッド…見たことないぞ?」

何か大声で喚きながら此方の様子を伺いつつジリジリと接近してくる。決定的な火蓋が切られるのは時間の問題だ…デスナイト達は今か今かと獲物が飛び掛かるのをじつくりと待ち続ける。

そこへ衣服鎧を纏った集団のリーダーらしき男が現れた。男はデスナイト達を引き攣った顔で見ると突然、片腕を挙げて命令を下す。

「やはりアレらは危険だ…絶対に野放しには出来ん!!?」 天使達で攻撃を仕掛ける!!?」  
アレらには絶対に近づくな!!?」

全身鎧の集団はすぐに後退。

衣服鎧を着た集団は次々と天使を召喚した。

「やれエエ!!?」

炎を宿したロングソードを持つ翼の生えた天使達が召喚され、デスナイト達へ襲い掛かる。デスナイト達は襲い掛かる天使達の攻撃を自身の身長以上はあるタワーシールドで防いだ。

命令を下した男が召喚した他の天使達よりも一回り大きい、メイスを持った全身鎧の天使が、1体のデスナイトの頭上目掛けてメイスを振り下ろした。デスナイトはその攻撃をタワーシールドで難無く受け止める。

その瞬間、デスナイトは腐り掛けた顔をグニヤリと歪ませた悍ましい笑みを浮かべた。他のデスナイト達も同様だった。

彼らは漸く出逢えたのだ…己の<sup>本能</sup>全てをぶつけても良い獲物に。

◇

スレイン法国神官長直轄特殊工作部隊『六色聖典』が一角、『陽光聖典』隊長のニグン・グリッド・ルーインは今日の前で起きている現実を受け止めきれずにいた。

「ひ、ヒイイイイイ!!??!!??」

「何だこの化けも…うぎやあ!!??」

「お、俺は、こんな場所で死んでいい人間じゃない！　お前ら、時間を稼げ！　俺の盾になるんだあ!!??」

蹂躪…虐殺…殺戮…

形容する言葉が見つからないくらいの悲惨な光景が目の前に広がっている。

黒い全身鎧を纏う強大なアンデッド達は瞬く間に炎の<sup>アークエンジェル・フレイム</sup>上位天使を殲滅。その後、黒霧となつて消えたと思いきや、離れた場所にいた陽光聖典の隊員達や別働隊達がいると真ん中へ移動してきたのだ。

地獄はそこから始まった。

赤黒いオーラを纏わせた大剣のフランベルジェを小枝のように振り回して次々と部下や別働隊の兵士たちを両断。大きなタワーシールドは防ぐだけに非ず、部下達や召喚した天使達諸共その巨軀を活かして叩き潰す。自身の召喚天使の<sup>プリンシパリティ・オブザベイスティオン</sup>監視の権天使も一対一では拮抗したものの、複数体相手となれば一気に形勢不利となり消滅してしまった。

更に恐ろしいのは、ヤツによって無惨に殺された者達が次々とアンデッドに変わり果て、かつての仲間<sup>に</sup>襲い掛かっているという事である。

(何故、こんな事に……!)

彼らを与えられた密命…周辺諸国最強の戦士で名高いリ・エステイーゼ王国戦士長ガゼフ・ストロノーフの暗殺は、エ・ランテル周辺の村々をバハルス帝国兵に扮した別働隊に襲撃させ、ガゼフの戦士

団を消耗させながら彼を誘き出し、追い込み、そして始末する。

たった1人の男を始末する為に大勢の村の人間が犠牲になるという心情的に心苦しい任務ではあったが、それが結果的に人類の救済に繋がることを信じて、任務を全うしようという覚悟を決めていた。

問題は人目を避ける為、敢えて遠回りとなるアペリオン丘陵沿いを進み、別働隊と別れようとしていた時にそれは起こった。

今まで見た事のない刺々しい全身鎧を纏わせた恐ろしいアンデッドの群れが闊歩しているではないか。常に霧が漂うカツツエ平野ならまだしも、アンデッドの目撃情報があまり多くないアペリオン丘陵にてそのようなアンデッドが現れるのは異例の事態だった。

一時は任務遂行を優先すべきという意見もあったが、アレほどのアンデッドを野放しにしているのは後々の世に悪影響を及ぼすのは必定と判断。

予定外ではあったが人類の安寧の為、討伐を決行した。  
その結果がコレである。

「おかねあげまじゅ、おええええ、おだじゅけてー!!?」

ニグンが呆然としている間にも多くの部下達が命を落とし、アンデッドへ変わり果てて行く。

彼は既に本来の任務遂行は不可能と判断し、あのアンデッド討伐に全力を注ぐ事を決意すると、神官長から与えられたマジックアイテム『魔封じの水晶』を取り出した。

「くッ!　生き残りたいものは時間を稼げ!!?　最高位天使を召喚する!!?」

今なお必死に戦い何とか生き残っている隊員達から希望に溢れた歓声が湧き上がる。

「悍ましき強大なアンデッドよ、最高位天使の威光に平伏すが良い!!

？  
「ドミニオン・オーソリティ威光の主天使!!？」

魔封じの水晶から現れたのは神々しく光輝く翼の集合体のような主天使。その姿を見た召喚主のニグンも思わず感嘆の溜息を吐いてしまう。

圧倒的絶望の中に現れた救いの神：部下達はより一層大きな歓声を上げて自らの勝利を疑わなかった。

「ホーリー・スマイト善なる極撃」を放て!!？」

主天使が手に持っている笏が光の粒子となって消えた。それはやがて大きな光の奔流となつてアンデッド達へ降り注ぐ。

「オオオオオオオオオオ!!？!!？」

直撃を受けた強大なアンデッド達はダメージを受けて苦痛の雄叫びをあげる。断末魔の絶叫なのだろうが、それでも聞いている側としては魂が震え上がるような恐ろしさを感じる。こうして平静を装う事が出来るのも威光の主天使が存在している事によるものが大きい。

「や、やったか？」

光の奔流は完全にアンデッド達を呑み込んだ。ゾンビへ変わり果てた部下達は当然の事ながら消滅している。土煙により良く見えな  
いが、恐らくあの強大なアンデッド達も消滅した事だろう。

ニグンは勝利を確信した。

「は、ははは!!？　　ハーツハツハツハツ!!？　　当然の結果だ!!？」

かつて魔神をも倒したと言われる究極の一撃だ。負ける訳がない!!？」

だが、その希望は土煙が晴れる前…その中から聞き覚えのある唸り声が聞こえたと同時に崩れ去った。なんとあの強大なアンデッドは消滅していなかったのだ。

それも5体全て。

「あり…えない…！　魔神さえ消滅させた威光の主天使の〈善なる極撃〉だぞ？　そ、それではまるで…あの強大なアンデッド達は…か、かつての魔神さえも…り、凌駕する存在だとても言うのか!?？」

一見すれば〈善なる極撃〉を余裕で耐え切ったように見えるが実際のところは少し違う。

実はこの強大なアンデッド…：デスナイトの特殊能力の1つに『1回だけどんな攻撃を受けてもHP1で耐え切る』と言うものがある。

威光の主天使は単純なレベル差で見てもデスナイトの上で、第七位階の弱点属性魔法をまともに受けたデスナイト達のHPは1で耐え凌いだに過ぎないのだ。つまり、どんなに弱い攻撃でも受けてしまえばデスナイトは消滅する事になる。

だが、そんな事など知る由もないニグンを更なる絶望のドン底へ叩き落とすには充分すぎる程の衝撃を与えた。

それでもニグンだけは未だに戦意を失わずに済んでいるのはまだ威光の主天使の存在があるからである。

「ま、まだだ!!？」　威光の主天使、もう一度〈善なる極撃〉を――」

咄嗟に追撃を命令するニグンであったが、そんな事を許すほどデスナイトは甘くはない。すかさずニグンとの距離を詰めたデスナイトの1体はフランベルジェを彼の胸元へ突き刺した。

「が…ッ!?？」　あり…え、な…い…」

彼の体を貫いているフランベルジェをデスナイトは横へ掻っ捌き、

彼は盛大な血飛沫を撒き散らし絶命した。その恐怖一色に染まった断末魔は、デスナイト達にとつてこの上なく素晴らしい死体となり、召喚主を失った威光の主天使は魔封じの水晶と共に消滅した。

残ったのは完全に絶望に呑まれた隊員達のみ。

後はもうデスナイト達お得意の殺戮の時間である。

「オオオオオオオオオオオオ!!?!?!?!?!」

法国よりガゼフ・ストロノーフ暗殺の密命を受けていた陽光聖典は、5体のデスナイト達により道中のアベリオン丘陵沿いにて全滅。

以降、アベリオン丘陵にはデスナイトと彼らによつて生み出されたスクワイア・ゾンビ従者の動死体達の集団が闊歩するようになった。

そうなれば負のエネルギーが蓄積されてしまうのは当然の理と言えるだろう。



エ・ランテル边境の村々は襲撃されることは無くなった。某村に住む某姉妹は今日も忙しくなくも仲睦まじく、平穏の日々を過ごした。



## 第4話 聖王女はつらいよ

◇

ローブル聖王国北部城塞都市カリンシヤ。

この国で最も強固な城塞都市にして聖王家直轄領である此処で、とある会議が行われていた。

「……由々しき事態ね」

嘆きながら眉を顰めたのはこの国の聖王女、カルカ・ベサーレス。聖王国史上初となる女性の聖王である。

その外見は花の顔と凛々しさを兼ね備えた容姿端麗で金糸のような長い髪は艶めき光沢を帯びている。まさに『聖女』を具現化したかのような人物であり、彼女を『ローブルの至宝』と讃える者も多い。

「バラハ殿の報告が正しければ、従来の城壁の警備態勢では些か不安が残るか……。最悪、かつての戦いのように、ここカリンシヤが戦場となる可能性もあります」

カルカの両端に立っていた女性の片方が口を開いた。彼女は神殿の最高司祭であり神官団団長のケラルト・カストディオである。

そして、もう1人……深刻な面持ちの2人とは裏腹に絶対的な自信を持つ女性がいた。彼女は鞆に納められた剣の切先を床に付け仁王立ちしながら口を開いた。

「御心配には及びません、カルカ様！　かつての……そのおー……えー、ケラルトの言っていた何だったかの侵攻の際も、この城塞都市カリンシヤが戦場だった時が御座いました。故に此処は何処よりも高く、そして強固な壁を持つのです！」

先に発言していたケラルトと瓜二つの外見をしている彼女は、ケラ

ルトの二つ上の姉にして歴代最強の聖騎士団団長のレメディオス・カストディオである。

姉妹共に聖王女の懐刀として彼女に忠誠を誓い、その圧倒的な実力を以ってカルカに逆らう者を悉く抑えつけている。この3人は臣下の関係を除いても友人として非常に親しい関係にあるが、公私共に一緒にいる事があまりにも多過ぎる為、良<sup>Lesbian</sup>からぬ関係の疑いが出てしまっている。

「でも、俄かには信じ難い話です。我の強い亜人部族達が徒党を組もうとしているなど…」

「ケラルト。私は命を賭してアベリオン丘陵の内部調査の任務を成し遂げた、バラハ兵士長の報告が誤りだとはとても思えないわ」

「はい、カルカ様。私も『黒色』の称号を与えられた彼の野<sup>レンジャー</sup>伏としての実力を疑っている訳ではありません。此度の報告は聖王国の存亡が懸かっているモノと心得ています」

「大丈夫です、カルカ様！ このレメディオスが、如何なる亜人共も我が剣の錆にしてご覧にいれましょう」

自信満々に答えるレメディオスだが、どうにも彼女は事の重大さをあまりよく理解出来ていないらしい。

「…貴女も彼の報告を聞いていたでしょう？」

「ハッ！ 亜人どもが沢山集まってくる事はちゃんと理解しております」

「…姉様」

「どうした、ケラルト？」

彼女にとってパベルが持ち出した情報はその程度の認識だったらしい。その事実カルカとケラルトはいつものことかと受け止めると同時に少し呆れ気味に項垂れる。常日頃から胃痛に悩まされると聞く、彼女の2人の副団長が気の毒だと心の底からそう思えた。

そんな気苦労など知りもしないレメデイオスは項垂れる2人の心情が理解出来ずただ首を傾げるのみだった。

「その認識は間違いではないのよ。間違いでは無いのだけど……」  
「はあ……？」

「姉様、全ての亜人部族が徒党を組んだ場合、その数は少なくとも10万は下りません。もう少し事態を深刻に受け止めてはどうですか？」

カルカの代わりにケラルトが今回の情報の真意を伝える。レメデイオスは顎に手を当ててほんの少しだけ考えてから答えた。

「むう……やはり、問題無いと思えますが？」

「そ、そうですか」

「一応、その理由を伺ってもいいですか、姉様？」

「うむ。えー、ゴホン！ ケラルトの言っていた、何だかの侵攻の後、要塞線は亜人どもの再侵攻に備え、一定間隔の小砦と3つの巨大な要塞を建てました。これだけでも難攻不落と言えるでしょう。それに、徴兵された民達が我らの到着まで敵の侵攻を食い止めさえすればそれで十分です！」

胸を張って堂々と答えるレメデイオスにカルカは色々と言いたい気持ちになる。そんな主君の姿を知ってか知らずか、代わりにケラルトが出てきた。

「流石は姉様……とはなりませんよ。そんな事は百も承知です。その上で『それだけでは不備ではないか』と言う事を話しているんです」  
「む？ 足りないのか？……ならばもつと城壁へ配置する兵士を増やせば良いのではないか？」

「それが出来ないから困っているのよ、レメデイオス」

黙っていられなくなったカルカが苦笑いで割って入った。案の定、

レメディオスは「なぜ出来ないのですか？」と直球で疑問をぶつけてきた。

嫌味ではなく純粋な気持ちで聞いてくるのだから困ってしまう。

「姉様、数年前から亜人部族達との小競り合いが頻回になりつつあるのは知っていますよね？　そのせいで徴兵される民達は年々増え続けている、ここまではよろしくて？」

「う、うむ……」

レメディオスは皺を寄せた眉間に指を当てながら考えている。恐らくもう既に理解出来る容量を超えるギリギリのところなのだろうが、構わず無視して妹のケラルトは話を続けた。

「お陰で農家や商場は常に人手が足りず、税金や作物の収穫もここ数年は満足出来ていない状況です。特に食料庫は常に不足の状態が続いています。こうなってしまうては、兵士達は勿論、民達に十分な食事が行き届かなくなるのは当然の理。亜人部族に対する備えを強固にするのも確かに大切ですが、それによって民達の生活をぞんざいに扱って良いというわけにもいきません」

「な、なる……ほど……か、完全に理解し、た？」

「嘘を仰らないで下さい。あと最後、疑問形になってるじゃないですか」

カルカは2人のやりとりを眺めていた。

性格は正反対の姉妹なのに困った時の顔は本当に良く似ている。やはり2人は姉妹なのだなと思い、少し口元が緩みそうになるが、今はそんな事をしている暇は無いと自身に言い聞かせる。

現在、カルカは内外から徐々に追い詰められている状況にあった。

ケラルトが言うとおり、亜人部族達との衝突が増えると必然的に徴兵する民の数は増えてしまう。その分、税金や農作物の収穫量が著しく低下してしまい、そんな彼女の方針を南部聖王国の貴族を筆頭とす

る保守派達からの不満や非難の声も台頭しつつあるのが現状だ。

税収や食料生産を確保する為には、徴兵令を緩和する必要がある。しかし、亜人部族との衝突が増えている現在は下手に徴兵する数を減らすわけにはいかない。

国内外の情勢が不安定なのは、カルカが聖王国史上初の女王になったからと言ってくる輩も珍しく無い。

今となっては昔以上にカストディオ姉妹の武力威圧に依存する形になってしまっている。少しでも改善と安定化を図るためにも、ここで大きな一手を出して結果を残さなければならぬ。しかし、その覚悟が出来ないから彼女は苦境に立たされているのだ。

「ここで一気に攻勢へ出るのはどうだ？ 守るばかりでは消耗するのは当たり前だ。ならば、ありつたけの兵力を以って亜人もが結束するよりも前に叩き潰した方が良いのではないか？」

「姉様それは――」

「待て、皆まで言うな、ケラルト。ふむ、お前の言いたい事は理解出来るぞ。私はカルカ様の警護やモンスター退治に専念するのが妥当。作戦を練るのは幕僚たちに任せるのが筋というものだ。うむ、まさに適材適所というやつだな!!？」

正直、色々と言いたい気持ちはあるが、彼女の言い分にも一理ある。

このまま守勢のみに専念していても事態が良くなる事はまずあり得ない。ここで一大攻勢に踏み切る事は決して悪い手とは言えないが、その分、相当の軍資金や兵力、食料や武器などを用意しなければならぬ。

聖王女として号令を掛ければ可能だ。しかし、それにより民達に更なる負担を強いる結果になってしまうのは明白で、特に聖王女を快く思わない南部の保守派が黙っていないだろう。そうなれば、いくらカストディオ姉妹の力を借りたとしても対処し切るのは困難を極める。何よりもカルカの信念とも言える国是がそれを許すはずが無いのだ。

―弱き民に幸せを、誰も泣かない国を―

亜人部族を撃退する為に多くの民達が犠牲となり、食料の不足に陥り飢えに苦しむことになってしまふなど許せるはずが無い。

それでは本末転倒ではないか。

外からも内からも、彼女の周りには敵が多過ぎる。

(覚悟していたとは言え：なんと険しい道なのでしょう)

いけない、とカルカは首を横に振る。暗い話題ばかりで、ここ最近表情が暗くなっていると自覚している。

この国の上に立ち、人々を導く立場である以上、容姿や表情には人一倍気を遣っている為、すっかりしなければならぬと自分の心に活を入れた。

「レメディオス、貴女の言い分もある程度は理解出来ます。しかし、それでは民達に更なる負荷を掛けてしまうの。それに、仮に勝てたとしても得られるものは皆無に等しいから、被害と戦費が嵩むだけで終わってしまうわ。大きな脅威を取り除けたと言えば聞こえは良いでしょうけど…」

亜人部族に勝利さえすれば、聖王国はアペリオン丘陵へ必要以上に軍備を置く必要は無くなる。それは結果的に国政を内部へ積極的に執り行う事が出来るのだ。民達も今までのように徴兵される事は無くなり、南部の貴族達を中心とした保守派を抑える事が出来る。

無論、良いことばかりでは無い。

仮に脅威が消えても損害賠償が取れるわけは無いし、討ち倒した亜人部族の領地を奪い版図拡大を行うなど以ての外だ。あの広大な丘陵地帯を治める余力など今の聖王国には存在しない。

「それなら、討ち倒した名のある亜人どもが身に付けている高価な武器を売るなりなんなりすれば良いのではないでしようか？」

「亜人の武器なんて何処に売る気なのですか？　王国ですか？」

「それとも帝国？　どちらにせよ、買ったたかかれるのは目に見えてますし、何より他国の武装を強化するような行為になってしまいます」

「うーん……良い案だと思ったのだが」

「どこがですか？　姉様、あまり深く考えていないでしよう？」

剣の腕は本物だが考える事が苦手な姉、やや腹黒いが知力に優れた妹。姉妹とは幼少からの長い付き合いだが、性格がまるで違う2人の会話は見ていて心が和む。

特にレメデイオスの裏表の無い良くも悪くも真つ直ぐで正直な所は、彼女にとつての癒しでありオアシスとも捉えている。尤もそれで彼女の問題的言動が必ずしもキャラになる訳ではないのだが。

「そういえば、カルカ様。バラハ兵士長の報告で気になる事がありました。瀕死の重傷を受けていた彼を治癒し、追手の山羊人達をたつた1人で相手取つたと言う……謎の魔法詠唱者です」

その話はカルカも聞いている。パベルの報告を疑うつもりは無いが、その報告が事実ならその魔法詠唱者は中々の実力者と言う事になる。

「おお！　　そうだ、私もその魔法詠唱者が気になっていた」

会った事の無い人物の名前など基本覚え無いレメデイオスが、珍しくその魔法詠唱者は認知していた。

「カルカ様、その謎の魔法詠唱者の調査を進めても宜しいでしようか？」

「そうね……」

「場合によってはその人物に会うのも——」  
「駄目だツ!!?」

レメデイオスが目を見開き声を上げた。

「何処の馬の骨とも知らぬ輩とカルカ様が会うなど許される事ではない!!? 危険過ぎるぞ、ケラルト!!?」

「分かっています、姉様。だからこそ入念に調査をした上での、という事です。ただし、出来れば王国や帝国の者たちと接触するよりも前に行動を起こしたいところですが……」

「現状、出来る事は限られてくるでしょうね…アベリオン丘陵となれば尚更」

「……」

限られた時間と人材でどうやって謎の魔法詠唱者を調査するかを思案している3人だが、レメデイオスは何を思いついたのか1人で勝手に納得しウンウンと頷いている。

レメデイオスが何かを言おうとした時、廊下を走る何名かの足音が聞こえた。

「カルカ様、背後へ!」

すかさずカルカを自身の背後へ来るよう前に出て、剣を鞘から抜き払う。

扉が勢いよく開かれた。

「聖王女様!!?」

「何事だ!?!? 騒々しい!!?」

息を荒げて現れたのは若い伝令兵だ。まだまだ未熟者とは言え、断りもなく…それも聖王女が在室している部屋へいきなり押しかけて



くるなど無礼にも程がある。

レメディオオスの叱咤に若い伝令兵は慌てて謝罪した後、「しかし」とその理由を伝えた。

「一大事で御座います!!?」      アベリオン丘陵にてアンデツドの大軍が目撃されました!!?      その数は数千にも及ぶ勢いで今尚増え続けております!!?」  
「なんですって!!?」

カルカは思わず声を上げた。何処ぞの亜人部族が軍団を率いて現れたのならまだ理解出来る。しかし、アンデツドの…それも数千規模の大軍がアベリオン丘陵に現れるなど今まで起きた事は無い。

「アンデツドの軍勢は此方に向かっているのか!!?」  
「い、いえ!      要塞線の砦から遠眼鏡で見える距離まで接近しましたが、その後、反転し丘陵内部へと引き返しました!!?      しかし、その数は徐々に増え続けております!!?」  
「数が数だけに膨大な負のエネルギーが蓄積されているようですね。ですが…よりにもよってこんな時に」

眩暈を覚えなくなるような報告だった。ただでさえ亜人部族への備えで手一杯だというのに今度はアンデツドの軍勢だ。場所が場所だけに亜人部族達とアンデツド軍団で衝突し、互いに損害を受けてくれれば良いのだが、これは楽観的かつ希望的観測に過ぎない。

「アンデツドは生者を憎む存在。ならば、そのまま要塞線まで襲って来なかったのは何故だ?」

「恐らく、亜人部族の中でも魔法に優れた魔現人<sup>マーギロス</sup>でしょうね。最高で第四位階魔法まで扱える上に、個体によっては第五位階まで行使できる者もいると聞きます」

「なるほど…つまり死霊系魔法に特化した魔現人と言うわけか。大方

狙いは此方の威力偵察か妨害工作だろう。攻め込むかどうかの瀬戸際で要塞線の兵士達を精神的に消耗させるとは……チツ！ 卑怯な亜人どもめツ!!?。」

レメデイオスの怒声に呼応してケラルトも遠くからでも聞こえる程の舌打ちをする。

正直、頭が痛くなる出来事に混乱するカルカだが、すぐに女王の表情を作り命令を発する。

「対亜人戦とは大きく予定が異なりますが、いつアンデツドの軍勢が攻めてくるか分かりません。直ぐに要塞線へ戦闘準備を!!?。 アンデツド戦に備え、神殿からも協力要請を出しなさい!!?。 冒険者達にも私からの命令を伝えなさい!!?。」

そこに居るのは国の行く末に悩む聖王女ではなく、この国を護るべく行動する聖王女の姿であった。主君の命令を受けた配下は急いでその場を後にする。

「カルカ様、私は大聖殿へ向かいます。アンデツド戦に備え、更に増援して頂くよう私の方からも嘆願します」

「そうね。レメデイオスは、私と共に万が一城壁が破られた時に備え、此処で兵達の指揮に当たります」

「分かりました」

「ハツ!!?。 お任せ下さい!!?。」

3人は直ぐに行動を開始した。その際、レメデイオスは聖王国の神宝である聖剣サファルリシアを帯刀する。

(例の件については、あとでグスターボあたりに頼むとしよう。急を要する事態なのだ、利用できるモノは何でも利用するに限る。うん、我ながら素晴らしい判断だ!!?)

レメデイオスは例の魔法詠唱者について、自身の案を早急に実行するよう心掛けた。

彼女は意気揚々と主君であるカルカと共に建物を後にする。

(しかし、思い返せば…パベルはあの報告で、何か隠している様に見える。ところが引つ掛かる)

◇

ローブル聖王国は半島を領土とする人間の国で、隣国のスレイン法  
国程では無いが聖王を頂点に神殿勢力と協力して統治している宗教  
色の強い国である。

「U」字を横にした形の国土をしており、広大な湾によって国土が南  
北に分けられている為、北部聖王国と南部聖王国と呼称する者もい  
る。

この国で最も特徴的とも言える『要塞線』は、全長100kmを超え  
る分厚い城壁で、これは聖王国の東方に広がるアベリオン丘陵…そこ  
に生息している様々な亜人部族からの侵攻に備える為に築かれた、さ  
ながらそれは――

「まるで『万里の長城』みたいですね」

「え？　　ば、バン…？　　まあなんだかわカンねえが、理解してくれ  
たんなら良かったよ」

ローブル聖王国で最も堅固に作られた城塞都市カリンシヤへやつ  
て来た悟は、商店通りにあつたとある道具屋の主人にこの国の大まか  
な情報を聞いていた。

(やっぱり、聖王国って名前だけあつて、宗教色が強い国みたいだ。  
俺みたいなアンデッドにはこれ以上無いくらい不似合いな国じゃな

いか……疎外感ハンパねえ)

もしかしたら来るべきでは無かったのかも知れない。しかし、少しでもこの世界の情報を得る事は早急に必要な事である為、ここは思い切って行動しなければならぬ。

でも何気に未知の世界を楽しみたいと言う欲求もあるので、観光気分では楽しんでいたりする。

「ところで兄ちゃん、あんた『冒険者』志望かい？」

「え？　冒険者？」

「そのナリだからってつきり……違うのか？」

今の悟は、いつもの魔王然とした漆黒のローブに死の支配者オーバードの顔剥き出しの姿では無い。

真紅のマントと、金と紫の紋様が入った漆黒に輝く全身鎧で身を包み込んでいる。肝心の頭部は細いスリットのある面頬クローズド・ヘルム付き兜を被っている為、その素顔を窺う事は出来ない。背中には先端が扇状に広がった150cm強はあり大剣グレートソードを2本背負っている。

側から見れば只者では無い雰囲気纏った謎の黒騎士。ユグドラシルのプレイヤーから見たらちよつと厨二病クサイロールプレイヤー。

何はともあれ、悟が憧れていた戦士職プレイヤー風の姿で、モデルは勿論、『正義降臨』のあの人である。

身なりのことをいきなり指摘され、ファッションセンスに少し自信を失いかけた悟であったが、その後に出て来た『冒険者』の言葉に食いついた。

『冒険者』って何ですか？　あー、すみません、自分かなり遠方の

方から来た流浪の旅人なもので」

「お、おお、そうだったのかい。まあ、冒険者組合が存在しない国もあるっちゃあるからな」

親切な店主はガタイのデカイ黒騎士黒に『冒険者』について説明した。

◇

親切な店主と別れた悟はフラフラと街中を歩いていた。『冒険者』について聞いてみたところ、悟が期待していたような職業では無かった。

(要するに『対モンスター用の傭兵』って事かあ…期待してた分、がっかりだよ)

『冒険者』とは国から独立した組合機関であり、その存在意義及び活動理念は“人々を守るため”が基本である。

とはいえ、全く冒険らしい事が無いわけではない。稀にだが新たに発見された遺跡や秘境の調査や探索を請け負う事もある。

しかし、そういった場所には強いモンスターがいる事が多いため、本当の意味での冒険が出来るのは上位階級の冒険者に自然と限られてくる。一般的な冒険者の仕事はモンスター退治が基本なのだ。

偶に薬草採取や商隊の護衛などの依頼もあるが、いかんせん夢も浪漫も無い仕事である。

ガクリと肩を落とす悟だが、仕事に浪漫という贅沢な感情を求めてしまう事の方が甘いのだと改めて自分に言い聞かせた。

(まあ、他はRPGお決まりの内容だったし、そこは問題無いんだけどね……えーつと、あのオツちゃんの話だと確かこの辺に…)

彼は聖王国の冒険者組合へ向かっていた。目的は勿論、冒険者になるためである。

夢の無い職業だが、メリットはある。国境の垣根に関係無く、誰でも登録を行うことは可能で、各国や都市にある冒険者組合に登録した

冒険者たちは依頼を受け負い、それに応じた報酬を受け取る事が出来る。

(出自に関係無く身分証明出来る物が作れる上に、依頼を達成すれば現地通貨を報酬として手に入れる事が出来る。今の自分にピッタリの職業じゃないか)

それに冒険者組合で出されているモンスター討伐依頼からこの世界の平均レベルを測る良い機会でもある。

丘陵地帯ではレベル30もいかない雑魚しかいなかったが、もしかするとあの地帯が弱いモンスターしかいないだけなのかも知れないし、他はレベル60以上がウジャウジャ居るのかも分からない。

「だが…広い街だからなあ。道に迷ってしまった、うーん」

周りをキョロキョロ見渡しながら冒険者組合を探そうとするが、全く慣れない土地故に今自分がいる場所も分からなくなってしまう。

ここで探索系魔法を使えば目的の地まで辿り着けるのだろうか、人通りが多過ぎる此処でそれは使えない。

(仕方無い。此処は人に聞くしかなさそうだ…えーっと)

道を尋ねるべく悟は声を掛ける人物を探した。特に「あ、この人がいいかな」と言うつもりでは無かったが、偶々視界の端に入った1人の少女に声を掛けた。

後ろ姿しか見えていないが、その背格好から恐らく14、5歳くらいの少女だろう。

「あのおー、すみません。冒険者組合はどちらに行けば——」

「え？　は、はい」

少女も声を掛けられるとは思わなかったのか、少し驚いた様子で振り返った。

「おわっ……!?」

そして、互いにビツクリした。

少女は大きなガタイの漆黒の全身鎧を纏った男の姿に、悟はその殺し屋のような非常に悪い目付きをした少女に。

(こ、怖い……こんな目をした女の子見た事無いぞ!?? ん?  
……いや、待てよ)

この凶悪な鋭い目付きを彼は一度見たことがある。その特徴的な目を持つ人物を思い出すと、思わずポツリと口に出してしまう。

「ば、バラハ殿……?」

「は、はい……そうです、けど……え? 何処かでお会いしましたでしょうか?」

(え? あ、ヤバ……)

悟はハッと我に返る。

魔法詠唱者としての鈴木悟という身分は隠していたつもりだったと言うのに、自分は今とんでもない間違いを犯してしまった。

間違い無く、パベルの子供だろう。

こんな睨んだだけで人を威圧する程の眼をした人間がそう何人も居るとは思えない。

(それにしても父親に似て目が……)

(す、凄い鎧……あと、背が高い……)

僅か数秒の沈黙が数分に感じる。そんな見つめ合いの中、奇しくも

2人は同じ事を考えていた。

(コワイ……)



## 第5話 さまようネイア・バラハ

◇

自分でも面倒臭い娘だなと思う。

はあ、と溜息を吐きながら少女は城塞都市カリンシヤの商店街を目的もなく歩いていた。

彼女の吊り上がった細目と小さな黒目は常に睨んでいるような印象を相手に抱かせ、目の下の隈がより一層凄味を引き立ててしまっていた。

そんな殺し屋のような鋭く凶悪な目付きは、父親譲りで彼女のコンプレックスだったりもする。その事で父親に文句を言おうものなら母親の鉄拳制裁が待ち構えている為、口では言わないようにしている。

彼女——ネイア・バラハは、ほんのつい数時間前の出来事を思い出していた。

(またお父さんと喧嘩しちやった……折角、仲直りするチャンスだったのに)

半月ほど前、ネイアは父と喧嘩をした。

ほんの些細な事が原因だった。

特に珍しい事では無い。年頃の娘とそんな娘の扱いに悩む父親……いつもの日常の一部とも言える。ネイア自身、父親が嫌いなわけじゃない。しかし、少しデリカシーに欠けている所がある為、年頃の娘である彼女はそれが許せず度々父親と喧嘩してしまうのだ。

半月前に喧嘩してから直ぐに父は此処カリンシヤレインジャーへ向かった。特に理由は話さなかったが聖王国随一の野伏である父は、国からの命令を受けて任務に家を留守にする事は決して珍しく無かったし、大体2週間前後くらいで帰ってくるのが普通だった。

ネイアはこの前の喧嘩で「少し言い過ぎた」と思っていた為、帰ってきたら謝ろうと心に決めていた。しかし、父は2週間を過ぎてても

帰ってくることは無かった。

巫人部族がまた城壁までやって来たのか、はたまた別の任務で問題が起きたのかまるで分からなかった。元聖騎士の母は「心配するな」と言っただけのもの、それでもネイアは気が気でなかった。

そんな母もやはり気になったのか、現役時代のツテで父が何処へ行ったのかを聞いていたのを偶然、街で見かけた。何を言っていたのかは聞き取れなかったが、怒る時以外は基本冷静な母が珍しく動揺していた。正確には必死に平静を装っていたのだが、ネイアは家に帰った後その時のことを母に詰め寄った。

——もう帰って来ない事も覚悟しなさい——

詳細を言わずそれだけ伝えてきた。

そして、体が勝手に動いていた。

背後から聞こえる母の声を無視して家を飛び出し、着の身着のままカリンシヤまで目指した。

小さい頃から父と一緒にキャンプへ連れて行ってもらった事が何でもある為、夜更けとは言えカリンシヤまでの道のりやその近道はしつかり頭の中に叩き込まれている。

何故、カリンシヤまでなのかと言うと、率直に言えばそこで父と再会したからだ。予想外の再会に2人とも啞然としたものの、何日も休まず走り続けたネイアの体はボロボロに汚れていた。

そんな娘の姿を見た父——パベルは慌てて娘の下へ駆け寄ろうとした。しかし、ネイアは死んだかも知れなかった父の元氣な姿に、心の底から安堵した……と同時に心配をかけさせた事に対する怒りが一気に噴火した。

「お父さんの馬鹿ツ!!?!!?」

そう吐き捨ててネイアは直ぐに引き返し、現在に至る。せつかくの再会が自分の下らない意地のせいで台無しとなり、益々会うのが億劫

になってしまった。家へ帰ろうにも既にそんな気力は残っておらず、仮に何日も掛かる道のりを辿り家へ帰ったとしても母の制止を無視して家を飛び出した為、怒髪衝天の母が待ち構えているのは間違いない。

早い話、行く当てもなく彷徨っている。

(お腹…空いたな…)

思わず腹の虫が鳴ってしまう。近くを通り過ぎた人が何事かと此方を振り返るが、ネイアは気づかないふりをして、そそくさとその場を後にした。

ここ数日まともな食事を摂っていない。最後に食事らしい食事を摂ったのは家を出た日の夕飯で、以降はカリンシヤまでの道中で見つけた木の実くらいしか口にしていない。

「でも…私って結構行動力あったんだ」

まさかここまで自分が考え無しに行動を起こすとは、今になって信じられない気持ちになる。それに、カリンシヤまで最短で来ることが出来たのは紛れもなく父親譲りの才能のおかげだ。

鋭敏な感覚、そして弓の才能。レンジャー野伏特有の潜伏術までは会得していないが、地形把握には自信がある。当然、どれも父親には遠く及ばないが、それがネイアをここまで行動させたのだと考えた。

本音を言えば母親のような聖騎士に憧れていたし、今でもその道を選びたいと思っている。ただ母親は未だに私が聖騎士になる事を微塵も許してはくれない。

(この前なんか、現役時代に愛用していた剣をいきなり出して来たかと思えば、鞘から引き抜いて切先を向けて来たっけ……「私に勝てたら許してやる」って、何もそこまでして反対しなくてもいいのに。親なら我が子の夢を応援するのが普通じゃないの?)

正直、あの時はかなりビビった。本気で殺されるかと思った。でも、父親が必死になって間に入ってくれたお陰で事なきを得た。そんな父親も自分が聖騎士の道を進みたいという思いを中々酌んではくれなかった。

(やっぱり弓の才能じゃ聖騎士になれないのかな…そうよね。お父さんでも無理だったら、私なんか幾ら頑張っても)

いつの間にか気持ち益々滅入ってしまった。

何をやっても上手くいかず、目指したいものがあっても誰も応援してくれない、人付き合いもこの目ではまともに出来ないし、そもそも他者と話す事自体得意じゃない。

こんなにも恵まれない人間は中々いないと我ながら思った。

(私……なんでこんなに駄目なんだろう?)

もう何もかもが嫌になって、本格的に逃げ出したかった。寧ろ、これはいい機会かも知れないと考えていると、背後から声を掛けられた。

「あのおー、すみません。冒険者組合はどちらに行けば——」

普段、人に声を掛けられる事など家族以外で殆ど無い為、驚きながらも声の聞こえた方へ振り向いた。

「おわ……!?」

そこに立っていたのは、声質からはあまり想像出来ないほどの巨軀で、漆黒の全身鎧を纏った男の人だった。それだけでも十分驚くに、男は更に驚愕の一言を放った。

「ば、バラハ殿……？」

「は、はい……そうです、けど……え？ 何処かでお会いしましたでしょうか？」

全身鎧の男は私の苗字を言い当てた。

一体何処で知り合ったのか？ それとも父親の知り合いか？ どちらにせよ得体の知れない存在に変わりない。少なくともネイア自身はこんな大男と知り合いなどではないのだから。

改めて男を見遣る。

この巨軀、身に付けている鎧……どれを見ても恐ろしい事この上ない。

(コワイ……)

正直今すぐ逃げ出したいが、男の人が『冒険者組合』への道を探っていた言葉を思い出した。

「えっと……此処からだとちよつと距離がありますね。カリンシヤへ来たのはいつ頃ですか？」

「あー、すみません。つい先日来たばかりなので……土地勘とか全然無いんですよ」

「そうなんですか」

それでは口頭での説明だけでは難しい。出来なくは無いが、土地勘の無い彼には中々酷というものだ。

(ちよつと怖い気もするけど、悪い人では無さそうだし。気分転換の意味でも道案内は悪く無いかもね)

滅入った気持ちを少しでもリフレッシュさせようとネイアは意気

込んだ。

「じゃあ、私が案内します。その方が確実ですから」

「それは助かりますッ！…えっと、バラハ殿でよろしいでしょうか？

申し遅れました、私は『モモン』と申します」

「ネイア・バラハです。普通にネイアで構いません。多分ですけど、バラハだと少し言い難いですよね？ 色んな意味で」

「では、よろしくお願いします、ネイアさん」

◇

ネイアはモモンと名乗る謎の騎士を冒険者組合まで案内する道中、色々な話を聞いた。

「だから私がバラハだと分かったんですね」

『凶眼の射手』の話は有名でしたから。それにしても本当に娘さんだったなんて。やはり目も父親と…あつ、す、すみません」

「いえいえ、お気になさらずに。私も受け入れ…てはいますから」

嘘だ、本当は未だにコンプレックスを抱いているし自分でもこの目が好きになれていない。でも不思議と嫌いとも思えないから、複雑な気持ちになってしまい言葉が少し詰まってしまった。

話の途中、自分からも話を振ってみた。

「モモンさんはどちらから来たんですか？」

「ずっと遠い国…としか言いようがないですね。『ナザリック』という言葉に聞き覚えは？ 　それか、『アインズ・ウール・ゴウン』は？」

「す、すみません。どちらも分かりません。調べたら何か分かるのかも知れませんが…生憎、図書館は貴族しか利用出来ないんです」

「そうですか…あ、しつこいようですが、『ユグドラシル』は？」

「うーん、やっぱり聞き覚えが…」

彼の口が出てくる言葉はどれもネイアの知らないものばかりだ。国名なのかそれとも地名かも不明だが、彼の言う通り周辺諸国では無いことが分かる。

「そういうえば、バラハ殿は今どちらに？　一目会いたいと思ってるのですが…。カリンシヤに住んでいるのでしょうか？」

「えっとー……すみません。ちよつと何処にいるのかは分からないんです。住んでる場所は此処じゃないんです」

「そうなんですか。娘のネイアさんが居るのでてつきり……ん？」

「じゃあ、なんでネイアさんは此処に？」

「あー、えっと……ちよつと用事で…」

「そうですか。……ところで話は変わりますが、この国の冒険者は――」

彼の言いたい事は分かる。

その汚れた身なりで住んでいる訳でもない街で用事とは何事か…と考えるのが普通だ。

でも彼は何かを察したのかそれ以上の詮索はせず、別の話題を振ってくれた。変に気を遣わせてしまっって申し訳ないと感じてしまう。しかし、彼が気遣いや優しさを持っているのが分かった。

（器の広い人なんだなあ。別に悪人とは思ってなかったけど、人は見かけによらないんだ……。うん、そうよね！　見た目だけで全部が決まるわけじゃないし！）

改めてそう思えた。それは無意識に自分自身への慰めにも繋がった事で少しだけ元気が出てきた。

「あ、此処っぽいですね？」

「え？　あ、そうですね。此処です」

気が付けば目的地に到着していた。城塞都市カリンシヤの冒険者組合は、場所が場所だけに頑丈な石造の建物である。依頼や冒険者の充実性は王国に及ばないものの、この国で首都ホバンスの冒険者組合に次ぐ勢力を持つ。

「ネイアさん、案内ありがとうございます」

「いえ、お役に立てたようで良かったです」

久しぶりに他人とまともに会話出来たが、それももうお終いのようだ。彼女は彼との別れにちよつと寂しさを覚えるが、彼にはやる事があるのだから邪魔をするわけにはいかない。

軽く別れを済ませて来た道を戻ろうとした時、「ちよつと待って下さい」と彼はネイアを呼び止めた。何処から取り出したのか分からないが、何やら手のひら程の大きさの包みを持ち、それをネイアへ渡して来たのだ。

「え？　こ、コレって？」

「今日、店の主人から貰った木の実パンです。良かったらコレを」

「え？　で、でも…」

「大丈夫ですよ。どうせ食べられな…ゴホン、もう2つも食べてしまってお腹が一杯なんです。なので、よかったら貰ってくださいませんか？」

目の前に差し出された木の実パンから芳ばしい匂いが鼻腔を通ると、お腹がぐきゆるると鳴ってしまった。

あまりの恥ずかしさに顔が紅潮してしまう。

「あう……」

「フフ、どうぞぐい遠慮無く」



数日前からお腹に入れたものと言えば小さな木の実程度しかないのだ。卑しい気もするが彼の好意を無碍にするのも気が引ける為、此処は素直に応じる事にした。

(無駄にするわけには…い、いかない、よね?)

ネイアはモモンから木の実パンを仰々しく頭を下げながら受け取った。

「では、私はこれで。色々とお世話になりました」

「あつ、い、いえ、！ 此方こそ…！」

モモンは丁寧に頭を下げ、ネイアに別れを告げた。彼が冒険者組合の中へ入って行く姿を見送ったあと、ネイアは組合から少し離れた噴水のある広場へと向かった。

そこに偶々空いていたベンチに座ると早速モモンから貰った木の実パンを食べた。

(美味しい…！)

気が付けばあつという間に完食したネイアは、久し振りに満たされたお腹に満足すると今度は睡魔に襲われた。

空腹が満たされたため今までの疲労が一気に出てきたのであろう。ネイアは抗えるはずも無くそのままベンチの上で眠ってしまった。

(あの人…優しかったなあ。あと…お父さんとお母さんに…謝ら、ない…と)

◇

目が覚めた時には既に夜更けだった。

街中は昼間とは打って変わって人通りが減り、コンティニチュアルライト「へ永続光」が埋め込まれた街灯と月明かりだけが街を照らしている。

「寒……」

季節は春とは言えまだまだ夜が冷える時期。

薄い外套しか防寒具を持っていないネイアには少し堪える寒さでもある。

どうにか暖を取ろうにも宿代など持ち合わせている筈もなく、かと言ってその辺の道端で焚火を起こすわけにもいかない。

(あー、どうしよう……)

一先ず、ネイアは教会へ向かいそこで少しだけご厄介になろうと思えばベンチから立ち上がるとした。

その時、ネイアを複数の黒い影が覆った。

「へへ、コイツはツイてるな」

「ああ、若い女の小汚え浮浪者だぜ」

驚いたネイアは直ぐにその場から離れようとするも1人の男が直ぐにネイアを頭から押さえ付けた。必死に抵抗する彼女だが、まるで解けそうにない。

「チツ！……顔はダメだな。こりや捨てられてもおかしくねえか。ま、上手く誤魔化せば問題ねえか？」

「だな。売っ払っちまえばあとは関係ねえよ。グへへへ、街の景観を汚す浮浪者を狩る慈善事業はこれだからやめられねえ」

「おうよ。年々徴兵される数が増える度に孤児共も増えるから、俺たちも大儲け出来るってもんよ。聖王女様様だなあ!!？」

どうやらこの暴漢達は浮浪者を攫い、それを裏社会の商人に売り飛ばす連中らしく、ネイアは運悪く目を付けられてしまったのだ。

「それにこの目…もしかして、あの『凶眼の射手』の?」

「グへへへ!!?　だとしたらソイツは幸運だ!!?　九色の一角を担う奴の娘となれば高く付くぜ!!?　顔だって趣味の変わったマニアを狙い目にして売れば問題ねえ!!?」

ネイアは必死に抵抗しようと声を出した。

「だ、誰か…助け…!!?」

だが、人通りも少ないこの時間帯で彼女の悲痛な叫びを聞いてくれる者などいるはずも無い。あえなく彼女は猿轡を口に当てられ、1人が用意した人が1人入れられる大きさの袋へ押し込まれそうになる。

「オラ!　暴れんじゃねえよ!!?」

「や、やめて!!?」

「このクソガキ!!?」

男の1人に殴られたことで、少し脳震盪を起こしてしまったネイアは、それ以上の抵抗も出来ずそのまま袋へ押し込まれてしまう。

「グへへへ、九色の娘なら『八本指』あたりが高く買ってくれそうだな?」

「ああ、間違えな…ぐぶえ!!?」

「おい、どうし…な、何だテ…うぎやあ!!?」

朦朧とする意識の中、男たちが悲鳴を上げる声が僅かに聞こえた。半分袋の中へ押し込まれている状態のため、状況がまるで見えないが何か起きたようだ。

そして、袋から引き摺り出されると眼前に昼間見た漆黒の  
クロースト・ヘルム  
面頬付き兜が現れた。

「ああ、良かった！　大丈夫ですか、ネイアさん？」

「も、モモン…さん？」

「もう大丈夫ですから…：一先ず此处を離れましょう」

彼の優しい声を聞き、「もう大丈夫なんだ」と安心したネイアはその  
まま気絶してしまう。モモンは彼女を抱きかかえながら安全な場所  
へ移動した。

## 第6話 違うんです誤解です



朝方、城塞都市カリンシヤのとある屯所は騒然となっていた。それは屯所前の門で発生しており、夜半には全く異常が無かった故に兵士達は困惑していたのだ。

「私たちは街の娘を誘拐して人買いへ売ろうとしました」

「他にも何回か同じように子供を攫っては売り払ってました。どうか私達を逮捕して下さい」

強面のゴロツキが両膝を地に付けながら集まってくる兵士達に向けて自らの罪を何度も告白していたのだ。

この異様過ぎる光景に兵士達は逮捕どころではなく、上層部へ報告した後、事態の收拾に勤しみ出した。

「どうやらこの者達は何かしらの精神支配の魔法を受けているようです。〈支配ドミネイト配〉もしくは〈魅チャーム了〉かは分かりかねますが…」

魔術師組合から派遣されてきた魔法詠唱者の調べによると、この人相の悪い2人組は精神支配の魔法を受けて自身の罪を告白しているらしい。

とある聖騎士が魔法詠唱者に「何者が魔法をかけたの分かるか?」と聞いた。

〈支配〉や〈魅了〉などの精神支配系魔法を掛けられたとしてもその記憶はしっかりと残っているのが普通なのだ。聖騎士はそれを理解している上で魔法を掛けた者突き止めようと考えていたのだが、魔法詠唱者は首を横に振って答えた。

「それは既に試しました。ですが、記憶にない覚えてない」と言った返事しかなかったのです」

聖騎士は困り果てた。

告白の中身が本当かどうかは別にしても実際に何人かの戦争孤児が行方不明になったという報告が至る所が上がっていた。その際、不審者の目撃情報が出てきており、目撃者からの情報を元に描いた人相描きと2人組の特徴が見事に一致していた。その甲斐もあり2人組の逮捕はほぼ確実と見ている。尤も彼らの告白内容を色々と調査し照らし合わせてからになるのだが、それは今は問題では無い。

問題なのは彼らに精神支配の魔法を掛けた者が誰なのかが分からない事だ。

魔法詠唱者は話を続けた。

「過去に彼らが関わっていた失踪事件の中身を幾つか照らし合わせていますが、今のところ筋が通っております。つまり、話の内容は真実である可能性は高いかと」

聖騎士は腕を組んで少し考えた後に魔法詠唱者へ問い掛けた。

「『記憶にない』 『覚えていない』 …そう答えたのだな?」

まるで念押しするように聞いてくる聖騎士に魔法詠唱者は怪訝に思いながらも頷いた。

聖騎士は魔法の効果が切れるまで待つてから再度彼らから事情聴取を行うよう指示を出した。

それから暫く待った後、精神支配の効果が切れた2人を先程と同じ質問で問い詰めるが、2人は精神支配を受けていた時と全く同じ事を述べた。

——覚えていない 記憶がない——

魔法詠唱者は彼らの魔法を掛けた人物を知らないと言う話は本当

であったことに驚愕した。聖騎士も唸るように再び考え込んだ。

〈支配〉や〈魅了〉を掛けられていてもその記憶は残る。だが、彼らは『記憶がない』の一点張りだった。初めは魔法を掛けた者に口止めされていただけかと思っていたが……違ったのか)

〈魅了〉や〈支配〉を掛けた人物が「自身に関わる情報を話すな」と命令或いはお願いをしたのであれば魔法が切れるまで待てばそれで済むことだ。しかし、結果は魔法が解ける前と変わらなかった。唯一違った点は「俺たちは無実だ!!？」と必死な形相で訴えかけてくるようになったくらいだろう。

無論、彼らの言い分を聞き入れるつもりはない。既に裏は取れているのだ。

(物理的に強い衝撃を頭部に与える事でごく稀に記憶が無くなるという話もあるにはあるが……それはあまり現実的ではないな)

聖騎士——グスターボ・モンタニエスは魔法詠唱者に再度問いかけた。

「俺はあまり魔法に詳しいわけじゃないんだが、『特定の記憶だけを消す』魔法って……あるのか?」

「私が知る限りでは不可能です。記憶を操作する魔法なんて聞いた事ありません。……恐らく、もしそれが可能な魔法詠唱者がいるとするなら……例の『逸脱者』ただ1人かと」

その言葉を聞きグスターボは瞬時にバルス帝国主席宮廷魔法詠唱者の姿を思い浮かべた。英雄の領域を超えた第六位階の魔法を行使できるまさに『生きる伝説』と呼ぶに相応しい人物。

「フルーダ・パラダイン……」

ボソリと呟くグスターボだが直ぐにその可能性は皆無だと頭の中の犯人リストから彼の名を消した。そもそもフルーダは帝国の最高戦力にして切り札とも呼べる存在だ。それほどの人物を無闇矢鱈と国外へ出すなど考えられないし、こんな所へ来て一体帝国に何の得があるわけでも無い。

飽くまで『記憶を操作する魔法を扱える者』と言う話の中で可能性の段階で彼の名が上がってきたに過ぎず、今回の犯人とは別義である。

「…引き続き調査は続けてくれ。どんな事でも良い、何か分かった事があれば直接俺に通すんだ」

「はい、分かりました」

これ以上詮索しても意味はないと踏んだグスターボはその場を後にする。

屯所から出て馬に乗り帰路に就くと、吐きたくも無い大きな溜息を吐き漏らした。後ろから追従する部下達は彼の溜息を聞かなかったように無視する。下手な気遣いをしたところで結局は気休めにしかならないからと、上司であるグスターボ自身が「いつもの事だから無視しろ」と命令しているのだ。

(はあ…全く、カストディオ団長は相変わらず無茶を仰る)

「命令を受ける側の身にもなれ」と心の中で呟きながらグスターボはキリキリと痛む胃の辺りを優しく摩る。

彼は上司である聖騎士団団長のレメディオス・カストディオから数日前に受けた命令を思い出していたのだ。

——アベリオン丘陵に現れたという謎の凄腕魔法詠唱者を見つけ  
出せ——



(……………つて、無茶言うなよ)

改めて団長に対し強い苛立ちを感じる。彼女は歴代最強の聖騎士団長の名に相応しい実力を有しており、この国で『戦力』という意味に於いては彼女ほど心強い存在はいない。しかし、あまりにも頭脳が残念すぎるのだ。「妹のケラルトに知力を持つていかれた」とこつそり揶揄する者も少なくない。

「あの腕っ節の強さを少しでも頭脳に活かせたらどんなに嬉しいことか……」

思わず心の声が口から漏れ出てしまうが、それを咎める部下は1人もいない。皆も彼の言葉に心底から同意見だからである。

頭を使わず戦士<sup>野生</sup>の勘<sup>勘</sup>だけで物事を決める脳筋女に、グスターボは副団長に任命されてから今日に至るまで散々振り回され続けてきたのだ。そんな彼は遂に胃痛と生涯連れ添う覚悟を持つに至っている。しかし、剣の腕は兎も角、頭脳派の彼をレメディオスはかなり信頼している為、彼が何か意見を言えば「お前が言うならそうなのだろう」と言われるほどである。

正直、ありがた迷惑な信頼だ。この傍迷惑な信頼の為に、自分は胃痛と言う代償を払わされているのだと思うと涙が出る。彼女のアホな言動を御する事自体はさして難しくは無いが、その代わり一瞬も気が抜けない。

団長であるレメディオスが何か問題を起こせば、その火消し役や後始末をするのはいつもグスターボともう1人の副団長にして胃痛の友であるイサンドロ・サンチエスなのだ。彼とは何度も苦労話に花を咲かせ、涙を流し酒を酌み交わしたことが……。

(いつ何処で何やらかすか分からないからなあ……あー胃が痛い)

件の魔法詠唱者についてはグスターボもレメディオス達と同様、報告は聞いている。副団長と言う役職の他、彼女の無謀な行動を諫める為にもそういった重要な情報を事細かに把握する必要があるからだ。グスターボ自身も興味を引く内容ではあったが、聖王国の現状を踏まえればそんな事にかまけていられるほどこの国に余裕が無い事も重々理解している。

だからこそ今回の団長命令は無茶苦茶なのだ。

亜人部族との小競り合いは年々増加し、徴兵される兵達は勿論、聖騎士団も皆忙しくなく国の為に戦い、働き続ける毎日だ。民達の不満や不安の訴えも増え、南部との折り合いも悪くなる一方だ。

謎の凄腕魔法詠唱者捜索隊など満足に作れる訳がない。

情報だつて少な過ぎる。漆黒のローブを纏っている以外の情報が皆無に等しいのだ。唯一遭遇したパベル自身も「怪我のせいもあつてよく認識出来なかった」と話している。おまけに彼がいた所が亜人族やモンスター達が跋扈するアベリオン丘陵で、今尚そこを彷徨っているならお手上げだ。

(これがいつもの気まぐれや思い付きなら、適当にちよつと難しい理屈っぽい理由を付けて、団長に諦めてもらうのがセオリーなんだが、今回の件は厄介だ…なにせ聖王女陛下が絡んでいる。あく本当に胃が痛い)

グスターボは再びお腹を摩る。

レメディオスの性格は読んで字の如く『猪突猛進』。それは彼女の主君にして親友であるカルカが絡む事案となれば、より盲目的で一直線に行動してくるのだ。並大抵の言い訳では彼女は決して納得しない、「必ず遣り遂げろ!!?」と激昂するのが関の山だ。

正直、癩癩を起こした子供よりも厄介である。

(その魔法詠唱者が聖王国内に居るっていう保証も無いのにどうすんだよ!!?)      デタラメにも程があるつっの!!?)

文句が止めど無く溢れてくるが言っても仕方がない。取り敢えず風潰しに要塞線から近い街へ転々と移動しながら聴き込み等の方法で探し続けるしかないのだ。だが、この途方の無いと思われる捜索活動も一片の光明が奇跡的に見え始めている。

「先の一件……もしかすると『当たり』かも知れんな。不明瞭な点も多いが、僅かな可能性は出て来たぞ」

眉睡な情報を頼りに万が一の可能性を信じたグスターボはもう少しこの街で件の魔法詠唱者を探す事にした。

捜索活動をしていると言うアピールの意味も込めて…。

（バラハ殿に聞こうにも今何処にいるのか分からないし…地道にやるしかないか。この一件がひと段落したら、ペットのリス達に存分に癒されよう）

改めてグスターボは謎の凄腕魔法詠唱者の捜索を再開するのだった。

◇

時を遡ること半日前…悟ことモモンは凶眼の少女ネイア・バラハの案内のおかげで無事に城塞都市カリンシヤの冒険者組合へ辿り着くことが出来た。

（いやあ、まさかバラハさんに娘がいたとは…しかも眼が父親ソックリなんて…遺伝って凄いなあ〜）

カリンシヤでこの国の事を色々と聞いて回っている内に、アベリオ丘陵なる場所出会ったパベル・バラハについて知る事が出来た。彼は聖王から与えられるこの国独自の称号である『九色』の内の一

色である『黒色』を与えられている。『九色』は国や聖王の為、最も貢献した人物にのみ与えられる非常に誉れ高き称号であり、この称号を付与されている者は読んで字の如く9人しか存在しない。パベルはその9人のうちの1人という事になる。

更に彼はこの国で弓矢に於いては右に出る者がいないほどの実力者らしくかなりの有名人だった。それは外見的な意味合いも含めてなのではないか、とも思うのだがとにかく彼は凄い人らしい。

悟はそんな彼の娘に偶然出会ったのだ。

(でも、なんであんなにボロボロで薄汚れた格好をしていたんだ？

住所も此処ではないとなると……)

お腹を空かせていたのも何か事情があるようで結構気になるところではあるのだが、その話題になりかけた時、彼女の雰囲気が一気に暗くなったのが見て取れた。どうやらあまり触れて欲しくなかったようなので、敢えて悟はスルーする事にした。

この感情や雰囲気を読み取るスキルはリアルでの社畜人生で培われた賜物である。

(まあ、誰にも触れられたくない事情のひとつやふたつあってもおかしくない年頃だろうし、下手に関わるのは悪手だよなあ)

しかし、お節介焼きの悟はネイアがどうしても気になっていたので去り際にちやつかり影シヤドウ・デーモンの悪魔を彼女の影に忍ばせていた。もし彼女が何かしらのトラブルに巻き込まれていたのであれば、手助けしてあげたい気持ちもある。

(ちよっとした『恩返し』の意味もあるけど)

彼女の事は影の悪魔に任せる事にして、悟はこの世界に来て2度目となる大きな任務ビッグイベントを熟さねばならない。

「身分証明の取得と……就活だな！」

異世界だろうが関係無い。鈴木悟は社会人としての義務である労働を果たさねばならないのだ。幾ら魔法が使えると言っても、社畜の性分故なのか何故か定職に就かないと落ち着かないからである。

（つていうか俺、死の支配者オーバーロードなんだけど、アンデッドになっても働くとは……『社畜魂此処に極まれり』だな）

何故か妙に悲しくなる。涙が出ている気がするのはアンデッドなので気の所為だろう。

早速、悟は意を決して冒険者組合の受付へと歩いて行く。

冒険者組合の内装は大体想像通りの作りになっていた。建物は石造りの2階建て、依頼書の様な羊皮紙が大きな掲示板に張り付いていて、複数人掛けのテーブルが片隅に幾つも置かれており、受付カウンターには受付嬢がいる。

何ら不思議な事はない、大体がRPGゲームでよく見かける配置となっていたのだ。

問題があると言うのなら——

（……全く読めん）

——掲示板に貼られている依頼書の文字が何一つ解読出来なかった。

甘い認識ではあったが、口頭でのコミュニケーションが上手く出来ても筆記による伝達まで通じるとは決して限らない。『異世界転生・転移あるある』の1つとも言えるこの事態に直面していた。

（この世界ではもうこのマジックアイテムは必須だな。街を見て回ったのは正解だったよ）

悟は自身の無限インフィニティ・ハヴァアサツクの背負袋から魔法の力で未知の文字を解読出来る片眼鏡モノクルを取り出した。『ユグドラシル』では特殊な方法で開くタイプの宝箱に使う地味に必需品なマジックアイテムだったが、此処にきて絶対必須なアイテムとなった。肌身離さず（というか持っていた事自体忘れかけていた）持っていてよかったと心の底から安堵した。

早速、片眼鏡を使い掲示板に貼られている依頼内容へ目を通した。

「……………うーん、本当に殆どがモンスター退治ばかりだな」

既に聞いていた通りだったのだが、『冒険者』とは名ばかりのモンスター退治専門の職業という現実直面すると改めて肩を落としたくなる。しかし、仕事に浪漫を求めるなど贅沢だと再度自分に言い聞かせながら依頼書へ再び目を凝らす。

「えつと…ゴブリン小隊討伐報酬は銀貨10枚。トロールの群れ：オーガとゴブリン…銀貨25枚…ふむ…これは、おっ？　金貨5枚……ふむふむ」

重要となってくるのはやはり報酬…現地通貨の確保だ。悟の手持ちには多少のユグドラシル金貨はあるが、ゲーム最終日に花火を大量に購入したせいもあり大分消費してしまっている。

金銭面の余裕は無い。

故に働いてお金を稼ぐしかないのだ。

（ざつと見た感じだと目ぼしい依頼は無いな。まあ慣れる一環という事で何か適当な依頼をやってみるか）

悟は掲示板の前から離れ、今度は受付へ向かい歩き出した。既にカウンスターには受付嬢が凜とした姿勢で待っていた。

「冒険者組合へようこそ。どのようなご用件でしょうか？」

絵に描いたような営業スマイルで受付嬢は挨拶してきた。悟も軽く挨拶をした後、組合へ来た用件を伝える。

「すみません、冒険者登録をしたいのですが」

「はい、新規登録で御座いますね。ありがとうございます。では、登録するにあたって必要書類への記載をして頂きますので、少々お待ち下さい」

頭を下げた後、受付嬢は必要書類を取りにカウンターの奥へ消えて行った。

その間、悟はカウンターの前に立って待ち続けているのだが、案の定背後からの視線が気になる。

（この格好は目立ち過ぎだったかな？ 自分としては顔も隠れる全

身鎧の中では結構お気に入りなのヤツをモデルに創ったつもりなんだけど…）

彼が装備している漆黒の全身鎧は、ナザリック地下大墳墓の第九階層にある自室の衣装部屋に置いてあった全身鎧を参考に  
グレイター・クリエイト・アイテム  
〈上位道具創造〉で創ったものだ。

悟としては目立ち過ぎず、顔を含め全身を隠せる一番ベストで特にした代物でも無いものを選んだつもりだったのだが、どうやら現地装備の価値基準を見誤ってしまったらしい。魔法で創ったに過ぎない防具でも現地人からしてみれば超一級品に見えるようだ。

（……何となく視線の中に妙な敵意も感じるなあ）

心の中で面倒臭そうに溜息を吐いたが、実際その認識は結構当たっ

ている。

『冒険者』はモンスタ―専門の退治屋と揶揄される通り常に危険と隣り合わせの職業だ。依頼中に命を落とす事など珍しくも無い為、出自や国籍、素行に関係なく簡単に冒険者登録出来る理由の1つはソコにある。冒険者は常に命と生活が懸かっており、良い報酬が貰えて尚且つ安全な依頼”を受けたものだ。

悟に敵意の籠った視線を送る輩の殆どが、そういったオイシイ依頼を取り合う競争敵が増えた事によるものであった。中には彼の装備類を見て「いいところの貴族が冷やかしに来た」と思い込んでいる者もいるが、大半は前者だ。

(命懸けで戦う仕事らしいから、もつと周りと助け合う職業かと思っ  
ていたけど…やれやれ、現実にはシビアだなあ)

などと考えている内に受付嬢が書類を持って、カウンター奥から戻ってきた。

「お待ちせしました。此方の羊皮紙に書かれている項目に記入をお願いします」

「分かりました。さて、と………あっ」

早速、羽根ペンを手に取り記入しようとした時、ある事に気付いた悟はペンを握る手を止めた。

(現地の文字が書けねエエエエ!!?!!?)

鈴木悟、痛恨のミス。現地語を読めるようになって油断したのか、現地の文字で書く事を完全に想定していたかったのだ。

受付嬢がペンを握ったまま手を止めている自分を「どうしたのか?」と不思議そうに見てくる。



それが悟を余計に焦らせる。

「あ、あのお……っ？」

痺れを切らし受付嬢が声を掛けてきた。

「すみません……私の故郷の文字でも……だ、大丈夫でしょう、か……？」

恐る恐る尋ねた。受付嬢は困った苦笑いを浮かべていたが、「取り敢えず書くだけ書いてみて下さい」と言う言葉に従い、思いつ切り日本語で書いた。

「よ、読めません……」

案の定、読めなかったらしい。

代筆を頼めないか確認したところ、料金は掛かるが可能との事だったので素直にお願いする事にした。

手続きは無事終えたが、現地語の読み書きを早急に練習し会得する必要が生まれてしまった。

◇

「あー……色々と疲れた。精神的な意味で……」

無事に冒険者となり身分証明が出来るようになった悟だが、手続きで色々と問題が起きてしまった事もあり、依頼は明日受ける事にした。

彼の首には銅製のプレートがぶらさがっていた。これが彼の身分を証明する証となる『冒険者プレート』である。冒険者の認識票であるプレートは全部で8階級存在し、新米冒険者の悟が付けているプレートは最下級の銅級だ。

実績を積むことで受ける事が出来る昇級試験で、見事合格出来れば

晴れてワンアップ上へ昇級出来る仕組みとなっている。

(でも、最高位がアダマンタイトって：幾らなんでも柔らかか過ぎるんじゃないか?)

この世界に於ける鉱物資源の<sup>ネタバレ</sup>上限を知ってしまったような気持ちになるが、気になるのはそのアダマンタイト級を冠する冒険者チームは数える程度しかないらしいという点だ。

聖王国には存在せず王国に2チーム、帝国に2チーム、竜王国に1チーム存在するようだが、中でも抜きん出て活躍しているのは王国のアダマンタイト級冒険者チームで『蒼の薔薇』と言うらしい。

(女性のみで構成された冒険者チームかあ：ペロロンチーノさんあたりが喜びそうなチームだな)

もしそのチーム内に合法ロリがいるのなら、彼は滝のように感涙を流していた事だろう。そんなことがあるはずが無いと我ながら馬鹿らしいことを考えたものだと思われた笑いが出てくる。

(聞く限りだとアダマンタイト級は周囲から：特に同業者達からは大分英雄視されてるんだなあ。もっと嫉妬心とかそう言うのが多いと思っただけど……いや、今は我が身を優先して考えよう。少なくとも新入りはあまり歓迎ムードでは無いっぽかったし)

悟は首にぶら下がっている銅板プレートを軽く撫でながら明日からの事を考えた。

基本的には<sup>ソロプレイ</sup>単独行動をするつもりだったのだが、受付嬢からの話を聞く限りだと、その考えはあまり常識的では無いようだ。確かに初めは誰もが1人なのだが、皆が必ず誰かしらと組んで1つのチームとなるのが普通らしい。

報酬金の分け前は減るが、この職業でやっていくつもりなら誰かと

チームを組む事が一番賢いやり方なようだ。それは『ユグドラシル』でも同じ事である為、その辺りは悟も理解出来る。単独行動ではどうしても役割に限りが出てしまう為、バランスの良いチームが必然となってくる。

「あー…そう言えば、代筆代金の支払いで一悶着あったなあ。やつぱり無闇にユグドラシル金貨を出したのは不味かったか。でも、持ち金それしか無かったし…」

現地語を書けない悟は受付嬢に代筆を頼んだ事で金銭を払うハメになってしまった。あまり持ち合わせの無い貴重な金をこんな形で消費してしまう事に軽く落胆しながら、取り敢えずユグドラシル金貨を1枚分だけカウンターへ出した。

その時、受付嬢の顔が金貨を受け取るなり段々と怪しくなった。まじまじと何度も裏表を返しながら金貨を見た後、「しょ、少々お待ち下さい!!？」と小走りで奥の部屋へと消えて行ったのだ。

やはり現地通貨以外は不味かったかと、浅はかな自身の行動を後悔しながら実に15分…片手で持てるくらいのだ。営業スマイルからは止めどなく汗が溢れていた事から、両替に大分苦慮したのだろう。

ちよつと罪悪感を感じる悟はかなりの額が詰め込まれた袋を受け取りながら心の中で謝罪する。オマケにかえって周囲から色々な意味で益々注目の的となってしまうた。

「はあ、取り敢えず勧められた宿へ行くか」

何故かこの街で一番冒険者達に馴染み深い安宿を悟は勧められていた。あの金貨と釣り銭の量から別に金無しと見られたわけでは無いのだろうか、悟としては別に不満は無い。寧ろ、安宿なら節約にもなるだろうしアンデッドの肉体である悟には宿など不必要なものだからだ。

飽くまで『彼はそこを拠点にしている』という体が出来ればそれで良い。

早速、例の安宿へ歩を進めようとした時、ネイアの影に潜ませている影の悪魔から報告が届いた。

「……………え、マジ？」

何と彼女が暴漢に襲われているという衝撃的な内容だったのだ。場所は此処からそう遠く無い噴水のある広場らしいが、流星に夜更けもい時間帯な為、人通りは全くと言って良いほど無いらしい。

「人攫いだと？ やり方と世界は違えど、悪党のやる事は相変わらずゲスいな……………」

悟はリアルでほぼ毎日起きている反政府テロ組織による破壊テロ活動事件を思い出していた。現代社会に対する不満を持つ事には同意するが、かといってそれで他人を巻き込んで良いというわけでは決して無い。

政府を『エゴの塊だ!!?』と連中は揶揄するが、他者の犠牲を厭わないお前達のやり方も同じ『エゴの塊』という奴じゃないか。

(身勝手な正義を振りかざすヤツほど迷惑なモノは無いな。つと、あんまり悠長な事を考えている暇は無さそうだ)

何より彼女には借りがある。

それを返す意味も含め、悟はすぐさま彼女が襲われている場所へ急行した。万が一、暴漢達が馬鹿をやらかしそうになった時は影の悪魔が止めに入るよう指示を出している。

(借りの有無に関係無く助けるつもりだったけど、誰かが困っていたら、助けるのは当たり前……………ですよね？ たっちさん)

悟はかつての友人にして恩人のアバター銀騎士の姿を思い浮かべていた。

◇

ネイアが目を開けた先には見覚えのない天井があった。

「うう……此処は？」

意識がボンヤリとして中々状況を理解出来ない。自分は今横になっっている、少し硬いがベッドの上に寝かされているようだ。

目だけを動かして周りを見渡すが、やはり此処は身に覚えのない場所なのは間違い無いらしい。ゆっくりと上体を起こし、眉間に手を当てて必死に何が起きたのかを思い出そうとする。

「えっとー…確か広場で…座って…パンを食べて…お腹一杯で眠くなって…夜にな…あっ!!？」

彼女は徐々に思い出してきた。あの人気の無い夜の広場で自分は一攫いに遭いかけていた。もう自分は終わりなのだと、過去の思い出や後悔が脳裏を駆け巡った時…何処かで聞き覚えのある声の人に助けられたのだ。

あの時の安心感を今になって思い出したのだ。しかし、肝心のその声の主…つまり自分を一攫いから助けてくれた人が中々思い出せない。でも、確かに知っている声だったし、気を失う瞬間に自分はその人の名前を口にしていた筈だ。

「も、モモン……さん」

そうだ、思い出した。自分を助けてくれたその人物の名前が自然と口から漏れ出た。

「はい、何ですか？」

「……え？」

突然、部屋の片隅から返事をするように聞こえてきた声に間の抜けた声で返してしまった。顔を向けると、見覚えのある漆黒の全身鎧を纏った男が椅子に座っていた。

モモンである。

「良かった。大事は無さそうですね」

「え、あ…は、はい…っじゃなくて!!？」

ありがとうございます!!？」

!!？」

理解が追いつけず緩い返事をしてしまったネイアは慌てて訂正し、深々と頭を下げて助けてくれた礼を述べた。彼は慌てて立ち上がり「頭を上げて下さい」と言ってくるが、上げられるはずがない。

食べ物に分けて貰っただけで無く、奴隷にされる寸前の所を助けてくれた大恩人なのだ。

「いえいえ!!？」

本当になんて御礼をすれば……あれ？

服が

…」

頭を下げたことで、目が覚める前に比べて衣服が大分小綺麗になっているのに気付いた。

「ああ。ちよつと汚れてたり所々破れていたの——」

「あつ。そ、そういう事…ですか…？」

何かを察したネイアは羞恥心のあまり両腕で身体を抱いて顔が紅潮させてしまった。危ない所を助けられただけで無く介抱までして貰った手前、文句などある筈が無いのだが、やはり年頃の娘という事もあるのだろう。

生まれて初めて家族以外の異性に自身の裸体を晒してしまった恥ずかしさから、俯いて紅潮する顔の頬をジワリと滲む涙がポロポロと流したく無いのに流れてしまう。

(ああ…恩人を前に私…もう本当に…面倒くさい女だなあ…：穴があつたら入りたいよお)

一方、モモンこと鈴木悟は目の前の少女が突然紅潮しながら嗚咽しながら涙を流して蹲ってしまったという現状に理解が追いつかず、思考が一時停止してしまった。

しかし、すぐに脳内でペロロンチーノが助走をつけて彼の頬を引叩いてくれたおかげで彼女が泣いてしまった訳に気付いた。

「ちちちちちちち違います違います!!? 別に服を脱がしたりとかは全然ツ!!?!!? もうほんとおつ全ツ然!!?!!? <清掃>と<修復>を使っただけですからああ!!?!!?!!?」

何とか必死の弁明で誤解は解けたが、今度は早とちりで恩人を困らせてしまった事による不甲斐なさや嫌悪感でネイアは再び涙を流してしまう。

彼女を落ち着かせ、諸々の事情を聞き終える頃には、既に深夜12時を超えてしまっていた。

## 第7話 何か忘れているような…



ローブル聖王国とスレイン法国の間に存在する巨大丘陵地帯であるアベリオン丘陵。多種多様な亜人部族が日夜縄張り争いを繰り広げるこの場所も、今だけは血に塗れた日常とは毛色の違う雰囲気になっていた。

「オオオオオ…オオオオオオオオオ!!?!?!?!」

身の毛がよだつ悍ましい死の咆哮が丘陵地帯に響き渡る。その咆哮に応えるように続々と呻き声の様な雄叫びが聞こえてきた。

そう…様々な亜人部族が蔓延るこのアベリオン丘陵は、5体の死の騎士達<sup>デス・ナイト</sup>を筆頭とした総勢10,000弱の様々なアンデッド達により支配されているのだ。

我が物顔でゆらりゆらゆらと丘陵地帯を闊歩するアンデッドの大群勢には、歴戦の亜人部族の戦士達も遠目から手を拱いて見ているか、避難する事しか出来ない状況に立たされている。

「おいおい、長えことこの要塞線に配属されているけどよお…こんな夥しい数のアンデッドは初めて見たぞ」

要塞線東の砦の班長であるこの筋骨隆々の大男…オルランド・カンパーノは遠眼鏡から見えるアンデッドの大群勢を眺めながら呟いた。彼は国の功労者や実力者にのみ聖王から与えられる九つの色の称号の1つである『黄』を下賜されている。

彼は単純な強さだけで『九色』の一色を与えられた腕利きの戦士であるが、性格は非常に粗暴かつ傲慢で、事あるごとに問題行動を起こしている。それは、彼がまだ一兵士に過ぎなかつた時から現れており、俺に命令するなら、まず戦って俺の背中を地面に付けてから言え”と言うとんでも無い行動に出た。



上官は勿論、貴族が相手でも一切容赦は無く暴力事件を頻繁に起こしている。故に10回以上も降格処分を受けているのだが、逆に言えばそれほどの問題行動を起こしても降格処分で済んでいるとも言える。

無論、それには理由がある。

貧弱な貴族に顎で使われる事を嫌い、腕力に任せた彼の生き方に感化された者達を惹きつけているからに他ならないのだ。それは街中に蔓延るタチの悪い荒くれを、軍である程度管理出来る環境下に置くことで、街の治安改善の一助にもなっていたりしている。

ある意味カリスマ的なものだろうが、そんな事など本人の知る由も無い。

(旦那が命懸けで持ってきた情報だと、丘陵には亜人達が徒党を組みつつあるって聞いたんだが……何でアンデッドが?)

『旦那』と呼ぶ人物の働きをカンパーノは決して疑ってはいなかった。つまり今起きている出来事はそんな彼でさえ見抜けなかった、或いは予想出来なかった不測の事態。それが『アンデッドの大量発生』と言う形で起きている。

幸いにもそれは直接的な聖王国への被害を齎してはいないものの、いつどのような被害が起きてしまうのかは想像に難くない。

「流石にあれだけの数が攻めてきたら、此処も無事じゃ済まねえだろうな」

「カンパーノ班長閣下。増援の件でしたら、私が確認して参りますが…」

「うん? いや、そいつには及ばんさ。そう言うのは旦那達の仕事だ。俺らの役割は此処を死守する事だけよ」

部下達から深く尊敬されている彼は『閣下』などと呼ばれているが、彼や周りもその呼び方については誰も気にしていない。乱暴者だが、

戦士としての矜持は持っている彼には、歴戦の強者である兵士や騎士達も彼の部下達と同様に敬意を抱いていた。

「現れた大群がアンデッドでまだ良かったですよ。相手がアンデッドなら対策は決まっているようなものですから」

「そうとも限らねえぞ。低位のアンデッドなら大した脅威じゃねえが、魔法に絶対の耐性を持つ魔法詠唱者の天敵の骨スケリトル・ドラゴンの竜や物理攻撃の効かない死霊レイズだっている。厄介な能力を持つ種類が多いのがアンデッドの特徴だ。流石の俺も実体の無え敵を叩つ斬るチカラは持ってねえからな」

そう言いながらカンパーノは腰に備えている8本もの同じ片手剣を軽く撫でた。重装革鎧を着込んだ巨軀と幾つもの剣を携えている外見は見るものに威圧感を与える歴戦の強者の雰囲気醸し出していた。

「変わりないようだな、カンパーノ班長」

「お？　こりやどーも、お晩でーす」

突如、声をかけられたカンパーノは驚きもせず音も無く静かな歩き方で姿を見せた細身の男へ顔を向けると猛獣の如き笑みを浮かべた。

格好ではカンパーノとは真逆の軽装革鎧の男は、凶悪殺人者の如き鋭い眼を持っていた。

彼こそカンパーノが『旦那』と呼ぶ人物：パベル・バラハである。凶眼の射手は陰の呼び名で、表では「夜の番人」の異名を持ち、聖王国最高の隠密にして百発百中の弓矢の超名手でもある。

「……上官に対する態度では無いな。不敬極まり無い、何度注意される気だ」

「こいつは失礼しました、兵士長殿」

彼の言動から相当な苛立ちを感じ取ったカンパーノは、素直に姿勢を直し彼に謝罪した。

(へへ、虫の居所が悪かったみてえだな。おー、おつかねえ)

◇

パベルはアベリオン丘陵で命懸けの情報収集任務を遂行した後、カリンシヤにて聖王女を始めとする『九色』を冠する他の数名達への報告と事情聴取に数日の時間を要してしまった。お陰で彼は帰宅する事も出来ずカリンシヤで待機する羽目になり、時折こうして状況確認のために要塞線へ訪れているのだ。

そんな時、彼は愛娘のネイアと思い掛けない再会をしてしまう。

首都で妻と一緒に居る筈のネイアが、何故カリンシヤに居るのかは分からない。あり得ない場所での再会で混乱する最中、娘のボロボロの身なりに気付いた。数秒の沈黙の後、何とか声を掛けようとするが、ネイアは突然顔を真っ赤にしながら「お父さんの馬鹿!!？」と怒鳴り声を上げ人混みの中へと消えてしまった。

連続して起きた予想外の事態に呆然と立ち尽くすパベルが漸く頭を働かせて娘を追いかけようとした時、部下の1人が慌ててやって来ると、アンデッドの大群勢が出現したという報告を受けた。

家に帰ることも出来ず、カリンシヤの人混みへ消えて行った娘を探す暇も無いパベルは鬱屈した日々を送る事となる。

気掛かりはやはり愛娘のネイアだ。何故片道で数日も掛かる場所であるカリンシヤに居たのか、今彼女は何処にいるのか、今もそれは分からないままだ。

(アンデッドの大群……まさかサトル殿が?)

此度のアンデッド大量発生の原因が、アベリオン丘陵で自身の命を救ってくれた謎のアンデッドであるサトルが関係しているのではな

いかと考えた。

（あの人は確かにアンデッドだ。しかし、そんな事をするような者には見えなかったのだが…）

あのアンデッドは確かに希少にして異質な存在と言えるが、何か悪さをする様な人物にも見えない。しかし、それでも「アンデッドだから…」と言う理由で何度も脳裏によぎってしまう。命の恩人を犯人扱いするのはかなり気が引けるが、友好的なアンデッドの出現と前例の無い丘陵地帯のアンデッド大量発生が無関係とは到底思えない。

（その道理で考えるなら、家に帰れず娘を探す事も出来ない原因は……）

パベルは自分なりの答えを導き出すと、心の中で小さく溜息を吐いた。

（いや、元はと言えば自分が下手を打ったせいだ。少なくとも娘の件はアンデッドの大量発生とは無関係と言っていない）

家庭事情すらアンデッドのせいにしように考える自分に強い嫌悪感と苛立ちを覚える。

とにかく今はアベリオン丘陵で大量発生しているアンデッドの問題を対処しなければならぬ。娘の事も気になるが、代わりに手の空いている部下に捜索を頼んでいる為、何とかなるだろう。

色々な事を考えている内にカンパーノの所まで到着した。相変わらず生意気な態度でいつもであれば軽く流すのだが、今日は苛立ちもあつてついつい強めの口調で叱ってしまった。だが、パベルはその事に対して悪いとは思っていない。

態度含め彼は色々と問題が多過ぎる為、ここで少し厳しめに注意する必要がある。尤も彼は軍人と言うより傭兵に近い為、今後態度を改

めるといふ事はないだろうが言わないよりはマシである。

「……他の上官に対してもそのくらい素直に態度を改めれば良いだろうが」

「へへへ、すんませんねえ、旦那。俺は俺より強い奴以外に頭を下げるなんざ真っ平なんでさあ」

「ったく、お前は」

文句はあるがこれ以上言っても意味がないのはパベルも理解している。砕けた態度ではあるもののカンパーノが彼の言う事を素直に聞いているのは、彼に勝利したからに他ならない。

「ところで旦那。何か悩みでもあるんですかい？　　なんか随分と虫の居所が悪いみたいです」

「まあ…色々あったんだ。早くこの件を片付けて家族のもとへ帰りたい」

「へへ、成る程。ご自慢の娘さんは息災ですかい？」

「……分からない」

「え？」

カンパーノは彼のいつもの調子を取り戻すつもりで自然と娘であるネイアの話をつもりだした。パベルは超が付くほどの娘想いの父親で、耳にタコが出来くらい自慢の愛娘の話をしてくるくらいだ。最近ではその娘自慢の話が一度や二度程度で済むための術を見つけ出す始末である。

だが、パベルは「分からない」の一言だけ話すと、愛娘の話題はそこで終わってしまった。これは只事ではないとカンパーノは直観的に理解した。娘の話になると悪鬼羅刹の如き表情で嬉しそうになるパベルだが、今は不機嫌でそのような表情になっている。

歴戦の猛者であるカンパーノでさえ、身の毛のよだつ光景だ。

(こう言う場合は…ソツとしておくのが一番か?)

予想外の事態に対する対処法を自問自答しながら導いたカンパーノはそれ以上話題を振ることはしなかった。

妙な気不味さを感じ取ったパベルは咳払いをする。

「ゴホン……それでアンデッド達に何か変化は？」

「変わりありませんねえ。不気味なアンデッドの大群勢が遠目から現れてはまた奥に引つ込むの繰り返しです。お陰で砦の兵士達はみんな生きた心地がしねえもんだから気が滅入ってますよ。これも亜人どもの策略ってヤツですかねえ？」

「何とも言えんな。亜人どもがアンデッドを大量召喚して操っている可能性もあるが……迂闊に近づく事も出来ない現状、このまま防御に徹する他無い」

「かあ〜！ ヤダねえヤダねえ。遂に亜人どもも小細工を使った心理戦を仕掛けてくる時代になっちゃいましたか」

カンパーノは大きな溜息を吐いた。単純な近接戦闘を好む彼にとつてこの状況はかなり退屈でもどかしいモノがあるのだろう。

「小細工なんて規模じゃ済まんだらう。アンデッドの数は10,000は下るまい」

「まあそうですけどねえ。最近じゃ、此処へ攻めて来る亜人部族も雑魚ばかりで名のある亜人は殆ど見かけないですよ」

「フフ、確かにな。お前はただ戦えればいいって言う様な男では無いからな」

「俺は別に亜人を殺す事が好きなわけじゃないんですよ？ 俺は強え奴と戦って、自分が強くなるのが好きなんですよ」

「なら『豪王』はどうなんだ？ 昔戦った事があるだろ？」

パベルの言う『豪王』とはアベリオン丘陵に棲まう亜人部族の一

種、山羊人の王バザーの異名である。かつてカンパーノはバザーと死闘を繰り広げ、援軍が到着するまで持ち堪えていた。しかし、破壊王とも呼ばれているバザーを前に手持ちの武器全てを破壊されてしまったカンパーノからすれば、事実上の『敗北』と受け止めている。

「いえ、まだヤツには勝てませんよ。ヤツに勝つには英雄といわれるようにならねえと」

「奴だけじゃない。『魔爪』『獣帝』『灰王』『氷炎雷』…それに『螺旋槍』」

「へへへ、超えなきゃならねえ強者で一杯ですわねえ」

いつの間にかパベルの表情がだいぶ柔らかくなっている。カンパーノ自身が意図していた訳ではないのだが、彼との会話でパベルが抱いていた心配事や悩み事が少しだけ紛れたらしい。

「ところで旦那。援軍の件はどうなってますか？」

「ああ。国は今回も冒険者組合へ緊急の依頼を出す方針らしい。早ければ明日にでもカリンシヤあたりに貼られる事になるだろうな。神殿勢力からの協力も仰いでいる」

「アンデッドの数が数ですからねえ。あんま大した人数は集まんねえんじゃないですか？ 前も亜人部族が攻めて来た時なんか、金級冒険者すら来なかったじゃないですか」

「そうだが、なりふり構ってはいられまい。ただでさえ人手が不足しているんだ。その分、報酬はたんまり出すらしい」

「へー、そうですかい。今回はマトモな数が来るといいですね」

2人は城壁から見えるアペリオン丘陵から視線を離さなかった。此処のところ嫌な事ばかりが立て続けに起きており、国政も南部との衝突により傾きつつある。

王国ほどでは無いにせよ、何か大きな…国を揺るがすほどの僥倖か吉報が無い限り、この国は内側から崩壊してしまいかねない。

「旦那。ひと段落付く事があれば、たつぷり休暇を取って一家団欒つてヤツを堪能して来てくださいや」

「……ああ、そうするよ。お前は どうするんだ？」

「俺ですかい？ うーん……武者修行？」

「ハハハハ、お前らしいな！」

一家団欒——その言葉でパベルの脳裏には行方知れずの愛娘の姿が浮かんでいた。

◇

何とか落ち着きを取り戻したネイアは、向かいの椅子に座っている悟に事の顛末を全て話した。彼女の話を聞いた悟はさてどうしたのかと腕を組み静かに悩んだ。

「成る程。それで家に帰ろうにも帰れなくなっちゃったと？」

「は、はい……考え無しで恥ずかしい事だと思います」

「そんな事はありませんよ。確かに何も言わずに出て行ってしまった事は良くないことですが、父親を想つての行動は素晴らしいと思います」

「ありがとうございます……そう言われると、そのお……少し気が紛れます。でもそんな父にも、私は……はあ」

呆れた溜息が安宿の狭い一室によく響いた。

話を聞く限り、一番の問題は彼女の母親らしい。最初は普通に帰って、素直に謝ればいいと思つた悟であつたが、どうも彼女の母親の話を聞く限りでは叱られる程度では済みそうに無いようだ。

最悪、殺されるかも知れないと顔を真っ青にして肩を震わせる彼女を見るにかなり怖い母親らしい。まさかと思ひネイアにある事を恐る恐る確認するが、彼女はそれを全力で否定した。どうやら別に虐待を受けているわけがなく、寧ろ年頃の娘の気持ちに寄り添う肝っ玉母



さんと言った感じだ。ただ、怒ると物凄く怖いらしい。

正直、神妙な面持ちで話す時の彼女の視線の方が怖い気がするのだが、思っけていても言わないのが大人である。

聞けば母親は元聖騎士だったらしく、ネイアも同じように聖騎士を目指したい旨を両親に告げていた。しかし、父親のパベルは賛成とは言い難く、母親は言わずもがな断固反対だった。

リアルでは教師をしているかつてのギルドメンバーの『やまいこ』さんは、生徒の進路相談で親子の意見のぶつかり合いを目の当たりにした事があると言っていた。あの世界では進学する子どもなんてほんの一握りしかいない為、進路などほぼ決まっている様なものなのだが、バラハ家の場合はちよつと過激らしい。

(一人娘の進路に真つ向から反対するにしたつて、剣は向けないだろ流石に：)

あろうことか彼女の母親は頑なに聖騎士を目指そうとする我が子に対し、現役時代の剣を取り出すとその切先を突き付けたのだ。「どうしても言うなら自分を倒してみろ!!？」と告げられたネイアは当然、そんな事など出来るはずも無く、不承不承ながらも表向きは諦める事にしたとの事だ。

ネイア曰く、一触即発の事態にならなかつたのは父親のパベルが必死に間に入った事が大きかつたようで、あの日に関しては心の底から父親に感謝していた。

「…念の為、もう一度聞きます。本当に虐待は——」

「気持ちには分かりますが…それは本当にありません」

「そ、そうですか…」

彼女の落ち着いた様子から悟の懸念はどうやら杞憂らしい。それ自体は良い事だが、母親の逆鱗に触れないようどうやって謝るかが重要になってくる。

褒めるときは普通に褒めてくれる肝っ玉お母さんだが、怒る時は全力で怒ると言う、常に0か100の人らしいので対処に困る。

(何とか手を貸してあげたいけど、見ず知らずの人がしゃしゃり出て来たらかえって状況は悪くなるだけだろうなあ)

「他所様に迷惑掛けて!!？」とブチ切れる姿が何となく想像出来る。しかし、このまま結果を恐れて時間だけが過ぎていくのも良くない。時間が経てば経つほど状況は悪くなる一方だ。

故に、悟が出来ることはただ1つ：彼女の背中を押して上げることだけである。

「とにかく、このまま恐れていては何も進まないでしょう。却って状況が悪くなるだけです、ここは勇気を振り絞って、正面から謝りましょう。誠心誠意で謝ればきっと分かってくれます。ですが、多少叱られる事だけは覚悟して下さい」

「…は、はい」

気は引けているが彼女もこのままではいけない自覚は持っているらしい。今日はもう遅い為、家に帰るのは明日にした。早めに休むよう彼女に伝え、悟は彼女が寝ている間に遠隔視の鏡を使い、聖王国首都ホバンスに転移門を設置した。これで一瞬で移動出来る。

(彼女にとって明日が大勝負だな。さてと、俺も明日こそは仕事をしない)

悟も明日は初めての冒険者稼業を行う予定だ。お互い大きな一歩を踏み出す者同士、心の中で健闘を讃え合うのも悪く無い。

(まあ、明日が仕事デビューなんて彼女の知った事ではないから、実質讃えるのは俺1人なんだけど)

軽い冗談を考えながら悟は明日からの冒険者デビューという事もあり、胸ワクワクで夜を過ごした。

「そう言えば……最近、何かを忘れてる気がするんだが……まいつか」

◇

その頃、アベリオン丘陵のとある一角で今なお増え続けているアンデッドの大群勢を遠目から眺めている人影がいた。

「まさか……本当の事を言っていたとはな」

「ねえ？　だから言ったじゃーん。カジツちゃん、私が嘘ついてると思つてたのおー？　傷付くなあ」

1人は赤黒いローブを身に纏い、頭髪も髭も眉毛も無い、窪んだ目と痩せこけた血色の悪い顔色をした不気味な男。もう1人は黒いフード付きのマントで身を隠した金髪ボブカットの若く瑞々しい女性だ。

「ふん、内容が内容だからな。眉唾程度にしか受け止めとらんかったわ」

「酷いなあー。私だって命懸けで法国の至宝だって持つてきたのにいー」

前者は遠巻きから見えるアンデッドの大群勢を興味深げに、後者はそんな前者の反応を面白そうに眺めている。

「だが……あれほどのアンデッドの大群が何故アベリオン丘陵に？」

カツツエ平野ならともかく」

「さあねえー。でも、カジツちゃんが5年も掛けて準備して来た負のエネルギーよりも凄いなじゃ無い？」

「うーむ…」

「カジツちゃん」と呼ばれている男は、自らが5年の歳月を費やして準備して来た苦勞が否定された様な複雑な気持ちを抱いた。だが、それも彼が目指す最終目的の為を思えば取るに足らないプライドというものだ。寧ろ、予定ではもつと掛かるはずだった期間を一気に短縮する事が出来るかも知れない僥倖を噛み締めるべきだろう。

「どれどれ、試してみるか。場所が場所だからな、下手に近づくと此方が危うくなる」

男は懐から妖しく光る片手ほどの球体を取り出して頭上へ掲げた。

『『死の宝珠』よ…!』

更に淡く光を放つ球体を暫く掲げた後、男は目を見開いて驚愕した。

「おお…! おおおおお! 何という膨大な負のエネルギー!

ワシが5年も掛けて集めた量とは比べ物にならないぞ!!?」

「おー、やったじゃーん」

男は歓喜した。あれだけの負のエネルギーを我が物にすれば間違いないと目指していたモノに成れる事を…だが、同時に懸念も存在した。

あのアンデッドの数は明らかに異常過ぎるのだ。死の気配と霧で覆われているカツツエ平野でさえ、あんな数のアンデッドは見た事がない。

(明らかに誰かの手によって喚ばれたものだろう。だが、一体誰が?)

死の宝珠で探った時にはアレらを操る者の気配は感じ取れない。

かったが…)

あの規模のアンデッドともなれば骨スケリトル・ドラゴンの竜や死者エールの大魔法使いダー・リツチを超える、未知の強大なアンデッドが存在する可能性も高い。それを操ることが出来る可能性のある者となれば、彼が知る中ではほんの数名しかない。

(だが、その者たちと思われる死の気配は感じ取れなかった……杞憂だったか？ 単なる偶然か？)

どちらにせよこの機を利用しない手はない。

悲願を達成する為なら多少強引な手を使っても構わない。

「おい、クレマンティーン」

「ふっふっくん♪ 言われなくても分かってるよカジツちゃん。この前拉致したアイツを連れてくればいいんでしょ？」

「ああ、話が早くて助かる」

クレマンティーンと呼ばれる女性は邪悪な笑みを浮かべる。これから彼が起こそうとしている計画は、彼女にとっても大きなメリットがある。

(まさかこんなに早く法国から逃げ切るチャンスが到来するなんてねえー)

地理的にも距離が近いためリスクもあるが、その分法国としても無視出来ない状況になる事は間違いない。故に法国は目の前にあるアンデッドの脅威を取り除く為に行動を起こす筈だ。

そうなれば連中も裏切り者の搜索などに専念できる事も無くなるというもの。クレマンティーンはその機会をより確実なモノにしてくれるであろう、男の計画に手を貸すのだ。

(カジットちゃんの計画がどこまでいくのかは気になるけど、私は頃合  
いを見てトングズラこかせてもらいますよおー)

周りにある利用できるものは何でも利用する。  
全ては自分の為に他ならない。

## 第8話 やっぱり忘れてた

◇

屯所での出来事から翌日の早朝、聖騎士団副団長が1人グスターボ・モンタニエスは今日も今日とて上司である聖騎士団団長のレメディオスから受けた無茶振り任務に勤しんでいた。謎の出頭をして来た2人の人攫いからの情報を頼りに夜半まで開いていた店へ聞き込みを続けているが、有力な情報は皆無だった。

「やっぱり此処にはいないのか……まあそりゃそうだよなあ。そんな都合のいい事が起きる筈がないんだよ」

件の魔法詠唱者発見を諦めかけていたグスターボは、既にどうやってレメディオスを諦めさせるのかを思索していた。搜索を始めて数日経つが、一向に見つかる気配は無く、この城塞都市カリンシヤの大体を調べ尽くしているが、もうお手上げ状態である。

（最悪、要塞線まで行くか？ ……いや、あそこは今、アンデッドの大群に気が張ってる筈だ。余計な火種を持ち込ませるわけにいかないな）

いよいよ困ったと、痛み出した胃痛に腹を摩りながら移動していた。何となしに街を見渡していると、フード付きマントと軽装革鎧を身に着けた数人が視界に入った。

（ん？……アレは）

彼らの特徴的な服装からグスターボは『九色』の1人、パベル・バラハの部下達である事を瞬時に見抜くと、何やら慌てている様子の彼らの傍へ近付いた。

「失礼。お前達は『黒色』バラハ兵士長の部下とお見受けするが？」  
「こ、これは、グスターボ副団長っ!?？」

『九色』を与えられていないグスターボだが、軍としての役職では彼の方が上官にあたる。パベルの部下達は慌てて姿勢を直す、楽にするようにとグスターボが軽く手を挙げてそれを制止する。

「随分と慌てているようだが、何かあったのか？」

本来、街の巡回は彼らの役割では無く、私事なら態々正装でいる理由も分からない。そうになると、彼らが集団で行動をしているのには何かワケがある筈だ。

何かしらの勅命を受けているなら余計な詮索はせず黙って引き下がるつもりだった。しかし、彼の部下達は互いに顔を見合わせると、「実は…」とそのうちの一人が話を始めた。

「……なんと、バラハ兵士長の御息女がッ!?？」

「は、ハイ……我らも昨日から捜索をしているのですが、中々足取りが掴めず」

「それはそれは…バラハ兵士長も気が気でないでしょうに」

彼の娘への溺愛ぶりはグスターボも聞き及んでいる。何度か彼の延々と語られる娘自慢の話には正直参っているが、その気持ちはグスターボも理解出来る所はある。

グスターボは未婚だがその代わりに愛ペットの栗鼠リスがいる。レメデイオスの無茶振りとその後始末を受けている彼にとって、かけがえの無い存在だ。もし愛ペットのリスが居なくなってしまったら、ショックとストレスにより胃痛悪化に加え、頭部も禿げ散らかしてしまっだろう。

故にパベルの心中を察する気持ちは、決して建前では無く本心なのだ。



「グスターボ副団長は何故カリンシヤに？…例のアンデッドの大群に備えてでしょうか」

「あー、いや。いつものやつだ」

「あつ…」

その一言で全てを察したパベルの部下達は哀れみの視線を向けてくる。それがグスターボにとって何より辛い。

だが同時に彼らの話はレメディオスの命令を回避するチャンスに思えた。幾ら彼女とて『九色』の1人にしてアベリオン丘陵での情報収集に大きく貢献したパベルの娘であるネイア・バラハの捜索に助力していたとあつては、渋々了承せざるを得ないだろう。あとは適当に難しい言葉や建前を言えばより確実になる。

便乗する形で申し訳は無いが、此方とてやらなければならない事が山積みなのだ。きつと分かってくれるだろうし、捜索については本当に手伝うつもりでもいる。

「ま、まあとにかく、バラハ兵士長の御息女が行方不明と知ったからには無視する訳にはいかんだろう。微力ながら我々も協力する」

「し、しかし、カストディオだ——」

「協力する。いや、させてくれ」

「は、ハイ。あ、いやッ！　非常に有難いです!!？」

「ハハハ、お互い様さ」

取り敢えずグスターボは彼らが手に入れた手掛かりを一通り聞いたが、生憎手掛かりとなる情報はグスターボも持っていなかった。

「むう…力になれず申し訳ない」

「い、いえ、どうか気になさらず。ですが、此処のところ、亜人部族との衝突で身寄りを失った浮浪孤児の行方不明事件が増えてますから…それも心配で」

「王国の犯罪組織『八本指』の枝組織が諸外国にまで影響力を伸ばして来ております。警戒はしているのですが……明確な実態すら掴めない状況です」

グスターボは「浮浪孤児の行方不明事件」に引つ掛かった。

（そういえばあの2人組は「街の娘を誘拐して人買いに売ろうとした」とか言っていたな？）

まさかと思ったグスターボは彼らに屯所へは寄ったかを聞いた。彼らの返答は「まだ寄っていない」であった。

彼は屯所の出来事をそのまま教えた。

「もしかしたら、バラハ殿の御息女は人攫いに遭いかけたかも知れないな……」

「で、では御息女は何処に……?」

「そこまでは分らん。その2人組もどう言うわけか記憶を失っているようだったからな。魔術師協会の力も借りて調べたから間違いない」

「で、では。もし、その娘がバラハ兵士長の御息女だとしたら？」

「うむ。まあ楽観は出来ないが可能性はあるだろう。問題なのは肝心の行方が分からない事だ。恐らく、御息女を助けたという謎の人物がカギとなるだろう……」

そして、その人物こそグスターボが探している謎の魔法詠唱者の可能性もある。とんでもない僥倖が舞い降りた事にグスターボは内心歓喜した。

「昨晚の出来事だ。まだこの都市内に居る可能性が高い。先ずは昨晚から今日までカリンシヤを出た怪しい者がいないかの確認を取る必要がある。我々は東と南、君達は北と西の城門へ向かってくれ」

グスターボはこの一石二鳥の可能性を信じ、行動を開始した。

丁度その頃、冒険者組合に国から発令された緊急依頼の貼り紙が掲示板に貼られた事でちよつとした賑わいになっていた。

◇

翌朝、安宿を後にした悟は早速、冒険者組合へ訪れていた。

本当なら夜中のうちにマーカーを設置した首都ホバンスへ〈転移門<sup>ゲート</sup>〉を開いて、彼女を連れて行くつもりだったのだが、ネイアはまだ少し心の準備が必要らしい。

(……喧嘩した時の仲直りってかなり勇気がいるんだな。そう言えば、俺って喧嘩らしい喧嘩ってした事無かったなあ)

たつちとウルベルトの仲違いは当時のギルメンなら誰もが知る所ではあった。その度、仲介に入っていた悟は決まって「仲直りして下さいよ」と簡単に言っていたが、結局最後まで根本的な仲直りが叶うことは無かった。

今朝、ネイアは言っていた。

——仲直りするって凄い勇気がいるんです……なのでもう少しだけ時間を下さい——

最初はその意味がよく分からなかったが、冷静になって考えてみると確かにそうなのかも知れないと思えてきた。そして、その意味が分からなかったのは自分が誰かと喧嘩をした経験がないからであることも。

(思い返せば、不満とか意見を言ったら嫌われるかも知れない……仲直り出来ないのかもしれないって事ばかり考えてたなあ)

母子家庭だった悟は、母親を小さい頃に亡くしている。死因は過労死だ。当時の彼は子供ながらに母親が学費や生活の為、毎日忙しく働いている事に気付いていた。その為、子供らしい我儘を言ったり親子喧嘩をした事が無かったのだ。

故に彼は恐れていた。自分のせいでまた大切なモノがいなくなってしまうことを。

(俺って臆病な人間だな…いや、今はアンデッドか)

悟はふと彼女の事を考えた。

感情や心を押し殺してきた自分と違い、彼女は怖い母親の逆鱗に触れるような事であつても行動することが出来た。

自分なんかよりよっぽど強い人間だ。

その芯の強さに少し憧れる所がある。

(彼女を送り届けるのは、何かいい依頼を受注してからにするか……)

組合の中へ入ると掲示板の前で何やら人だかりが出来ていた。オイシイ依頼でも入ったのか、それとも別の何かかは不明だが、悟も興味がある。

人混みの中をかき分けて前へ出ると、掲示板の真ん中に一番新しい依頼書が貼られていた。しかも、他の依頼書と比べて結構上質の羊皮紙に見える。

「見ろよ…」

「おいおい、まただぜ」

冒険者達がその新しい依頼書を見て何やら呟いている。「また」と言う辺り、別段珍しい依頼というわけではなさそうだ。

「此処も危険かも知れねえな。近過ぎる」

「ホバンスに拠点移すか？」

「亜人の次はアンデッドか……」

「やっぱりあの噂は本当だったんだな」

悟は周囲から聞こえる様々な単語の中で気になる言葉を聞いた。

(『アンデッド』……?)

早急に確認する必要があると悟は懐から解読用のマジックアイテムの片眼鏡モノクルを取り出し、例の依頼書へ目を通した。

(アベリオン丘陵で大量発生したアンデッドの討伐協力の依頼か。へー、国が組合に依頼を出す事もあるんだなあ。えーっと、基本報酬は1人あたり金貨10枚で討伐したアンデッドの数に比例して追加報酬あり……ほう、結構悪くないんじゃないか？ アンデッドの数は2日前時点で6,000——)

「ふん、またかよ。随分とまあ馬鹿にされたもんだな。俺たちを消耗品か何かと勘違いしてるらしい」

悟はすぐ隣にいたベテランっぽい冒険者のオッサンの言葉に反応し顔を向けた。偉そうに腕を組み、ほくそ笑みながら国からの依頼書を眺めている。

彼の首に提げられている冒険者プレートへ視線を動かした。どうやら鉄級アイアンらしい。

銅級カッパーの悟が言えた立場では無いが、正直その貫禄で下から2番目の階級ってどうなのだろうかと思ってしまう。しかし、冒険者稼業の経験は明らかにこのオッサンの方が上なので、ここは先輩の功を頼ろうと悟は考えた。

「すみません。それは一体どう言う…」

「あん？　なんだおま……デカあ」

オッサン冒険者は啞然と悟を見上げるが、首にぶら下がっている銅級プレートを見て直ぐにいつもの偉そうな態度に変わった。

「ハッ！　誰かと思えばヒヨッコ冒険者かよ、まったく脅かしやがって……何だお前、ああいう依頼は初めてか？」

「はい。つい先日、流れ着いた新入りなもので」

「ふーん……まあいいか。偶に国から組合へ依頼が来るんだ。大体がアベリオン丘陵の傭人部族関連とか、そういうのだな。そのくらい今の聖王国は人手不足なんだ」

「ですが、一見すると結構オイシイ依頼じゃないですか？　数は多いですが、倒した分だけ報酬も上がるみたいですよ」

悟の言葉にオッサンはチツチツと人差し指を左右に振った。正直鼻につく態度だが、ここは堪えどころだ。

「甘いな、最下級<sup>銅級</sup>」

（お前だって鉄級じゃないか…）

「まあ確かにお前さんの言い分にも一理ある。俺も初めて、国からの依頼を見た時はそう思ったさ。だが、気付いたんだよ。あの依頼内容には大きな落とし穴がある。それに気付かず欲に目が眩んだ同僚を俺は何人も見た」

「落とし穴？」

「いいか、他の依頼書と、よくよく比べてみる。何かが抜けてるからよ」

後輩にいい所を見せたいのかオッサンは段々上機嫌に盛り上がっていた。何だかちよつと可愛く思えてきた。悟はオッサンの言う通り、国からの依頼書と他の依頼書を比べて読んでみた。

確かに何か違和感がある。何かが抜けているのだ。それに気付くのに時間は掛からなかった。

「…依頼の達成条件が無い？」

「その通り。国からの依頼は基本的に明確な終わりってヤツが無いんだ。達成したかどうかの匙加減は国次第ってわけよ」

依頼内容は「大量発生したアンデッドの討伐協力」「基本報酬は1人金貨10枚で追加報酬あり」その他、色々と記載はあるが他の依頼書にある達成条件が抜けている事に気付いた。

他の依頼書にはきちんと「ゴブリン小隊の殲滅」や「規定量の薬草採取」と言った達成条件があるにもかかわらず、国からの依頼書にはその記載が無い。

「報酬に目が眩んだ欲深い冒険者達が参加しに行ったんだが、扱いはまるで前線に送り込まれる傭兵さ。完全に軍の指揮下に入ってるし、嫌気が差して抜け出したヤツらもいたが、国はそいつらを「依頼未達成」って事にして報酬を出さなかったんだ。仲間が死んで依頼遂行不可能でも抜け出したらそれで終いさ。酷えったらありやしねえ」

かなり悪い依頼の様だ。リアルブラック企業と中身だけが異なるが後は全くと言っていいほど同じに感じる。仲間が死んで続けたくても続けられない冒険者に対しても何の補償も無いのだ。

（今後の事を考えるなら、依頼に応じた冒険者の待遇を良くするのが妥当なんだけど…国の考えは分からないなあ）

彼が最初に言った「消耗品」の意味も理解出来る。そんな散々な目に遭えば誰だって次に依頼が出て受けてやらないに決まっている。

まさに因果応報というやつだ。

「それにしてもなんだってアベリオン丘陵にそんだけのアンデッドが出てきたんだ？」

「え？　普段は違うんですか？」

「おうよ。さつきも言ったと思うが、亜人部族の討伐協力が今までだったんだ。まあその変動もあつて今回の国からの依頼は誰も受けねえんじやねえか。お前さんは受けんのか？」

「うーん……どうしようか迷つてる所ですね」

「やめとけ、やめとけ。どうせ酷くこき使われて終いよ。オマケに何千つて数のアンデッドが相手と来たもんだ。よっぽどヤベエアンデッドが現れたんだろうよ。アベリオン丘陵にアンデッドが昼夜間わずに現れるなんざ殆ど無かつたしな」

「へー、そうな………」

突然、悟は言葉を止めて固まつてしまった。今の彼は静かに、だが必死に思考を回転させている。「まさかそんな筈は」と否定したい気持ちだが脳内で結論が浮かび上がるまでに沸々と湧き上がる。しかし、現実が変わる事はない。

「あ、ああああ………」

アベリオン丘陵――

アンデッドの出現――

死体から創造した死の騎士達――  
デス・ナイト

丘陵地帯から出ないよう命令――

負のエネルギーの蓄積――

「あああああああ――！！？！！？！！？　や、やつちまつたアアアアアアアアアア！！？」

全てに気付いた悟は組合の建物全体が大きく揺らぐ程の絶叫を上



げた。その姿はかのノルウエー出身の画家ムンクの作品『叫び』のソレである。

そのあまりに突然の大轟音に、鉄級オツサンは勿論、受付嬢や他の冒険者達も皆例外無くたまらず両耳を塞いだ。

「ぬおおあー!?? な、何だアア!??」

「ぐおお耳がアアアアア!!?!?!」

「うるせえええ何だアアアアア!??!?!」

「ウギヤアアアアア!!?!?!」

アベリオン丘陵のアンデッド大量発生。その原因は紛れもなく5体の死の騎士デス・ナイトを放置していたことで、それをすっかり忘れていたのだ。

「自己防衛以外の戦闘はしないように」と命令を与えた事で安心し切っていたのが大きな間違いだった。それは逆に言えば「自己防衛目的なら戦闘をしても良い」という事に繋がる為、あの丘陵地帯を彷徨ったこの数日間で死の騎士デス・ナイト達は亜人か何かと接敵、そして殺し尽くしたのだ。

（死の騎士デス・ナイトは殺した相手から従者の動死体を生み出す特殊技術ス・キルを持っている!!? ああ〜何でこの特性を考慮しなかったんだアアアアア!!?!?!）

気が付けば数千体なんて馬鹿げた数になったのだ。オマケに国家の存亡に関わりかねない大事件にまで発展してしまっている。アンデッドの数が増え、一塊となって大移動を続けていたのであれば今の丘陵地帯の出来事は十分説明はつく。

そうと分かれば冒険者デビューでルンルン気分に戻るワケには行かない。

悟は大慌てで冒険者組合から出て行くとへ転移門ゲートを開く為にひとまず人気の無い場所を必死に探した。しかし、完全にテンパっている

悟の思考は満足に働かず、瞬時に脳裏に思い付いたのはネイアが現在待機している安宿の一室だった。

「ああー……!!?!!? クソツ!!? 何で俺っていつもこうなんだ!!?」

街中を漆黒の全身鎧を纏った大男が人間離れた速さで疾走する姿に、大勢の人々が驚愕と呆然の視線を向けていた。

その中にはグスターボ達の姿もいた。

「うおお!!? な、何だアレは!!?」

漆黒の全身鎧を纏った大男がかなり慌てた様子で疾走する姿は、グスターボからすればかなり怪しい。昨晚の出来事と関係が無いとも言いつけない。

彼へ疑心の視線を向けるグスターボはある可能性を導き出した。

「まさか……あの攫い屋に関係する奴かもしれん。2人組が捕まり、俺達が嗅ぎ回っている事を聞きつけて慌てて……逃すか!!?」

グスターボは部下と共に怪しい男<sup>悟</sup>を追いかけた。馬に乗っている自分達よりも圧倒的に速い脚力に愕然としながらも、決して見逃しはしないと必死に喰らい付く。

無茶振り上司の命令からの解放がかかっているかも知れないのだ。彼がいつも以上に胃痛に耐えるのも当然というものである。

◇

陽光聖典の襲撃から既に数日が経過していた。気が付けば周りは負のエネルギーの蓄積により自然とアンデッド達が大量発生してしまい、何となく流れの中で死<sup>デス・ナイト</sup>の騎士達がこの10,000体規模のアンデッドを引き連れるリーダー<sup>引率</sup>的役割を担ってしまっていた。



に対し「道を開けろ」と命令を下した。命令を受けたアンデッド達は  
大慌てで左右に分かれて道を開ける。その光景は海を割ったモーゼ  
を彷彿とさせるほどであった。

まだ大分遠いが主人が開けた一本道を全速力で駆けて近づいて来  
る姿が見える。もうすぐ主人と久しぶりに対面出来る歓喜の気持ち  
を必死に抑え、出迎えようとしていた。

「……ん……や……！」

主人が何かを叫んだ。それが何かよく分からなかったがまだ叫ん  
でいる為、今度こそ聞き漏らさぬよう耳を傾ける。

そして、その言葉がハッキリと聞こえた。

「全・

員・

正・

座アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
!!?!?!?!」

明らかに怒気が込められている主人の大声を聞き、恐怖と絶望感に  
襲われた。しかし、まずは主人の命令を聞く事こそが最優先である  
為、死の騎士<sup>デス・ナイト</sup>達は一斉に武器を置いて正座をし、他のアンデッド達も  
一斉に土下座<sup>スケリトル・ドラゴン</sup>を始めた。因みに骨の竜は『伏せ』の姿勢を取って  
いた。

アベリオン丘陵のど真ん中で総勢10,000体のアンデッドによ  
る大正座。そんな彼らの中心で「何やってんのマジでエェ!?」と声  
を荒げる悟。

異様にして異質な光景を遠巻きから眺める集団がいた。

「な、何をしておるのだ……あの黒騎士は?」

「カジット様……あの者は一体」

「そんな事、ワシが知るわけがあるまいッ！」

カジットと呼ばれた赤黒いローブを纏う男が苛立ち紛れに答える。先日訪れた時には居なかった存在が少しその場を離れている間に現れ、何やらアンデッド達を平伏させているのだ。

あのアンデッド集団の中にはかなり強力な個体も確認出来る為、何の理由もなく平伏するなど到底考えられなかった。

(まさかワシの知らぬ間に『ズーラーノーン』が……いや、それはあるまい。十二高弟の1人であるワシの目を盗みそこまでの事が出来るなど、あまり考えられぬ)

カジットは自らが所属している秘密結社『ズーラーノーン』の手の者かと考えたが、今回の件に関しては組織も認知している筈である為、態々余計な手を入れるような真似はしないだろう。

ならばと聖王国の隣国である『スレイン法国』の線も考えるが、彼の国は組織の者が目を光らせているから何か動きがあれば報告が上がるはずだが、それが無いと言う事は法国の線もあり得ない。

「……おい、クレマンティーン」

彼がそう呼ぶと後ろからもう1人のフード付きローブを羽織った唯一の紅一点クレマンティーンが出てきた。

「戦士の目から見て……あの者、どう見る?」

普段、飄々で軽い態度の彼女が珍しく真剣な視線を例の黒騎士へ向けられる。

「んー、別にビビる事無いと思うよお。戦士としてはズブの素人だねえ」

「……偽りでは無いな?」

「もう、信用ないなあ」

「ふん、まあ良い。お前でも十分対処し得る相手なら恐るるに足らん」

警戒すべき相手では無いと分かると、カジットとクレマンティーヌ、その取り巻き達が行動を開始した。

## 第9話 ごめんね、カジツちゃん

◇

つい感情とその場の勢いで死の騎士達デス・ナイトに正座を命令してしまい、何故か釣られるカタチで他の10,000近いアンデッド達も一斉に正座をしていたが、悟は一先ずこんな事になった経緯を死の騎士達デス・ナイトに聞いた。

「なるほど、天使を召喚する連中から始まり今に至るワケ……はああ  
〜」

案の定、聞けば聞くほど彼らは何も悪く無いのだ。自身の不甲斐なささと杜撰さに思わず両手で顔を兜越しに隠してしまう程に。

(穴があつたら入りたい……この子達は何も悪く無いじゃないか)

心優しい死の騎士達デス・ナイトは心を通じて必死に「主人は何も悪く無い」ことを、〃全ての非は自分達の不甲斐なさにある〃と訴えかけて来る。

それがかえって悟のメンタルを擦り減らしているとも知らずに健気に全ての罪を被ろうとしているのだから本気で泣けてくる。いやもう心が泣いている。

『報連相』は基本中の基本なのにそれをキチンと教えなかった自分が悪いんだ。お前たちは命令を忠実に守っただけなんだから、気に病む必要はない」

社会人としての基本を何も知らないこの子達に教えなかったのだ。全ての自分に非があるのは至極当然のこと。「自分の為を想うなら、ここは謝罪を受け入れてほしい」と伝えると、死の騎士達デス・ナイトはかなり困惑と動揺しながらも、主人である自分の意思である為にぎこちなく承

諾してくれた。

ほんの少しだけ肩の荷が降りた気持ちになるが、やらねばならない事はまだある。

「さてと、ここまで増えたアンデッド達をどうするか」

悟は振り返った先に広がるアンデッドの地平線へ目を遣る。自分が創り出したアンデッドなら消す事は簡単に来るが、アレらは蓄積された負のエネルギーにより自然発生している為、倒す以外の方法は無い。地道に斬り伏せる事も可能だが、ぶっちゃけて言えば面倒臭い。

何より聖王国が何かしらの手を打って来る前に何とか処理しなければ後々かなり面倒臭い事になりかねない。それで聖王国側に犠牲者が出れば寝覚めが悪いと言うものだ。

アンデッドだから寝る必要は無いがこれは気分の問題だ。

「ん？　待てよ……天使を召喚する連中？」

ここで悟は彼らの言い分に1つ引つかかる点があったのを思い出した。

ここまでアンデッドが増えたきっかけはその『天使を召喚する連中』であり、そこから段々とアンデッドの数が増えたと言う。それまでは亜人もモンスターも此方を見るなり逃げて行っていたそうだ。

(…まさか何処ぞの国の人に手を出したんじゃ?)

もしそうなら明確な国際問題待ったなしである。未来永劫お尋ね者になってしまう可能性も高い。尤も自己防衛以外の戦闘を認めていない為、彼らがその『天使を召喚する連中』を殺し尽くしアンデッドに変えたとしても先に手を出したのが向こう側なのは明白だ。

この子達は自己防衛の為、行動したに過ぎないのだ。しかし、そん



な理屈が通るとは思っていない。苦渋の決断だが、今後のことを考えるならやはり『証拠隠滅』を図った方が良い。

(この子達には悪いけど、高位の魔法で――)

「やはり見間違いでは無いみたいだな。それほどのアンデッドを平伏させるとは…お主一体何者だ？」

不意に背後から初めて聞く声が聞こえてきた。

振り返るとそこには赤黒いローブを纏う男と似たような黒いローブを纏う集団が小丘の上に立ち此方を見下ろしていた。

「…お前達は？」

「質問をしているのはワシらの方だ。む？…そのプレートは…：貴様、冒険者だな？」

「ああ、つい先日なつたばかりの、聖王国の銅級冒険者だ」

悟は絵に描いたような怪しい集団を注意深く観察する。明らかに善人では無いが、ただの悪党とも思えない。

彼らの大まかなレベルを測定した。

取り巻きみたいな連中はレベル20前後で、一風変わった雰囲気を持つ赤黒いローブの男はレベル25前後とやや高い。しかし、中でも1番高いのはレベル35前後の人物だ。

(他の奴らと違って杖を持ってない…つまりアイツは魔法詠唱者じゃない可能性もあるか？ いや、別に魔法詠唱者は必ず杖系の装備が必須ってわけじゃないしあんまり関係ないか)

取り敢えず最も警戒すべきは1番レベルの高いアイツだろう。悟は警戒しながらも彼らの正体を探ろうとした。

「一応、質問には答えてるんだ。先ずは名前くらい名乗ったらどうだ

？」

「ふん。お前の態度次第だな」

「ねえーカジツちゃん、殺さないの?」

例のレベルが高い奴が耳打ち：どころか此方などお構い無しに普通トーンで『カジツちゃん』なる人物へ話し掛けていた。その声質から、どうやら若い女性らしい。

「カジツちゃん、と言うのか? 随分、変わった名前なんだなあ」

「戯けた事を申すな! ワシの名はカジツト・デイル・バダンテールだ! そんなふざけた名前な訳があるまい!!?」

「はいはい。よろしくね、カジツトさん」

「ツ!? ぐ、ぐぬぬ…」

うっかり自分で自分の名を口にしてしまった事に気付いたカジツトは、ボロを出すキツカケを作った女をひと睨みする。一方の女は口笛を吹いて知らん顔だ。

「これほどのアンデッドを平伏させるとはな……お主、やはり只者ではあるまい」

「買い被りだな。俺はただの新米冒険者だ」

「偽りを申すな。10,000体ものアンデッドを平伏させる者が、ただの新米冒険者」な筈が無かるう」

悟は改めて謎の黒ローブ集団を観察する。先ほどから質問をしているのは赤黒いローブを纏うカジツトなる男だけだ。口調に態度、取り巻き連中の一步引くような姿勢から見ても、ほぼリーダー格と見て間違い無いだろう。しかし、単純なレベル基準で言えばカジツトは2番だ。1番は例の女である為、強さの序列で上下関係が決まる組織ではない事が伺える。

（あの女の態度はどう見ても目上の人に対するそれじゃない。んー、多分だけど用心棒的なポジションかも知れないな）

カジットとその部下達は恐らく魔法詠唱者。その線で行くなら、彼女は前衛型戦士職と考えるのが自然だろう。魔法詠唱者という可能性も無くはないが、それではバランスが悪過ぎる。

「あつそ。俺は本当に『ただの新米冒険者』なんだが。それで納得いかないならご勝手に」

「…魔法詠唱者では無いだろうな。此奴の言うことが正しければ、戦士としても大した事が無いようだ…：十中八九『タレント』であろう」  
「ん…？　タレント？」

僅かに反応した悟を見たカジットは「やはりそうか」と自らの予想が的中した事にニヤリと笑った。

一方、悟は聞き慣れない言葉に心の中で首を傾げた。

（『タレント』？　芸能じ…なワケないか。直訳すれば『才能、才能がある人』なんだが、この世界独特の特殊技術スキルの呼び名か？）

実は彼の考察は当たっている。

生まれながらの異能トとはこの世界独自の能力で、先天的に何かしらの特殊能力を有した者を言う。その種類は、何の役にも立ちそうにない微妙な能力から国一つを滅ぼしかねない強大な能力まで様々である。仮にタレントを持つていても、自分に噛み合わない事も多い。その為、自分に合ったタレントを持つ者はかなり希少なのだ。

カジット達はその中でもかなり強大なタレントを持つ人物を現在所持している。故に悟もその類の何かだろうと考えていたのだ。

「まあ良い。お主の名は？」

「…モモンだ」

「そうか。では、モモンとやら。お主のそのチカラ、ワシらの為に使ってみる気は無いか？」

まさかの勧誘に一瞬驚いたが、見た目からして「悪者ですよー」の自己主張の激しい連中の仲間になどなるはずが無い。最恐DQNギルドのギルドマスターの言葉とは我ながらとても思えないが、多分あの連中はそんな生易しいモノではないだろう。

ここは少し加入しそうな雰囲気を出しつつ、情報を引き出すのが良いだろう。

「…お前達が何者なのかにもよるな。話はそれからだ」

『ズーラーノーン』：聞いた事はあるだろうか？」

いいえ聞いた事ありません。

とは言わず、分かっているフリで顎に手を当て考える素振りをみせた。

「お主のタレントは、アンデッドを従属させる”…まさに我々の為にあるようなチカラよ。我らの仲間になるのであれば悪いようにはせん。それよりもワシと同じ『十二高弟』の席を一つ譲る事もやぶさかでは無い。ワシが掛け合ってやる」

脈ありと踏んだのか聞いてもいない事を次々と話してくれる。なんていい人馬鹿なんだろう。しかし、今話していた内容が虚偽と言う線もあり得る為、話半分程度に受け止めておく。

向こうもそのつもりで勧誘していると考えたが、あの気分良さげに話す素振りから多分本気かもしれない。実におめでたい。

「……福利厚生はどうなっている？　ちゃんと保障されているのか？」

「ふ、ふくじ……う、せ……」

悟の言葉の意味が分からないカジットは分かり易く困惑した表情を見せた。彼の部下達も意味不明の言葉が出て来たことに互いに顔を見合わせながら混乱している。

勧誘を蹴る為口に出したに過ぎなかったが、当然というべきかこの世界の文明水準に『福利厚生』などと言う言葉も無ければ制度も無いようだ。だが、リアルでも『福利厚生』などあつてないような制度である為、贅沢な不満というやつなのかもしれない。

「やれやれ、『福利厚生』が出来ていないのであれば話にならん」

「むう…では断ると言うのだな？」

「ああそうだ。と言って大人しく引き返すようには見えんな」

「当然。お主のような『タレント』は我ら『ズーラーノーン』にこそふさわしいというモノ。抵抗するようなら容赦せんぞ？」

その瞬間、彼の部下たちが一齐に身構えた。何となく分かり切つてはいたが、やはり戦う羽目になったかと溜息を吐いた。

「そう簡単にいくと思うのか？」

「そのつもりだ。最悪、背後にいるアンデッドだけでも置いて行って貰えれば此方としてはそれで良い。元々はそれが狙いだからな」

カジットは懐から妖しく光る球体を取り出し、それを上へ掲げた。

『『死の宝珠』よ、辺り一帯の負のエネルギーを吸収するのだ!!?』

彼がそう叫んだ瞬間、『死の宝珠』なる球体が眩く紫色に光り輝き始めた。悟は死の宝珠を興味深く観察する。

(ユグドラシルでは見た事のないアイテムだな。似たようなのはあるけど…ちよつと欲しいかも)

冷静に分析している間にも膨大な負のエネルギーが死の宝珠へ集約されつつあった。一方のカジットは想像通り、想像以上の膨大な負のエネルギーがあつという間に溜まった事に歓喜の声を上げる。

「フハハハハハ!!??!!? 素晴らしい、素晴らしいぞ!!?まさかこれほどまでとは…ツ!!?」

(何をするのか少し興味はあるが…放つて置いてもあんまりいい事は無さそうだな)

悟は手の平をカジット達へ向けた。

「ワイデインマジック魔法効果範囲拡大化・エレクトロ・スファイア電撃球」

彼の手の平から無数の電撃の球体が出現、膨れ上がるとカジット達へ向けて一気に放出された。その動きを瞬時に察したカジットは慌てて後ろへ向けて声を上げた。

「く、クレマンティーン!!?」

無数の電撃の球体が着弾する寸前で、クレマンティーンがカジットを抱えてその場を飛んで躲した。しかし、反応が遅れた彼の部下達はそのまま一気に膨れ上がり広範囲に飛散した膨大な電撃に巻き込まれてしまった。

「さてと、コレで残りは2人だけになったな」

「き、貴様…そのナリで魔法詠唱者だったと言うのか!?!?」

「まあ、コッチが本職だし」

クレマンティーンに担がれていたカジットは焦った。戦士だとはかり思っていたが、見た事のない魔法を扱う魔法詠唱者だったのだ。

コレでは頼みの綱であるクレマンティーンの見立ても当てにできない。

(あの魔法は一体何なのだ!?) 〈雷 撃〉に似ているが違う…それにあの範囲にあの威力…ツ)

魔法詠唱者としても明らかに只者ではない。更に奴の背後には未だに10,000体のアンデッドがいる。まともによっても勝ち目はない。

(クレマンティーンで先にヤツを仕留め、残ったアンデッド供は例の小僧を使い支配下に置くというワシの計画がこうも一気に狂うとは…!)

どうやって対処するか必死に考えるカジットをクレマンティーンは乱暴に降ろした。そして、数歩前へ出ると腰のスライレット刺突武器を2本取り出した。

「次はお前か?」

悟の問い掛けに対して、クレマンティーンは被っているフード越しに彼を静かに見つめていた。そこにはいつもの相手を小馬鹿にしたニヤついた表情ではなく、一流の戦士らしい素の彼女が現れていた。

「へー、アンタ魔法詠唱者だったんだー」

「言っておくが隠してたワケじゃないぞ。この格好はまあ…趣味みたいなもんだ」

「ふーん…魔法詠唱者としては一級品ってとこだねえ」

するとクレマンティーンは背後にいたカジットの方へ振り向いた。何故自分に振り向いたのか理解出来なかったカジットだが、彼女は

つものニヤついた顔を見せてきた。

瞬間、何かを察したカジツトは慌てて身構えるが、少し遅かった。クレマンティーヌはステイレットの持ち手をくるりと変えて、柄の部分を使い彼の腹部目掛けて思い切り殴ったのだ。

「ガハッ!?? な、何をオ…ッ」

「ごめんねえ、カジツちゃーん」

英雄の領域に達している彼女の一撃をマトモに受けてしまった彼は強烈な激痛と共に膝から崩れ落ちると、そのままうつ伏せに倒れてしまう。

恨みがましい瞳で見下すように佇む彼女を睨み付けながら、呪詛のような声で呟いた。

「クイン…ティアの…片割れ、めエエ……」

彼はそのまま意識を失った。

「…一体何の真似だ？」

まさかの仲間割れに悟が驚いていると、クレマンティーヌが再び此方の方へ向き直った。今度は自分かと一瞬身構える悟だったが、彼女は突如としてステイレットを腰に納め直すと、ヒラヒラと両の手を自身の顔くらいの位置まで上げた。

「は…い、降参です」

「…はあ。」

まさかの降伏宣言である。あまりに唐突過ぎた為、一瞬思考が停止してしまっただが、確かに彼女から敵意らしい敵意は感じ取れない。すると彼女は手を挙げたままゆっくりと此方の方へ歩み寄ってきた。



その動きを察した死の騎士達デス・ナイトが自分を守る為、殺意剥き出しでタワーシールドを構え前へ出てきた。

「あ、あのき…ツイツらはアンタの命令は聞くんだよ、ねえ？　　じ、じゃあ…ちよ〜つと下がらせてくれないかな〜？」

死の騎士デス・ナイトの動きに一瞬、彼女の動きが強張る。極端にビビっている風には見えないが演技をしているようにも見えない。

悟は死の騎士デス・ナイトごときデス・ナイトに（ゴメンね）ビビるようなら大した事はないだろうと改めて思い、言われたように死の騎士デス・ナイトを制止させた。

「お前はアイツらの仲間じゃ無かったのか？」

「んー、身内には違いないけど『仲間』って言うほどの意識や信頼関係は皆無って感じかなあ。ぶっちゃけて言うとな新入りだったし」

「ふむ。お前は確かあ…クレマンティーヌ、だったか？」

「う、うん、そうだけど」

悟は顎に手を当てながら彼女を観察する。

（うーん、まあ多分嘘はついて無さそうだな）

一方のクレマンティーヌは、人生最大の賭けに生きた心地がまるでしなかった。

（相手が魔法詠唱者ならスツと行ってドスツ！　…で終いなんだけど、殺した途端、アイツの背後にいる連中が暴走しないとも限らないしねえ）

彼女が警戒している相手は目の前の男悟と言うよりも、彼が服従させているアンデッド達にあった。戦士として絶対的な自信を持つ彼女でも、10,000近い数のアンデッドを相手に逃げ切れると思うほ

ど自惚れてはいなかった。

特にタワーシールドを持つ禍々しい鎧を纏った5体のアンデッドは、今のクレマンティーンで勝つのは至難の業であると認識していた。

(漆黒聖典にいた頃の装備が有れば、勝てないまでも逃げ切ることは出来てたかもしれない。でも、今はあまりにも分が悪過ぎる)

カジットは例のタレント持ちを使った儀式魔法で、あのアンデッドの大群を目の前の男に代わって支配下に入れようと考えていた。だが彼自身も、支配下に置けるか否かは分からないと言っていたのだ。彼にとつて1番重要な事は、膨大な負のエネルギーを得る事にある。その先にある彼の目的までは凶り兼ねるが、その為なら少なくとも周りの犠牲など厭わない節があった。

クレマンティーンからしたら堪ったものではない。

彼女がズーラーノーンに身を置いているのは、法国からの追手を振り切るための隠れ蓑として丁度良かったからであって、組織に忠誠を誓ったつもりは毛頭無いのだ。

(例の儀式…『死の螺旋』だっけ？　それで街一つをアンデッドで埋

め尽くされた『死都』に変える。私はその騒ぎに乗じて法国からの追手を振り切つて、ズーラーノーンからも抜ける。後は評議国あたりで暫く身を隠そうかなあーって思ってたんだけど…)

彼女がカジットの計画に協力しているのもソレである。正直、ズーラーノーンに加入して早々に逃走の機会が訪れたのは僥倖だった。それがまさかの計画変更…城塞都市エ・ランテルではなく、法国の目と鼻の先にあるアペリオン丘陵。そして、10,000のアンデッドを服従させるといふこれまた希少なタレントを持つ、謎の漆黒の全身鎧を纏う凄腕の魔法詠唱者の出現。ここで再び逃走計画に大きな狂いが出てしまったがもう後戻りは出来ない。

リスクは大きいが早く法国から解放されたい彼女がこの千載一遇の機会を逃す訳にはいかなかった。

「……なるほど。お前の言い分は分かった。取り敢えずは、仲間を売るから見逃してくれ」という捉え方でいいか？」

「そ、そりゃあアンタにとってあんまりメリットの無い事だとは思いますが、こう言うのも何だけどさあ…カジツちゃーじゃなくて、カジツトってズーラーノーン最高幹部の1人なんだよオ？　結構な手柄になると思うしいー」

「そもそも『ズーラーノーン』とは何だ？」

クレマンティーヌは「え？　そこから？」と少し意表を突かれてしまったが、取り敢えず変な疑問はさておき素直に彼へ説明した。

「まあ平たく言えば『悪の秘密結社』だねえ。死霊系魔法詠唱者から構成された組織で、アンデッドを使って色くんな過激な活動してるよお。だから近隣諸国からめちやくちや嫌われてる…お分かり？」

「ほう、悪の組織か…」

悟は「たっちさんなら『正義降臨』の背景と一緒に飛び出して行っただろうな」と考えながら、一つの妙案が脳裏に浮かんだ。

「……これはチャンスだな」

「え？」

「ひとつ聞きたい。お前はなんでズーラーノーンとか言う組織にいるんだ？　聞く限りでは入りたくて入った風には聞こえないんだが」

クレマンティーヌは悩んだ。普通なら多少なりとも嘘をつくべきなのだろうが、この男に対してその行為は果たして『吉』と言えるのだろうか。流石に「嘘を見抜く」タレントを持っている訳では無いだろうが、彼女の勘が「嘘をつくのは不味い」と警告している様に感

じた。

彼女は自身の勘を信じる道を選んだ。

「まあ、国が嫌になった」からかなあ？」

「国が…？」

悟は首を傾げる。彼女もまあそういう反応が普通だよなと思いがらも話を続けた。

「正確に言えば、前に所属していた場所が嫌になった。何かといえば私を見下したり、ダメ出ししたり、『お前は出来損ないだ』なんて日常茶飯事。もうやんなつちやつてさあ…：…それで国を飛び出したつてわけ。素直に『辞めます』なんて言える場所じゃなかったし、もう国を捨てて行くしかなかった、うん」

「ふむ…」

彼女は「嘘は言っていないよお」と我ながら上手い言い訳に自画自賛したくなった。だが肝心なのは彼がどう受け止めたかである。クレマンティーヌは自身の言い分を聞いた彼が腕を組んでウンウンと頷いているのを静かに見つめる。

その悟は彼女の話の内容に共感していた。

（それはもう立派な『パワハラ』と言うやつだ。オマケに個人の尊厳も傷付けるなんて、とても正気の沙汰とは思えない。全くもってけしからん！）

彼女の言い分に納得しながら静かに怒りを覚えていた。リアルも似たような職場環境が多いという記憶と相まって、同情心も湧いてくる。

（でも見た感じ、彼女はそれなりにヤバい仕事をしていたのかも知れ

ないけど……)

悟は広がるアンデッドの地平線を眺めた。

(俺もやらかしてるしなあ……)

我ながら卑怯な手段と思えなくも無いが、何の後始末をしないより遥かにマシだ。それに放って置いてもいい事なんて一つも無い。かえって近隣諸国に迷惑をかける事になってしまう。

この事態は出来るだけ早く対処はしておいた方がいい。

(ゴメンなあ……無計画な俺のせいで)

彼は改めて死の騎士達<sup>デス・ナイト</sup>へ罪悪感に満ちた視線を送る。だが、彼らは自らがこれから受ける運命を憂うよりも自分の身を案じてくれている。

それがかえってツライ。

せめてもの償いに今回で得た教訓を胸に刻み、二度と同じ過ちを繰り返さない事を心の中で静かに誓った。

「…お前の話、分からんでもない。つまりは国の追っ手から逃げ切れれば良い訳だな? その為に、このアンデッド達を使ってもっと場を掻き乱してほしい…そういうことかな?」

「良かったあ話の分かる人で…あ、そだ」

何かを思い出した彼女は元の場所へと戻って行った。何か忘れ物かなと思っていると、彼女は小脇に何やら青年らしき人を抱えながら直ぐに引き返して来た。

「誰だソレ?」

「カジツちゃんが儀式で利用する為に用意した強力なタレント持ち」

「……なんだ拉致までしてたのか？」

「ま、そゆこと。言っとくけどコレもカジツちゃんの指示だったからね」

自分は関係ありませんと言わんばかりの態度だが、それよりも悟が気になったのは青年の身なりだ。衣服とは言い難い薄絹を纏い、全裸が透けて見えている。

最も気になったのは頭に付けているサークレットだ。蜘蛛の糸のようなキメ細かさの金属糸の所々に無数の小粒の宝石が付いており、まるで水滴が付着した蜘蛛の巣のようだった。

悟は瞬時にこのサークレットがマジックアイテムの類であると見抜くと<sup>オールド・アブレイサル・マジックアイテム</sup>へ道具上位鑑定を発動する。

（『叡者の額冠』……ユグドラシルには無かったマジックアイテムだ。装備した者の自我を奪い、装備者そのものを高位の魔法を発動させるためのアイテムに変化させる……え、こわ）

悟からしたらメリットよりもデメリットの方がデカい。明らかな『デバフアイテム』だ。オマケに『叡者の額冠』以外の装備が大幅に限定される、視力を失う、一度装着すると安全に取り外すことが不可能とあるのだから余計にヤバイ。もし安全に取り外すとしたらこのアイテムそのものを破壊するしか方法が無い。

（ん？　でも装備出来るのは女性のみ……じゃあ何で彼は装備出来るんだ？）

悟はこの疑問をクレマンティーンへ尋ねた。

「あれれ〜？　もしかして知らない？　コイツ、エ・ランテルじゃ結構有名人で、『あらゆるマジックアイテムを使える』って言うタレント持ちなんだよ、本当に知らなかったのオ？」

その言葉に悟は愕然とした。

種族や職業に関係無く、どんなマジックアイテムでも…それこそギルド長しか使えないギルド武器さえも使えるというのならとんでもないぶつ壊れ能力と言える。だから彼は『叡者の額冠』を装備出来たのだ。

正直、こんなデバフアイテムの為に使うのはかなり勿体無い気がする。

しかし、生粋のアイテムコレクターである悟にとっては、ユグドラシルに無かったマジックアイテムと言うだけでも欲しい代物だ。

「このアイテムはどうした？」

「ウチがいた国の最秘宝の一つで、逃亡する時に腹いせで強奪して来たんだあ。別に悪いとは微塵も思っていないけどねえ。え？　もしかして欲しいのお？」

「欲しくない、と言えば嘘になるが…仕方無い」

悟は彼女に抱えられたまま意識を失っている青年の頭部へ手を翳した。

「グレート・ブレイクアイテム  
「上位道具破壊」」

「ええ…ツ!?？」

『叡者の額冠』は粉々に砕け散った。それを見て驚きの声を上げるクレマンティーヌだが、悟は勿体無かったなあと少しガツカリしていた。

（勿体なかったけど、人の命には代えられない。うーん、でもさつき明らかに種族的思考に引っ張られてたなあ）

カルマ値―500は伊達では無いと改めて気を引き締め直した。

「あ、もしかして壊したら不味かったか？」

「あー…いや、別に」

「なら良かった。それじゃあ——」

突如、悟達の上空に亀裂が走った。クレマンティーヌは気付いていない様だが、悟はその異変を瞬時に感じ取った。話を中断したかと思えばいきなり空を見上げる彼の動きを彼女は不思議に思った。

「へ？　どしたの？」

「対情報系魔法の攻性防壁が起動したな」

「え？」

「何者かが情報系魔法を発動して此方を監視しようとしていたらしい」

「ウゲツ!?？」

クレマンティーヌの顔色が一気に青褪めた。

「ヤバイ…ふ、風花聖典の連中だ。私の居場所が、ば、ば、バレちゃったああ…」

頭を押さえて明らかに動揺している彼女に、悟は「大丈夫だと思うぞ」と呑気に答えた。

「…ど、どゆこと？」

「攻性防壁が起動したからな。殆ど覗かれてはいないだろう。寧ろ、監視しようとした奴らの方がヤバイ」

「え？　…え？」

「対情報系のカウンター対策をしてなかったら、広範囲化した  
エクスプロージョン  
爆裂が…まあその程度でソイツらが参るわけないかあ」



何がなんだか分からない彼女を尻目に悟は、相手の心配をしていた。寧ろ、情報系魔法を扱える者がいると言う事が分かっただけでも大きな収穫と言える。

(もつと強力な対情報系の魔法を張り直す必要があるな……)

「ね、ねえ…本当に、大丈夫、なの？」

「ん？ ああ、問題無い」

「そ、そう…」

「じゃあ、早速取り掛かるからお前は避難してくれ」

「え？ ひ、避難？」

「巻き添えを喰らいかねないからな」

そう言う悟は〈転移門<sup>ゲート</sup>〉を発動させた。突然、何も無い所に楕円型の漆黒の空間が現れた事に、クレマンティヌの目が点になる。

「な、な、何、それ…？」

「何って…ただの〈転移門<sup>ゲート</sup>〉なんだが」

「ゲート、ト…？ それって…な、何位階の？」

「第9位階だが？」

「だいきゅ…!?？」

「え？ 代休？ なんだ疲れたのか？ なら丁度良いな。今繋

げた場所はカリンシヤで俺が泊まっている宿部屋だ。お世辞にもきれいでは無いが、俺にベッドは必要無いしな。ほら、行け」

「ち、ちよつと待つて!!？ な、何がなんだか」

「いーから、さっさと行け」

「つて、あああああー…ツ!?!?？」

見たことも聞いた事も無い魔法を前に混乱している彼女を気にも留めず、悟は彼女を摘み上げるなり〈転移門〉の中へ放り投げた。

「何驚いてんだか…唯の〈転移門〉じゃないか」

彼女のリアクションに首を傾げる悟だが、直ぐにそんな事も忘れて、視線をアンデッド達の方へ向ける。

「さて……一瞬で終わらせるからな」

悟を中心に無数の青白く光る魔法陣が立体的に出現。そして、一定の時間が経過すると、彼は心の中で謝罪しながら魔法を発動させた。

「超位魔法〈フォールン・ダウン失墜する天空〉」

超高熱源体によつて生じた絶熱が天空に出現、アンデッドの大群に向かい地面へ激突すると同時に広範囲へ一気に膨れ上がる。

10,000もいたアンデッドの大群は一瞬で2,000体近くまで消滅した。

◇

〈転移門〉へ放り出されたクレマンティーヌは、城塞都市カリンシャの安宿の小汚い部屋に到着した。

「ああああーっつと、と、とツ!!?」

何とか姿勢を直し無様に床へ転がる事だけは回避し、見事にベッドへ着地した。

「こ、此処は……まさか本当に?」

直ぐに周囲を警戒した彼女だが、どうやら彼の言った通りの場所へ到着した事を確認する。汚れた窓からは確かにカリンシャの風景があった。

(アイツ何者だよ…見た事ない魔法ばつか使って…だ、第九位階とか…え、英雄の領域なんてモンじゃねえよ!!?)  
もう神話の類じゃねえか!?!?)

今更ながら全身から嫌な汗が出てきた彼女は、取り敢えずはあの窓から出て、この場から離れようと歩み出した。

(評議国はもう遠すぎる……こうなったら聖王国の南側を通って南方へ……ん?)

妙な視線を感じ取ったクレマンティーンが振り向くと、部屋の隅で怯えたように縮こまっている少女がいることに気付いた。

しかもかなり目付きが悪い…ある意味自分より狂悪だ。

「こ、こんにち、は……」

「……こんにちは」

涙を溜めながら必死な笑顔で挨拶をしてきた少女に、クレマンティーンも思わず釣られて挨拶を返してしまった。その後、気不味い沈黙の間が数秒後続いた後、彼女は窓を開けて飛び出して行った。

部屋の隅で縮こまっていたネイアは、その後ろ姿を黙って見送った。

「な、なんだったの……あの、人…?」

## 第10話 // 漆黒の英雄 // 爆誕



超位魔法〈フオーリン・ダウン失墜する天空〉を発動させた事で10,000近くいたアンデッドの大群は約2,000体まで減らす事が出来た。流石に一度に全てを消滅させる事は出来なかったが、2,000体なら戦士職スタイルで今後活躍する為の良い肩慣らしになる。

悟は背中に納めていた2本の太剣を抜いた。

「さて、仕上げといくか」

悟はアンデッドの大群へ飛び込み、2本の太剣を力任せに振るった。空を斬る音と共に無数のアンデッドが瞬く間に地面もろとも粉微塵に吹き飛んでしまった。太剣を力一杯薙ぎ払った場所には三日月型に酷く抉られた地面が出来ていた。

（魔法詠唱者の俺でこの威力は予想外だ。つまり本職が全力を出せば最低でもこの辺り一帯の地形を大きく変えてしまう可能性もあるな）

先ずは力加減を覚える事が大事である事を思い知る。今度はもう少しリラックスしてみようと両肩を何度か回したのち、もう一度アンデッドの大群の中へ突っ込んだ。

その後も悟の戦士職のロールプレイを想定した自主訓練を黙々と進める。偶にアニメや漫画のキャラクターを模した動きをしたり、自分が思う達人っぽい動きをそのままやってみたりとそれなりに充実した時間を過ごす事が出来た。

気が付けばアンデッドは残り100体も居ない数まで減少していた。どうやら自主訓練に夢中になり過ぎていたようだ。

でも個人的には大分満足している。

「思う存分練習できる機会なんて、多分滅多に無いだろうし……よし

！」

些か恥ずかしさはあるがどうせやるなら悔いの残らない様にと、意を決した悟は最後に憧れだった白銀の聖騎士が扱う『ワールドチャンピオン』専用の奥義を真似てみる事にした。どうせなら本気の本気でやろうと、彼はありったけの補助魔法を自身へ掛けた。

「グレート・フルポテンシャル ドラゴニック・パワー の ヘイスト グレート・ラック グレート・ストレングス 上位全能力強化 竜 の 力 加速 上位幸運 上位筋力向上 パーフェクト・ウォリアー …… 完璧なる戦士 ！！？」

最後の 完璧なる戦士 は使用者のレベルをそのまま戦士レベルへ移し替える魔法で、特定クラスを得た者しか使えない戦士系装備も使用可能になるが魔法が一切使えなくなるというデメリットがある。

全体の能力値も本職より低くなる為、『ユグドラシル』では事実上“コスプレ魔法”と言っても良い。しかし、戦士職ロールプレイを目的とする今の悟にとってメリツトの方が大きい。

当然、状況によって使う場面は限られるが…。

「うーん、100体ぐらいか…一撃で倒せたら最高なんだが」

悟は深く腰を下ろして2本のグレートソードを左肩へ担ぐ『溜め』の構えを取った。残り100体のアンデッド群へ向けて一対のグレートソードによる全力の一撃で薙ぎ払おうと悟は考えていた。

見るからに厨二病染みた構えだが本人は至って真面目である。力の調整や戦士職っぽい動きを会得する為には、全力による一撃はどの程度のモノかも理解しなくてはならないのだ。

「おおおおおお…ツ!!? ワールド 次元——」

かつての憧れの銀騎士が持つ戦士系最強職『ワールドチャンピオン』最終レベルに至る事で習得できる超弩級最終特殊技術……を見よ

う見真似で声高々に放った。

「…………断切」  
ブレイク ！！？！！？！！？！！？！！？！！？」

ありつただけの補助魔法を使った全身全霊の一撃をアンデツドの大群へ向けて薙ぎ払った。

その刹那、最初の一撃とは比べ物にならない程の衝撃と地鳴り、そして視界に映る範囲の天を覆い尽くす巨大な土煙。2本のグレートソードの行き場虚しく振り切った姿勢のまま、想像以上の出来事に、悟は唯々呆然と眺める事しか出来なかった。

「…………は？」

呆けた一言が出てくる頃には衝撃と轟音の濁流は徐々に鎮まり、土煙も晴れようとしていた。漸く、土煙も晴れて目の前の光景が鮮明に映った頃、悟は驚愕のあまり声すら出なかった。

視界の先には幾つかの丘陵と100体前後のアンデツドが居たはず。ところがどうだ、何も無いのだ。

(えー……………)

『何も無い』は些か語弊がある。正確にはアンデツド達もその背後にあった丘陵も消滅し、大地が大きく抉られた大地へとその情景を変えていた。

想像以上の破壊力を生み出した事に呆然となる悟だが、結果的に試して良かったとも思えた。少なくともこの世界に於いては、下手に全力を出す必要は無い」と言う事が判明したのだ。

「いくら完璧なる戦士を使つたと言っても魔法詠唱者ごときの一閃だぞ。これはちよつとオーバーが過ぎるんじゃないか？」

壊した地形は元に戻すべきなのか、もしするなら悟は森祭司系ドレイドの魔法を大して取得していない為、出来なくはないがちよつと面倒な事になる。

「まあ別にいいか」と半ば現実逃避に近い形で、ズーラーノーン達と奴らに拉致されていたタレント持ちの青年と共にこの場から立ち去ろうとした時だった。気を失っているカジットの懐から何か呼び掛けて来る様な気配を感じた悟は、彼からその呼び掛けてくる正体を取り出した。

「あーコレか。すっかり忘れてた」

出て来たのは彼が負のエネルギーを貯めていた例の水晶玉だった。何やら妖しい光を発しながら彼に語りかけて来る。

「え？　俺の死の気配に敬意を…？　何言ってるんのお前？　つてか喋れるんだ…：知性インテリジェンスあるアイテムアイテムってヤツか。『ユグドラシル』には無いタイプのアイテムだし取り敢えず貰っておくかな」

PvPのルールに則るなら悟はカジットから何か1つアイテムなどを貰う事が出来る。

彼をノシたのは正確に言えばクレマンティーヌなのだが細かい事は気にしない。その後も長ったらしい事をゴチャゴチャ言っていた『死の宝珠』だが、特段興味も無かったのでさっさと無限インフイニティの背負袋ハヴァアサツクへ放り込んだ。

「さてと、それじゃあ…：…ん？」

遠くから近付いてくる騎馬集団を確認出来た。統一された身なりから察するに恐らく聖王国の聖騎士達だろうか。

彼らの姿がハッキリ見える距離まで近付くと、派手に荒れ果てた一帯を見て驚愕の表情を浮かべ誰もが啞然としていた。そんな場所に

漆黒の全身鎧を纏った男が1人佇んでいるのだから怪しまれても無理はない、と悟は半分諦めの気持ちを抱く。

「こ、これは一体……!？」

彼らの中で先頭を走っていた男が馬上からそんな言葉を漏らすと此方へ視線を向けて来た。明らかに此方を警戒している。

「貴殿は……ふむ、冒険者か」

男は悟の首に掛かっている銅の冒険者プレートを見て呟いた。なるほど、こういう時こそ冒険者プレートは下手に身分を説明する必要も無く便利である。

上官らしい男が悟と変わり果てた大地を何度か交互に見ながら恐る恐る質問して来た。

「アレは……貴殿がやった、のか？」

「え？ ええ、まあ」

明らかに引き攣つてる、つてか引いてるが下手に嘘は吐けない。「元に戻せ！」と言われればやはり面倒だが戻すしかないと覚悟を決めていると、男は下馬し此方へ歩み寄って来た。

「あの大爆発も……貴殿が？」

「あーそのお……はい」

「ど、どうやって……？」

あの爆発超位魔法の正体について聞かれたが此処で正直に言えば何となく不味い気がした悟は、「使い切りの強力なマジックアイテムを使った」と言う事にした。〈電撃球〉も〈転移門〉も恐らく一般的に知らない様な世界だ。超位魔法を話した所で信じてもらえないだろう。



でも流石に厳しい言い訳かと思ったが、男は顎に片手を当てながら考えると「なるほど」と言ってきた。どうやら取り敢えずの納得はしてくれたみたいで一安心した。

加えて悟は今は好機とズーラーノーンの面々達を男の前へ突き出した。

「アンデッド騒動の元凶達です」

「…コイツらは一体？」

「えつとお、確か『スーラータ…』ゴホンツ！ 『ズーラーノーン』と名乗っていました」

「何だとツ!?!…まさか…いや、あり得るか」

『ズーラーノーン』の名を聞いた上官含める騎士達は目を見開き驚きの声を上げる。それに疑う様子も無い事から、どうやら本当に彼らは悪行の数々をして来た組織らしい。と言うよりも結構広く認識されては『秘密結社』とは言えないのではないだろうか？

上官の部下達はカジットを始めとするズーラーノーンの面々を連れて行く。当然〈記憶操作コントロール・アムネジア〉による改ざんは済ませてある為、カジット達が目を覚ましてもあのアンデッド騒動は自分達によるものだと答えるようになっていく。

その過程で例の拉致されていた少年も引き渡した。彼の正体を知ると上官は再び驚きの声を上げるが「必ず送り届ける」と約束してくれたので大丈夫だろう。

「聖王国の存亡が懸かっていたとも言える未曾有の危機を救って頂いたこと誠に感謝申し上げます」

男は自身の立場を顧みずに深々と頭を下げて礼を述べた。随分と誠実な男性だと悟の中での彼の評価は絶賛爆上がりである。尤も今回の騒動の原因は自分である為、礼を言われるような立場に無いのだ。かえって罪悪感が増してしまう。

「礼には及びません。ただ居ても立っても居られなかった…それだけです」

いやマジでそれだけなんですと思う悟だが、男は頭を上げると何やら目に感涙を溜めて言ってきた。

「おお何と謙虚な…！ 聖王国の為、名もなき銅級冒険者単独で、事を治めた大功労者と言うのに…！ ハッ!? ここ、これは失礼致した！ 私は聖王国聖騎士団副団長のイサンドロ・サンチェスと申します。貴殿の御名前は？」

「も、モモン、です」

「モモン殿!!? 此度の御礼は主人に伝えた後、必ず正式に恩賞を賜るものと心得申し上げます！」

「ア、ハイ…アリガトウゴザイマス」

勝手に進む話の内容に理解が追い付かず、悟は心ここに在らずの空返事を返した。

「では早速要塞線まで御送りを——」

「いえいえ！ お、お気遣いなく！ 自分で帰れますので!!?」

「そ、そうですか…ではモモン殿が冒険者として居を構えている場所は何処に？」

迷ったが下手に嘘を言えば今後の活動に支障を残す可能性がある為、此処は正直に答える事にした。

「……カリンシャ」

「心得申した！」

イサンドロ一行が離れていく姿を眺めながら悟も今度こそ帰る事

にした。そう言えば随分とネイアを待たせてしまっている。早く戻って彼女を早急に母親の下へ送り届けなくてはならない。

◇

〈転移門〉を開き、悟はネイアが居る安宿の一室へと戻って来た。〈転移門〉を開いた時に「うわあ！」と驚いたネイアの声が聞こえてきた。やはり見慣れない魔法らしい。

「も、モモンさん!!?」

「待たせてしまってすまない」

「い、いえ。あの、さっきこの部屋に来た女の人は…一体」

彼女の言う『女の人』が一瞬分からなかったが、すぐにクレマンティーンの事であると思いつく。

そう言えば彼女は何処へ行ったのだろうか。碌な人間では無いかも知れないがもう後の祭りである為、追われている身であるならば下手な行動は取らないだろう。

(これを機に改心……するかなあ?)

まあどうでもいい事だと直ぐにそんな考えもやめて。行きずりの浮浪者という事にして適当に彼女に説明した。案の定、腑に落ちない顔をしているが悟はシラを切る。

それよりも今は彼女を送り届ける事が先決だ。

「さて…じゃあ行くぞ?」

強張っているがネイアも待っている間に意を決した様子で力強く頷く。

悟は再び〈転移門〉を開き、彼女の実家がある首都ホバンスへ移動した。

◇

先ず最初に結論から言っておくと、ネイアは特段怒られる事も殴られたりする事もなく家へ帰る事が出来た。

実は一部始終を内緒でコッソリ<sup>パーフエクト・アンノウアブル</sup>〈完全不可知化〉で窺っていた。無論、他意はなく不測の事態：『女教師怒りの鉄拳』ばりの行動に備える為である。

「た、ただいま……その、ご、ごめんなさい」

玄関前で仁王立ちしている母親にネイアは恐る恐る謝る。あの萎縮した様子から本当に怖いのだろう。かと言って怒声を上げるでも無くただ彼女を見ているだけなのだ。これは流石に可笑しいと思つたのかネイアは恐る恐る視線を上へあげる。

ネイアは驚いた。

母は下唇を噛みながらボロボロと涙を溢していたのだ。余りにも予想外の反応に彼女が唾然としてみると、彼女の母はネイアを力強く抱き締めた。気が付けばネイアも泣いていた。

結局のところ勝手に何日も家を出て行った事による心配の方が大きかったと言う事だろう。『鬼の目にも涙』…とは言わないがどんなに怒りつぼくてもやはり親は親なのだ。

我が子の身を案じ無い親など存在しない。

それが人の親と言うものだ。

(まあ、ハッピーエンドで終わって良かったじゃないか)

もしかしたら気持ちが悪く落ち着いた後に彼女は怒られるかも知れないがそれはそれで仕方無い。『叱る』事も1つの愛情なのだ。

(羨ましいな。彼女には帰るところがあつて……俺の帰るところは何処かあつたかな)

唯一の居場所と言って良い『ユグドラシル』も無くなり、リアル世界にもそんな場所など無いと言っても過言じゃない。帰る場所があり、それを待ってくれる存在がいる彼女が微笑ましくもあり羨ましくもある。しかし、嘆いてばかりはいられない。無いものは無いのだから仕方無い。ならば見つけるしかないのだ。

(元気でな、ネイア)

悟は グレートター・テレポーター・セッション 位 転 移 を使ってカリンシヤへと引き返した。数日後、ネイアが家に戻っていたという一報を聞いたパベルは仕事を部下に押し付けて脱兎の如き速さでホバンスへ向かったという。

その後、再びバラハ親子の件で悟は更なる災難に見舞われることになるのだがそれはもう少し先の話である。

◇

アンデッド騒動から3日後、今日も冒険者組合を訪れて何か手頃な依頼がないか模索していた。

「えっと…昨日はゴブリン小隊討伐任務を受けたから、今度はもう少し違うのを…お？ ああの張り紙が無くなってる？」

掲示板に例の聖王国からの依頼が書かれた羊皮紙が無くなっていて事に気付いた。どうやらアンデッド騒動がもう落ち着いたと言う情報がここまで浸透してきたらしい。

(そうなるともまた此処に冒険者達が集まるって事だよな)

アンデッド騒動を受けて「ここも無事では済まないかも知れない」と言う憶測から拠点を別の都市へ移した冒険者チームも少なくない。

その為、ここ3日間組合の中は幾分か寂しさがあつたのだ。

(まあ俺の知ったことではないか…えーっと)

だが、彼は此処にずっと拠点に置くつもりは毛頭無かつた為、割りかしどうでも良かった。地道に日銭を稼いである程度貯まつたら今度は王国へ行くこうと考えていたのだ。

(王国はあまり良い噂は聞かないけど冒険者稼業が一番潤つてる街が多いらしいから、此処よりももっと面白い依頼とかあるのかも。フフン、ちよつと楽しみ)

先の事を胸ワクワクで考えていると何やら組合のスタッフルームが騒がしい。他の冒険者たちも異変に気付いたのか、次々と奥のスタッフルームへ視線を向けている。

何かまた面倒事かと興味半分程度に聴き耳を立てながら掲示板に目を凝らすと、スタッフルームの扉が開きそこから聖騎士たちがゾロゾロと出てきたのだ。「また聖王国関連の依頼かな?」と考えていると聖騎士達は自分の所へやって来た。

「…えっと、何か?」

平静を装っているが実は内心不安でドキドキしている。

「ハハハツ!!? 探しましたぞ、モモン殿」

「え?...あ、ああ〜!」

1人が笑いながら語り掛けてきた。

そういえば何処かで見た事があると思ったら、聖騎士団副団長のイサンドロである事に気付いた。

「お久しぶりで御座います。ささ、参りましょうぞ！」

「…何処にですか？」

「無論、カリンシャの城にございます！　モモン殿はこの国の英雄

!!?　明後日には盛大な祝典を此処カリンシャにて行う予定となつております!!?。」

「祝典?…:え、祝典?。」

「はい、祝典も祝典!!?　大祝典でございます!!?　明後日には

この街全体がモモン殿を讃えましょうぞ!!?。」

全くもって理解不能。

ブラック企業でも皆勤（強制）賞を貰ったことの無い自分がどうやら大公衆の面前でハードルMAXな場所で賞を貰うと言うのだ。仕事以外、基本コミュニケーションには酷というモノ。

本能的に考えるのを止めた悟が意識を取り戻した頃には、既にカリンシャの城の迎賓室にいた。

そこでイサンドロが止めの一言を残して行った。

「明後日の祝典にはベサーレス聖王女陛下もお見えになられます。それから我らが聖騎士団団長カストディオ様も同じく。ではそれまでごゆるりと」

先程からズーラーと混乱している悟を差し置いて上機嫌に退室した。

（*ズ*ゆるりと*ズ* じゃねエエエエエエ!!?!!?!!?）

彼の身体は全身緑色に発光した。

せめてもつと早い段階で発動して欲しかった。

◇

（なんでこんな事になったんだろう…）

悟は周囲から飛び交う黄色い歓声を浴びながらそう思った。

彼は今、ローブル聖王国城塞都市カリンシヤの大広場に居た。万単位の大観衆と言う文字通りの『人海』に開かれた道を悟は歩いて行く。開かれた道の左右には等間隔で聖騎士達が凜とした姿勢で佇んでいる。

その道の先には大広場の台座があり、そこには左右対称で配置されている聖騎士達とその中央で絢爛な椅子に座す女性が1人。

恐らく彼女が聖王女なるカルカ・ベサーレスなのだろう。遠目からでも絶対が高い身分の人物である事は世間一般常識に疎い悟でも理解出来る。

自分は今、その人物の下へぎこちない足取りで向かっている。

(……吐きそう)

一步、また一步と足を進めるたびに無いはずの心臓の鼓動が増す。正直いつ破裂してもおかしくなくらいだ。

〈<sup>グラス</sup>心臓<sup>ハート</sup>掌握〉を喰らう側の気持ちがちよつと理解出来たかも知れない。しかし、<sup>パッ</sup>常時<sup>シ</sup>発動<sup>ブ</sup>型<sup>ス</sup>特殊<sup>キ</sup>技術の『精神安定化』がさつきから連続で発動している為、周囲には見えていないだろうがもし見えているのだとするなら今の悟は緑の発光体となっているのが分かるだろう。

「黒騎士様」と呼ぶ声が聞こえる。

「英雄の再臨」と謳う者がいる。

「聖王国の英雄」と讃える者がいる。

もうここまで来れば仕方無い。

こうなったらなるようになれば良い。

上へとあがる台座の階段を登ると例の聖王女が姿がハッキリと視界に入った。

(この人がこの国の女王である聖王女……)



絵になるほどの凜とした姿勢で玉座に座る彼女は愛らしさと凜々しさを兼ね備えた美しい女性だった。慈悲深い女神とは正に彼女の様な人間を指す言葉だろうか。

(皆が『聖女』と呼ぶのも分かる気がするなあ)

カルカの傍らには剣を台座へ突き立てながら佇む女性が居た。彼女もまた美しく整った顔立ちをしているがその視線には何やら力強いモノを感じる。

(それでコッチが聖騎士団の団長カストディオか。確か瓜二つの妹がいるんだっけ？ 妹の方は結構有名な神官らしいけど……)

この国のトップを前にいつまでも立ち尽くす訳にもいかない。悟は事前知っていた情報を脳裏に照らし合わせながら静かに片膝を台座へ付けて跪く。作法など知らない、完全に想像だ。

大歓声が徐々に静まり返り、静寂の間に変わると玉座に座っていたカルカが静かに立ち上がった。

「モモン殿。此度のアベリオン丘陵にて出現した10,000にも及ぶアンデッドの大群を単独で討伐、聖王国の女王として心より御礼申し上げます」

「…恐れ多くも、有り難き御言葉」

悟は出来るだけ恭しく頭を下げ続けた。因みに何故らしくも無い難しい言葉を使えるのかと言うと、武人建御雷とギルドの一室で一緒に見た某大河ドラマの影響によるものである。

「聖王国の存亡に関わる事態を貴方は鎮めたのです。『英雄』が如き所業とは正にこの事。しかし、貴方は冒険者の最下級である銅級とお聞

きしましたが？」

「ハッ：数日前に冒険者となつたばかりでございます」

「それはそれは：此度の手柄を考えれば余りに不釣合い。故に私カルカ・ベサーレスはカリンシヤの冒険者組合組合長とその役員達と相談の上、貴方にオリハルコン級への昇級を推挙致しました所、了承の意を頂きました」

悟は驚きのあまり思わず顔を上げそうになるが何とか堪える。最下級からまさかの上から2番目の階級へ飛び級となつたのだ。しかし、悟本人としてはのんびりと階級を上げていくつもりであった為、早速彼の人生計画に大きな狂いが起きてしまった。

(はあー……まあ聖王女からの好意を無碍にするわけにもいかないし、そもそも御礼の気持ちとしての昇級……下手に恨めないよなあ)

ぶつちやけた話、ありがた迷惑なのだ。

下手をすれば同業者の先輩達に要らない妬みを買いかねない。そんな面倒以外の何物でもないのだ。

「あ、有り難き幸せに……ございます」

そんな彼の気持ちなど知るはずも無いカルカは優しい微笑みで静かに頷いた。その隣に立つ団長のレメディオスも彼女に同調するカタチで力強くウンウンと頷いている。

多分彼女は何も考えていない。

「無論、これだけでは褒美として些か物足りません。加えてローブル聖王国聖王女より褒美を贈呈いたします……これへ」

カルカの言葉に高官の1人が恭々しく短剣を持ってくると、彼女はそれを両の手で規律正しい作法で受け取り、悟の前へ持って来た。

「…有り難き幸せ」

「更に聖王女、および聖騎士団団長、聖王国神官団団長、九色より連名でモモン殿への感謝状を贈呈致します」

感謝状はともかく、聖王女が短剣を与えると言うのは貴族や騎士の中で目覚ましい戦果を挙げたものに対する勲章的な意味合いを持つ。

これには南部貴族達への牽制の意味も含まれている。

アンデッドの大群が丘陵地帯に出現したと言う報告は既に聖王国南部まで届いている。それをたった一人で鎮める程の実力者のモモンは既に聖王国の民達にとっては『英雄』のような存在なのだ。

この事実が南部まで届くのも時間の問題ではあるが、そんな英雄を真っ先に聖王女自らが褒美を賜わす事で民達の関心や支持を大きく集約、又は改善する事に繋がる。また、名だたる実力者となった彼を自身の陣営に引き込む意味も含まれていた。

地理的要因もある為、仕方が無いとしか言いようは無いが、南部貴族達は聖王女派にまんまと出し抜かれた事になる。故にこの場に参加している南部貴族の者達は不機嫌にこの祝典の様子を座して眺めていた。

悟に短剣と感謝状、オリハルコン製の冒険者プレートが贈呈されると大歓声は今日一番の音量となった。変わらず微笑みを向けるカルカ、まるで自分の事のように誇らしげにドヤ顔を決めるレメディオス。自身の人生計画に大きな支障をきたしてしまいシヨンポリ気味の悟が揃っている。

大歓声と拍手喝采が鳴り止まない中、カルカはずっと頭を下げた状態の悟に対し言葉を掛けた。

「モモン殿。もしご迷惑で無ければ…素顔を見せてはくれませんか？」

この要望に悟の肩がビクンと跳ね上がる。

「す、素顔…でございますか？」

「ハイ…！」

「そ、それは…御眼の汚れにございますれば—」

「構いません。さあ…」

不味い、かなり不味い。

言わずもがな兜の下は凶悪な髑髏なのだ。そんな素顔をこんな大衆の前に晒す訳にはいかない。

幻術で欺ける事は可能かも知れないが、あの大衆の中に幻術を見破る特殊技術ススキル或いは生まれながらの異能トを持つ輩が居ないとも限らない。それもこの聖王女がそうだという可能性も十分にある。

「で、では…」

こうなればままよの気概で悟はゆつくりと兜を脱ぎ始めた。

周囲に一齐に騒めきが起きる。

カルカやレメディオスもその素顔を息を呑む。

「…面を上げられよ」

カルカの言葉に従い、ゆつくりと顔を上げる。

「なるほど。南方のお生まれなのですな」

「は、ハツ…」

大公衆の面前に晒した悟の素顔は、死オーバーロードの支配者の顔では無く、幻術で作りに出した偽りの顔だった。

黒髪、黒目、やや褐色寄りの肌…話に聞く南方出身者の特徴と人間だった鈴木悟をモデルにしている。ただリアルリアルの鈴木悟は余りにも痩せこけた病的な外見をしている為、多少盛っている。

顔立ちは至って平凡。ブサイクでは無いが、特別イケメンという訳でもない。可もなく不可も無い……『普通』の顔立ちだ。

「我儘を聞いて下さり、誠に感謝します」

「いえ、そのような事は」

聖王女自らの賀詞を受けた悟は直々にオリハルコン製冒険者プレートを首へ掛けられた。

再び湧き上がる大歓声、大喝采。

ある意味人生最大の山場を乗り越えた悟はカリンシヤの迎賓室へ戻った後、備え付けの大きいベッドへ倒れるように横になった。

「……何でこうなった」

こういう時は寝て忘れるに限る。しかし、眠る事が出来ない体が恨めしい。ほぼ完全に燃え尽き症候群と化した悟は茫然自失の状態で一夜を過ごした。

◇

聖王国団副団長のグスターボはカリンシヤ城内の待機室で自身の愛ペットの栗鼠と戯れていた。日夜胃痛に苦しむ彼にとってこの時こそが正に至福の一時である。

それに幾分か胃の調子も良い。

それは彼にとって大きな朗報が届いた事に起因する。

(団長の気紛れは本当に参るが、こういう時の気変わりは正直ありがたい)

カストディオ団長からの指令である『謎の魔法詠唱者の搜索』が取り止めになったのだ。その代わりに、つい先日のアンデッド騒動の大功労者、『漆黒の英雄』モモンの調査』である。眉唾な噂程度の人物の搜索よりも遥かに楽だ。

愛栗鼠を愛でてしていると部屋のドアがノックも無しに開かれる。

「…失礼するぞ、グスターボ」

「…イサンドロ？ どうした？」

入って来たのは同じ副団長のイサンドロだ。同じ副団長と言っても彼は自分と違い、九色の一色を与えられている。そして、カストディオ団長の問題行動に胃を痛めている同士でもある。

そんな彼が何やら気落ちしたかの如き落ち込み具合で部屋に入ってきたのだ。また団長に無茶振りをされたのだろうか。

彼はもう一つの椅子に腰掛けると項垂れながら口を開く。

「…：なあグスターボ、お前の知恵を俺に貸してくれないか」

「おいおい、俺とお前の仲じゃないか。水臭いぞ、遠慮なく言ってみろ。また、団長…：か？」

「まあ…：そうなんだが」

グスターボはやれやれと疲れ果てたため息を吐き漏らす。一難去ってまた一難、それも今度はイサンドロと来たもんだ。胃痛仲間として見過ごす訳にはいかないと、グスターボは彼に詳しい話を聞く事にした。

「…：…して団長は、なんと？」

「それが…：友人の恋路を応援したい…：と」

「…：…はあ？ こ、こ、こ、恋路？…：…だ、誰の？」

イサンドロは大きなため息一つ吐いた後、意を決して答えた。

「…：…：ベサーレス聖王女陛下の、だそうだ」

グスターボは思わず口をあぐりと開けた。

愛栗鼠が持っていた木の実を彼の開かれた口の中へ隠し入れても気が付かないくらいの驚きだ。

「あ、新しい…パターンで参ってる。妙案を考えろ」と言われても  
「王族の恋路に関わるなど…荷が重すぎる」

一般的な聖王国内の平均婚姻年齢が18〜20歳。『ローブルの至宝』、『聖女』と謳われる聖王女のカルカはもう20代半ばに差し掛かる。

これまで恋愛どころか結婚の気配すら無かった事と公私共にカストディオ姉妹と居る事が多い為、同性愛者なのではとの噂が立っていた。

「……し、して相手は？　まさか以前話にあった、バハルス帝国の『鮮血帝』…では無いだろうか？」

名君だが冷酷無慈悲で評判なかの『鮮血帝』と婚姻となれば角が立つどころか棘が立つ。慈悲深い聖王女には評判的な意味で不釣り合いである。しかし、イサンドロは首を横に振る。その反応を見て良かったと胸を撫で下ろしたのも束の間、彼の口から火炎球が放たれた。

「……モモン殿、だそうだ」

グスターボの顎が外れた。

## 第11話 安月給は辛いよ

◇

バハルス帝国帝都アーウィンタールの中央に存在する一際大きく圧倒的存在感を放つ皇城。その中の絢爛豪華な一室にて、意匠による装飾が施された椅子に腰掛けながら1人の男性が薄笑を浮かべながら一枚の羊皮紙を眺めていた。

「フツ、面白いな」

彼はバハルス帝国の皇帝ジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルニクス。臣民からは歴代最高の皇帝と謳われる一方、多くの貴族を無慈悲に粛清した経緯から『鮮血帝』の異名で近隣諸国から恐れられている。

「なるほど。確かに爺の言う通り、コレは厄介ごとだな」

ジルクニフは向かいの椅子に座る長い髭を蓄えた老人に声を掛けた。老人は少し唸った。

「アベリオン丘陵に突如として出現した1万にも及ぶアンデッドの大群勢。そして、それをたった一人で打ち破ったとされる冒険者モモンと彼が使ったマジックアイテム。もし後者の2つが事実だとするならばモモンなる御仁は英雄の領域に匹敵する実力者、マジックアイテムは国宝級のシロモノと言えるでしょうな」

老人は自身の身長の中程はある長い白髭を撫でながら答えた。この老人こそバハルス帝国が誇る最高戦力にして英雄の領域を超えた逸脱者。主席宮廷魔術師フルーダ・パラダインである。

「しかし、残念ですな。もう少し帝国に近ければ私自らが調査に赴く



事が出来たと言うのに……」

「仕方無いさ。流石に場所が悪過ぎる」

心底無念そうに唸るフルーダをジルクニフは諫めるように苦笑いを浮かべた。

今回の事件が起きたアベリオン丘陵という場所は帝国のほぼ真西に存在している。地理的な問題により調査隊をおいそれと派遣する事は難しい。しかし、最もその調査を困難たらしめる原因は、アベリオン丘陵のすぐ隣にあるスレイン法国なる国という存在に他ならない。

彼の国は帝国や王国、聖王国と同じく人間を主体とする国家だが、その実態は謎に包まれており、ジルクニフでさえ法国の実態を掴めきれずにいる。一連の騒動は法国の隣にある丘陵地帯で起きたのだから何もしないわけがない。

（余計な詮索をしたり首を突っ込まなければ、さしたる問題とはならないだろう。だが、アベリオン丘陵の一件を満足に調査出来ない、と言うのは歯痒いな）

だが当然の事ながら一か八かの危険な橋を渡るような事案ではない。ならば態々法国を不快にさせるような真似は控えるべきだろう。だが、もし彼の国から調査の協力願いがあつた時を踏まえ準備だけはおくべきだろう。

ジルクニフはもう一人の危険人物に釘を刺しておく。

「余計な事はするなよ、爺」

「無論、承知しております、陛下」

やや厳しめな口調のジルクニフにフルーダは恭しく頭を下げた。

フルーダは非常に優秀な人物だが魔法に対し異常なほどの執着心を持っており、その為ならば何でもする程の狂人である。酷い時で

はまともな会話すら出来ない程に興奮する事もある為、その時と比べれば今はまだ会話が出来る分マシと言うものだ。

異常な魔法狂いを除けば替えの利かない人物である。

だがそれ以上にジルクニフの好奇心を引いたのは、聖王国で一躍時の人となったモモンという名の新米冒険者である。彼については南方からの放浪騎士である事以外の素性は不明のまま。しかし、1万にも及ぶアンデッドを単独で相手取り、更には国宝級の強力なマジックアイテムを以て殲滅した。今では彼は聖王国の英雄となり、銅級からオリハルコン級へ大躍進した人物だ。もし彼の功績が事実であれば聖王国に置いておくのは余りにも勿体無い。

(モモンという新たな英雄の誕生は、今の聖王国の情勢を考えれば非常に大きな意味を持つ。おいそれと彼を遠方へ行かせるような事は、聖王国の冒険者組合は勿論、聖王国自身が許さないだろう)

だが、それは聖王国に限ったこと。帝国は未だに深刻な人材不足が悩みの種となっている。1人でも多くの優秀な人材が欲しい。ジルクニフは少しでもモモンに関する情報収集を行い、本当に有能な人物であれば穩便にこちらへ引き入れる方法を探る。

フルーダも彼が持つマジックアイテムに興味がある手前、要望以上の調査をしてくれる事だろう。

「一番良いのは、彼が自分の意志で帝国まで足を運んできてくれる事だが……」

◇

スレイン法国の最奥。神聖不可侵のこの部屋には最高神官長と6つの宗派の神官長の計7人が集い円卓に座っている。法国最高会議である神官長会議がこれから始まろうとしていたのだ。

「ではこれより会議を始める。最初の議題は……言わずもがな土の神殿の大儀式の間にて起きた謎の大爆発の件だ。土の巫女姫を始め、優秀

な神官たち数名も巻き込まれたあの事件……」

司会進行役を務める土の神官長のレイモン・ザーグ・ローランサンは深刻な面持ちだった。それは彼だけに限った事ではない。他の神官長たちも同様に眉間に皺を寄せながら唸った。

「新たな巫女姫候補の選任は申すに及ばず。土の神殿の復興工事も同様이다。しかし、やはり解せんな。何故2回目なのだ？」

陽光聖典隊長ニグンに与えた『魔封じの水晶』は法国が有する貴重なマジックアイテムの一つであり、封じ込められているのは最高位天使である威光の主天使だ。最高位天使を打ち破れる敵など竜ドラゴンロード 王などの存在を除けばいる筈がない。

それに陽光聖典の隊員は皆厳選された精鋭であり、それを指揮する隊長のニグンも例外ではない。彼は英雄の領域こそ至ってはいないが、それに近い実力を有している。そんな彼が指揮する部隊が全滅に危機に瀕した場合にのみ使用を許可している魔封じの水晶を使ったのだ。ただならぬ事態故に、最高位天使が解放されれば本国にもそれが察知できる仕組みになっている。

魔封じの水晶の使用を確認した法国は直ぐ様、土の神殿にて大儀式魔法ブレイナードへ次元の目アイを発動させ、現場の監視を始めた。

その時、大儀式の間に居た者達は絶句した。

大地を埋め尽くさんばかりの夥しい数のアンデッド。そして、極めつけは陽光聖典の隊員達をまるで虫ケラの様に惨殺する伝説のアンデッド、死の騎士デス・ナイトが5体も居たのだ。

1体で一国の軍隊に匹敵するデスナイト。目撃事例は極めて少ないが、その危険性は法国も重々理解している。最近確認した目撃情報によると、何年前か前、カツツエ平野に1体デスナイトが現れたらしいが、かの帝国の逸脱者とその弟子達により討伐もしくは捕獲されているらしい。

「デスナイト…かの伝説のアンデッドが5体も…それも我が国の隣に位置するアベリオン丘陵に出現するとは」

「あれだけのアンデッドが居れば、デスナイトが発生するのも納得はいく。確かアベリオン丘陵でのアンデッドの大群騒動は『ズーラーノーン』によるものだろうか？」

「それについては目下調査中だが、ズーラーノーンであれば確かに納得は出来る」

「イカれた死霊使いどもめ…いつか必ず報いを受けさせねばなるまい」

アベリオン丘陵で発生した、秘密結社ズーラーノーンが主犯のアンデッド騒動については話が進む。その様子を静かに見ていたレイモンは小さく溜息を吐いた後、軽く手を叩き皆の視線を集めた。

「各々方。確かにアベリオン丘陵で発生したアンデッド騒動も懸念すべき事態ではあるが、今上げている議題からは些かズレてしまっている。話を戻しましょう」

進行役の土の神官長の言葉は尤もだ。数人の神官長達は軽く頭を下げて謝罪した後、議題へと話は戻った。

「1度目の大儀式魔法による監視は問題なく発動出来ていた。当時、私はその場にいたからそれは分かる。巫女姫や神官達、魔法陣にも不審な点は何ひとつ見られなかった」

レイモンの言葉に他の神官長達は頷く。

大儀式の間で例の光景を目の当たりにしたレイモンは事態の深刻さを瞬時に理解した。そして、国家非常事態を最高神官長へ申告。アベリオン丘陵に隣接する国境付近へ軍の展開を指示した。また、最悪の事態に備え、『漆黒聖典』の何名かに出撃待機命令も下していたのだ。

しかし、常時監視する事は出来なかった。大儀式魔法とは言え、発動しているのは人間なのだ。それは叡者の額冠の適合者である巫女姫も例外ではない。一度、大儀式魔法を中断させて魔力の回復を待つ必要があったのだ。

その後、再び大儀式魔法による監視を始めた時に悲劇は起こった。

「残念ながら大儀式の間に居た者で生存者は確認されず、巫女達の死体も原形すら分からぬほど損傷が激しかった為、蘇生も叶いませませんでした」

「むう、やはり事故と捉えるのは無理があるな」

「しかし、大儀式の間にズーラーノンの刺客が潜り込める隙などある筈がない。仮に画策していたとしても時間が無さすぎる」

「では、あの爆発事故もズーラーノンが仕掛けたとは考え難いか」

「…やはり破滅カタストロフの竜王ドラゴンロードが関係しているのではあるまいか？」

——破滅の竜王。

誰かが呟いた言葉に場が一気に静まり返る。

漆黒聖典が1人「占星千里」の『世界を滅ぼせる力を持つ存在が現れる』という予言を受けた法国は復活に備え、神器『ケイ・セケ・コウク』の警備を他の漆黒聖典の隊員たちに当たらせていた。しかし、土の巫女姫は例の爆発事故により死亡してしまった。

神官長達は「破滅の竜王が復活したのではないか」と言う可能性を考え、漆黒聖典に『ケイ・セケ・コウク』を使い破滅の竜王を支配下に置く』よう出撃を命じた。

「現場がアンデッドで犇めいていた事も考慮すれば、ヴァンピリック・ドラゴンロードエルダーコフィン・ドラゴンロード吸血の竜王か朽棺の竜王の可能性もあるのではないか？」

「しかし、両竜とも既に滅んでいる」

「両竜ともアンデッドの竜王だ。本当に滅んでいるかどうか怪しいものだ」

「…やはり今は漆黒聖典からの報告を待つしかなさそうですね。具体的な報告が上がるまでは、アベリオン丘陵との国境線の警備強化、また大儀式魔法も発動を控える、と言う事で宜しいでしょうか？」

レイモンの言葉に他の神官長らは頷いた。ここで更に巫女姫や貴重なマジックアイテムを失うことは断じて許容できるものではない。

「しかし、そのアンデッドの大群勢も今は一匹もいなくなっている状況。いや、正確には『消滅』か」

「俄には信じ難いが…」

「だが事実消えているのだ。それも壮絶な戦いの痕跡を残してな。あれほどのアンデッドを相手取り、尚且つ一掃出来るほどのマジックアイテムを行使した人物…確か、モモンだったか？」

聖王国に突如現れた新米冒険者モモン。

情報によるとアベリオン丘陵に発生したアンデッドを貴重なマジックアイテムを使い消滅させ、残った数千体のアンデッドも単身で討伐したと言う。

お陰で彼は一躍聖王国の英雄として祭り上げられている。

「モモンなる人物は一体何者だ？」

「彼について分かっている事は、南方出身の放浪騎士であるという事ぐらいだな。例の貴重なマジックアイテムは、旅の道中で偶然立ち寄った遺跡から見つけた物らしいが」

「それほど強力なマジックアイテムが眠っている遺跡であれば、単独での探索は困難のはず」

「マジックアイテムを無しにしても、数千体のアンデッド相手に単身で殲滅したのだ。英雄の領域に近い…もしくは到達している人物やも知れぬ」

モモンについて皆が思う意見や情報を出し合う中、レイモンも彼に

於ける自身の見解を述べる。

「聖王国とその民を救う為、国の依頼を受注せずに行動する……そのモモンと言う男は『善』なる者と見て良いでしょう」

最高神官長含め皆が彼の意見に同意の頷きを返す。新たな英雄の誕生。それも人類の守り手となり得る人物が聖王国から生まれたのだ。『人類の守護と繁栄』を国是とする法国からしてみれば、非常に好ましい人物と言える。

皆の脳裏に共通した考えが過ぎった。

彼をより相応しい環境と居場所に招待する。

詰まるところヘッドハンティングである。

「彼に関する情報に嘘偽りが無ければ、冒険者モモンには是非とも人類の守護と繁栄の為、法国に居を移してもらいたいものだ」  
「だが、既にベサーレス聖王女が彼に対して公的に褒賞を渡し、大祝典を挙げてしまっている」

皆が「うーむ」と唸る。

国も、国民も彼の偉業を祝福し讃えているとなれば下手に彼を聖王国から引き抜こうと言う行為は彼の国からの印象を著しく損う可能性が非常に高い。

ローブル聖王国は宗教色の濃い国という特性上、鎖国的な法国ともそれなりに良好な関係を築いている。実際、聖王国という第三国経由で諸外国からの品々の輸入を頼っている場面も少なくない。

法国も『人類最後の砦』という責務を自称している特性上、あらゆる事態を想定した体制作りに抜かりは無く、万が一聖王国とのパイプを失ったとしても深刻なダメージになる事は無い。しかし、人類同士が争い合い、禍根を残す様な事が起きては本末転倒である。

そのような事態は避けるべきだ。

また、下手な小細工を弄する事なく素直に聖王国へ伝えると言う手

もあるが、レイモンはすぐにその考えを捨てた。

法国としてはマジックアイテムの更なる融通と資金面の援助をカードに話を持ち掛けるつもりだが、聖王国から求めてくるモノは十中八九予想出来る。

(対亜人部族に於ける援軍の派遣要請……だが今の法国にその余裕は無い)

アベリオン丘陵に住まう亜人部族達とまともに戦えるほどの正規軍を揃えらるゝとなれば、北方の敵対国であるアーグランド評議国が動き出す可能性が高い。六色聖典の何れかを派遣するにしても、火滅聖典はエルフの国で手一杯、陽光聖典は既に全滅、切り札である漆黒聖典は論外。それに法国は一度、聖王国からの援軍要請を事実上断っている。

それだけではない。

聖王国はモモンと言う存在に2つの意味で救われたのだ。

1つは言わずもがなアンデッドの大群勢の件だ。国家存亡の危機は彼の義侠心によって救われている。肝心なのももう1つ……国内情勢の安定化に貢献していると言う点だ。

昨今の聖王国の内情は酷く不安定だ。

アベリオン丘陵の亜人部族との度重なる衝突。それによって年々増え続ける徴兵。徴兵が増えれば働き手も減り、作物の収穫や商業に少くない悪影響を及ぼす。そして、戦争孤児の増加に人攫い、治安の悪化だ。国民は確実に疲弊しており、『聖女』と謳われる聖王女の美貌の威光も徐々に陰りつつある。

故にモモンという存在は今の聖王国には必要不可欠だ。下手に奪うような動きを見せれば聖王女は兎も角、聖王国の民達が黙ってはいないだろう。何より歴代最強の聖騎士団団長である『白』がどう動くか……想像に難くない。

(禍根を残すような真似はするべきではないな。ここは一先ず情報収



集に力を注ぐべきだろう)

そう考えたレイモンは皆に向けて話を始めた。

「やはり諸々の事情を考えますと、ここは静観するのが一番かと思いますがどうでしょうか？」

他の神官長たちは近くにいた者同士で軽く耳打ちをするが、その後は皆特に異論も無くレイモンへ視線を戻して頷いた。

「彼が真に善性の英雄で我が国へ迎える事が出来たのならば、あの人格破綻者…第九席次の後釜でも良いと考えていたのだが仕方あるまい」

「うむ。右に同じく」

「ありがとうございます。加えてもう一つ皆様にお伺いしたい議が御座います。漆黒聖典に今回の任務を終えた後、そのまま数名を聖王国へ潜伏させたいと考えております」

突然、レイモンから提言された内容に皆は理解し難いと言った訝しい反応が現れる。一呼吸置いた後、最高神官長が口を開いた。

「……ローランサン、それは先の発言と大きく矛盾しているのではないか？　今しがたお主は『静観する』と申したばかりではないか？」

最高神官長の言っている事は尤もだ。

しかし、レイモンとて呆けたワケではない。

「最高神官長が申し上げた通り『静観』と確かに私は申し上げました。しかし、『何もしない』と言う意味ではありません」  
「ほう」

「今やモモンは時の人。彼の偉業は遅かれ早かれ周辺諸国へ知れ渡るのは必定です。故に聖王国の高官や貴族達は勿論、聡い国であれば彼を探ろうと動き出す事でしょう」

そこまで話した所で神官長達は彼の狙いを理解出来た。

「なるほど。他国に彼の周囲を下手に彷徨かれれば探り難く、最悪先手を取られかねない。だが我々は地理的に有利であり。これを活かして聖王国は勿論、他国を出し抜き一つでも多くの情報を手に入れる、と。つまりはこう言うわけか」

「ご推察の通りです。あわよくば弱味を握る事が出来れば儲けもの。しかし、飽くまで目的は情報収集のみ。下手な接触は出来る限り避けようかと」

「良いんじゃないかしら？ 彼の言う通り、風花や水明聖典では、土の巫女姫の二の舞になりかねない。下手に大儀式魔法も使えないとなれば、ここは漆黒聖典に任せるべきよ」

「だが、今彼らは重要な任務に就いている最中だ。更に神器『ケイ・セケ・コウク』を唯一扱えるカイレ殿も同伴している。そのまま聖王国へカイレ殿を送るのは危険だ」

「無論です。現在行っている任務を終えた後、カイレ殿は数名の隊員を護衛にあたらせて帰国させます」

「分かっているとは思いますが、優先すべきは破滅の竜王復活の予兆が本当か否かの調査、そして、万が一復活していた場合、神器を用いて支配下に置く事であるぞ」

「ご安心ください。それも重々承知です。少しでも任務に支障をきたす様であれば帰国撤退を最優先させます」

そうであればと皆がレイモンの提案に同意の頷きを見せる。

「そうなる、情報収集と隠密活動に優れた『天上天下』は外せんな」  
「後者は兎も角、前者には護衛となる人物が必要だろう。『人間最強』

と『一人師団』はどうだ？」

「ふむ。神人を除けば片方は『個』として最強、もう片方は『群』として最強：問題は無かろう」

その後も神官長会議は粛々と進行した。

会議が終わったのは深夜遅くで、会議室から出た瞬間、皆から疲労の溜息が一斉に溢れ出た。

まだまだやるべき事は盛り沢山だ。

人類の守り手たる責務は代え難い使命感があると同時に、非常に安月給でツライのだ。

## 第12話 気疲れモモン

◇

ローブル聖王国首都ホバンスにある王城。その書斎室で、聖王女は職務に取り組んでいた。

亜人部族との小競り合いが要塞線で繰り広げられていた時は、民や兵士達の士気向上や直ぐに指示を出す為、彼女は要塞線から最も近い城塞都市カリンシヤの城に在住し職務に当たる事が多かった。

「はあ…」

カルカは時折、溜息をつきながら机に置かれた様々な羊皮紙へ筆を走らせる。部屋の窓から差し込む陽光と暖かい風にカーテンが靡き、そこから見える首都は平穏で活気あふれる声が微かに聞こえて来る。

「おや？ お疲れですか、陛下」

「あつごめんなさい、大臣」

「…少し休憩しますか？」

「い、いえ、大丈夫よ。執務に支障は無いわ」

そう言うとカルカは再び筆を動かした。しかし、ものの数分おきにピタリと止まったかと思えば、自然と窓へ顔を向けて溜め息を吐いている。

執務の補佐を担当している大臣は、そんな彼女の姿を朝から何十回も目の当たりにしていた。

アンデッド騒動が起きて以降、亜人部族達が襲撃してくる頻度がめつきりと減ってしまった。無論、国内の問題はそれだけではない。しかし、カリンシヤはもとより北部聖王国に住まう人々は久しぶりの平穏な時間を噛み締めていた。

これも全て1人の英雄のお陰である。

——瞬きの平穏。

王女も民も関係なく、その儂いひと時を噛み締めるように過ごす。カルカもその一人……という訳ではなかった。

「ふう……」

ある程度の執務を終えたカルカは漸く羽根ペンを机に置き、一息吐く。大臣が労いの言葉を掛けてお茶の用意を侍女に伝えようとした時、彼女は先程と同じく窓を眺めながら声を漏らした。

「ねえ、大臣。今度カリンシヤへ赴く予定はいつ頃かしら？」

「まだ予定は立っておりません、聖王女陛下」

「……やっぱり、我が国の前線に立つ兵達の士氣の為にも、もう暫くカリンシヤに居るべきじゃー」

「兵達を憂うその御心、誠に素晴らしいものと心得ます。しかし、陛下の仕事は兵達の士氣を昂らせるだけではありません。この国の為、他にもやらねばならない執務は御座います」

「だからこそ、その執務をカリンシヤでー」

「首都ホバンスは物流や各主要都市部との連絡路などのあらゆる面で利便性があります。カリンシヤはほぼ東部末端部にありますれば、不測の事態などの急務において致命的な遅れが発生する可能性があります」

「……」

「その様な顔をしても駄目ですよ」

可愛らしく頬を膨らませて不満を訴えて来るが大臣には通用しない。彼女とは聖王女の座に君臨する前からの付き合いだからこそその砕けたやり取りだが、彼の言い分が至極尤もである事は彼女も良く理解している。

故にそれ以上の我儘は言わず、心底残念そうに溜息を吐いた。

「……ねえ、大臣。ひとつ聞いて良いかしら？」

「はい、何でしょう」

「…み、身分の違いって、大事だと…思う？」

彼女の心情の変化を薄々勘付いていた大臣はその言葉を聞いて確信した。朝から何となく察してはいたが、いざそういう感じを匂わせる質問を投げ掛けられると流石に動揺してしまう。

だが彼女も既に20代半ば。

婚約の気配すら無いと来れば色々と焦る気持ちも理解出来る。

「身分の違い、とは？」

「えっと…いい、いえ!!？」 何でもありません」

敢えて何も気付いていない風に質問を返す。すると、彼女は急に慌てたように席を立つと必死に動揺を隠しながら扉へ歩き出した。

「ど、どちらへ？」

「す、少し自室で休みます」

そう言い残し彼女は執務室を後にする。明らかにいつもの彼女とは思えない狼狽に大臣は目が点になった。

「参りましたなあ…」

侍女に用意させたお茶を啜りながら木漏れ日の窓を仰ぐ。

◇

侍者も連れずに自室へと戻ったカルカはベッドの前に立つと、そのまま倒れる様に横になる。フカフカのベッドにうつ伏せで寝る姿はとても聖王女とは思えないモノだったが、この場には自分以外は誰もいない。

彼女の中で燻っていた思いが一気に溢れ出た。

「くふううううううう！！？！！？　　モモンさ…いえ、モモン様あゝ  
くゝ♡」

カルカはその着のまま枕を抱き締めながらキングサイズのベッドの上を身だしなみなど露ほども気に掛けず何度もゴロゴロと転がった。

「はあ…これが、この感情が『恋』というものなのですね、お母様。この胸の高鳴り…ああ、心が破裂しそう♡」

美しく長い金髪は大分乱れてしまったが当の本人は少し落ち着いたらしい。枕を抱き締めたまま天井を見上げて「はう…」と静かに吐息を漏らした。

何もない筈の天井に心底恋焦がれるあのお方の姿が浮き出て来る。カルカはベッドから上体を静かに起こすと彼の姿が映る天井を紅潮した顔で愛おしげに見上げた。

「黒い髪…黒い瞳…ああ貴方様の全てが私の心を締め付けて来ます。こんなにも殿方に魅入られるなんて初めて…♡」

心ここに在らずとは正にこのこと。

正直、レメディオスやケラルトよりも先に恋に身を焼かれる体験をしてしまった事に少なからず罪悪感を抱かないワケではないが、彼女の乙女心は既に冷めやらぬ熱により燻られている。

しかし、彼女はこの国に君臨する聖王女。モモンは元放浪騎士の冒険者。身分に違いがあり過ぎるこの恋が成就する事は無いかも知れない。それでも彼女は彼を諦めるという選択が出来ずにいる。そもそも選択肢にすら入って無い。

(令嬢の中には英雄と結婚した者がいるという話を昔聞いた事があり

ますし、小さい頃に聞いた英雄譚でも姫と英雄が結ばれる事は多いです)

故に「自分でも問題無いのではないか？」と言う淡い希望をカルカは抱いていた。

若くして聖王国の王として君臨し続けてきたカルカは、自身の『結婚』の意味は重々承知している。当然、恋に浮かれて聖王女としての責務を疎かにする気は毛頭無い。だが、それでも生まれて初めて抱いたこの恋心を手放したくなど無いのだ。

「この機会を逃したら30を過ぎても……いいえ、一生結婚など夢のまた夢となるかも知れません」

普段は表に出さないが彼女は非常に強い結婚願望を抱いている。しかし、聖王女という立場もあってか男性との出会いも極端に少なく、気が付けば既に20代半ばに差し掛かってしまった。

挙げ句の果てに「我儘は言いません。糸の一切ついていない、私という人間を愛してくれるお嬢さんを！」とかなり焦っている。

この強い結婚願望から彼女は極秘裏に肌年齢等を維持する為の新しい信仰系魔法……通称『美容魔法』の研究・開発を進めており、可能性の追求にほんの少しも余念が無い。実はカスタディオ姉妹でさえ、カルカが美容魔法の研究・開発をしている事を知らない。

ずっと抱き締めていた枕をベッドの上へ置き、大きな鏡と様々な化粧道具などが綺麗に並べられている豪華な化粧台の前へ座る。

「モモン様はどういった女性が好みなのかしら？　髪は長い方が良い？　それともレメディオスみたいに短い方が好み？　お好きな色は何なのでしょう？　食べ物は何？　趣味は何？……私はこんなにも貴方様を想っているのに何も知らない」

鏡に向かい眩きながら精巧な作りの櫛で自慢である煌びやかな長



い金髪を優しくとかし始める。恋をした愛らしい乙女の顔であり、想う相手の事を何も知らないと言う悲壮顔が入り混じった表情をしている。

知りたい…ああ、知りたい…

彼の好きなモノ、好きなコト

彼が嫌いなモノ、嫌いなコト

彼の全てを知りたい

彼の愛を、全てを自分に向けさせたい

(駄目…こんなに髪を乱したら…綺麗に、もつともつと綺麗にならないと…)

静かに、そして一心不乱に自身の髪や肌のチェックを行う。

「ふう…そろそろ戻らないと」

これからは毎日あの御方に出会う事を想像して身嗜みを整える。自分とは違い彼は自由に行動する事が出来る為、いついかなる時と彼と出会うかも分からない。

カルカは部屋を後にする。

未だ冷めやらぬ恋の熱を胸の内に抱きながら…

◇

城塞都市カリンシヤの冒険者組合の安宿。

その一室に今も利用し続けている悟は机の上に置かれた金銀銅貨を黙々と小分けしていた。

「えーっと、この分はマジックアイテム用のお金で、コッチは面白そうな武具や防具を買うお金、それからコッチは1週間分の宿代で、あとは貯金かな」

貧乏性故に金銭管理が細かい悟は今日まで冒険者稼業で稼いだお金を定期的に計算している。謂わゆる家計簿と言うヤツだ。

「はあく…しっかし、随分と出歩き難くなっちゃったなあ」

心底残念な声を漏らしてしまう。

彼はアベリオン丘陵で発生したアンデッド騒動を単独で解決した英雄として国を挙げての大祝典と恩賞を受けて以降、何処へ出掛けようにも引つ切り無しに声をかけられるようになってしまった。

「漆黒の英雄様！」

「モモン様！」

「聖王国の救世主!!？」

どれも好意と尊敬、感謝の黄色い声であり、普通であれば有り難い事ではあるのだがプライベートはほぼ無いに等しい。何処へ行くにも声を掛けられ、その度に出来るだけ丁寧に応えてはいるがやはりストレスは溜まる。

気ままな一人旅を謳歌したかったが自身の不注意のせいでこんな事になってしまった。自業自得と言われればそれまでなのだがやはり『自由』は欲しい。

(幾ら肉体的疲労の無い、アンデッドの身体と言っても精神的な疲労は溜まるんだよなあ…)

ならさっさとこの街から抜け出して他の街か別の国へ行けば良いのだが、中々そうもいかないらしい。事態は彼が思っているよりもずっと複雑になっていたのだ。

実は悟はカリンシャの冒険者組合の組合長に拠点を移したい旨を何日か前に伝えていたのだ。「色んな所を見て回りたい」と隠す事な

く素直に伝えたが、組合長は腕を組んで少しの間難しく考えた後、神妙な面持ちで答えた。

「すまない、モモン君。出来ればまだこの街に留まってくれはしないだろうか」

一瞬、彼の言っている意味が理解出来なかった。

理由を聞くと、要するに自分という存在が城塞都市カリンシャを始め、聖王国の兵達の士気向上や国全体の治安改善に貢献し、そして何より人々の心の拠り所となっているのだと言う。

悟はそれを聞いて哑然とした。

確かにこの国が抱えている問題に関しては悟もある程度は理解している。様々な負の連鎖が重なってしまい国内情勢は悪化の一途を辿っているらしい。しかし、まさか自分のミスを処理しただけでそんな事態になってしまっているとは想像していなかった。

(言われてみれば…カリンシャの活気が大分増してる様な気がする)

元の活気など知る由もないが、何はともあれ自分という存在が居るだけでも人々にとっては大きな意味を持つ事は間違いないようだ。何か菌痒い気持ちになるがそこまで言われると「それでも出ていきます」とは言い辛くなるというもの。

(無理矢理に出ていけば、後々の行動にどんな影響が出るのか予想出来ない。ましてや国を挙げての祝典もやった手前だと尚更か……はあ～)

まさか国際指名手配みたいな扱いになるとは信じたくないが、可能性はゼロでは無い分やはり不安だ。

(それにしても、まさかたった1人にここまで依存するって、この国大

丈夫なのか？ いや、『依存』は俺も同じだったか……」

亜人部族との衝突云々は悟に関係無いが、1万体のアンデッドを生み出してしまったと言う負い目は感じている。聖王国に対しての『泣きつ面に蜂』をかましてしまった手前、ここは大人しく従う方が良さそうだ。なにより『ユグドラシル』に縋っていた自分、そして“出て行く” “居なくなる” 事の寂しさや辛さを痛いほど理解しているのも彼を思い留まらせた要因でもあった。

「…分かりました。暫くは此処を拠点に活動していきたいと思います」

「おお！ 分かってくれたか、モモン君！ その代わりと言っては何だが、今君が利用しているのは例の安宿なのだろう？ ならばこの街で一番高い宿を使うと良い。無論、費用は全て組合が請け負わせていただく！」

何故か興奮しながら前のめりに迫って来る。

どこか必死そうにも見える彼の言動に正直引いた。

「あーいえ、大変恐縮ですが今まで通りの宿を利用したいと思います」  
「い、いやしかしだな！ …ゴホン、モモン君は既にこの街、いや…この国の英雄と言っても過言では無いのだ。そんな人物が新米冒険者が利用する様な安宿に泊まり続けるとなれば、君の沽券に関わるのだよ」

「オリハルコン級とは言ってもまだまだ冒険者のイロハも理解し切れてないので、新米冒険者も同然です。それに豪華な部屋とかは…まあ何と言いますか、気が休まらないと言いますか」

「そ、そうか。君がそこまで言うなら、仕方ない…では、依頼の斡旋を組合を挙げて行わせてくれ給え。階級に見合った依頼を厳選しようではないか。そうすればより広い人脈を形成は勿論、その人脈を通した特別な依頼なども——」

「ありがとうございます。ですが、自分の依頼は自分で見つけたんです。無論、指名依頼などがあれば受けようとは思いません。まあ、内容にもよるでしょうが」

「あつ……そう、かね。ま、まあ無理強いはしないよ、は、ハハハハ……」

先程までの勢いと興奮は何処へやら。組合長は苦笑いを浮かべながら座っていたソファへ腰を下ろした。その姿に心がチクリと痛む。

「申し訳ありません。せつかくのご厚意を……」

「ツ!? ご、ゴホン! …いや、気にしないでくれたまえ。君には君にあった生き方と言うモノがあるのだから。だがね、モモン君、これだけは覚えておいてくれ。もし君が望むのであれば我々冒険者組合はいつでも全力で応える準備はあるという事を」

「あつハイ……ありがとうございます?」

「うむ。さて、貴重な時間を取らせてしまったね。用件は以上だ」

「ハイ。では失礼させて頂きます」

悟は扉を開けて組合長の部屋を後にした。

やれやれと思いつつも少しだけ申し訳ない気持ちになったのも事実だ。

兜越しに頬を搔きながら先ほどの自分の対応を思い出す。

（うーん、流石に全部を断ったのは不味かったか? でもなあ……）

悟は何も小心故に断っていた訳では無く、彼なりに色々と考えた末で組合長の厚意を断っていたのだ。

組合の厚意に甘えると自分よりも長く冒険者稼業を続けている人達から色々な反感を買ってしまうリスクがあった。

もう一つは『鈴木悟』がリアルに居た頃に聞いた話なのだが、相手企業からの厚意を素直に受けしてしまうと最悪弱味を握られてしまう可能性があるらしい。特に向こう側が用意したホテルなどは注意が

必要だ。隠しカメラや盗聴器、美人局などどんな罠が仕掛けられているか分からない。

(後者に至っては完全にたっちさんから昔聞いた愚痴をたまたま思い出しただけなんだけど、でもまさかここに来てあの人の愚痴が活かされるとは思わなかったよ)

ウンウンと自身の経験と判断に誤りは無い…筈と半ば強引に納得する事にした。

ありがとう、たっちさん。

「さてと、それじゃ帰る前に軽く組合の掲示板でも見るとするか。オリハルコン級だけど面白そうな依頼があればも——」

組合長の用件も終わり油断し切っていたのが運の尽き。彼が組合の一階へ姿を現した瞬間、その場にいた冒険者達が一斉に此方へ視線を向けてきた。

「うおおお!!? モモンさんだああ!!?!!?」

「うわビックリした」

今では彼は多くの同業者達の憧れの存在だ。

街中を出歩くだけでも多くの民衆から声を掛けられ、迫られる。それは同業者達が相手でも例外では無い。

何とか上手くやり過ごしたモモンは掲示板は諦めてそのまま安宿へ帰る事にした。

(はあ…ほんと精神的に疲れる)

こう言う時こそ発動して欲しい精神抑制効果だが、キャパオーバーでないとはやはり発動しないらしい。本当に使い勝手の悪い種族的特

性である。

◇

モモンが退室した後の組合長室では、部屋の主である組合長の他、また別の人物が彼と向かい合う形でソファに座していた。

組合長がその人物に対し深々と頭を下げる。

「も、申し訳御座いません。まさかモモンく…いえ、モモン殿があそこまで無欲で謙虚な人物であつたとは…」

彼が頭を下げていた人物…：聖王国神官団団長ケラルト・カスト  
デイオは特に気にするわけでも無く、用意された紅茶を優雅に口へ運んでいた。

彼女は組合長とモモンとのやり取りを隣室で聞き耳を立てていたのだ。

「いいえ、彼を此処に縛り付けておく言質を取る事が出来ただけでも十分です。他の要望は飽くまでついでに過ぎません。御礼申し上げます、組合長」

「は、はい!!? あ、ありがとうございます!」

姉同様に整った顔立ちをした彼女は微笑みを向けた。しかし、どこか腹に一物ありげで腹黒そうな印象の微笑みは、組合長の緊張をほぐすどころか却って肝を冷やさせる事になった。

生きた心地でない青褪めた組合長を他所にケラルトはモモンについて考えていた。

(ですが、出来る事なら組合が用意した高級宿と高い報酬依頼の斡旋を受けて欲しかった所ですね)

彼女の主目的は既に達成されたも同然だが、やはりもう一押しが為

されなかつた事は残念と思つていた。

組合が用意した高級宿には常にケラルトの配下を数名配置し、彼が利用する部屋は勿論、チエツクアウトの際の行き先も逐一把握する計画だ。しかし、まさかあのオンボロ安宿の方が彼にとって落ち着くなど誰が予測出来るだろうか。

更に組合が斡旋した依頼は、彼女の息のかかつたその手の業界の実力者や豪商達が依頼主になる予定でもあつた。その過程で彼と友好関係を築き、彼に関する様々な情報を手に入れる事で間接的にパイプが繋がっている自分へとそれらの情報が入ってくる仕組みだ。行く行くは聖王女派閥の貴族から指名依頼を出して、直接的に聖王国政府との繋がりを築いていく。

やがて彼の名声と実績が国としても無視出来ない物となつてきた所で、彼を一介の冒険者から『九色』の新たな人員として迎え入れる。

組合長が彼に提案した内容は全て彼を抱き込む為のケラルトが仕掛けた『餌』なのだ。しかし、逃がした魚は大きい。

だがここまで美味しい話を悉く断られると色々と勘繰りたくなるのは彼女の性分だろう。

「確かにあそこまで無欲だと却つて怪しいですね。元々そう言う性格と言われればそれまでなのだけれど……まさか私が隣室に居る事を見抜いて?」

今度は冷酷さに満ちた視線を組合長へ向けた。ケラルトは彼が何か余計な事をしでかしたのではないかと疑つたが、当の本人はたまつたモノでは無い。

「い、いえいえ!!?」      その様な真似は決して!!?」

その言動から嘘では無い事を瞬時に見抜き、視線を外した。隣で安堵の溜息が聞こえる一方、ケラルトは顎に手を当てて考え込む。組合長から提案された内容はどれも一介の冒険者であれば破格であり、逆



に断る方が難しい。

（私が潜んでいる事が悟られないよう、隣室には幾つもの魔法を掛けていた。優秀な盗賊でも見抜く事が困難な筈だ。仮に彼が魔法でソレを探ろうとすれば私が気付かない筈がない）

純粋に無欲と言うのは少し考え難い。

そもそも彼が使ったと言う例の強力なマジックアイテムだが、彼曰くそれは旅の道中にあつた遺跡から偶然見つけた物でそれを拝借している時点で無欲とは言い難いものがある。

（でもそんな強力な代物を迷い無く使っただけでも結構物欲観念が欠如してるかもしれないけど…）

次に魔法を使つて此方の狙いに気付いたと言う点だが、これも考え難い。

先に述べた通り少しでも魔力を使う素振りがあればケラルト自身が気付く筈だと自負しているからだ。また、彼は第3位階魔法まで扱えると聞き及んでいる。魔法詠唱者の中でも数少ない天才のみが行使出来る領域にある時点でも十分凄い事だが、信仰系第5位階魔法まで行使できるケラルトからすれば敵では無い。

因みに彼女が第5位階魔法まで扱えると言うのは非公式であり、その事実を知っているのはほんの一握りだけである。

（生まれながらの異能と言つてしまえばキリがないけれど…）

だがケラルトはその可能性は一先ず保留にした。『タレント』まで考察の候補に挙げてしまったら何でもありになってしまふからである。

本人の才能や得意分野と『タレント』が見事にマッチする確率は極めて稀であり、大半が全く関係の無い能力であったり、そもそも扱う

機会すら無かったりが殆どだ。可能性はゼロでは無いが此処は敢えて保留とする。

（そうなるよ…彼はこうなる事を見越していた、と考えるのが一番妥当かしら？　此方の狙いのある程度予測していたのであれば、先程の組合長と彼とのやり取りも合点がいく）

どうやらモモンは相当な場数を踏み、用心を常日頃から心掛けているかなりの切れ者らしい。そして、何よりも自分自身を客観的立場から見て判断する事が出来ている。

そう結論付けたケラルトは「うつつふつつ」と一層腹黒さの籠った笑い声を出した。

（かなり有能な存在ね。何としても彼をこの国へ縛り付ける事がこの国の、カルカ様のため）

是非とも欲しい人材だ。そして、叶う事なら『九色』などではなく正式に聖王国政府の人間として置いておく為、爵位を与える事も考慮するべきだろう。

だが物事には順序がある。

徒に早まった行動を取れば却ってチャンスを失いかねないのだ。今は焦らず、外堀から埋めていくのが肝要であると、ケラルトは自らを諫める。

（恐らく他国も動き出す筈…特に法国はすぐ隣で起きた出来事もあって関心は高い）

「警戒は必要ね」と聖王国の英雄が他国に奪われないよう対策を練る必要があるとケラルトは感じていた。この国の救世主であり人々の支えとなったモモンをみすみす奪われるような事があつてたまるものか。

警戒すべきは国外だけに限らない。カルカを陥れようと企む南部貴族を主軸とした保守派も警戒対象だ。もう既にモモンの存在は連中に認知されている。

「あつ、そうでした組合長。今日はいいでに回収させて貰います」  
「かしこまりました」

組合長は少しその場を離れると自身の机の引き出しを開けて、その中から纏められた無数の羊皮紙や手紙などを両手に抱えた。  
それらをケラルトの下へ持っていく。

「ご苦労さま。……チツ、やっぱり」

羊皮紙には全て『モモン殿へ』と書かれていた。贈り主はケラルトの予想通り、南部貴族ら保守派からである。

「はい。日に日に南部貴族からモモン殿へのアプローチは増しています」

「先日は使者が現れたのよね？」

「適当な理由を付けてあしらいました。多分また来るでしょうが…」

「来るとしても精々三下くらいでしょうから、また来るようなら同じようにあしらって下さいね。対応に困るようなら私に連絡を」

「かしこまりました」

「あらっ？」

汚物を見るような視線で適当にモモン宛の手紙や羊皮紙を眺めていると、その中に一つ珍しいモノがあった。

「…これは王国からね」

「そうです。しかし、贈り主は申し訳ありませんが、聞き覚えのない貴族です——」

「それで良いのですよ。腐り切った王国貴族の名前を覚えるくらいなら道端の石ころを数えていた方が……」

「け、ケラルト様？」

「……考え過ぎかしら」

真剣な顔で王国の三流貴族からの手紙を眺める。しかし、何かを結論付けたのか、ケラルトは軽く頭を左右に振った後、他の手紙と一緒に魔法で燃やした。

## 第13話 漆黒聖典

◇

月夜に照らされる深夜のアベリオン丘陵。

夜行性のモンスターや血に飢えた亜人がいつ何処から飛び出してくるかも分からない為、昼間とは別の危険な雰囲気になり溢れている。しかし、そんなモンスターや亜人達でさえ今は近づくのを恐れる場所が存在した。

そこは巨大なクレーターが形成されており、地面が剥き出しになっている窪みには草木は一本も生えていない。何か得体の知れない強大な力によって綺麗に切り抜かれた、或いは消滅した痕跡は、古くから丘陵地帯を住処とする亜人達にとって非常に恐ろしい場所と化している。また、この恐ろしい場所が聖王国の要塞線から比較的近い事もあり、亜人達は自然と要塞線へ近づく事も中々出来ない状況が続いているのだ。

「なるほど。確かに強力なマジックアイテムを行使したという話も納得出来る」

射干玉色の長髪に紅玉の瞳を宿した中性的な顔立ちをした青年が目の前に広がる大きなクレーターを見て眩く。また、彼の他に全く異なる武装・服装をした男女10人も同様にクレーターに興味深そうに眺めていた。

「思った以上に深いな…魔法最強化マキシマイズ・マジックを行使してもここまでの威力は生み出せない」

「やはりマジックアイテムを？」

「そう考えるのが妥当であろう。その者がかの逸脱者に匹敵する術者であれば話は別だがな」

漆黒の魔術師風のローブを纏い周囲に6つの黒い宝玉らしき物を

浮遊させている男と、彼とはまるで正反対の緑の上質な神官風の服装を纏う長い金髪の女性が談論している。

「何か分かったか？」

「そうですね。先ず1つは周囲に負のエネルギーは殆ど感じ取れませんでした。聖王国の聖騎士や神官達がこの辺一帯を浄化したのでしよう。流石と言うべきですね、かなり丁寧に仕事をしております」  
「あれほどのアンデッドが現れた後だ。聖王国なら念には念を入れて浄化を施すのは当然の事だろう。また1万体のアンデッドが出現するような事態があつてはならない」

「ええ、そうですね」

神官風の女性の言葉を受けた青年は一先ず聖王国が仕事をこなしてくれていた事に感心した。聖王国の国内事情を考えれば浄化対応に遅れが出る事も考慮していたが、どうやら杞憂だったらしい。もしその時は彼女に一働きして貰う必要があつたが、主目的の任務に支障が出るような事態は出来る限り避けたかつたからだ。

「ではあのクレーターについてはどうだ？」

青年の問い掛けに魔術師風の男が答える。

「少なくとも竜王の類で無い事は確かだ。あの地からは竜王が行使する魔法独自の魔力の残滓が感じられん」

「それはつまり…カタストロフ・ドラゴンロード破滅の竜王の復活による影響では無い、と捉えて問題無いか」

「その可能性は低いと見ている。そう捉えて貰って構わん」

元より破滅の竜王復活に備える為、今回の任務に出勤した彼ら『漆黒聖典』だが、どうやら今回のアンデッド騒動とかの竜王は無関係である可能性が高い事が判明した。

「如何いたしますか、隊長？」

他の隊員から指示を求められた青年こと漆黒聖典『第一席次』である隊長は少し考える。土の神殿で発生した爆発事件の原因が破滅の竜王の兆しでは無かったとするならば、一体何が原因なのか分からず振り出しに戻った形になってしまった。

しかし、彼らの任務は飽くまで『破滅の竜王が復活していた場合、神器を用いて支配下に置く』事であり、土の神殿の爆発事故を探る事では無い。

(だが、神器を纏ったカイレ様を連れて下手に動くワケにはいかない)

隊長は再び魔術師風の男である第三席次こと『四大精霊』に問い掛ける。

「他に何か分かることはないか？ 例えは何位階相当の威力を有していたとかは」

『四大精霊』は自身の周囲に浮遊している六つの妖しい宝玉を操る。それは不気味な淡い紫紺の光を発しながらクレーターの周囲を漂い始めた。

「正確な所は不明だが、途轍もなく強力だと言うのは間違いない。少なくとも第八位階は下るまい」

「第八位階…ッ」

その言葉に全員が息を呑む。

第八位階となれば法国における大儀式級の魔法である。そんな危険で貴重なマジックアイテムを例の男…モモンは保持していたのだ。

「おいおい、それってかなりヤバいんじゃないか？」

「ッヤバい」なんてモノじゃないですよ。それが事実ならモモンという人物は他にも危険なマジックアイテムを持っている可能性が高いと言うことです。一個人が持っているいい様な代物ではありませんからね」

両手に異なる盾を持つ戦士風の装いをした筋肉質の男：第八席次『巨盾万壁』の言葉を、非常に優しげな雰囲気纏う金色のショートボブヘアをした男、第五席次『一人師団』が肯定する。

「ウチにも第七位階魔法とかが封じ込められてる『魔封じの水晶』は何個かあるけど結構貴重品だし、私的にはそのモモンって男とそいつが見つけたって言う遺跡に興味があるかなあって思うけど、ソイツ見つけるの隊長く？」

1人の少女が大分蓮つ葉な口調で上司である隊長に話し掛けた。大きなとんがり帽子を被り薄花色で三つ編みおさげの長髪の、下着同然の格好をした少女、第十一席次『無限魔力』の言葉遣いに関しては元々の性格が不遜である為、既に大半が諦めている。

『無限魔力』の意見を隊長は首を横に振って否定する。

「いや、それ以上の行動は任務内容を逸脱してしまう。まずは本国へ連絡し指示を仰ぐべきだろう」

「ふーん。まあ責任とか御免だし、その方が良いかもねえ」

「…その不遜な言葉遣いどうにかならんのか？」

彼女の言葉遣いもとい性格を未だに許容しきれていない『四大精霊』は不快そうに注意するが、当の本人は心底ウザそうな態度で大きなとんがり帽子を利用して視線すら合わせようとしない。

「はあ？　　何でアンタなんか文句言われなといけないワケ？」



そもそもアンタがもちよつと正確に調べることが出来れば良かったんじゃないの？」

「貴様ア…」

あまりの態度に静かに怒りを燃やす『四大精霊』とそつぽを向いている『無限魔力』。2人の犬猿の仲は今に始まった事では無いが、まとめ役でもある隊長からすれば悩ましい問題である。

「まあまあ、お二人とも落ち着いて。確かに言い方は良くありませんですが、彼女の不満は逆に言えば貴方の力を信頼しているからこそなんですよ。そうですね？」

二人の喧嘩の間に入ったのは『一人師団』だ。彼は持ち前の笑顔を向けながら、彼女に詰め寄る『四大精霊』を諷める。一方の『無限魔力』は肯定も否定もせず「フン」と鼻を鳴らしてその場から離れて行った。

隊長はこの場に彼がいた事を神に感謝した。

「すまない。またお前に手をかけさせた」

「いいえ、お気になさらず。人類の守り手たる者同士が争い合うなど笑い話にもなりませんから」

「ああ、全くだ」

「くだらん喧嘩は終わったかえ？」

そこへ白銀の生地チャイナドレスに天に昇る龍が金糸で刺繍された旗チヤイナドレス 袍 服を纏った老婆がやれやれと言った様子で話しかけて来た。老婆こと法国の重要人物カイレに隊長は「お見苦しい所をお見せしました」と謝罪する。

『一人師団』はカイレへ一礼した後、2人の会話の邪魔にならぬよう数歩後ろへ下がった。

「破滅の竜王の危機は杞憂であつた事は人類にとっては喜ばしい事ではあるが、肝心の爆発事故の原因は不明のままじゃな。それでこれからどうするつもりじゃ?」

「一先ず道中で見つけた洞窟へ一度引き返します。そこで本国へ報告した後、これからの指示を確認します」

「ふむ。それが妥当じゃろう」

「隊長…」

隊長とカイレ、少し下がった場所に立っていた『一人師団』とは違う別の声が聞こえた。しかし、3人はその声に驚く事は無く平然としている。3人が声の聞こえた方向に顔を向けると、何も無い空間からスーツと1人の人間が片膝を地面に付けた状態で現れた。

顔だけでなく頭部全体をも包み込む赤色の全身タイツに鎧を付けたアシン風の男。金属板の様な物で鎧を補強している、突如として現れたこの人物は第十二席次『天上天下』である。

「東から<sup>パフオルク</sup>山羊人の偵察部隊が接近している。数は15。此処へ到達するまで1時間は掛かる。かなり遅々とした歩調だ、余程此処が怖いらしい」

周囲を警戒していた『天上天下』からの報告を聞き、隊長はそうかと呟き考える。

「それでも偵察を送り込む、と言う事は亜人たちが再び活発化するのも時間の問題だな。あまり長居は出来ない」

「どうする、隊長?」

「例の洞窟へ引き返す。お前は先に行って洞窟内部の安全性を再度確認して来て欲しい」

「分かった」

命令を受けた『天上天下』は軽く頭を下げた後、今度は空間に姿を

隠し消えていった。彼が行動を開始した事を確認した隊長は、今度は他の隊員たちへ向けて指示を出した。

「傾聴」

この一言で周りの隊員達は一齐に隊長の話に身を傾けるべく顔を向けた。隊長は一通り見て確認した後、話を続ける。

「これより道中で見つけた例の洞窟へ一度引き返す。その後、本国と連絡を取り指示を仰ぐ。道中の最優先事項はカイレ様を本国へ護送する事にある。不測の事態が発生した際は事前に通達した通りのメンバーで散開し本国へ帰還する。各員気を引き締めて行動にあたれ」

「了解」

ハッキリと答える者から気怠そうに答える者と様々な返答があった。

（正確には最優先で護るべきはワシではなく神器『ケイ・セケ・コウク』じゃがな）

だがしかし、と漆黒聖典らを見てカイレは改めて感心する。個の塊と言っても良い漆黒聖典の隊員を瞬時にまとめられる器量と実力を有するのは、やはり彼を置いて他にいないだろう。

（実力だけで言えばあの娘の方が上じゃが……アレは危険過ぎる）

カイレの脳裏にある人物が浮かび上がる。

“あの娘”とは法国が秘匿している存在であり切り札でもある。『漆黒聖典』に属しては居るがあまりにも存在そのものが危険である為、公的な席次は与えられず『番外席次』という例外中の例外と言う事になっている。

『絶死絶命』――

それが番外席次に与えられた圧倒的強さ故の異名である。万が一、彼女の存在が大っぴらになれば評議国の竜王達は間違い無く法国へ攻めて来るだろう。

「では、カイレ様」

「うむ」

漆黒聖典は道中で見つけた洞窟へ向けて歩き出した。

◇

洞窟へ辿り着いた漆黒聖典は早速<sup>メッセージ</sup>〈を使い本国へ連絡を取っていた。薄暗い洞窟内だが既に『天上天下』によって中の安全は保障されている。

「傾聴。新しい指令だ。聖王国へ潜伏し、冒険者モモンについて探りを入れる、との事だ。不可抗力以外の接触は禁止。第三者を通しても同じだ」

その言葉を聞いてあからさまに落胆する者から安堵する者と様々な反応が見られる。

「カイレ様はどうするのですか？」

一人の隊員が当然の疑問を聞いて来た。カイレが神器を身に纏って同行した目的は破滅の竜王を支配下に置く為であり他国への潜入任務では無い。そもそも彼女とその神器を無闇に移動させるのはあまりにも危険過ぎる。

だが隊長はその手の質問は当然聞いて来るだろうと思っていた。

「カイレ様は本国へ帰還する。無論、その護衛役となる隊員達も含め

てだ。聖王国への潜伏調査は数名の隊員のみで行う」

「それは誰と誰でしょう？」

「まず一人は『天上天下』、そして『無限魔力』」

自身の名を呼ばれたことに『天上天下』は軽く領き、『無限魔力』は不満げな表情を浮かべながら「げっ」と声を発した。どうやら彼女としては潜伏調査の任務は嫌だったらしい。

「ちよつとちよつと!!？」 何で私!?」

怒りながら詰め寄る『無限魔力』だが、隊長はあつけられかんと答える。

「今回の調査任務に於いてお前の探索に長けた能力がベストだと上は判断した。『天上天下』は言うまでも無い」

「でも調べるだけなら『天上天下』だけでもいいじゃん!!？」 何で私もなの!？」

「モモンなる人物が英雄の領域に達している可能性が高いからだ。上としては第九席次の穴埋め要員に考えているらしい。だったら集められる情報はより多く、そして確かな物であった方がいいだろう」  
「え〜、もうそれ責任重大じゃん…」

「任務を終えたら長期休暇と働きに見合った褒賞を出すらしい。それから、今回の任務の責任者は『一人師団』という事になっている」  
「えっ、本当？ じゃあやる!!？」

責任者は自分ではない上に、褒賞と休暇の話が出た途端、やる気に満ちた態度を見せる彼女の現金な反応に溜息を吐きたくなる気持ちで隊長は我慢した。それを気の毒そうに見つめる『一人師団』だが、決して他人事では無い。これからは彼が彼女の面倒を見なければならなくなるのだ。

「次に護衛役として、『一人師団』それから『人間最強』」

「なるほど。了解しました」

「ガキのお守りかよ。冗談キツイぜ、隊長さん」

案の定、『一人師団』は不満一つ溢す事なく微笑みながら了承し、もう一人の大男は不承不承と肩を竦める。その大男は白髪白髭白胸毛を蓄えた半裸の姿をしており、百戦錬磨の筋骨隆々とした体躯で背中には巨大な斧が備わっている。

彼が第十席次『人間最強』である。蛮族の戦士を彷彿とさせる風貌をしており、その見た目通りの好戦的な性格をしているが、自分よりも強いと認められた者に対しては意外と従順である。

「つつーわけだ。変な事はすんなよ!!? ガハハ!!?」

「ちよつ、痛い痛いって!! イタタタ!!? 撫でんな馬鹿あ!!?」

『人間最強』がその大きな手で『無限魔力』の頭を大きな尖り帽子ごとグシャグシャと乱暴に撫でた。見るからに痛そうで、案の定痛かつたらしく、彼女が「触んなゴリラ!」と怒鳴ってその手を振り解こうとしている。だが臂力の差故に全く振り解けない上に彼は止めようともせず、面白がつて撫で回し続けた。2人のじゃれ合いを『天上天下』は腕を組みながらやれやれと呆れながら眺める。

「はあ…すまないが後は頼む」

「はい、お任せ下さい」

あとは貴重なもう一人のまとめ役の『一人師団』に任せて、隊長ら他の隊員達はカイレを連れて本国へと帰還の途へ就いた。

◇

ローブル聖王国の東に広がるアベリオン丘陵。此処には血気盛んな亜人部族とモンスター達が日夜跋扈する危険な場所であり、亜人と

の争いやモンスターの間引き以外の目的でこの様な危険地帯を通る様な事は殆どない。しかし、聖王国の要人や商人など人々が国と国とを行き交う為の公道は存在する。

アベリオン丘陵との境に築き上げられた堅固な要塞線の北方に王国へ通じる公道があり、人々はその唯一の道を使って国境を越えているのだ。公道はお世辞にも整備されているとは言えないが、安全に移動出来る道は他に無いため仕方が無い。

公道を通る商隊や旅人を狙った野盗や亜人、モンスターの襲撃も多いのだが、国は公道を巡廻・警備する程の余裕は無く、隣国の王国もアテは出来ない。その為、その護衛を冒険者に依頼する案件が非常に多いのだ。

「この前、この道を通った下請け商人が野盗集団に襲われたって聞きました。な。いや、貴方の様な冒険者が護衛依頼を受けて頂いて本当に心強いですよ」

「いえいえ、ロフーレさん。私なんてまだまだ若輩もいい所です」

「ハハハ、本当に噂通り謙虚な方で！ まあもしもの時はお願いし

ますよ、モモンさん」

「ハイ、お任せ下さい」

冒険者モモンとしてローブル聖王国城塞都市カリンシャを拠点に活躍し始めてからもう2ヶ月が過ぎようとしていた。

流石に2ヶ月も過ぎれば人々のモモンを讃える声に多少の落ち着きは出てきているものの、声を掛けられる事は相変わらず多い。それでも外出し難しいほどでは無い為、少し前から本格的に冒険者稼業を再開している状態である。冒険者の活動を再開するまでは、ユグドラシルには無かったアイテムを街の市場で買ったり、あとはミラー・オブ・リモートビューイングの鏡を使った周辺諸国の情報収集や、この世界の読み書きの練習と結構ワンパターンのルーティンが多かった。

(騒ぎになりたく無かったから遠見の鏡でこっそり組合の掲示板も見

てたけど、特段目ぼしい張り紙は無かったし、そもそもオリハルコン級の俺が下階級の依頼を下手に受けるわけにもいかないからなあ)

組合の掲示板に貼られている様々な依頼書にはその難度に見合った冒険者階級が書き記されている。自身の階級より上の任務を受ける事は組合の規定により基本的に不可能だが、その逆であれば問題は無い。

例えば今の悟はオリハルコン級だが、その下であるミスリル級やプラチナ級、金級などの依頼を受ける事は可能だ。しかし、規定上違反では無いが、それによって下階級の冒険者達が受ける依頼が著しく減ってしまうと言う問題が発生してしまう。ただでさえ冒険者の収入は不安定な上に命懸けなのだ、自分達の貴重な収入源である依頼を奪うような輩は格上の冒険者であっても許されるものではない。

たとえそれが『英雄』と謳われる者であっても同じに違いない。冒険者はやはり自身の階級に見合った依頼を受けるべきなのだ。

(組合の印象も良くないだろうし、やっぱり今回みたいな少し難易度の高い依頼を今後は中心に受けて行く必要があるな。本当はもつとマイペースにやりたかったけど…こればっかりは仕方ない)

極貧生活をリアルで味わった事のある彼だからこそ理解出来る。自己満足によって彼らを衣食住に困るような事態に陥らせるなど言語道断だ。

下の階級の冒険者達は一つ一つの依頼報酬が少ない分、それなりの数をこなして金を稼がないといけない。それは武具や防具、必要なアイテムから宿代、食事代、移動代と様々だ。

因みに今回の依頼はプラチナ級で王国のロフール商会の商隊を王国のビョルケン Heim 領内まで護衛するというものである。偶々、聖王国で商いの用事で訪れていた際、あのアンデッド騒動に遭遇してしまい、行きと同じ護衛では些か不安がある為、聖王国の冒険者組合に依頼を出したらしい。



「モモンさんは王国に来た事はありますか？」

「いえ、私は遙か南方から聖王国へ流れ着いた浪人です。王国や帝国などにはまだ一度も」

「そうでしたか。もし宜しければ、エ・ランテルを訪れてみるとういでしょう。あそこは帝国や法国とも領土を面している為、人や物の往来が盛んな街です。行ってみて損はないでしょう」

「それはそれは。時間がある時に是非、ゆつくり観光してみたいものです」

依頼主と軽く談話をしていると、悟の代わりに上空からの周囲の警戒に当たらせていた骨のハゲワシポーン・ヴァルチャーより報告が入った。

「…止まって下さい」

「えっ?」

公道の先の脇道からゴブリンの群れが飛び出して来た。ゴブリンであれば何も問題は無いと依頼主であるロフーレが安堵したのも束の間で、そのゴブリンの群れの後から直ぐに別のモンスターが現れた。蜥蜴にも蛇にも似た全長約数十メートルの巨体を持ち、緑色の硬い鱗、鋭い爪、あらゆる物を噛み砕く大きな牙と顎、王冠の如きトサカを持つ八本足の伝説級のモンスター。

——数多の戦士達の天敵、ギガント・バジリスク。

「なあッ!?…ぎぎ、ギガント・バジリスク!! 何故伝説級のモンスターがこんな所に!」

商隊の人達は突如、目の前に都市一つ滅ぼせる伝説級の魔獣が現れた事で悲鳴をあげている。ロフーレとて恐怖に引き攣った顔で震えてはいたが、やはり商会の責任者故か直ぐに取るべき行動を取った。

「み、みんな急いで引き返すんだ!!?」 積荷は全部此処へ置いて行け!!?」

「し、しかし、ロフールレさん!」 それでは積荷が……!」

商隊の一人は我が耳を一瞬疑った。

あの荷車の中には貴重な品物が積んである。万が一積荷に何か有れば商会にとって少くない被害が発生する事は目に見えている。自身の命に関わる危機が目の前に現れたと言うのに、商会の事を考えてしまったのは彼がそれほどまでにロフールレ商会に尽くしているが故であり、だからこそロフールレ自身もこの人物を雇っているのだ。

だがロフールレはそんな彼の懸念などお構い無しに、諭すように言った。

「死んだら何も残らん、命あつての物種だ!!?」

そう告げると彼の背中を押して早く逃げろと必死に促した。

「なるほど。此方には気付かず、目の前のゴブリン共を食べるのに夢中のようなですね」

「も、モモンさん、貴方も早く!!?」 戦っても勝ち目は無い、逃げる事は決して恥ではありませんぞ!!?」

今度は護衛として雇ったモモンに逃げるよう促すロフールレであったが、彼はその場から動かずにギガント・バジリスクを黙って見据えていた。

「ロフールレさん、此処は私に任せて、貴方は仲間達と一緒に避難して下さい」

「な、なんと……ッ!?!」

絶句した。相手はたった一体で都市一つを滅ぼす事も出来る伝説級の魔獣ギガント・バジリスク、石化の視線や即死級の猛毒の体液を有し、分厚い鱗はミスリルにも匹敵するバケモノだ。アダマンタイト級冒険者チームでもなければ倒す事など不可能で、モモンの力を疑う訳では無いがそれでも勝ち目など無いに等しい。

「む、無茶だ!!? 無駄死にですぞ!!?」

「どちらにせよ、ヤツは追いかけて来ますよ。そうなたら多かれ少なかれ皆さんに被害が出てしまう。そして何より、今ここでヤツを倒さなければ、次にこの公道を通る人々の脅威になってしまう」

モモンは背中から二本のグレートソードをゆつくりと引き抜くと、片方の剣先をギガント・バジリスクへ向ける。

どうやらギガント・バジリスクもゴブリンを食べ終えたらしく、次なる獲物としてモモンを視界に捉えたようだ。蛇とも蜥蜴とも取れる長い舌でゴブリンの血で塗れた口元を舐めると、ギラリと連なる鋭利な牙を剥き出す。

「ロフールさんは下がっていて下さい。直ぐに終わらせませす」

モモンがそう告げた瞬間、彼は大地を蹴ると瞬く間にギガント・バジリスクとの距離を詰めた。対するギガント・バジリスクは猛スピードで自身へ突っ込んで来るモモンに向けて大きな顎を開けて猛毒の体液を噴射する。並大抵の耐毒効果を持つアイテムなど意味を成さないほど強力な即死級の猛毒の噴出液がモモンへ降り掛かろうとするも、彼はそれを全身鎧を纏っているとは思えない軽快なフットワークで左右へ飛び退きながら容易く躲した。

毒液を全て避け切られてしまった事に驚くギガント・バジリスクは、怯まず接近して来るモモンに強い本能的危機感を瞬時に抱く。

ギガント・バジリスクの瞳が妖しく光る。

奥の手の『石化の視線』を発動させたのだ。

「お？ 石化の視線か？」

視界に入る生き物全てを石化するギガント・バジリスクの切り札とも言える特殊<sup>スキル</sup>技術は、悲運にも空を飛んでいた鳥や荷車に繋がれていた為逃げられなかった馬を巻き込み、瞬<sup>鈴木悟</sup>く間に彫刻の様な石に変える。しかし、レベル100であるモモン<sup>鈴木悟</sup>に対しギガント・バジリスクのレベルは20後半である為、抵抗<sup>レジスト</sup>成功により状態異常は無効化される。

「お生憎様、俺に石化能力は効かないんだ」

自身の奥の手が通じない事に驚くギガント・バジリスクにモモンは距離を更に詰めると、一気に跳び上がり二本のグレートソードを大きく振りかぶった。

「ぜやあああッ!!？」

モモンが放つ漆黒の一閃がギガント・バジリスクの頭部を切断。切断面から血を噴き出しながら頭部の無いギガント・バジリスクの身体は激しく痙攣<sup>けいれん</sup>したうち回る。やがて徐々に痙攣が収まると間もなくピクリとも動かなくなった。

「ギガント・バジリスクは確か眼球と鶏冠が高く売れたはず」

モモン：悟がギガント・バジリスクの死体を見下ろしながら追加報酬の算段をしていると、逃げていた筈のロフーレたちが恐る恐る戻って来た。どうやら途中からギガント・バジリスクの嘶<sup>せき</sup>きが聞こえなくなった事に気付き、気になって様子を見に来たらしい。

「モモンさん、あなたまさか、ひ、一人でギガント・バジリスクを？」

「ええ、もう安心ですよ」

「い、一体で都市一つを滅ぼせる伝説級の魔獣を…ひ、一人で…」

「え、ええ、まあ。あのお…どうかし——」

「モモンさんツ!!?!?!」

ロフーレは物凄い勢いで悟へ詰め寄るとその手を強く握り上下へぶんぶん振り始めた。その目は爛々と輝き潤んでおり感動と感激に溢れているのが見て分かるが、当の悟はただ困惑するばかりだった。気が付けば周りにロフーレ商会の人たちも集まり自分を声高に讃え、感謝を述べている。

「貴方の実力を疑っていたわけじゃないが、やっぱり貴方は本物の英雄だ!!?」

「ど、どうも、です」

みんなの過剰とも取れる反応に悟は再び自身の認識のズレを改めて認識した。久し振りのまともな依頼の戦闘という事もあり、すっかりその辺の注意を怠ってしまったらしい。

(まあ結果的に依頼は無事に達成出来そうだから良かったけど…コレがまた変に噂にならなきゃいいんだけどなあ)

彼の懸念は残念ながら当たった。商隊護衛依頼の最中に突如現れた伝説級の魔獣ギガント・バジリスクの単独討伐。この話はロフーレの人脈により王国中に浸透してしまい、聖王国でも難なくギガント・バジリスクを運んで帰って来た彼の姿にかつての祝典に匹敵するほどの大歓声上がり、また暫く続いたと言う。

それに対して悟が再び溜息を吐く日々が続いた事は言うまでもない。

## 第14話 天才姉妹の考察

◇ 「これが例のギガント・バジリスクね…」

冒険者組合が管理している幾つもの倉庫の1つ。そこに収められているギガント・バジリスクの死体をケラルト・カストデイオは興味深く眺めていた。〈保ブリザベインジョン存〉が施されているこのギガント・バジリスクの死体は、先日モモンが商隊護衛依頼をこなしている最中に偶然遭遇し討伐した個体である。

予想だにしていなかったギガント・バジリスク討伐により、組合の冒険者達は勿論、カリンシャに住まう人々はその話題で持ちきりだ。紛れもなくモモンは聖王国の歴史に名を残す英雄であると多くの人々が断言し、聖騎士団や兵士達の間でも周辺国家最強の戦士として名高いあのガゼフ・ストロノーフさえも超える存在であると口にする者も少なくない。

ケラルト自身も彼の偉業については認めている。今の不安定な聖王国には必要不可欠と言っても過言ではない。だが、同時に彼に対して一定の危機感も抱いていた。

（英雄の領域に及んでいる可能性を秘めた彼のチカラが聖王国へ向けられないとは限らない。そうならないよう注意深く情報を集めて、対応するつもりであるけれど…）

彼女は手を顎に当てながら静かに思案する。英雄に匹敵する力を持つという事はそれだけで脅威なのだ。帝国に存在する『逸脱者』フルーダ・パラダインがそうであるように。彼の实力は聞くところによれば帝国全軍に匹敵するとも言われている。

（モモンは基本的に温厚な性格で物腰も柔らかか。決して自分から無礼を働くようなマネはしない…）

今のところ彼について分かっている事を踏まえれば、自分から全てを敵に回すような行動を取る可能性は低いように思える。しかし、何事にも絶対は無ないように、彼が急に心変わりをする可能性もゼロでは無い。

ケラルトはそう言った最悪な事態も想定した上で彼に関わる情報：弱味などを収集しつつ、良好な関係を築けるよう関わっていくつもりなのだ。

「さて、そろそろ来る頃かしら？」

殆ど外部の光を遮断している倉庫内で、とある人物が来るのを待っていた。やや薄暗い倉庫内で伝説級の魔獣の死体と一緒にいるのは決して良い気分では無いがこればかりは仕方無い。

少しでも多くの情報を得る為、この穢らわしい魔獣の死体を下手にいじって欲しく無いのだ。

それから半刻程経過してから倉庫の扉がゆっくりと開かれると、そこから現れたのは自身の姉であり聖騎士団団長のレメディオス・カストディオだった。実は彼女こそケラルトが待っていた人物であった。

「すまない、待ったか？…むッ!？」

普段と変わらない聖騎士の格好をしたレメディオスが軽く謝罪しながら入って来た。彼女は倉庫に入るなり、建物の中央にドンと置かれたギガント・バジリスクを見て一瞬目を見開いて驚き身構えた。しかし、既に死んでいる事に気付くと静かに構えを解いた。

「いいえ、私が無理を言ったのだから姉様が謝る必要はありません」

「そうか？ 私としてはずっと鍛錬してるだけだったから別にもっと早くても構わなかったぞ。まあ鍛錬に夢中になり過ぎて少し遅れてはしまったが」

「あら？　確か今日は参謀達の会議に参加する予定ではなかった？」

「小難しい話は私には分からん。時間の無駄だと思って、途中から抜け出して来たのだ。なに心配するな、グスターボとイサンドロを会議場にちゃんと置いてきたからな」

悪意の無い自信満々の顔で説明されたケラルトだが、毎度の事ながら悩ましい問題だと溜息を吐き眉間を押さえる。姉であるレメデイオスの頭脳が酷く残念な事実は既に周知の事だが、せめて大事な会議くらい最後まで参加はして欲しかったのが正直な所だ。そして、毎回彼女の不始末の被害を被る2人の副団長を心の底から気の毒に感じた。

今度見かける事があれば労いの言葉の一つでも掛けておくべきだろう。

「はあ…姉様は聖騎士団の団長なのだから、会議には表面的でも構わないから参加するべきよ」

「何故だ？　理解出来ない話を黙って聞くよりも己を精進していた方がずつと有効的ではないか？」

「それは…否定しないけど、はあ…」

「ん？　ん??？」

やはり理解してくれそうに無いと理解出来ずに首を傾げ困惑する姉を見て思った。分かりきった結果ではあるが、カルカを支える二柱の1つであり自身の実の姉と言う事情もある為、一応「これからは会議を抜け出さないように」と忠告だけはして本題に移る。

レメデイオスも倉庫に入った時から当然視界に入っていたであろう、先日モモンが依頼途中で偶然討伐したギガント・バジリスクの死体についてだ。

「そんな事より、姉様を呼んだのは他でも無いわ。もう気付いてるで



しようけど」

ケラルトが顎でしゃくりながら「コレのことよ」と言うと、レメディオスは改めてギガント・バジリスクの死体を回るようにゆっくりと歩き出し眺めた。

「しかし、ギガント・バジリスクとは懐かしいな。私も一度だけだが討伐した事があるぞ。覚えているか、ケラルト？」

「ええ、もちろん。姉様が団長に就任する前の事でしたわね」

「ああ！　攻めてきた亜人どもの掃討戦をしていた時に偶然、遭遇してしまつてな。ハハハ、あの時は流石の私も驚いたものだった！」  
「姉様を筆頭に部下の聖騎士達と神官、従軍魔法詠唱者らと協力して見事に討伐。亜人達に姉様の武勇と名を知らしめたきっかけの1つでしたわね」

「うむ!!?　　我ながら誇るべき戦果だったぞ!!?」

レメディオスはかつての自身の武功を誇らしげにケラルトと共に嬉しそうに思い出していた。

アベリオン丘陵にギガント・バジリスクが出て来る事など滅多に無かった為、聖王国内は勿論、亜人部族達にも『聖王国にレメディオスあり』と思い知らせた一件である。

(戦士としては一流の姉様なら、この死体を見て何かわかるかも知れないと踏んだけれど：フッフ、流石は姉様ね。早速、死体に何か違和感が無いか調べ始めたわ)

実は彼女を此処へ呼ぶにあたって、ケラルトは「姉様に見せたい物がある」とだけ書いた手紙を送っただけで詳しい情報を何も伝えていない。

理由は大きく2つある。

1つは仮に詳細を書いて送ったとしてもレメディオスが手紙の内

容をキチンと理解するとは思えなかったからだ。そうなると彼女は周囲の聡そうな部下に声を掛けて「これの意味が分かるか？」と手当たり次第聞いてくるだろう。基本的にその対象は副団長の2人である場合は大きな問題にはなり得ないが、必ずしもそうするとも限らない。

(それに詳しい内容を書いても、此処へ来たなら十中八九手紙の中身を半分以上忘れて聞いてくる。これじゃ只の二度手間：なら此処へ来てから説明すれば良いだけのこと)

もう一つは彼女の暴走を防ぐ為だ。レメデイオスは脳筋故に猪突猛進で良くも悪くも行動力のある性格をしている。彼女が手紙を見て「モモンが今度はギガント・バジリスクを単独で討伐した」などと言う話を知った途端、性格上ほぼ間違いなく彼女はモモンと接触を図ろうとする事だろう。それでもし彼がこの国を出ていくキツカケになつてしまつたら元も子もない。

『漆黑』のモモンを可能であればこちら側へ引き込む為にも彼に関する情報は出来るだけ誰よりも先に把握しておく必要性がある。

何よりカルカ様の件もある。

「……綺麗だな」

「え？」

レメデイオスがギガント・バジリスクの死体全体をぐるりと眺めたあと呟いた。その言葉に一瞬だけ瞠目したケラルトだが直ぐにその意味を心の中で汲み取る。

「死体が、だ。ケラルト、このギガント・バジリスクは些か綺麗過ぎる」

「それは…どういう事か説明出来ます？」

ケラルトはその理由を尋ねた。レメデイオスはうむと一つ唸った

後、斬り落とされた頭部から胴体、尻尾まで指を差しながら横へ移動させながら答えた。

「よく見てみる。このギガント・バジリスクの目立った傷は切断された首の部分だけだ。鱗にも爪にも他に目立った傷と言えるようなモノは見られない」

それを言われてケラルトは初めて気付いた。確かに言われてみると目立った傷痕は殆どと言って良いほど無かったのだ。

「知っている通り、以前の私が倒したギガント・バジリスクは多数の支援があつてこそ倒す事が出来たのだ。無論、支援ありきでも簡単に来るはずも無く、ヤツの爪や牙、鱗など数え切れぬ程剣をぶつけた：まあ要するに、激しい戦闘らしい戦闘の跡が見受けられんだ」

なるほどと拳を口元に当てながらケラルトは頷く。当時の姉は今のような強さを有してはいなかったと言つても、ギガント・バジリスクのような伝説級の魔獣を相手に勝利するには様々な支援魔法や装備、マジックアイテムが必須である。それは聖剣を有している今の彼女でも同じである事は間違いない。アレを一撃で倒すなどレメディオス自身も困難を極める事は百も承知――

「おつと!!?　　言つておくがなケラルト、今の私は昔の私よりも遥かに強いぞ!!?　　ギガント・バジリスクの1匹や2匹恐るるに足らずだ!!?」

——という訳では無いようだ。サーコートのマントを腕で払い靡かせながら自信に満ち溢れたその瞳を見せる様では、どんな正論を言つたところで大して聞く耳を持たないだろう。

目頭を押さえながら溜息を吐く妹を他所に、その原因である姉のレメディオスは「それから」と話を続けた。

「一番目立つ、と言うよりも唯一にして絶対な致命傷である切断された首なのだが…これも凄いで。傷跡を見ればそれがどんな武器を使っただけの出来た傷なのか大体見当がつくのだが、これは刀のような切れ味の鋭い武器と言うよりも、ずっと大型の武器…：大剣か大斧に近い武器で斬れ味ではなく膂力で押し斬った可能性が高い。それも途轍もない程のな」

気を取り直して彼女の言葉に耳を傾けた。ケラルトは魔法詠唱者である為、戦士職の着眼点などはイマイチよく分からない事が多いのだが、少なくとも戦いに於ける彼女の分析力や判断力<sup>野</sup>はかなり信頼出来る。そして、モモンの武器を想像する辺り、やはりレメデイオスの分析は当たっているのだ。

(少なくとも彼の實力は本物である可能性が非常に高い…：それだけでも大きな収穫ね)

ケラルトは改めて姉の分析力の高さを評価する。

「ふむ。短時間で、しかも一撃…：ケラルトよ、このギガント・バジリスクを見事に仕留めたのは何者だ？」

目をキラキラさせながら問い掛ける姉に、ケラルトは少し顎先に指を当てて「果たして教えて良いものか」と一瞬考えたが、ここまでのモノを見せておいて下手に誤魔化す行為はかえって暴走を助長させると判断した。

故に素直に答えたのだ。

「『漆黒』のモモン。彼がギガント・バジリスクを単独で仕留めたのですよ」

「何と!!? モモン殿がコレを…!!?」

瞠目し感嘆の声を上げるレメデイオスを見て、ケラルトは彼女の意外な反応に少し驚いた。普段の彼女であれば名前を言ったところで「誰だソイツは？」と首を傾げるのが殆どで、良くても「何処かで聞いた名だな？」程度だ。

彼女は名前を聞いて直ぐに誰なのか理解している…戦い以外の記憶力が残念な彼女に名前と人物像がしっかりと記憶に残るとなれば、レメデイオスにとってモモンが如何に強い印象を与えていたのかが見て取れる。

レメデイオスは歓喜の笑顔で再びギガント・バジリスクの死体を眺めながら頷く。

「実に素晴らしい!!? 冒険者にしておくには余りにも惜しいぞ!!

? そうだ、ケラルト。私は良い考えを思い付いた!」

「駄目です」

「む? 我が妹ながら失礼ではないか? 私はまだ何も言っていないぞ?」

「分かりますよ。姉様の事だから『聖騎士団へ入団させたい』と言うつもりだったのでしょう?」

「うっ…! な、何故ダメなんだ?」

これこそケラルトが最も懸念していた状況の一つだ。事前の手紙で詳細を記載しなかった自分の行動が改めて正しかったと再認識しつつ、本気で理解していない姉の疑問に答える。

「まず第一に聖王国の内情は未だ不安定だからです。今では南部の保守派からも強い関心を与えている彼を一方的に自陣へ引き込めば、益々対立が激化するのは目に見えているからです。ただでさえ一枚岩とは言い難い状況にトドメの楔を打ち込んでどうするのですか?」

「うう…そう、なのか?」

眉間に皺を寄せ、人差し指でこめかみを押さえるレメデイオスはやはり納得はしていない。元より国内情勢に疎い彼女は、妹の言っている意味を理解するのに必死だが、ケラルトは間髪入れず話を続ける。

「もう一つが彼を此方の都合で縛り付けるのはかえって逆効果だからです。彼はこの国へ来てまだ半年も経っておらず、そんな彼を無理に管轄下に置くような真似をすれば聖王国に対する彼の印象は最悪になり兼ねません。彼自身の強い希望、もしくは何かしらのこの国へ腰を下ろす明確なキツカケが無い限り、下手な勧誘は控えるべきです」

「し、しかしだな、ケラルト……」

「カルカ様の事も少しは考えて下さい」

「む、むう……」

ここまで言って仕舞えば流石のレメデイオスと言えど下手に動くとはしないだろう。主君であるカルカの名を利用するようで気が引けるが、嘘は言っていない。姉が下手に暴走して状況を掻き乱した挙句、モモンが聖王国から去る様な状況になれば最悪だ。

（私自身、恋愛感情を抱いた事が無いから何とも言えないけれど……失恋は心を壊しかねない、とか）

友人としての心配もさる事ながら、一国の君主がそのような事態になるなど冗談では済まされない。下手すれば保守派に足を掬われ、全てを奪われる可能性も高い。

非常に難しい責務だ。

国の行く末を案じつつ、友人の恋を成就させるといふ使命を並行しなければならぬ事とほぼ同義なのだから。

（その為には少しでも彼に関わる情報を誰よりも早く把握する必要がある……暫く気が抜けないわね）

国内の保守派は勿論、諸外国の動向にもより一層目を光らせねばならない。特に王国の貴族達がアプローチをかけ始めている。彼が自陣に加わるならばとても心強い。しかし、もし保守派などの敵側へ加担する様な事になれば忽ち脅威となる。

上手く立ち回らなければ危険だ。

ふとレメデイオスの方へ顔を向けると、腕を組みながら難しい顔で相変わらずうーむ、と唸っていた。ケラルトはくすりと小さく笑いながら、やはり彼女を連れて来て正解だったと思った。

何だかんだ言っても姉の裏表のない真つ直ぐな性格には、一時的とはいえケラルトも心が安らぐ場合があるのだ。

「む？ どうしたのだ、ケラルト」

「いいえ。姉様は何も変わらないのですね」

「何を言う。私は日々厳しい鍛錬を積み重ね、強くなっているぞ!!？」  
「ええ、そうですね。フフフ」

此方の心情を知らず、全く見当違いな発言をする彼女の言葉にケラルトはクスクスと笑った。

◇

商隊護衛の依頼を終えてから数日後、悟は今日も今日とて何か良い依頼が無いか確認するべく冒険者組合へ訪れていた。

「おはようございます、モモンさん」

「ああ、おはよう」

既に顔馴染みとなっている受付嬢に軽く挨拶をした後、掲示板へと向かう。しかし、貼られている依頼書はどれも等級の低い依頼ばかりだ。

(今日も目ぼしい依頼は無し、か。金銭的余裕はまだあるとは言え、そ

ろそろちゃんとした依頼を受けたい所なんだけど)

あまり我儘は言えないなど半ば諦めながら、組合に設置されているテーブル席の1つへ腰を下ろした。個人指名の依頼があった場合は朝の挨拶をした時点で受付嬢が声をかけてくるのだが、それが無いという事は個人指名の依頼も無いのだろう。

今のモモンはオリハルコン級である為、別段自身の階級より下の依頼を受ける事は何の問題も無いのだが、他の冒険者達の食い扶持を奪うような真似はあまりしたくない。

つまり…今日も暇なのだ。

悲しいかな社畜根性故に何も無い日というのはそこそこ苦痛なのである。

(もう街中で寄りたい店はあらかた寄ったし、欲しいアイテムもあるわけじゃないし……暇だ)

カリンシャでやりたい事は既にやり尽くしたモモンにとって、何も無い日と言うのは退屈以外の何物でもない。リアルであれば『ユグドラシル』へ終日ログイン出来るのだが、そんな事が出来るはずも無い。『ユグドラシル』以外の休日の過ごし方をあまり良く知らないのだ。

モモン…悟は両肘をテーブルの上に立て、両手で兜のスリットを隠すようにして項垂れる。

(あーあ、本当なら少しずつ階級を上げていく過程で、同業者と仲良くなって、ギルドメンバー程とはいかないまでも友人関係を築いていこうと思ってたのに…)

何度溜息を吐き、何度自問自答したことが。

今の彼は聖王国を窮地から救った英雄で、国内最高峰のオリハルコン級冒険者となっている。そんな彼が気軽に「友達になりましたよ」と言ったところで周りは変に萎縮するに決まっている。リアルで部



長や専務クラスがいきなり一介の平社員に対して「プライベートでも仲良くやろう」とか言われれば誰だつて気まづくなるし、かと言って断るとどんな目に遭うか想像も出来ない。

何処か遠くへ行こうにも先日の組合長との話を受け、了承した身としてはそうする訳にもいかない。

実際周りで色々と称賛の声を上げている人々とどこか心の距離：壁を感じている。無論、皆悪気があって心の壁を作っているわけでは無いのは理解しているが、愚痴を言える親しい人のいない悟にとつてはリアルの時とはまた違った「孤独」を実感していた。

(心から安らげる居場所が無い：本当の俺を知らない世界つて、なかなか堪えるものがあるなあ)

1人の時間が増えると考えたくも無い事を考えるようになってしまふ。リアルでは『ユグドラシル』と言う逃げ場があったが此処には無い。気が付けば段々と燻るような苛立ちが沸々と湧いて来ていた。

モモンは首を左右に何度も振って、気分転換の意味合いも含めて何か適当な依頼を受けることにした。

「いかんいかん。こういう時は何かに没頭するに限る。そういえばさつき掲示板にゴブリン小隊討伐の依頼があった筈だ」

あんまり他の冒険者の仕事を奪うような真似はしたく無かったが、何かやっていないと苛々が溜まって仕方が無い。彼は早速席を立ち、掲示板へ足を運ぶ。

そこへ一組の冒険者チームが乱暴に組合の扉を開けて入って来た。戦士職、魔法詠唱者、斥候の3人組のようだったが見るからに素行が悪そうな人相だ。其々の首にはミスリル級を示す冒険者プレートがさげられている。

「おう、姐ちゃん。俺たちミスリル級冒険者に相応しい依頼はねえか

？」

背中に戦斧を携えた戦士職風の男がカウンターの上に片腕を乗せながらミスリル級プレートを見せつけるように受付嬢へ声を掛ける。

「申し訳ありません。当組合にはプラチナ級以上の依頼は今現在出ておりません」

色々な冒険者の応対をしていただけに受付嬢の態度は淡々としたものだった。

一方、戦士職の男は大した依頼が無いと分かった途端あからさまに不機嫌な顔になっていた。

「チツ！ シケてんなー！」

不機嫌な男はカウンターを蹴ると流石に驚いた受付嬢がビクリと肩を震わせた。その反応をニヤニヤと面白そうに見ていた男は、踵を返して仲間達が待っているテーブル席……ではなく、掲示板の前に立っていたモモンのもとへ移動して来た。

「よおニイちゃん。随分とご立派な鎧と武器を持つてるじゃねえか？

さぞかし羽振りが良いんだろうなあ〜？」

もし自分の目に間違いが無ければ首に下げられている冒険者プレートはやはりミスリル級だ。面倒臭い連中に絡まれてしまったとモモンは軽く溜息を吐いて答えた。

「いいえ、そんな事はありませんよ」

「俺は聖王国南部で活動してる『戦牙』つつウミスリル級冒険者チームのリーダーだ。最近までこの国のトップを張ってたんだが、最近オリハルコン級の冒険者が出て来ちまってよお。めちやくちや落ち込ん

でんだ」

「それはお気の毒に――」

「だからよお、こんな可哀想なセンパイの為に何か奢ってくれよ」

「生憎、持ち合わせがありません」

「ああ？　　テメエなに生意気な口きいてんだ？」

適当にあしらうモモンに対し、ミスリル級の戦士が彼の正面に回り込み下から睨みつけてきた。男がモモンの首にぶら下がっている冒険者プレートに視線を向けた瞬間、彼の目が完全に敵意に満ちたものへと変わる。

気がつくとテーブル席にいた男の仲間たちもモモンを取り囲むように集まり、組合にいた他の冒険者達からの視線も集まっていた。その中でミスリル級冒険者チームは一言も発さずただ静かな敵意をモモンに向ける。

「はあ…分かりました。場所を変えますか？」

モモンはミスリル級冒険者チームらと共に裏口にある組合の訓練所へ足を運んだ。他の冒険者達は野次馬根性で彼らの後をついて行く。

気がつくとモモンはちよつとした御覧試合規模の人々に囲まれた状態となっていた。

## 第15話 PVP

◇  
今日のオルランド・カンパーノは非番だった。

「ああく退屈だ。退屈で退屈で死にそうだけ」

彼の休日の過ごし方は、九色の一色を下賜される前から変わらな  
い。装備品の手入れを行った後は、ひと汗かくまで鍛錬を行い、最後  
に酒場で朝まで飲み明かす。あとは屯所や冒険者組合へ顔を出して  
は強そうな新兵や新人冒険者相手に腕比べを一方的に申し込むくら  
いだろう。

(どっかで揉め事とか起きてないもんかねえ)

そんな事を考えながら街中を散歩する彼だが、彼の存在自体が治安  
維持に繋がっていると言っても過言では無い。下手に暴力沙汰を起  
こせば兵士が出てくる前にカンパーノが嬉々として現れるのは分  
かっている為、余程この辺りに疎い流れ者でも無い限り揉め事を起こ  
そうなどとは思わないだろう。

だから彼は今退屈なのだ。そんな自分を刺激してくれる出来事が  
起きるのを彼は心の中で願っている。

「ああ？　なんだあの人集りは？」

彼が何の気なしに冒険者組合の前を通ろうとした時だった。何や  
ら次々と冒険者達が組合へ足早に入っていく姿が目に入った。確か  
に時間的にもそろそろ冒険者達が依頼を受注する為、活発になる頃合  
いではあるが、あんなに人が集まるのはあまり見ない光景だ。

(へへへ、丁度いい暇つぶしになりそうだけ)

彼は冒険者では無いが野次馬気分で見に行く分には何の問題も無い。もし仮に何か揉め事が発生していたのであれば願っても無い事態だ。

小難しい問題なら正規の軍人達に任せ、下らない喧嘩騒動なら事態の沈静化を名目に自分が出張る。ゴロツキ出身の性分故かこう言った事態に出会す、もしくは察知する能力は人一倍だと自負している。カンパーノは軽い気持ちで組合へと向かった。その足取りはガタイに似合わず軽やかだったと言う。

◇

グスターボは憔悴しきった面持ちで街中を歩いていた。

(はぁー…全くどうすれば良いのだ)

ついこの間までの自分は油断していた、浮かれていたと猛省する。レメディオス団長から受けた『漆黒の英雄 “モモン”の調査』という命令は、最初こそ雲を掴むような命令に比べれば大分マシになったと内心喜んだものだ。しかし、そこにイサンドロが話してきた別の指令：『ベサーレス聖王女陛下の恋路』が関わるとなれば大きく変わってくる。

聖王女が恋に落ちた相手がモモンなのだ。

そうなると自然と『モモンの調査』は単純な素性やら実力を探りを入れるのではなく『為人』と言う事に変換される。

(ただでさえ独身の俺が色恋沙汰に関与するのは明らかに間違いなんだろうが、イサンドロの負担を減らす為ならば仕方無い)

本音を言えば王族の恋愛事情に首を突っ込むくらいなら彼の悩みを聞かなければ良かったと少しだけ後悔はしている。だが、今回自分

が彼を助けるのと同様にグスターボ自身も彼に助けられた経験は何度もある。

持ちつ持たれつの良き関係。

自分だけ助けて貰おうなど出来るはずが無い。

(そういう探りを入れるとなると中々難しいモノがある。重要なのは如何にしてモモン殿に悟られないようにするかだが：やはり個人的な友好関係を築くのが一番だろうな)

こちらから近付き彼と親しい友人関係を築く：果たしてそんな事は可能なのだろうか。

この様な事情を知っている人物は自分を含め非常に限られているし、それらの人物は皆何かしらの要職に就いている者ばかりだ。そんな人物が近づいた所で「邪な狙いがあるのでは？」と警戒心を抱かれ、腹を探られるのは目に見えている。若しくはコチラの立場を利用してコネを得ようとしてくるやも知れない。

これはかなりのリスクが伴う結果となる。

あまり良い案とは言えないだろう。

(これまでのモモン殿の行動を考えればその可能性はあまり無い気もするが、飽くまで希望的観測に過ぎないしなあ)

もし仮に上手く進められるとするならば、彼が冒険者になるよりも前：つまりは彼が聖王国へ訪れるより前に彼の事を知っている人物で無ければ難しい。しかし、その様な人物が聖王国には居るはずもないだろう。

(しかし、なぜモモン殿なのだ？

確かに南方出身者は珍しいが、顔

は平凡そのものと言っている。明らかに『聖女』と謳われている陛下とは不釣り合いだ)

恋に落ちた相手が他国の王族ならまだ分かる。その最たる例がバハルス帝国の『鮮血帝』だろう。彼は容姿端麗で統治者としてのカリスマ性や実力も有している為、それだけで見れば文句は無いだらう。だが、彼が『鮮血帝』と呼ばれる事から体裁的な問題が出てくる。しかし、そこはもうグスターボの関与する所では無い。

（面食い、では無いのだろう。まさか陛下は南方出身者が好みか？

むむむ、だとすると、かの周辺諸国最強と謳われるガゼフ・ストロノーフも……いや、それは無いか？ つと、いかんいかん、思わず現実逃避してしまった）

カルカが好む異性の特徴を考察する事は彼女の恋愛事情を補佐する上で有益とも言えるが、満足に相談出来る相手はほぼ存在しない上に自分は恋愛ごとには疎いと来ている。

王族の恋愛事情に関与するなど自分は明らかに分不相応だ。だが現実そうなっている為、胃痛が悪化するのも当然と言える。

「巡回がてら何か良い方法をとっていたが、かえって胃が痛くなっただけか……イタタ」

グスターボが胃の辺りを擦りながら街を歩き続けていると、人混みの中で一際目立つ人物が目に入った。あの筋肉質でガタイの良い後ろ姿は見間違うはずも無い。

「アレは……カンパーノ班長か？」

『九色』の一色を下賜された一人、要塞線の班長オルランド・カンパーノである。彼が今しがた嬉々とした様子で冒険者組合へ入っていく姿が見えたのだ。

「冒険者組合に何の用が？」

彼が冒険者組合に用事があるなどあまり無い様な気がする。それにあの嬉しそうな顔は明らかに揉め事を嗅ぎ付けた時のソレと全く同じなのだ。そう考えると、心なしか冒険者達が足早に組合の中へ次々として入って行っているように見受けられる。

(もし本当に揉め事で並大抵の兵士よりも強い冒険者が相手となるとカンパーノ班長ぐらいが丁度良いか。でもあの人加減を知らないからなあ)

以前、彼がゴロツキ同士の喧嘩騒動に遭遇した際、鎮圧行為という名目で逆にゴロツキ達を一人でブツ飛ばしたと言う出来事があった。だが、誰が見てもアレはやり過ぎだ。

(仕方無い。聖騎士団副団長として、揉め事を看過する訳にはいかないか)

加えてカンパーノが再び過剰鎮圧に乗り出さない為のストッパー役としても自分が何もしない訳にはいかない。『九色』では無いが聖騎士団副団長としてそれなりの実力はあると自負している。流石に暴走するカンパーノを止めるのに無傷とはいかないだろうが、面倒な事態になるのは防げるだろう。

それに加えてちよつとした気分転換の意味も含まれている。最近鬱屈した仕事が多過ぎる故に何かしら気を紛らわせたいたいのが正直なところだ。

結局のところ『現実逃避』である。

◇

組合の扉を開ければ案の定、人集りが出来ていた。こういう混み具合は大体破格の高額報酬依頼が張り出される場合にのみ起きるのだが、その場合は大体掲示板の周囲で起きる。



今回の人集りは組合の裏手へ続く扉の奥まで続いているのだ。

「確かあの奥は訓練場だった筈。そうになるとやはり冒険者同士の喧嘩か？」

あまり当たってほしく無い読みが当たってしまった事に溜息を吐きたくなるが、それよりも先にカンパーノを見つけなければならぬ。

人混みを掻き分けながらやつとの思いで訓練場まで進むと、カンパーノの巨躯を容易に見つける事が出来た。まだ離れた位置に居るが、彼が暴れ出していない事にホッと胸を撫で下ろす。だが、肝心の騒動の原因がこの位置から確認出来ない。掻き分けて進むにはかなり厳しい人の密度だ。

「失礼。一体これは何事だ？」

しょうがなく彼は近くの冒険者へ声を掛けた。

「喧嘩だよ喧嘩。南部のミスリル級が喧嘩ふっかけたって話だぜ」  
「み、ミスリル級が？」

彼は我が耳を疑った。ミスリル級と言えば聖王国内では少し前まで最高クラスの冒険者だったからだ。その数は非常に限られている為、チーム名を言えば直ぐに何者なのか分かる筈なのだが、果たしてそんな折り紙付きの実力者からの喧嘩を受けた命知らずは一体何処の誰なのだろうか。

「それでその喧嘩を買った相手は誰なんだ？」

「モモンさんだよ。オリハルコン級冒険者『漆黒』のモモンさん」

「……………え？」

我ながら間抜けな声を出したと思った。そして、気が付いた時には先程話をしていた冒険者の呼び掛けを無視して無我夢中で人混みを掻き分け漸く訓練場の中央部が見える位置まで移動していた。

その場には確かに漆黒の全身鎧に身に纏ったモモンが仁王立ちで佇んでいた。そんな彼の目の前には戦斧を肩に担いだ戦士風の男がいかにもやる気満々の雰囲気でも対していた。

(嘘だろオオオ!!?!!??)

グスターボは顎が外れる勢いで口をあぐりと開けて心の中で叫んだ。いや、本当に叫んでもいいくらいなのだ。があまりにも驚愕が過ぎる光景だった為、偶々声が出なかつただけである。

聖王国の英雄に喧嘩を吹っかけるだけでも大問題だ。別に『英雄に決闘を申し込むのは違法』というのは無いが常識的に考えてあり得ないだろう。ただの手合わせ程度なら兎も角、先ほどの話の通りそんな生易しい雰囲気でも無い。

周りは野次馬根性が好奇心からなのか誰一人として止めようとする者はいない。

無理もない話だ。

片方はオリハルコン級で聖王国の英雄、もう片方は階級はひとつ下のミスリル級とは言えそれでも冒険者としての実力は申し分無い。そんな二人の喧嘩を止められるかと聞かれれば否と答えるのが当然とも言える。

「なあ、お前さんはどっちが勝つと思う?」

「そりゃモモンさんだろ!」

「俺もモモンさんだな」

「いや、俺は『戦牙』のリーダーに賭けるぜ」

「俺も俺も! 若い頃手合わせした事があるが『戦牙』のリーダーは強えぞ〜!!?」

何と不謹慎だろう。冒険者達は次々と何方が勝つのかの賭け事を始め出した。『どちらが強いのか』と言う好奇心から一転。そこへ金が絡めばそれは一気に博打へと早変わりだ。瞬く間に周りは物々しい雰囲気から祭りの如き賑わいと喧騒に包まれる。

(じよ、冗談じゃない、相手はベサーレス陛下の思い人なんだぞ!?)

此処でカンパーノの方へ視線を向ける。彼はこれから起きる事を楽しそうに眺めていた。どう見ても止めようとは考えていないらしい。

(カンパーノ殿、あなたは分かっているのか!? 彼にもしもの事があつたら聖王女陛下は…!!?)

と心の中で叫んだ所でカルカがモモンに恋をしているなど知っているはずもない。しかし、ここで彼に何かしらの重い怪我を負わせるような事になり、その時の怪我が原因で冒険者を引退して聖王国を去る、なんて事態になれば我が国の損失は勿論、カルカの傷心は計り知れない。

そこまで考えたところでグスターボは「待てよ…」と顎を片手で触れながら思索する。

(陛下が惚れ込んだモモン殿は冒険者として偉業を成し遂げた彼であるか、それとも冒険者云々は関係無い彼そのものであるか…どちらかによってまた調べ方も大きく変わる)

それに方が一モモンが冒険者を引退するような事態になったとしても、彼がこの国から出ていくと言う確証は無い。もう旅をするチカラを有していないならばこのまま聖王国に腰を下ろすのではないだろうか。

意図的に今後の冒険者稼業に支障を来す怪我を負わせる…我なが

らゾツとする考えだが彼をこの国に置いておくと言う目的は達成出来る。

(だが、聖王国を救った英雄という、王国のガゼフ・ストロノーフ、帝国のフルーダ・パラダインのような優位性を失うだけで無く、市民達の安寧の抛り所をも失う事になる為一概に良い案とも言えない)

メリットとデメリットで考えるなら明らかにデメリットの方が大きく、またリスクも高い。『国が意図的に自分を襲おうとしている』と思われかねず、最悪他国へ居を移し、聖王国の非道を告げていく事になるだろう。そうなればカルカの恋路など関係無しに国内外の問題が一気に爆発する事は火を見るよりも明らかだ。

改めて冷静になって考えてみると今日の前で起きようとしている喧嘩騒動はある意味僥倖と言える。此方には何の意図も無く、モモンの力量をこの目で確認する事が出来るのだ。今後何かしらの仕事を仕掛ける上でも彼の實力に関する情報収集は非常に重要となり得る。

(彼の功績を疑うつもりは無いが、やはりただ聞くのと実際に見るのとでは大きく違う)

それにグスターボとて戦士なのだ。  
相手の實力を分析するのは慣れている。

(恐らくカンパーノ殿もそれを見越して…では無さそうだな。あの人の場合は単純に興味本位な所が大きいだろう)

だがそれでも戦士としての實力は彼の方が上なのだ。自分では気付かない点があるかも知れない。後で彼にモモンの實力について色々聞いてみるのも良いだろう。

そうと決まれば自分は傍観者だ。サーコートに備えられたフードを深々と被り彼の實力の分析に努めるのみ。無論、最悪の場合、仲裁

に入る準備もしておく。

「それでもどうか無理はなさらないで下さいよ、モモン殿」

自分の判断が間違いでは無い事と彼の無事を祈りながらボソリと呟いた。

◇

今、モモンはミスリル級冒険者チーム『戦牙』のリーダーと対峙していた。

（面倒くさい。それになんかギャラリーも増えて来てるし、こんな形で目立ちたくなんかないんだけどなあ。いやいや、そもそも目立つ事自体望んでないワケだし。なんでこうやる事なす事全部が裏目に出るんだ？）

目立ちたく無いのに目立ってしまう。まるで何か呪い系のデバフでも受けているかのような出来事の連続にモモンは辟易していた。普段の死の支配者オーバーロードの姿と違って落ち着いたデザインの全身鎧なのだが…。

（それにコイツらもコイツらだよ。先輩冒険者としての威厳云々垂れるなら、もつと寛容な姿勢を見せて欲しいのに何でここまで喧嘩腰なんだよ）

何故こんな事態になったのかよく分からないが、キツカケは単なる嫉妬と私怨と考えて良いだろう。ポツと出の新人がイキナリ飛び級でオリハルコン級になったモモンが気に入らないと、そんな事ばかりを口にしてている。

『漆黒』…『漆黒』ねえ。その一級品っぽい全身鎧に相応しい名前じゃ

ねえか。大方、どつかの遺跡から偶然見つけたモンなんだろうよ。その背負ってる2本の大剣含めてな」

小馬鹿にした態度で嘲笑を浮かべる『戦牙』のリーダーに、モモンは小さく溜息を吐く。

「どう思っても構いませんが。結局何が言いたいんですか？」

「否定しねえってのか？　いいか、冒険者の実力ってのは装備で決まるんじゃないか。『経験』と『実力』で決まるんだよ。テメエは一気にオリハルコン級に昇級して周りからチャホヤされて勘違いしてるよ。うだから、先輩として忠告しておいてやるよ」

「それはどうも。肝に銘じておきます」

「……いけしやあしやあとしやがって。調子に乗るのもいい加減にしとけよ!!？」　例のアンデッド騒動だって、俺たちでもやろうと思えば1万のアンデッドを相手取ることは出来たんだぜ！　それにギガント・バジリスクだって、準備さえしてれば討伐する事ぐらいワケねえさ!!？」

「…はあ」

何故こうも癩癩を起こした子供みたいな態度を平気で取れるのか。モモンには理解出来ない。呆れ果てて反論する気などまるで起きず、一言面倒臭そうに応えるだけで精一杯だ。

「テメエの偉業なんざ実際は大した事無え、手柄に尾びれ背びれが付いて過剰に持ち上げられてるに過ぎねえんだ。特にギガント・バジリスクの単独討伐なんざ冷静に考えれば分かる事だろうが。伝説級の魔獣を相手にたった1人の戦士職が敵うワケねえだろう？」

男はモモンの下へ静かに歩み寄ると周りに聞こえない程度の声で話し始めた。

「(分かってんだぜえ…お前さんの正体。大方、聖王女派の連中に担ぎ上げられた傀儡か何かだろう?)」

全てを見透かしたニヤついた笑みを見せながら話す彼にモモンは「何を言ってるんだコイツ」と素直に思った。

(聖王女派? 傀儡? 何の話をしてるんだ?)

「(かく言う俺たちも南部の保守派の後ろ盾があつて今があるからな、お前さんもそのクチと見たぜ。なあお前は幾ら貰つてんだ? 場合によっちゃそっち側に鞍替えしてやつても良いんだぜ。カスト・ディオ姉妹の出来の良い方が後ろに付いてんのか?)」

「何言つてんだお前?」

「はあ?」

「南部の保守派とか鞍替えとか…悪いが俺はお前達が思つてるような卑しい存在ではない。見当違いも良い所だ」

「なっ!?!」

驚き身じろぐ彼にモモンは「ははくん」と相手がまんまとドジを踏んだのに気付いて一気に畳み掛ける。

「話を聞くとお前たちは南部の保守派から色々と後ろ盾になつて貰つて今の地位にいるみたいだが、それは冒険者組合の規則を著しく違反している行為じゃないのか?」

墓穴を掘るとはまさにこの事だろう。気が付けば周りからも『戦牙』に対する不審の声が相次いで聞こえてくる。

「え? アイツら南部から裏金貰つてんの?」

「国家運営に加担してるって事か?」

「実力はあつてもミスリル級に相応しい器量かと言われれば確かに疑問はあつたな…」

「おい、それじゃ『戦牙』が利用してる組合も怪しいんじゃないか?」

周りから段々と不審の視線が彼らに集まり始めた。雰囲気的不利になりつつあった『戦牙』が狼狽える中、リーダーは激昂してモモンに指を差した。

「で、デタラメ言うんじゃないか?!? 言い掛かりだ?!?」

「その割にはだいたい焦ってるようだが?」

「ぐっ…!」

(分かり易過ぎだろ…)

例え凶星だとしてもそこは無理にでも平静を装うべきなのだが、それすら頭によぎらないくらい勝手に追い詰められているらしい。

まあ十中八九事実なのだろうが…。

「だったら今ここで証明してやるよ?!? 俺たちが本物のミスリル級だつてことを、そしてお前がお飾りに過ぎないニセモノだつて事をなア?!?」

リーダーは激昂しながら戦斧を取り出した。

一方、モモンは大剣を抜くでも無く腕を組んだまま顔を他の『戦牙』メンバーたちへ向ける。

「アイツらは呼ばなくていいのか?」

「へっ、テメエなんざ俺1人で十分だ?!?」

「あっそう」

どうでもいいかとはかりに適当な返事をしたモモンは背中の大剣を引き抜くとそれを地面へ深々と突き立てた。その手には何も持っていない。



「やあぐうど」

この舐めているとしか思えない態度にリーダーはブチ切れた。

「〈肉体向上〉!!? 〈脚力強化〉!!? 〈戦気梱封〉!!?」

武技を発動させた後、地面を踏み込んで一気に詰め寄る。その速さは並大抵の冒険者では反応するのが困難であり周りからは驚きの声上がる。卑しい連中とは思っていてもその実力はやはりミスリル級なのだ改めて思った。

「〈剛撃〉!!? 死ねエエエエ!!?!?」

更なる武技を加え、振り上げた戦斧をモモンの頭部目掛けて迷い無く振り下ろす。『戦牙』のメンバーたちは訓練場の中央部にモモンの血が飛び散る光景を脳裏に浮かべた。

一方のモモンは相変わらず腕を組んで佇むばかり。

(フツ、無駄だな。アイツはリーダーの攻撃にまるで反応出来てない。偽りの偉業を聞かされ続けた事で本当に自分は英雄と陶醉した愚か者というわけか)

『戦牙』の魔法詠唱者がほくそ笑みながらモモンの実力を改めてニセモノであると評価する。そもそも『戦牙』のリーダーという役はチームとしての統率力だけで無く、完全実力者主義で選ばれる決まりになっており、彼は3人の中でも頭一つ抜きんでた実力者故に『リーダー』となったのだ。

(これでクソ生意気な新参をぶっ潰せる上に、ヤツの偽りの実力も証明出来る。さっきの雰囲気は流石に不味かったがアイツを潰せばそれもどうとでもなるさ)

実はモモンの言っていた事は的を射ていた。どのみちここでヤツを倒さなければ冒険者としての自分達は終わりだ。そうなったらこの国を出て行く他無い。

(まあその心配も杞憂に——)

ドゴオオン!!!

「……………え？」

次の瞬間、何かが凄く速さで自分達の横を通り過ぎて行き、何かがつかり崩れる轟音が響き渡る。何事かと思いついてその音が聞こえた方向へ振り返ると、そこには壁に突き刺さっているリーダーがいた。上半身は完全にめり込んでおり、下半身のみが力なくブラブラと宙に揺れている。

メンバー2人は恐る恐るモモンの方へ顔を向けた。モモンは右拳を突き出した状態で静止しており、その後ゆっくりと再び腕を組んで佇む姿勢に戻った。

「まだやるか？」

その一言を受けた2人は冷たい汗を一気に噴き出させた。自分達は大きな間違いを犯したことに漸く気付いたのだ。

「ヒイヒイヒイすみませんでしたああ!!?」

2人は情けない声を上げながら壁からリーダーを引っこ抜き、そのまま彼を抱えて訓練場から逃げるように去っていった。彼らの悲鳴が段々と小さくなり、取り残された訓練場の野次馬たちは呆然となる。

訓練場に僅かな静寂の一時が訪れた瞬間——

「うおおおおオオオオオオ!!!」

この場では収まりきれない程の大歓声が火山の噴火の如き勢いで溢れ出した。皆が口早にモモンを讃える。

「スゲエエ!!!スゲエよモモンさん!!」

「ざまあみやがれ『戦牙』の奴ら!!」

「俺たちのモモンさんの実力思い知ったか!!!」

たった一撃、たった一発の拳でミスリル級をぶっ飛ばした。それも皆が釘付けになって見ていたというのに彼の初動さえ全く気付かない程に。

(い、一体何が…拳一つで倒したのは分かったが、何一つ動きが見えなかった…!)

グスターボは目を見開いて驚愕していた。唯一捉える事が出来たのは他の皆と同じように右拳を突き出した後の姿だけで他は何も見えなかった。右の拳を出そうという動きは一切捉えられなかったのだ。そして、『戦牙』のリーダーも見事な動きであったのは間違いない。

相手は決して弱く無い。

モモンが桁違いに強過ぎたのだ。

(これでは分析のしようが…い、いやいや、『モモン殿の実力に偽り無し』。これだけでも大きな収穫だ)

当初の思っていた事とは違ったが、1万にも及ぶアンデッドの群勢の件、そしてギガント・バジリスクを単独で倒した件…どちらも更に信憑性が増したのだ。

「これはひよっとすると…あ、アダマンタイト級にも」

グスターボが下を向いて思案していると周りの群衆から歓声とは別の声…どよめきが聞こえた。何事かと思ひ再びモモンの方へ顔を向ける。

そこには、巨漢がモモンの前に立ち塞がっていた。

「…なッ!？」

グスターボは青褪めると同時に今日最大級の胃痛に襲い掛かられた。彼が此処へ入って行くのを見た時から薄々嫌な予感を感じていたが、此処に来てその予感が的中してしまったらしい。

「お、おい…あの入って…」

「嘘だろ…」

「マジかよ。何で『九色』の1人が…!」

群衆からも驚きの声上がる。皆の注目を集めている、巨漢がオランダ・カンパーノだったからだ。

「よお英雄さん。マジで強えんだな」

モモンよりもやや背が高いオランダは歯茎が見えるくらいの満面の笑みを浮かべていたが、その目は明らかに獲物を見つけた獰猛な獣そのものであった。

モモンはまたしてもガラの悪そうな輩に絡まれたという事実心底ウンザリしていた。

「…またかよ」

ここで漸く精神安定化が発動した。

## 第16話 オルランド・カンパーノ

◇

首都ホバンスの裏路地。此処は昼間でも薄暗く、荒くれどもの絶好の溜まり場となっていた。一般人なら余程の用事でも無い限り近寄ることすらしない。

「お前が最近巷で話題の暴れん坊か？」

ある日、俺がいつものようにその辺に座り込んで酒を飲んでいて、闇夜に溶け込みやすい浅黒の外套を纏った軽装革鎧の男が話し掛けてきた。

ただの痩せっぽち：かと思つたがどうやらそうではないらしく、細く見えるが身体はだいたい鍛え込んでいる。明らかにその辺のゴロツキどもとはワケが違う。

何よりもコイツの眼がそれを物語っている。

先程から俺を睨み付けてくるその眼は並々ならない凄味と鋭利さを含ませていた。

俺は気怠そうに立ち上がった。

俺は男を見下ろし、男は俺を見上げた。

「誰だテメエ？　俺に何の用だ」

目の前の男は驚きこそするが俺に対して怖気付く様子が微塵も感じられなかった。寧ろ感心していると言っている。

「中々の巨漢だな。正に持って生まれた天性の肉体ってヤツか」

「ケツ、癩に障る言い方しやがるぜ。ってかテメエいつまで睨み付けてんだ」

男は「あゝ」と苦笑いを浮かべ、頬の辺りをポリポリと掻く仕草

を見せた。

「不快に思わせてしまったのなら申し訳ない。この眼は生まれつきなんだ。別に睨んでいたつもりは無かったんだが…」

「…それで普通なのか？」

「これで普通なんだ。悪いな」

その眼光で睨んでいないなら本気で睨んだ時は一体どれだけの迫力になるのだろうかと言う好奇心が湧き上がる、と同時に最近小耳に挟んだある人物に関わる話を思い出した。

『凶眼の射手』か？ 『九色』の…』

「俺のこと知ってるのか？」

「〃相手を射殺すほどの眼光を持つ男〃…お前を見ればその噂も納得だ」

その男——『九色』の一色である『黒』を下賜された〃夜の番人〃

〃凶眼の射手〃こと兵士長パベル・バラハはバツが悪そうに後頭部を搔いた。照れ隠しか、それとも不快に思っているのか。

先程の言動から恐らく後者な気がする。

だがそれよりも問題なのは、聖王国九色の1人が自分なんかは何の用事があったて訪ねて来たのか。国の兵隊からも手を焼かれている俺のことだ。恐らく自分を捕縛するか殺せと国から命令を受けたのだろう。

もしそうならやる事は決まっている。

返り討ちにするだけだ。

「その九色の1人が俺に一体何の用だい？」

「ああ。先日獣身四足獣ゾーオステイアの襲撃があったという事件は知っているな？」

その話はいよいよ最近だが聞いた覚えがある。獣身ゾーオステイア四足獣の群れが要塞線へ攻めて来たと言う話だ。撃退には成功したもののこちら側も手痛い被害を受けたらしいが、それと自分に一体何の関係があると言  
うのだろうか。

「実はその時の戦闘で九色の1人が引退を余儀無くするほどの負傷を  
してしまつてな。席……いや、色が1つ空いている状態なんだ」

「ふーん、そいつあご愁傷様」

「最近、亜人部族どもは勢いを増しつつある。中でも『十傑』は歴代最強と謳われるほどだ。国は今、ここで奴等に弱味を見せるわけにはいかない状況にある。ましてや『九色』の1人が欠けてしまうような事態が亜人どもに悟られたら、奴等の攻撃はより激しさを増していく事は明白だ」

「そりゃあ大変なことって。んで、それと俺に何の関係があるんだ？」

パベルは一呼吸置いた後、彼から一切視線を外す事なく見据えながら口を開いた。

「お前を勧誘しに来た。空いた『色』を埋める為に」

まさかの勧誘に一瞬目を見開くが、直ぐに興味も失せた男は鼻で笑った。

「嫌だね。なんで態々国とか軍とかそんな規律に縛られる様な所に籍を置かなきゃならねえんだ。そもそもなんで俺みたいなゴロツキなんだよ。もつと体裁の良い優秀な奴はいるだろうが」

「確かに優秀な若者はいるが未熟者ばかりだ。現役の者は亜人どもとの戦闘で死ぬか負傷するかでそれも難しい」

なるほど、と男は納得した。ちゃんとした役職を持つ優秀な人材が不足しているのだ。確かに好き好んでこんなゴロツキを勧誘しよう

とはしないだろう。誰だって揉め事を起こすような輩を抱えたくはない。

国は今そのくらい追い込まれていると言う事だろう。

「勝手ながらお前の事を色々調べさせて貰った。確かに粗暴性は問題点だが単純な戦力と言う意味では文句無し、と俺は思ってる」

「…テメエらいつの間」

「それに無理に軍人になる必要は無い。流石にゴロツキのままと言うわけにはいかないが、傭兵に近い役職はどうだ？」

「おいおい勝手に話を——」

「要塞線ではいつどこから亜人どもが攻めてくるかも分からない。先日日の襲撃のように『十傑』の一体が現れるかもしれんぞ？」

その言葉を受けて男の言葉が止まった。

もつと強い奴と戦える——

その可能性に強く惹かれたのだ。

「お前が暴力沙汰を引き起こす動機の中に『強い奴と戦いたい』というのがあるのも知っている。今の暮らしを続けても相手なんてかか知れてるだろ？ 『九色』だって皆が高い戦闘能力を持つてるわけでは無いし、大体がゴロツキを相手にする程暇じゃない」

男の表情が不快に歪む。自分が軽んじられている節が言葉の中にあつたからだ。しかし、同時に自分が何を望んでいるのかも的確に当てている。国に縛られるのは癪だがパベルの提案は悪くない。だが、ここで「分かった」と素直に応えるのも彼の心が許さない。

「どうだ？ 待遇は悪く無いぞ」

「……」

そもそも腕力だけで生きてきた彼にとって権力者や有名人に顎で



使われたり、命令されるのが心底嫌なのだ。だからこそ農民なり商人なりと一般的な平民らしい暮らしではなく、敢えて道を外したゴロツキになった。

自分に命令出来るのは、強い奴だけ――

「…気に入らねえな」

「気に入らない、とは？」

「テメエの上から目線の態度が気に入らねえ」

男はそう吐き捨てる。右拳を振り上げるやいきなりパベルに向けて振り下ろした。その巨体からは想像出来ない素早い奇襲攻撃だったが、パベルはその攻撃を背後へ跳び退いて躲した。

「ほう？」

空を切る音を残し空振りに終わった右拳だったが、男は面白くて堪らない表情を浮かべていた。その顔は寧猛な獣同然でパベルに狙いを定めている。

追撃がない事を確認したパベルは話しかけた。

「交渉決裂か？」

「いや、そうでもねえぞ。寧ろ悪い提案じゃねえと思ってる。これは俺の性分の問題だ」

「…？」

男は握った拳を反対の手で包み骨を鳴らす。

明らかにやる気満々だがこれで交渉決裂では無いと言うのはどう言うワケなのか。

「俺に言う事聞かせたかったら俺と一対一張りやがれ！　テメエが勝ったら喜んでアンタの勧誘に乗ってやるよ！！？」

なるほど、とパベルは思った。

厄介だが非常に分かり易い。

パベルは腰の重心を少し下げて身構える。

「やれやれ、近接戦闘はあんまり得意じゃないんだがなあ」

「だったらお前にお使いを頼んだ上の連中を恨むんだな」

「いや、それは無い」

「??…まあいい。それじゃあ…行くぞオ!!」

九色の一人と喧嘩自慢のゴロツキが人通りの無い裏路地で衝突した。

◇

「はあ…!!?　　はあ…!!?　　ガハツ!!?」

パベルとの一対一タイマンは男の敗北で決着が付いた。男は大の字で地面に背中を付けて息を荒げている。顔中傷だらけアザだらけで鼻からは止めどなく鼻血が流れている。無論、顔だけで無く、頑強と自負していた自身の体全体が傷だらけで悲鳴を上げている。

一方、パベル自身も流石に無傷では無かったが、地面に背中を付けて倒れている彼を息一つ乱れる事なく涼しげに見下ろしていた。

（つ、強え…!!?　　対峙した時から察してたがまさかここまでとは

…!!?　　コイツ…ほ、本物だ!）

今まで敗北どころか苦戦すらしたことのない彼にとってパベルの強さは本物でその衝撃は凄まじかった。

正直、『九色』なんて大層な役を貰ってる奴らの実力を軽んじていた。「戦えば俺の方が強い」と言う慢心に似た自信もあったのは事実だ。

初めての敗北……だが、不思議と悔しさは無かった。彼の強さ、そして自分よりも強い相手がいる事にただただ感動していた。そして、決して届かない強さでは無いということも理解出来た。

「さっきの話なんだが、お前を勧誘する事に関して上の連中や他の九色達の大半は反対だったんだ。完全に俺の一存なんだ。他が反対していた理由はまあ……お前の素性を考えて察してくれ」

「……!?」

パベルが彼を見下ろしながら話を始めた。

「けど俺は体裁云々は関係無く、実力のある奴は素直に評価して認めるべきなんだと思ってる。実際、『十傑』の1体である『魔爪』が現れて九色の1人……『黄』に瀕死の致命傷を与えたのを知ってそう感じた。奴らは日に日に力を増し、蓄えている。今の『九色』のままではいつかは奴等に決定的な敗北を喫するとも思ってる」

「……」

男は既に上体を起こしていたが黙ってパベルの話に耳を傾けていた。

「俺はお前の実力を認める。それにお前みたいな気合いの入った奴が仲間だと心強いしな」

「フンッ、変な慰めしやがって……」

「別にそんなつもりはないんだが？」

「あーあー分かってるよ、ダンナ。約束は約束だ。アンタの勧誘、受けさせて貰うぜ」

「その答えを聞いて嬉しいよ、宜しく頼む」

男はニヤリと笑い漸く立ち上がる。

パベルは右手を差し出し、男も右手を差し出して硬い握手をする。

「兵士長のパベル・バラハだ。分かっているだろうが、九色の一色である『黒』を下賜されている」

「オルランド・カンパーノだ。知っての通り喧嘩自慢のゴロツキだ」

こうして男——オルランド・カンパーノはパベルの勧誘を受け、空席であった九色の一色である『黄』を下賜される事となった。その後、彼を慕う他のゴロツキ達も次々とオルランド直属の部下として加入する事となり、『愚連隊』ならぬ『愚連班』となり要塞線に配属されている部隊の中で最も好戦的かつ凶暴な部隊としてその名を轟かせる事となる。

◇

オルランドは昔初めて自分を負かしたパベルとの出逢いを思い出しながら、目の前にいる漆黒の全身鎧を纏った男——モモンと対峙していた。自身よりも約頭一つ分ほど小さいモモンを見据えて獰猛な笑みを浮かべるが、決して侮っているつもりは無い。

彼は強い……それは間違いない。

まだ見ぬ強者との出逢い。

それはかつてパベルと出逢ったあの日の出来事を彷彿とさせ、ジワジワと感動を湧き上がらせていた。

「よお英雄さん。マジで強えんだな」

「……またかよ」

一方でモモンは相手に聞こえない程度の声量で溜まりに溜まった苛立ちを含めた愚痴をボソリと呟いた。

その瞬間、アンデッド種の種族特性の一つである精神安定化が漸く発動される。一瞬で苛立ちが鎮まるモモンであったが、それでもやはり燻るような腹立たしさは残っていた。

不完全燃焼……余計にストレスが溜まる。

(なんでこうやる事なす事全てが裏目に出るんだ？ そんな縛りプレイ専用のデバフアイテムを装備していた記憶は無いんだが…)

念のため、自身の装備類や所持品を再確認する必要があると思っていると、目の前に現れた粗暴そうな輩——カンパーノが話しかけて来た。

「なあ、次は俺とも一対一<sup>タイマン</sup>張つてくれねえか？」

突拍子もないカンパーノの発言にモモンは内心呆れ果てながらも、さりげなく大男が身に付けている装備類へ目を向けた。

牛皮を何枚も重ねた重装革鎧、小型の円形盾<sup>バックラー</sup>、左右の腰に片手剣が4本ずつ、両大腿部には短剣が数本、後ろの腰に手斧、背中には先程のバックラーと共に長剣が、あとは武器と言うよりも伐採用と思われる鉈<sup>ノコギリ</sup>が1本。

彼の巨軀から見ても中々の重武装だ。それにどれも何か突出して優れた効果が付与されているようにも見えない。

ごく普通の一般的な武器だ。  
それが余計に違和感を覚える。

(なんでこんなに武器を持つ必要があるんだ？ 見た感じ脳筋っぽいけど、武器を沢山持っていれば良いみたいな考え方の人にも見えな  
いし)

モモンはその意味が分からなかった。もしかしたら何かしらの浪漫か拘りを大事にするタイプの人間と言う可能性もある。

「生憎、貴方と戦う理由がありません」

とにかく、相手はやる気に満ち溢れている事は確かだ。モモンとし

てもこれ以上関わらない方がいいと判断して、出来るだけ彼と視線を合わせないよう左側へ避けて通り抜けようとした。

カンパリーの右横を通ろうとした瞬間、ふいに自身の右肩に彼の大きな手が置かれる。

「おいおい、ツレねえ事言うなよ。ちよつとだけ手合わせがしたいだけだつて」

モモンの右肩に置かれた彼の右手に力が入る。力尽くでもモモンを逃がさないのが右肩から感じる力みで感じ取れる。

だが、何よりも驚いたのはモモンを押さえ付けている筈のカンパリー自身だった。

(ビクともしねえ…!?)

カンパリーは自身の横を通り過ぎようとするモモンを押し返すつもりだった。しかし、モモンはその場から一歩たりとも動いていない。

(ぐツ……何て体幹してんだコイツ!?)

カンパリーが息むほど自身の右腕が震えるが、やはり微塵も動く気配が無い。更に言えばモモンはその場から止まっているに過ぎない状態で、肩に手を置いているから動いて無いだけで進むうとすらしていないのだ。

彼の脳内にイメージとして浮かび上がったのは、地底深くまで根を張った巨木だった。先程カンパリーは「体幹が尋常じゃない」と一瞬、過ぎったがそんな簡単なモノではないと分かる。

体幹?…ではない

重量おもい?…いやそれも違う

〈武技〉?…いや使用する気配は無かったはず

装備の性能?…それかマジックアイテム?

色々な考えが浮かぶが直感的にどれも違う気がしてならない。もっと根本的な何かな気がする。

唯一わかる事は、彼はカンパーノが今まで出逢ってきたどの強者とも違うタイプである事だ。

(おいおい、本当に何者だよコイツ…)

カンパーノが困惑していると自身の右腕を不意にモモンが左手で掴んできた。

「はあ…もういい加減にしてくれませんか?」

「ツ!!??」

その瞬間、モモンの左手に掴まれた右腕から、ミシミシツと軋む音が聞こえて来ると同時に万力で締められたような強烈な痛みが走り思わず顔を歪める。

「ぐおツ…!?!」

突如、カンパーノは全身に浮遊感を覚えた。一瞬何事かと思ったが、それがモモンによつて左手一本で軽々と持ち上げられていた事に気付くのにそう時間は掛からなかった。

周りの野次馬達ギャラリは、明らかに一回り近くも大きいカンパーノを片手で軽々と持ち上げたモモンに驚愕の声を上げた。

「はあ?!」

「おいおい、嘘だろ!!?!」

「ど、どんな腕力してんだよ、モモンさんは…」

モモンが一切の重さを感じる事もなく持ち上げた事実困惑するカンパーノは、何とか我に返り地面へ足を付けようと抵抗しようとした。

その瞬間、何とモモンはそのまま彼を自身の背後へ軽々と投げた。まっつてのだ。

まるで小枝を道端に放り捨てるかのよう簡単に、である。

「~~~~ツ!!??」

投げられたカンパーノは困惑しながらも何とか投げられた宙の最中、無理矢理体を捻って体勢を修正して背中などを地面にぶつけるような惨めな落ち方はせず何とか上手く着地した。その身のこなしと反射神経に周りは「おおくく!!??」と思わず感嘆の声を上げる。

ドスンツと重量のある着地をしたカンパーノは全身に冷汗を流しながら、息を荒げモモンを見据える。

(右腕は…まだ動く。しかし、なんつうバケモンだよコイツは)

モモンの万力によって掴まれた右腕が無事である事を確認しながらカンパーノは思った。持ち上げられる瞬間、全く気付かず、そして抵抗する暇も無く簡単にしてやられたのだ。

今まで出逢ったことのないタイプの強者が目の前に現れたという事実、カンパーノは歓喜せずにはいられなかった。かつての九色の一人であるパベルと戦った時に匹敵…いや、それ以上と言っても良いくらいの高揚感、彼に武器を抜かせる”と言う行動に一切の迷いを与えなかった。

「お前…最高じゃねえか!!??」

カンパーノは両腰に二対ずつ備えていた片手剣を両手に一本ずつ携えた。



「さあお前も剣を取れ!!？」

彼はモモンに対して剣を抜くよう声を荒げた。周囲からはどよめきと興奮の声が聞こえてくる中、肝心のモモンは肩を竦め溜息を吐く。

『九色』と言うこの国の顔役と言っても過言ではない役職に就いている人が、そう簡単に剣を抜いて誰かと闘いを申し込む、と言うのはあまりよろしくないのでは？」

「馬鹿言うなよ、先に仕掛けたのはお前だぜ。俺は呼び止めただけだが、お前は俺を投げ飛ばしたんだ。事態を鎮めるのは当然の行動だ」  
「…投げたのは避難措置で他意はありません」  
「へへ、悪いな。話は後で聴かせてもらおうぜ」

カンパーノは両手に持った片手剣を構え、深く腰を下ろす。完全にやる気満々な様子に、モモンは背中の大剣2本をゆっくりと引き抜いた。

「お、おいおい、カンパーノ班長閣下とモモンさんの一騎討ちだぞ」

「こ、これは喧嘩なのか？ どうなんだ？」

「いやいや、喧嘩じゃ…無いよな？」

「断言しても良い。この決闘は一生に二度とお目にかかれねえ」

「ど、どっちが勝つんだ？」

「モモンさんじゃねえか」

「いや、カンパーノの強さも本物だ」

外野がこれから目の前で起きる出来事の結果を予測した。気が付けば外野の声は聞こえなくなり、固唾を呑んでその行く末と結果を見る。守る。

緊張の静寂で張り詰めた場の空気。誰かが唾を飲み込んだ音が聞

こえると同時に事態は動いた。

「いくぞオオオ!!?」

先に仕掛けたのはカンパーノだった。

踏み蹴った勢いで抉れた大地を背後に、2本の片手剣を上段で構えて一気にモモンとの距離を詰める。

「〈剛腕剛撃〉!!!」

脳天目掛けて躊躇無く振り下ろされた2本の片手剣をモモンは同じく2本の大剣をもつて真正面から受け止めた。

「うおおお!!?」

「この2人ヤベエぞ!!?」

「ち、近づけねえって!!?」

〈武技〉と渾身の力を込めて振るわれたカンパーノの一撃、それを防ぎ受け止めたモモンの大剣。甲高い金属音が訓練場全体に響き渡り、その衝撃波が周りの野次馬まで伝わる。

「ハッ、俺の一撃を受け止め切れる奴あなかないねえぞ!!?」

「やっぱりお前はスゲエよ!!?」

「それはどうも。それで? 満足しましたか?」

「馬鹿言いなさんな!!?」

続けざまにカンパーノは両手の片手剣を巧みに使った攻撃を連続で繰り出した。対してモモンも2本の大剣をまるで小枝を振り回すかの如く軽々と振り回し、それら全ての攻撃を防ぎ続ける。けたたましく鳴り響く金属音は2人の間に激しい火花を散らした。

彼の戦法はその外見通り、自慢の巨軀と力を活かすことを得意とす

る。並大抵の相手であれば防御に徹していたとしても最初の一撃で終わっていただろう。

無論、ただの力自慢では『九色』の一角を担える筈も無い。

「ハア!!?」

「おつと!!?」

薙ぎ払われたモモンの大剣をカンパーノは左の片手剣を巧みに扱い受け流した。攻撃を受け流された事で僅かに姿勢が崩れると、カンパーノはその隙を逃さずもう一方の片手剣で刺突攻撃を繰り出した。剣先が狙うのは全身鎧の弱点とも言える関節部位、モモンの肩と腕の間だ。

「うおツと…!」

「チイ、外したか!」

だがモモンは寸前の所で何とか身を振って躲し、僅かに肩を掠める程度で済ませた。渾身の一撃が決まらなかった事に舌打ちをするカンパーノだが、その胸中は躍り昂っており苛立ちは微塵も湧いてこない。

「ぜやああ!!?」

「へ不落要塞!!?　ぬうおおおツ!」

仕返しとばかりにモモンは2本の大剣を使った袈裟懸けの一撃をカンパーノへお見舞いする。彼は避けずに2本の片手剣で防御の体勢を作り、更に武技を加えて身構える。だが、モモンの一撃は持ち前の強靱な体幹と防御用の武器を以ってしても受け止めきる事が出来なかった。

咄嗟にカンパーノは背後へ飛び退く。何とか衝撃を和らげる事に成功するが、モモンの振るった剣圧はカンパーノの身体の奥深くまで

響かせるほどの一撃だった。

地面へ着地したカンパーノだがその影響もあつて体勢を崩してしまふ。そこへ間髪入れずに今度はモモンが距離を詰めて来た。

右手に持つ大剣を引きながら迫るモモンにカンパーノは冷汗を流すもその顔はやはり笑っていた。

繰り出される強烈な突きの一閃。

カンパーノは再び「武技」を発動させて躲す。

「か、〈回避〉!!?」

それなりの熟達者が扱う刺突剣<sup>レイピア</sup>、その刺突攻撃は甲高い空を切る音を奏でる。それが大剣級の武器となればまるで顔のすぐ真横で突風が吹いたかの様に思う程の暴音が耳と肌を通して伝わって来る。

追撃にモモンが左手に持つ大剣を振る直前、カンパーノは彼の腹部目掛けて蹴りを放った。

「オラアア!!? うおっと!」

普通であれば蹴りを受けた方が背後へ押し退かれるのだが、どう言うわけか蹴った側のカンパーノが体勢を崩し背後へ後退してしまつた。

「〈即応反射〉!」

直ぐに武技を発動させて崩れた体勢を攻撃する前の姿勢に戻した。

幸いと言って良いのかモモンの追撃は来ない。

再び両者睨み合いの状態へ戻る。

周囲からは止めていたのであろう息を一気に吐き出す声が一斉に聞こえる。

(へへへ、ヤベエなマジで強えぞコイツ!)

久しく出逢えていなかった、己の全てをぶつける事が出来る強者。これほどの手応えはかつて『十傑』の1人、バフオルク山羊人の王「豪王」バザーとの死闘以来だろうか。

あの時は終始防戦一方で増援が来るまでの時間稼ぎぐらいしか出来なかった。周りは「あの『豪王』相手に生き残った戦士」と讃えるが、カンパーノ本人からしてみれば敗北したも同然の戦いとも言える。

バザーから「早急に討ち倒しておくべき存在」として認知されなかった：強者と見做してくれなかったのが無念でしかなかったのだ。

今の自分は当時よりも強くなっていると自負しているが、それでもバザーに勝てるかと言われれば「勝てる！」と断言は出来ない。

あの時のバザーは本気では無かっただろう。

もともと強さに貪欲にならねばならない。

それにはもともと強者と戦い、そして超えねばならない。

(その為にも俺は…)

カンパーノは片方の片手剣の剣先をモモンへ向けながら言い放つ。

「お前をぶっ倒すぞ、モモン!!!」

「………そうですか」

モモンの反応は素っ気無く、特に武器を構えるでもなく2本の大剣の剣先を地面へ向けて下げたまま佇んでいるだけだった。

隙だらけで『構え』の『か』の字もない。

(オレを舐めてる? いや違う……これは知らない、のか?)

カンパーノが彼と戦っている最中、違和感を抱いていた。漆黒の全身鎧を纏い、2本の大剣を軽々と振るうその姿は正しく豪傑なる戦士

そのものであるが、実際に対峙してみると彼からは戦士然とした技量が全く感じられない。正直、戦士としてド素人と言っている。

(確かにあの身体能力は脅威的だが、戦士としては青二才以下……単純に自分の臂力を利用して大剣を振り回してるに過ぎない戦い方だった)

だが聞いたところによると彼は『魔法戦士』らしい。魔法は彼の及ぶ領域では無いが、戦士という点で考えるならば彼の職業はかなり異質だ。

戦士としての技量が無いのに『魔法戦士』を自称している。だってら最初から『魔法詠唱者』と名乗ればいい。

何故態々専門外である『戦士』の真似事などしているのだろう。

(まあ、俺にとっちゃやどうでも良い話だがな。強え事に変わりはねえわけだし)

「ただ…」と言呟きながらカンパーノは両手に持っていた片手剣を元の鞘へ戻した。予想外の行動に首を傾げるモモンを他所に、彼は両手を背中に携えていた長剣へ伸ばし、その柄を握ると一気に引き抜いた。

「それが貴方の本命ですか？」

「別にそういうわけじゃねえが、まあ使い慣れてるって意味じゃそうかもな。それに俺にとっちゃ身に付けてる武器全部が切り札になり得るんだぜ」

「…？」

「分かんねえか？　なら先ずは受け止めてみな!!？」

カンパーノがそう吐き捨てると、複数の武技を同時に発動させる。

「〈能力向上〉!!?　　〈疾風加速〉!!?　　〈肉体強化〉!!?　　又ウ  
オオオオオオ!!」

武技を掛け終えたカンパーノは、長剣を頭上へ掲げて強化された身体能力を活かしモモンとの距離を詰めた。対するモモンは避けようとはせずに2本の大剣を持ち上げ受け止める姿勢を見せた。

それを見てカンパーノはニヤリと笑う。  
これこそ彼が狙っていた状況だからだ。

(そうだ!　受け止めてみる!　その瞬間、お前の自慢の大剣が  
砕け散る!!?)

実はカンパーノは生まれながらの異能持ちなのである。それは、  
使用している武器を破壊する代わりにその数倍の一撃を生む”とい  
う文字通り諸刃の剣である。だがその能力は極めて強力で、カンパー  
ノが持つ膂力と武技による強化、そこに彼のタレントを加わるとその  
破壊力は、例え魔力を付与された頑強な鎧や盾だろうが、ましてや武  
器であろうが容易く粉碎する事が出来る。

カンパーノの狙いはモモンの2本の大剣を破壊することであった。  
モモンは間違いなく戦士職では無い。  
つまり彼の本職は別にある。

何故彼が戦士職の装備を身に付けて活動しているのかは不明だが、  
どんな事情があるにせよ仮に今の彼に勝てたとしてもそれはカン  
パーノにとって『勝利』とは言えない。

その武器を破壊して、無理やりにもモモンの得意とするやり方へ  
持つて行く。

それで倒す事が出来ての『勝利』なのだ。

「ハアアアアア!!　〈剛・腕・剛・撃〉!!!」

振り下ろされるタレントが付与された渾身の一撃。モモンは2本

の大剣を交差させて受け止める姿勢を取り…そしてぶつかつた。

「おわあああ!?!」

凄まじい衝撃波と轟音が鼓膜を破るかの勢いで響き渡る。周りは反射的に耳目を閉じてしまった。

「す、すげえ…」

「どうなった!?!」

「い、生きてんのかよ?　モモンさん」

2人の周りには大きな土煙が舞い上がっていて、その様子を伺う事が出来ない。皆が2人：特にモモンの身を案じながらもその行方を見守っていると、少しずつ土煙が晴れてきた。

徐々に見える2人のシルエツト。

どうやら両者共に持ち堪え立ち続けている。

そして、完全に土煙が晴れた先にはカンパーノが振るつた長剣を2本の太剣を以って受け止めた姿勢を保っているモモンの姿があった。そして、カンパーノの長剣は砕けた。

「今のは流石にビッククリした。やはり〈武技〉は馬鹿には出来ないな」  
「~~~~~ツツ!!??」

信じ難い目の前の光景にカンパーノは顔から滝のような冷汗を流しながら思わず固まってしまった。今の今まで自分のタレントを上乗せした渾身の一撃を武器・防具を破壊されずに受け止めきれた者はいない。

いつか「豪王」を正面から討ち倒す為に編み出した一撃なのだ。そう易々と受け止めきれないはずが無い。

「あ、アンタ…マジで何者だよ」



混乱、困惑、衝撃、無念の想いを抱きながら漸く喉の奥から出した言葉を、モモンは相変わらぬ余裕のある声で答えた。

「とある騎士に憧れた、ロールプレイヤーだ」

次の瞬間、モモンは大剣を構え直した。カンパーノは慌てて再び2本の片手剣を引き抜くが、左手に持つ大剣を掬い上げるように振るい、彼の片手剣を宙へ弾き飛ばした。

彼の胴体はガラ空きだ。

「色々言いたい事はあったんだが…良い体験が出来た。感謝する」  
「へっ…そうかよ」

カンパーノは笑った。

乾いた微笑だが、不思議とこの結果を受け入れていた。モモンの右手に握られていた大剣がカンパーノの胴体部へ強烈な一撃を加える。

「がはッ!!」

刃部では無く平面部による打撃攻撃だが、カンパーノに多大なダメージを負わせるには十分過ぎる程だった。勢いのまま壁に背中から激突したカンパーノは、そのまま力無く地面へ倒れ込む。死んではないが、起き上がる気配は感じられない。

周りから漏れ聞こえて来るのは歓声ではなく、感嘆の声だった。

モモンの強さを知っていた。

カンパーノの強さも知っていた。

そして決着が付いた。

その結果にただただ呆然としていた。

そこへ野次馬の中から1人の男性が慌てて駆け出てきた。その男——聖騎士団副団長グスターボは、倒れ伏すカンパーノの下へ駆け寄

ると彼に回復魔法を掛けた。

「ライト・ヒーリング 軽傷 治癒」

魔法を掛け終えたグスターボは群衆へ顔を向けるとその中から数名の聖騎士たちが現れた。聖騎士たちはカンパーノの下へ駆け寄り、協力して彼を運び始める。

その姿を見届けたグスターボは、今度はモモンの下へ駆け寄る。

「お初に目に掛かります。私は聖騎士団副団長のグスターボ・モンタニエスと申します。事の事情は見……聞き及んでおります。モモン殿、此度はカンパーノ班長のご無礼、誠に申し訳ありませんでした」

グスターボはモモンに対し頭を下げた。

周りのどよめきなど蚊ほども気にせず、ただひたすらに自らの非を詫びたのだ。

「どうかお気になさらないで下さい。確かに驚きましたが、九色の一人と戦えた事はとても貴重な体験でした」

「…あのカンパーノを倒しただけでなく、その寛大な度量、誠に感謝申し上げます。そう仰って頂ける事は此方としてもありがたい」

「ですが、彼は大丈夫でしょうか？ 事情が事情ですから私も付いていった方が——」

「御安心ください。彼は気を失っているだけで、治癒魔法も掛けたのですぐに目を覚ますでしょう。それに彼の粗暴は…恥ずかしながら昔からでして、今回の騒動の発端が彼なのも既に確認済みです」

「そうですね…」

「それから、これはほんのお詫びの印に…」

グスターボは懐から片手ほどの小袋を取り出した。取り出す際のチャリチャリした音から中身は金銭である事をモモンは瞬時に察し

た。しかし、モモンはそれを受け取らなかった。

「いえ、それを受け取る事はできません。今回、私は九色の1人と手合わせいただきました。既に満足に値するモノを得ています」

「ツ!!? …分かりました、ではそう言うことにさせて頂きます」

「はい、ありがとうございます。では私はこれで」

モモンはグスターボに軽く頭を下げた後、そのまま訓練場の出入り口へ向かった。

(……「手合わせ」か。飽くまで喧嘩騒動では無く、九色からの手ほどきを受けた、と言う体になれば九色の評判に傷が付かなくなる……まさかここまで気遣われるとは)

かの人物は一体どれだけ寛大な度量を有しているのだろうか。もし彼がこの先も聖王国に居てくれるのであればこれほど心強い事はない。

欲を言えば我らが団長の良いストッパー役になってくれれば幸いだが…。

「ハハハ、希望的観測か」

諦めの苦笑いを浮かべる。

それよりもモモンがカンパーノを凌駕する程の実力者であると言う事実が判明したのは大きな成果だ。下手をしたら団長にも匹敵する力を有している可能性だって十分ある。

(英雄に匹敵する実力と器量は、確かに良くも悪くも無視出来るものではない。この報告は団長よりも妹でもあるケラルト殿に伝えるのが得策だろう)

彼女であればきつと何かしら良い案を出してくれるに違いない。姉の団長とは違い非常に明晰な頭脳を持っているのだから。そして、彼女は聖王女陛下下の恋愛事情を知る数少ない要人だ。

(…ん？ ケラルト殿に恋愛経験など果たしてあっただろうか？)

不敬とは思いつつ不安を感じてしまう。

グスターボの胃痛が安らぐ日はまだ少し先かもしれない。

◇

「はあ…なんでこう変な方向にばかり動くんだ？」

冒険者組合を後にしたモモン——鈴木悟はカリンシヤ郊外にある短い草原くさばらの生えた小丘で大の字に横になっていた。清々しいくらいに雲一つない空は今の悟の心をジワジワと浄化してくれる。

組合を出る際、悟は受付嬢に訓練場を荒らしてしまった弁償を一方的に払った後、周りの声を出るだけ無視してこの憩いの場所まで移動していた。

此処は悟以外、通る人はまず居ない。

彼のプライベートルームとも言えるだろう。

(やっぱり飛び昇級は不味かったんじゃないか…実際、絡まれたし)

彼はつい先ほど組合の訓練場で起きた出来事について考えていた。

例のミスリル級冒険者チームは賄賂の受け取りなど冒険者組合規定から逸脱する様な行爲をしている可能性が濃厚である為、同情の余地などありはしない。だが、これが続かないとも限らない。少なくとも今の悟の出世を面白くないと思う輩がいたのは事実だ。

(リアルでも優秀な新入社員は、妬みの対象になるって聞いた事があるし。俺は受けた覚えはないけど……ん？ それって俺は優秀じゃ

無いって事を裏付けているんじゃない？)

自分が優秀だと思った事は無いが、冷静に分析して考えてみるとホロリと悲しい気持ちになるのは何故だろう。だからこそ、嫌味の対象にならなかつたのだから結果的に良かったと考える事にした。

「でも、暫く南部は行こうとは思わないかな。アイツら南部から来たって言ってるし」

つまり南部は自分を快く思わない同業者が北部より多い可能性がある。

「まあそれは良いとして…うーん、武技か」

悟はカンパーノとの闘いを思い出した。

『ユグドラシル』には無かつた特殊<sup>ス</sup>技術<sup>キル</sup>で、恐らくだけど戦士職専用のこの世界独自のモノだろう。発動時の消費対象はMPっぽくは無<sup>い</sup>から…もしかしてHPかな?)

この世界に来てから初めてマトモに武技を受けた彼にとって新鮮で実りのある貴重な体験だった。確かにカンパーノにイキナリ絡まれた時は「何だこいつ」と苛立ちを露わにしていた悟だったが、この国のトップクラスの实力者と戦えるという点、そして戦士としての経験を積むという点で非常に有意義な時間だったと言える。そして、まだまだ練習が必要なのだと改めて理解できた。

(レベルカンストの俺はこれ以上レベルアップする事は無いだろう。けど経験は積む事は出来るし、ソレを活かした闘いをする事も出来る筈だ)

自分は完全な戦士職を会得する事は無いが経験値では無く、戦士としての経験は積めると踏んでいた。それによって被るメリット、デメリット関係無くである。

それに彼がこの世界に来て魅力に感じた物の一つが『武技』だ。『ユグドラシル』には無いスキルをあわよくば会得したいと考えていたのだが、悟の考えでは恐らくそれは難しいと思っっている。

(戦士職専用のスキルと仮定するなら魔法職の自分は会得出来ないと考えるのが今のところ普通かな？ 攻撃力や防御力の強化：見たところ他にも色々な種類があるっぽいし、実際の効果はともかくとしての汎用性は高そうだな)

もし『ユグドラシル』では出来なかつた魔法の新規開発がこの世界で出来る様に、武技もオリジナルで編み出す事が出来るなら非常に有用な独自スキルとなり得る。

(場合によっては初見殺し、なんて武技も出来るだろうな。いや、既に会得してる現地人がいるかも知れない)

下手したら圧倒的レベル差を無視した大ダメージの至即死効果のある武技が無いとも限らない。この世界基準の強者と戦う時は慎重にならざるを得ないだろう。

それは『タレント』にも同じ事が言える。

以前『ズーラーノーン』が起こしたアンデッド騒動(ということになってる)で保護した9割全裸青年が、あらゆるマジックアイテムを装備可能”というぶつ壊れチート能力を持っていた件もある。

平均レベルが低過ぎるからと言って油断は出来ない。

「でもなあ、そう言った知見を深める為にももっと広い世界を見てみたいのに、出れないんじゃないかなあ」

いつそのこと、あの時副団長のグスターボに「ちよつと国外に出た  
いけど良いですか？」と聞けば良かっただろうか。少し後悔しながら  
このモヤモヤした気持ちを忘れさせる為、悟は再び青空へ集中させ  
る。

「……ん？　鳥？」

青空を飛ぶ1匹の鳥が目に入った。他に鳥も飛んでいない為、目立  
つには目立つが距離が大分あるにも関わらず、その鳥はかなり鮮やか  
な色をしている事に気付いた。中々に綺麗だ。

悟は何となく〈浮遊する視界〉でその鳥を近くで見してみた。

「へ〜真<sup>クリムゾン</sup>紅<sup>ソーン</sup>の梟<sup>オウル</sup>か…この世界にも居たんだなあ」

ユグドラシルではただの雑魚モンスター程度の認識だったがこの  
世界に来てからは綺麗な翼と色合いを持ったモンスターだと改めて  
認識出来る。

こういう発見もある。

やっぱりこの世界に来て良かった。

## 第17話 周りの動向

◇

冒険者組合の出来事から数日後、昼下がりの街中をパベルは歩いていた。彼はある信じ難い噂を聞いた為、カンパーノの自宅へ向かっていたのだ。

——オランダ・カンパーノがダイマン一対一で負けた——

噂を聞いた時、耳を疑った。

この国では上位に入る強者である彼と戦って勝てる人間などパベルが知る者の中では片手で数える程度しかいない。パベルは本人に直接会って話を聞く必要があると考えた。

暫く歩いた先に彼の家が見えて来た。住宅街でよく見かける借家でパベルも何度か訪れた事はあるが、外から見ると別に変わった様子は見られない。

唯一、気になるのは静かだという点だ。

彼が家の中にいる時は酒を飲んでいるか、大酩をかいで寝ているか、それとも鍛錬をしているかのどちらかだ。少なくとも彼が家について大人しくしているというのは想像もつかない。

「俺だ。入るぞ」

パベルはドアをノックした後、一言声を掛けてから扉を開けた。扉の開けた先にはテーブル席に腰掛けるカンパーノの姿があった。左手に薄汚れた布、右手に鞘から抜かれた片手剣が握られており、どうやら手入れをしている最中のような様子だ。

「おっ？　ダンナじゃねえか」

「ああ。急に悪いな」



普段と変わらない態度に内心安堵したパベルは適当な木製の椅子に座った。テーブルの上には他にも彼が携えている武器が綺麗に整列されている様子から朝からずっと手入れをしていたのだろう。

カンパリーノは手入れをしていた片手剣をテーブルの上へ置き、パベルへ体の向きを変えて正面から話し掛けてきた。

「もしかしてダンナが此処へ来た理由は、俺が負けた件のことですかい？」

いきなり彼からその手の話題を振って来た事に驚いた。それは、彼が負けたという噂の肯定を意味している。

「…本当だったんだな」

「ああ。オマケに俺は『手合わせを願い出た』つつう体になっててよお。まあ俺が負けた事実は変わんねえが…あーあー、もう完敗だぜこん畜生」

腕を組んで天井を仰ぐ彼だが不思議と悔しさはパベルの感覚から感じ取れなかった。寧ろ…

「随分と嬉しそうだな？」

「え？ うーん…まあなんつーか、超えられねえ壁ってヤツにぶつかっただ感じですよ。でも不思議とバザーと戦った時みてえな悔しさは全く湧いてこなかったんだよ。どっちかつーと清々しい気分だな」

カンパリーノはいつもの獰猛さの影すら見えない、ありふれた満面の笑みを向けて言い放った。しかし、彼の性分を考えるとそれで諦めるような人間とは考え難い。そして、彼ほどの戦士をそこまで圧倒したという相手…『漆黒』のモモンについても一層興味が湧いた。

「それほどの実力だったのか？　モモン殿は」

「ああ。間違いなくアレに敵うヤツあこの国には存在しねえな。『白』のレメディオスだって無理さ、断言出来る」

そこまで言わせる程かと思った。かの歴代最強の聖騎士団長さえ凌駕するとなればとんでもない事態になる。良くも悪くも聖王国の力のバランスが大きく崩れかねない。

レメディオスは間違いなく英雄の領域に到達した本物の強者だ。彼女と言う存在1つで国内の保守派は勿論、アベリオン丘陵に住まう亜人部族達に対しても大きな抑止力となり得ている。

少し思案し、再びカンパーノへ顔を向ける。

「それで…お前はモモン殿を越える為にこれから鍛錬をする気か？

　治療魔法を受けたとは言え、無理は——」

「それなんだがよおダンナ。実は折り入って相談があるんだ」

「ん？　何だ改まって」

ソワソワした様子の彼だが何をそんなに言い難い事があるのだろうか。普段の彼からしたらかなり珍しい光景である。やがて「あーもういいか!!？」と踏ん切りがついたのか、自身の頭を乱暴に搔きむしり、パベルへ視線を合わせた。

「俺、九色を辞めようと思ってんだ」

まさかの言葉に絶句する。

だが彼の様子から決して冗談で言っている風にも思えない。色々聞きたい事はあるが取り敢えずはそれに至った原因を聞く事にした。

「まさか…モモン殿に負けたからか？」

「ああ。アイツは強者としての1つの『高み』だと思ってる」

「そ、そこまで…なのか…モモン殿は？」

「『超えられねえ壁』…へッ！　上等だよ。だったら命ある限り挑み続けてやる…って思ったんだ。その為には今の環境じゃ無理だつて気付いたんだ」

「これから…どうするつもりなんだ？」

「取り敢えずは武者修行だな。この国を出て、王国へ行つて、それから帝国。あとは…まあとにかく色んな強え連中と戦つて経験を積みてえんだわ。だから今の肩書きは言っちゃ悪いが邪魔でしかねえんだ」

「上が…認めると思うのか？」

「適当に書き置きしてコツソリ出るつもりだ。一応、俺の部下達にはその為の段取りを手伝つて貰う予定ではある」

彼の眼は本気だった。

恐らく自分が止めた所で彼は聞かないだろう。

「はあく…俺は何も聞かなかつた事にする」

「へへ、悪いなダンナ」

「全くだ。残されたコツチの身にもなつてみる。お前が抜けて『九色』に穴が空くんぞぞ？」

「グスターボはどうだよ？　実力的にはイサンドロと拮抗してんだろ」

「…アイツの胃が保たん」

全くどこまでも気楽で勝手な奴だと呆れ果てるが、それこそがカンパーノと言う人間なのだと言つてしまふ自分もいる。恐らく上は新たな後任となる『九色』を早急に決める為、躍起になるだろうがそこはもうパベルの及ぶ所では無い。

だが本当の問題は国内ではなく国外…アベリオン丘陵にある。

「亜人部族…『十傑』だつて健在なんだぞ」

アベリオン丘陵に住まう亜人部族の中で『英雄級に匹敵する』と謳われている10体の強者達。連中に対抗する為、聖王国としては『九色』は決して欠けることなど許されたい必要不可欠な存在なのだ。

カンパーノを勧誘する前の席が一つ空いていたあの頃も上層部は大分焦っていた。

あの時の混乱が再び起きようとしている。

ハッキリ言つて無責任だが、それを咎めた所でカンパーノは止まりはしないだろう。

「……頼みは、お前の愚連班の連中か？」

「ああ。アイツらは俺に似て捻くれてるからな。何処の馬の骨とも知らねえ奴が上に就いても反抗するのは目に見えてる。だがアンタは別さ、ダンナ。アンタの命令ならアイツらも素直に聞く」

「……それだけだぞ。あとはお前の好きにすればいいさ。言つて置くが、仮に道中お前が巡回吏とかに見つかつても俺は知らぬ存ぜぬでいくからな」

「恩にきる……!!?」

カンパーノは深々と頭を下げて礼を言う。

立場的にパベルは彼を首根っこを掴んでも止めるべきなのは重々理解しているが、それだけでは割り切れない想いと言うのがあると言うもの。

手の掛かる後輩が自分の夢のために覚悟を決めて旅に出ようと言うのだ。

一人の人間として、そんな彼を後押ししたいと思つてしまった。漠然としているがそれで十分である。

(やれやれ。あとは残った俺達で上手く回していくしかないか。それから……近いうちに彼と会う必要があるな。『九色』の1人として……1人の父親として)

パベルの中でも1つの覚悟を決めていた。  
それはカンパニーとはまた別の覚悟である。

◇

カリンシヤの大通り沿いにあるとある喫茶店。その2階バルコニーに設置されたテーブル席に2人の男女が座っていた。

「ねえ〜？　まだ動かないのお〜？」

「もう少し待って下さい。彼が報告に来るまでの我慢です」

男女のテーブルには其々の飲み物が置かれている。男性の方には紅茶が入った白いシンプルなカップ、女性の方には甘い果実水が入ったグラス製のカップが置かれている。男性は特に急ぐでもなく優雅に紅茶を嗜んでいる一方、女性は退屈そうに頬杖を突きながらグラスに添えられているストローを咥え、ズゾゾゾと音を立てて果実のジュースを飲んでいる。

「音を立てないで飲んで下さい」

「やあだあ〜」

男——『一人師団』が見兼ねて注意するも、女性——『無限魔力』は知らん顔で聞く耳を持たず更にジュースを吸う音を立てた。『一人師団』は軽く溜息を吐き、諦めたように自身の紅茶へ再び口を付ける。『無限魔力』は退屈そうにテーブルをトントンと指で弾く。その瞬間、2人の周りの音が消えた。

「って言うか、いつその事宿にみんな集まった方が『天上天下』も楽じゃない？　アンタの梟ちゃんて居場所は見つけたんならあとはいくらラクシヨ〜じゃん？」

「別行動をする事に意味があるのですよ。万が一、我々を付け狙う輩

が出てきた場合は直ぐに他の2人へ〈伝言〉を使い連絡し、各々時間と隙をずらして撤退させる。その為の手段です」

「うげえ…何度手間よソレエ」

『石橋は叩いて渡る』…何事も慎重に、ですよ」

「はあ？　なにそれ？」

「神が残した有り難き御言葉です。貴女も聖典加入時に習いましたよね？　必修科目ですよ」

「あー…た、多分」

「…不敬ですよ」

「あーもう、ゴメンって!!？」

そこへ2人とはまた別の声が入って来た。

「戯れあっている所悪いが報告だ」

「ツ！　『天上天下』ですね、ご苦労様です」

姿は見せないが間違いなく2人の直ぐ近くに『天上天下』は居る。

「モモンは近々、例のギガント・バジリスクが出現した公道沿いの調査任務の護衛を請け負うらしい」

「そうですか。気付かれていますかね？」

「無論だ」

「では引き続きお願いします」

『一人師団』の言葉を最後に見えざる者の声と気配は消えた。

「ねえ、アイツが言ってた例のギガント・バジリスクってアンタが召喚したヤツの事よね？」

「ええ。邪魔な巫人を任務のついでに掃討するために召喚した魔獣です」

「嘘ばっかりね。本当はさりげなくモモンの力量を測る為にワザと

召喚して暴れさせたくせに」

「おや？　何の事でしょう？」

呆れて顔を背ける彼女に『一人師団』はいつもの優しい笑みを向けている。

（ギガント・バジリスクを撃退出来なければ人類の守り手たる『漆黒聖典』の隊員は務まりません。ですが…モモンは討伐してしまった）

『一人師団』はカップの入った紅茶の波紋を見つめながら考える。

（今度は我が家の汚点のような人物で無ければいいのですが…）

しかし、最悪強ければ問題ない。

人類の守り手は多くても困りはしないのだ。

そんな期待を抱きながら『一人師団』は紅茶に口をつけた。

◇

「がはッ!!?　も、もう…やめて…くれ…」

聖王国南部の某所にてミスリル級冒険者チーム『戦牙』のリーダーは血反吐塗れの地面に倒れ伏していた。彼を取り囲む怪しい装束の集団と彼らとは明らかに風貌が違うスキンヘッドの巖のような男が仁王立ちしている。

他のメンバーは既に激しい拷問と暴行によって死んでおり、今はリーダーの視界の片隅でゴミの様に放置されていた。

スキンヘッドの男がリーダーへ声を掛ける。

「余計なコトをしてくれたな。貴様らのくだらない私怨とプライドのせいで、我々は計画の大幅な修正を余儀なくされたのだぞ」

男がしやがみ、その鍛え込まれた大きな手で倒れているリーダーの顔を驚掴み上げた。メリメリと音を立てるその握力にリーダーは堪らず悶絶する。

「南部の保守派貴族を使った貴様らへの投資支援は少なくない。金は勿論、武器や防具、マジックアイテム、人材……拠点としている街の冒険者組合にも俺たちの手駒を潜ませた。そのお陰で今のお前達……ミスリル級冒険者チーム『戦牙』があるのだ。分かるだろう？」

リーダーは涙目になりながらも必死に頷き、スキンヘッド男の言葉を肯定する。それでも男の手の力は微塵も緩まない。

「何故俺たちが貴様らを支援したか分かるか？　南部聖王国の冒険者の中でお前達の評判が一際悪いからだ。『実力はあるが人間性に問題あり』『手駒』として最高だ」

リーダーは自分達を積極的に支援してくれた南部貴族が彼らと繋がっていることは薄々勘付いていた。それでも知らぬ存ぜぬで付き合っていたのは、危険だと理解していても貫える旨味が多過ぎたのが正直な理由だった。

今は後悔している。

しかし、後悔した所でもう遅いのだ。

「だから貴様らを支援した。貴様らの名声を高めれば、それを後押しした貴族……即ち我々が南部でより活動し易くする為の基盤作りになれる。お陰で俺たちは王国以外の版図では南部聖王国が最も成功した地域となっている」

リーダーの顔を驚掴む力が徐々に強くなり、リーダーはその手から逃れようと必死もがき始めた。



「そこへ現れた期待の超新星『漆黑』のモモン。瞬く間にただの新米冒険者から『救国の英雄』へ成り上がったヤツを利用しない手は無い。籠絡する為の橋掛けとしてお前達を使ったのが…全ての誤りだった」

スキンヘッド男の手の力に更なる力が込められると、骨が軋みを上げる音が聞こえて来る。リーダーの暴れる動きが一層激しさを増した。

「表も裏も、国を効率良く動かすには『求心力』が重要だ。モモンは貴様ら以上に価値の高い存在だったが、もはや意味を成さなくなった。モモンは南部に対して強い警戒心を抱く事だろう。他の手駒となる南部冒険者に対しても同様にな」

「ず、ずびば…」

「更に南部の冒険者組合にも国からの調査が入る事になった。流石に今の俺たちでは証拠を揉み消したりする程の影響力はこの国にはまだ無い。貴重な手駒は減るが、切り離すしか無くなった。芋蔓式に摘発されるよりはマシだがな」

「ゆゑ、ゆゑる…」

「このお…使えんゴミがア!!」

スキンヘッド男はリーダーを地面へ豪快に叩き付けた。後頭部からその衝撃とパワーをまともに受けたリーダーは、少しだけ痙攣してからやがて動かなくなってしまった。

まだ苛立ちが治まらないスキンヘッド男はゆっくりと立ち上がり、周囲の部下へ命令を告げた。

「ゴイツらの死体をいつも通りに始末しておけ。冒険者が依頼中にモンスターに襲われて命を失う事など、よくある話だ」

「分かりました」

「そのあとは…暫くは闇に潜むぞ。流石に『九色』とやり合えるほど、この国における俺たちの力はまだ強くはない」

「ハイ。モモンについては…？」

「そのまま情報収集を続けておけ」

一通り命令を告げた後、スキンヘッド男はその場から離れて行った。

「だが…フッフッフツツなかなか面白いぞ。『漆黑』のモモン、か。いつの日か必ず相見えようぞ。『六腕』最強である、この『闘鬼』ゼロとな  
!!!」

## 第18話 指名依頼



城塞都市カリンシヤの冒険者組合で起きた騒動から半月が経過した。

『漆黒』の冒険者モモンは仕事としては初めて訪れる首都ホバンスの街中を馬車に乗って移動していた。

「今日も街は平穩そのもの。要塞線に亜人部族が攻めてくる回数が著しく低下しており、街に住まう民達が臨時徴兵される事も少なくなりました。それもこれも全てモモン様のお陰でございます」

「大袈裟ですよ。私などよりも、常日頃から国を守る為に身を粉にして務めている、この国の兵士や聖騎士の皆さまの尽力あつての平穩です」

モモンは同乗している従者から賛辞を贈られていた。冒険者になつてから幾度となく言われ続けた内容を無碍にしない程度に応える。ここ最近、こう言った言動に対するあしらい方が板に付いてきていると自負していた。

（ありがたい事だとはいつもながら思うけど、ここまで沢山の人に褒められるなんて経験は今まで無かつたし、耐性が無いのは仕方無いよな）

それでも人はどんなに過酷な環境でもいずれば慣れる生き物なのだと改めて実感する。尤もリアルの世界は決して慣れてはいけな環境であるが、アレはもう慣れとかそういう次元の問題では無い。

リアルでの嫌な思い出を苦々しい表情を兜の中で浮かべながら考えている間にも、従者との会話は続けていた。モモンはそれを適当に相槌を打ってやり過ごす。

「モモン様の御活躍は近隣諸国の果てまで轟く事でしょう。何れはア  
ダマンタイト級となるのも決して夢では——」  
(それにしたってこの人、出発してからずつとこの調子だけど、よくこ  
こまで褒め言葉を矢継ぎ早に出せるよな。やっぱりこういう状況に  
は慣れてるとか?)

ここまで言われると、呆れを通り越して少しだけ彼に感心してしま  
う。

何故モモンは今、従者を名乗るこの男と一緒に馬車へ乗っているの  
かというと、数日前に組合を通してモモンに対する指名依頼が入った  
のだ。「詳しい依頼内容は直接会ってから話したい」との要望らしく、  
移動手段として依頼主から馬車と従者が用意された。

モモンとしては別に徒歩でも構わなかったが、相手は既に馬車を用  
意していたのだ。その為、先方の好意を無碍にするワケにはいかず、  
渋々乗車しているというワケである。

「——モモン様はやはり…つと、話に耽っている間にどうやら目的地  
が見えてきたようですね」

「どうやらそのようですね」

モモンは「長かったなあ」と内心思いつつも、馬車の窓から見  
える首都ホバンスが誇る最も尊くも神聖な建造物…大聖殿に目を向  
けた。

(アンデッドの俺には圧倒的に不似合いな場所だなあ……バレない  
よね?)

そんな心配事を他所に馬車は真っ直ぐ大聖殿へと進んで行った。

◇

この国の信仰の中心とはよく言ったものだ。

王家が住まう王城に次ぐこの都市で最も大きく目立つその建造物は、かつてギルドメンバーと一緒に見た参考資料集の中にあつた『失われた世界遺産図鑑』の1つ『アヤソフィア』を彷彿とさせる。大きな正門を潜り抜けた先には手厚く整備された中庭と石畳の通路が綺麗に整備されていた。

(凄い。普通にお城顔負けの造りだ)

それでも仲間達と築き上げたナザリック地下大墳墓には到底劣ると感じていると、本殿へ続く幅広い階段の前へ馬車は停まった。

「長旅お疲れ様でした。ご到着に御座います。さあモモン様、此方へ」  
「ありがとうございます」

馬車から降りたモモンは従者に促され、案内されるまま階段を登り、大聖殿本殿へ入って行く。中も想像通り精巧な造りをしており、厳かで静かな空間を清潔感のある神官服を纏った人々や修道女が行き交っていた。

依頼主が居るとされる部屋までの道中、すれ違う聖職者達は上品に軽く頭を下げてくれた。モモンも礼儀として頭を下げるが、その僅かなやり取りでさえ緊張感で気を張ってしまう。

出来るだけ人と会わない事を移動中願いながら、暫く歩いていると1つの部屋の前へ到着した。どうやら此処に依頼主がいるらしい。

従者が扉をノックして自分が到着した旨を伝える。

(さて、姉の方は祝典で一回見かけたけど…噂に聞く頭脳明晰の妹はどんな人物なんだろうか?)

モモンは無いはずの胃が痛くなる感覚を覚える。だが、ここまで来て逃げるワケにはいかない。と言うか出来ない。半ばヤケクソの気持ちでモモンは開かれた扉の先へ歩を進めた。

扉を潜った先は小さな洋風の屋内庭園だった。

天井は一面ガラス張りで太陽の光が心地よく庭園を照らしている。そして、庭園の中心にあるガゼボには円形のテーブルと複数の椅子が用意されていた。

庭園の奥にはまた別の部屋へ通じると思しき扉が複数。

「お待ちしておりました。私が今回の依頼主、ローブル聖王国神官団団長のケラルト・カストディオと申します」

ガゼボの前に立つ1人の神官服を纏い、茶色の腰まで伸びた綺麗な長髪が特徴的な美女——ケラルト・カストディオが礼儀正しいお辞儀をして出迎える。

（この人が噂に聞くケラルト・カストディオか。神殿の最高司祭にして天才カストディオ姉妹の妹……とても悪評がある風には見えないけどなあ）

その顔は噂通り姉と瓜二つだった。

モモンは彼女の元へ歩み寄ると頭を下げ自己紹介をする。

「お初にお目に掛かります。私がオリハルコン級冒険者『漆黒』のモモンです。今回、高名なるカストディオ様からのご指名の依頼を頂き、光栄の至り」

「私も『救国の英雄』である貴方様に御依頼を受けて頂き、誠に感謝申し上げます。こうして直接お会い出来ただけでも嬉しい限りでございます」

天性の美女から向けられる微笑み、丁寧かつ物腰柔らかな口調は一般的な男性であれば間違い無く心を射抜かれていただろう。

とてもではないが、噂に聞くような腹に一物ありげな雰囲気や腹黒い印象は微塵も感じられない。寧ろ『もう1人の聖女』と言われて

もおかしくないのではないかと思うくらい、慈愛に満ちた美女である  
ときえ感じ取れる。

(昔神殿で勤めていた神官系の冒険者達は、ある意味一番怖い人”っ  
て震えながら言つてたけど…うーん、全然そんな感じしないな。やつ  
ぱり変な先入観を持つのは良くないな！)

実際に会ってみない事には人の良し悪しは分からないと改めて実  
感してモモンは、彼女を知るとされる人達からの評価はそこまで当て  
にはならないと踏んだ。こんなに優しそうな人が腹黒いワケがない。

「それで…後ろにいる方々は」

モモンはケラルトの後ろに佇む2人へ視線を向けて尋ねる。2人  
は同時に恭しく頭を下げた。

「それでは改めまして、同じく『九色』が1人、『桃』を下賜されてお  
ります。聖騎士団副団長のイサンドロ・サンチェスと申します」

彼とは面識がある。アンデッド騒動の際、初めて接触してきた聖騎  
士団の副団長だ。噂では団長の相手に大分胃を痛めているらしい。

そして、もう1人が前へ出てきた瞬間、モモンは思わず身を強張ら  
せた。

「お初にお目に掛かります。『九色』が1人、『黒』を下賜されている、  
聖王国兵士長のパベル・バラハと申します」

あの凶悪な眼付き…間違いない。

モモンがこの世界へ訪れたばかりの頃、一番最初に出会った人間  
だった。

(ま、マジかアアア!?　ど、どうする!!?　どうすればいいんだ!?　まさかこんな所で会うなんて思わなかったぞ!!?)

動揺のあまり『精神沈静化』が発動してしまったが、冷静を取り戻したからと言って状況が解決してくれる筈も無い。出るはずも無い冷や汗が噴き出る感覚を何となく感じていると、ある事を思い出した。

(ん?　いや待てよ、よくよく考えたら俺、この姿モモンになつてからはパベルさんとは一度も会つてない)

彼と出会つた時の自分はありのままの姿オーバード：死の支配者だった為、今の姿を見られたとしても魔法で創られた全身鎧を破り、その上で幻術で創られた姿を看破されない限り、正体を見破られる心配は無いのだ。

余程の失態を犯さなければ最悪の事態が起きることはない。自身の焦りが杞憂であると分かつた途端、心の中で大きな安堵の溜息を吐いた。

(ふう〜焦つたあ〜……いやでも、こういう偶然もあるんだなあ。うん、気を引き締めよ)

モモンは気持ち切り替え、2人に対して頭を下げる。

「初めまして。どうか、お見知り置きを」

この時、パベルの眼がピクリと動いた気がしたのだが気のせいだろう。注意深く行動するのは当たり前だが、行き過ぎた警戒はかえって視野を狭くし、そして余計な先入観を抱かせてしまうのだと実感した。

ふとガゼボへ目を向けると、従者達がテーブルに香りの良いハーブ



ティーを準備している所だった。

「さあ、どうぞ御席へ。詳しい依頼内容をお話しします。勿論、受けるか否かは内容を聞いてからで構いません」

「わかりました。失礼します」

モモンはケラルトに促されるまま席へ着いた。

◇

「なるほど。公道の調査を行う者達の護衛ですか」

「はい。昨今のアベリオン丘陵は余りにも異例の事態が立て続けに発生しております。亜人部族達の不穏な動き、ズーラーノーンによって引き起こされた1万體にも及ぶアンデッドの大群、滅多に現れないギガント・バジリスクの出現…いずれも聖王国の安全保障に関わる事態です」

ハーブティーの良い香りが仄かに香る小さな庭園で、モモンはケラルトからの指名依頼の内容説明を聞いていた。

アンデッド騒動は完全にモモンの失態によるものではあるがそれ以外は彼の及ばない所だ。半年以上もこの国に留まればそれらの事情はある程度耳に入る為、確かにそう言った面を考えれば異例の事態尽くしだ。

（オマケにこの国は聖王女派と保守派に二分されている。隣国の王国と比べれば全然マシとは言われるけど…これだけ問題が山積みなのに国が1つに纏まり切れてないってヤバくないか？）

何だか本格的にこの国が可哀想になってきた。

何はともあれ、アベリオン丘陵が敵対している亜人部族の支配下にある以上、唯一の隣国との架け橋である公道まで安全が著しく脅かせる事態になっているのは許容し難い事態だ。

（俺が商隊護衛で通った公道か……あの後、ロフリーさんも言ってたけど、ギガント・バジリスクみたいな伝説級で危険なモンスターが現れるのは滅多に無いらしいな）

今回、ケラルトは交易路としても極めて重要な公道の調査依頼で、国を代表して自分を指名して来たのだ。尤もモモンは調査する側ではなく、調査隊の護衛なのだが、確かにオリハルコン級に相応しい依頼であると言える。

「ギガント・バジリスクに敵うモンスターや亜人は決して多くありません。不運にも遭遇した者は貪り食われたのかも知れませんが、ただ単に惨殺された者もないとは限りません。アンデッド騒動の件を鑑みれば、再びあの時の様な事態が起きる可能性もあります」

「その調査隊に神官職の方々も派遣する、と？」

「はい。我が国の生命線ゆえ念には念を入れなければなりません。当然、杞憂で済むのであればそれに越した事はありませんが」

「確かに。あの公道が脅威に晒されている可能性がある事は聖王国にとって死活問題。それで、その調査隊の編成は如何なさるのでしょうか？」

モモンの問いにケラルトは視線をパベル達九色の面々へ向けた。

先に口を開いたのはパベルだった。

「道中の安全は元より、具体的な調査任務に関しては我々が務める手筈となっております。そして……」

「我ら聖騎士団も調査隊の護衛につきます。また、万が一負のエネルギーが蓄積されている節が見受けられた場合は、我らと神官団より派遣される部隊が浄化作業を行います」

続けて副団長のイサンドロの説明が入る。  
一通り終わるとケラルトが口を開いた。

「今回最も懸念すべきは調査任務中に亜人部族が襲撃してくる可能性が高いことにあります。まだ公には発表されておりませんが、アンデツド騒動の後、驚くほど大人しくなっていた亜人部族が活動を再開し始めているとの情報も入っています」

「なるほど。ちなみに、その亜人部族の中でも特に気をつけるべき対象はいるでしょうか？　可能であればそれらの特徴や特殊技……武技などが分かると助かります」

モモンはケラルト達が知り得る亜人部族に関する情報を聞いた。

『十傑』という数ある亜人部族の中でも英雄級に匹敵すると言われている10体の強者達、  
「豪王」  
「魔爪」  
「氷炎雷」  
「白老」  
「黒鋼」  
「七色鱗」  
「獣帝」  
「灰王」  
「螺旋槍」  
「牙王」と其々大層な異名を持ち恐れられている。そして、各々の装備類、扱う武技、魔法、職業、種族的特性など…。

「中でも目立って活発になっているのは山羊人王侯、  
「パフォルク・ロード豪王」の異名を持つバザーです」

「『豪王』ですか…」

「かつて『黄』のカンパーノ班長を追い詰めた実力者です。尤も、その時のバザーも本気ではなかったでしょう」

カンパーノの名前が出てきた事でモモンはあの日の出来事を思い出した。特別強いとは思わなかったが、彼のお陰で本格的な武技を体験出来たのは間違いない。

そういう意味では彼に世話になったと言えるだろう。

（この世界基準で考えれば十分強者の部類に入るとは思うけど。なるほど、そのバザーとか言う王侯の亜人はもつと強いのか）

もしかしたら亜人でしか会得出来ない武技なんてモノもあるかもしれない。

その時、何か強烈な視線を感じた。

モモンは兜のスリット越しに視線の主へ恐る恐る目を向ける。

視線の主はパベルだった。

凶悪な曇りなき眼光で先程からモモンから視線を微塵も外さない。睨み付けていると言ってもいいくらいだ。

(な、何で？　俺何か変なこと言いましたか？)

身に覚えはサツパリない。

お陰で先程から説明をしてきているケラルトの話も全くと言って良いほど頭に入っていない。

あまりのプレッシャーに耐え兼ねたモモンは思わず視線ではなく、顔の向きを彼から逸らすように動かしてしまった。

視線の先には他の部屋へ通じると思いき扉の1つ。モモンは気を紛らわす為にその扉を集中して凝視する。

「――以上が説明に……モモン、様？」

モモンの不自然な行動に流石のケラルトも思わず首を僅かに傾げた。彼女の変動に気付いたモモンは、慌てて彼女に顔を向き直した。

「す、すみません。つい気になったもので…は、話は大体分かりました」

「………そうですか」

ケラルトの目が僅かに細められる。

今度は彼女からの異様な圧のある視線を感じる。恐らく途中から話を聞かなかったであろう自分に対する不満の現れだろう。

モモンは自身の席から僅かに見える一面ガラス張りの天井窓へふと目を向けた。青空と陽光が差すその光景は幻想的で、未だ重苦しい沈黙が流れている最中を一瞬だけ忘れさせてくれた。

(あー…鳥がいるよ……。つてアレ?)

天井窓の縁に止まっている鳥。その奥に広がる大空を優雅に飛ぶ、真紅の色彩の羽を持つ鳥に気付いた。

真<sup>クリムソン・オウル</sup>紅の梟だ。

「……あんな所に」

気がつく顔も天井窓へ向けており、ボソリと呟いたその一言が聞こえたのかパベルが物凄い形相と勢いで、モモンが見ていた方向と同じ天井窓へ顔を向ける。

窓の縁に止まっていた鳥達が一斉にバサバサと飛び立っていく。

「……ッ!」

彼の迫力に思わず「ひえ…!!?」と声を上げそうになったが、寸前で留めた自身を褒め称えたい。

特に会話も無い、異様な行動のやり取りにイサンドロはやや困惑気味だった。そして、ケラルトはいつの間にか元の優しい微笑を浮かべる顔に戻っている。

「……ではモモン様。私達の御依頼、御受けいただけますでしょうか?」

途中会話をよく聞いていなかったモモンとしては下手をすれば重要な情報を聞き漏らしてしまったのかも知れないので、一概に「良いです」とは言えない…のが本音だ。若しくは「もう一度…」と再度詳

しい情報を聞きたかったが、余所見していた手前そんなことを言えるはずがない。

ならば自ずと答えは決まってしまった。

「問題ありません。よろしくお願ひします」

依頼を受けるしかない。

期待に全力で応えるのが挽回のチャンスだ。

今の自分はオリハルコン級冒険者なのだ。

受け入れるしかない。

(あー……怖かった。あつそうだ)

依頼を受けると決まると、モモンは各々と握手を交わした後、既に用意して貰った宿へ案内されることとなったが、退出する前にモモンはケラルト達へ体を向けて思い出した事を口にする。

「カストディオ神官団長殿、そしてサンチエス副団長殿。カストディオ聖騎士団長殿にも、よろしくお伝え頂けると幸いです」

こうした社交辞令の言葉は社会人として当然の義務だ。ここに来てやはり社畜時代の経験が活かされるあたり、クソみたいな社会環境でも馬鹿には出来ない実感する。

「……はい、必ず」

ケラルトは変わらず優しい微笑を向けてくれた。

◇

小さな庭園部屋に残ったのはケラルトを始め、九色の2人のみ。因みに従者達は退出している。

ケラルトは残っている自身のティーカップのハーブティーへ口を付ける。

「ふう…」先ずはモモン殿が我々の依頼を受ける、と言う当初の目標は達成出来ました。ですが、まさかここまで見抜かれるとは想定外でした」

ケラルトの言葉に同調するように他の2人も力強く頷く。彼女も一見冷静に見えるが、ティーカップを取る手は僅かに震えていた。恐れ慄いているのだ。

モモンという英雄級の実力者の洞察力に。

そして、敢えて指摘しない彼の度量に。  
彼女もまたギリギリだったのだ。

「もうよろしいですよ、姉様」

ケラルトが扉の一つに向けて話し掛けると、その扉が開かれた。すると扉の奥から堂々とした足取りで彼女の姉：聖王国聖騎士団団長レメディオス・カストディオが現れたのだ。

奇しくもレメディオスが出てきた扉はモモンが途中ずっと視線を向けていた扉だった。

「やはり気付かれたか？ ケラルト」

「ええ、恐らく。他の扉にも罫として何名か配置しておりましたが：姉様が潜んでいた部屋の扉しか見ておりません。何より決定的なのは彼が去り際に放った一言です」

——カストディオ聖騎士団長殿にも、よろしくお伝え頂けると幸いです——

先の行動を考えれば、あの扉の先にレメディオスが潜んでいると見

破っていなければまず出てこない言葉だろう。

モモンは此方の狙いを最初から見抜いていた。

今回彼女を連れて来たのはモモンの戦士としての力量を正確に見極める為だ。しかし、敢えて姿を見せなかったのは相手を萎縮させない為、そして、余計な警戒心を抱かせない為である。

レメディオスは腕を組み、らしくもなくうむと悩み考えながらパベルへ問いかけた。

「私は野伏レンジャーでは無いのだが…パベル兵士長はどう感じる？」

「かの御仁は『野伏』や『盗賊』に類する能力を発動している様には見受けられませんでした。本当に…何の気なしに突然、としか言いようがありません」

困惑気味に答えるパベルにレメディオスは眉を顰める。

「だが、現にモモン殿は私が潜んでいる部屋を見破っているのだぞ。こう言った事態を含め活躍する為のお前では無いのか？」

「申し訳ありません」

「姉様、彼の実力は本物ですよ。それは姉様も御承知のはず。そんな彼が見落とすなどあり得ません」

己の不甲斐無さに謝罪するが、ケラルトがすかさずフォローに入り彼を庇った。流石のレメディオスも妹からここまで言われればそれ以上パベルを責め立てる事はしなかった。

「むう…となると、モモン殿はどうやって」

「姉様の目にはあのお方はどう映りましたか？」

ケラルトからの質問にレメディオスは「ふむ」と少し考え込んだ後に答えた。



「正直言って戦士としての技量は感じられなかったな。その辺の素人と何ら変わらない立ち振る舞いだった」

どうにも腑に落ちないと言った様子で語る彼女を見て、ケラルトは確信した。

（やっぱり、辞職したカンパーノの言っていた事は本当だったって事ね）

ケラルトは視線をパベルへ向ける。彼もケラルトの意思を汲み取ったのか僅かに頷いた。

（本当に戦士としては大した事が無いのかもしれないわね。つまり本職は別…『魔法戦士』を名乗ってまで本職を隠し通す意味はなに？）

右手を口元へ当て考え込む。

仮に職業を偽っていたとしても、装備品まで戦士職に拘る必要は何処にあるのだろう。そんな事をすれば間違いなく戦闘において邪魔でしか無い。態々自身を追い込むなど狂気の沙汰だ。

（彼の異様な洞察力…まさか本職は『盗賊』？

いえ、それは怪

しい。斥候系の職業であれば完膚なきまでにカンパーノが敗北するなどありえませんか）

近接戦闘は不得手とする斥候系職業では純戦士職であり『九色』の1人であったカンパーノが一方的に負けるなど考えられない。一応、パベルはカンパーノに一度勝利してはいるものの、今の彼と戦うとなると「勝てるかどうかは分からない」のがパベルの見解だ。

（それにモモンは真正面から彼とぶつかって勝利している。ハッキリ言って姉様くらいの実力者でなければ不可能ね。でも、モモンはそれ

が出来た)

戦闘内容と結果を聞けば、モモンは戦士職と考えるのが妥当だ。だが、姉様の分析力野生の勘を以ってしても「彼は戦士としては素人」と判断している。

(敢えて素人の立ち振る舞いを？ 確かに自身を探ろうとする者達を欺くという意味では効果的と言える。それもカンパーノとの戦闘でも緩めずに膂力だけで圧倒して、貫き通した：そう考えると理解は出来る)

魔法の類を発動させた様子も見られなかった以上、此方の探りを見抜いたのもその一環だろう。

一雫の汗が彼女の頬を伝う。

(なんて人物…)

恐ろしい。

完全に此方の意図を見抜く頭脳と洞察力。

己の戦士としての力を隠し通してもカンパーノに勝利を収める程の実力。

何故そこまでして己の素性を隠し通したいのかは不明だが、一つだけ確かな事がある。

「絶対に敵に回すのだけは避けなければなりませんね」

「ん？ どういう事だ、ケラルト」

「彼は自らの実力を欺くために高度な演技をしていた。そして、今回の接触で私達が下手に動かないよう釘を刺してきた。最後に姉様が潜んでいたのは見抜いていたと、敢えて口に出して言ってきたのはそういう意味でしょう」

「なんだと…!!？」

レメデイオスは驚愕すると右の口角を上げた。

「流石だなモモン殿は!!?　次こそは是非、直接会って話が見たいものだ!!?」

単純にモモンの計り知れない実力に歓喜する姉を見て、ケラルトは眉間に指を当てて溜息を吐く。やはり姉のモモンに対する考えは単調だ。

(まあ何はともあれ、彼に対して探りを入れるのはやめておくべきでしょう。少なくとも警戒はされたと捉えた上で今後について考えなければ)

モモンとの信頼関係を築き、ゆくゆくは自陣営へ引き込む。そして、あわよくばカルカの恋路を叶える。ケラルトはカルカの為、聖王国の為、より一層、粉骨碎身の覚悟を持って取り組むよう覚悟を決めた。

(そう言えば、彼は天井窓を見ていましたね)

ケラルトは自分達の仕掛けとは全く関係の無い所へモモンが顔を向けていた様子を思い出していた。慌ててパベルが同じ場所を顔を向けていたが、特に何か反応するでもなく視線を元に戻っていた。

「バラハ兵士長。あの時、貴方はモモン殿の後に天井窓を見ましたね。アレは何故ですか?」

「……妙な気配がしたもので」「妙な気配?」

訝しげに表情を僅かに歪める。

彼の視線が再び天井窓へ移ると、他の面々もつられて同じ場所へ顔を向けた。

「念の為、部下に探らせましたが、異常は見受けられませんでした。杞憂に過ぎなかつたかと…」

「そう。でもモモン殿は動いていた…彼も何か感じ取っていた可能性もありますね」

パベルはあの時、モモンがボソリと呟いた言葉を思い出した。

—— ……あんな所に——

(間違いなく彼は何か気付いていた。だが、痕跡が見つかったという報告は出ていない)

あの言葉の意味をパベルは考えていたのだ。  
何気ない一言…にしては些か不穏が過ぎる。

(まさか…我々以外の者か?)

モモンとの依頼内容に於ける会談場所と指定は直前まで極秘として扱われていた。更にこの大聖殿には〈警報<sup>アラーム</sup>〉を始め、あらゆる探知魔法を無数に設置しているだけでなく、一級実力者の斥候部隊も無数に護衛として配置していた。

この嚴重な警備網を掻い潜るなどあり得ないが、ここでパベルはある可能性が脳裏に浮かぶ。

(……まさか法国が動いている? 噂に聞く六色聖典の何かが…)

もし事実なら法国はモモンを狙っていると言う事になるだろう。

「ケラルト様…ひとつ懸念が」

杞憂かも知れないがあくまで可能性として報告するべきだろう。  
パベルは自身が考えた内容をケラルトへそのまま告げた。

◇

首都ホバンスの人通りの少ない某所。

何も無い筈の物陰の空間からスウーッと何かが片膝を地面へ着けた状態で浮かび上がった。

漆黒聖典第十二席次『天上天下』が現れた。

「ふうー、いやあ焦ったぜ。まさかコッチの存在に気付くとはな」

彼は思わず安堵の溜息を吐いて、その場へ腰を下ろす。

「アレはマジで気付かれた？ いや、何となく気配を感じ取った、の

方が正しいか。オマケに“凶眼の射手”にまでバレかける始末…もしマジでバレてたら始末書じゃ済まないかもなあ」

全身に冷や汗をかいた後だが、彼が装備している伝説級マジックアイテムの効果で不快感など微塵も感じられない。

もう一呼吸置いた後、『天上天下』はゆっくりと腰を上げた。

「さてと、んじやまあさつさと報告しに行きますか。ここはアイツのフクロウに任せて、と」

『天上天下』は再び姿を空間へ溶け込ませた。

## 第19話 公道調査

◇

隣国を繋ぐ唯一の公道。その調査隊の護衛という指名依頼を受けたモモンだったが、今のところモンスターや亜人による襲撃が無い為、特に大きな支障も無く順調に経過していた。

調査隊は護衛部隊を含めた150名と中々の人数ではあるが、公道の距離を考えればこれでも少ない方だ。しかし、下手に人数を増やしてしまうと襲撃された時に護衛部隊が守りきれない可能性が高くなり、被害が拡大してしまう。その為、多過ぎず、そして少な過ぎない人数での任務となるのだ。時間は多少掛かるが被害を最小限に抑えるには仕方がない。

「これは…鉄鼠人アイマツトと洞下人ケイブンの死体ですね」

「争い合った形跡があるな…どうやら縄張り争いはまだ続いてるらしい」

「亜人同士で潰し合ってくれるなら万々歳だ」

公道よりアベリオン丘陵側のやや離れた場所にて、数名の斥候と聖騎士が無造作に転がる亜人族の死体を調べていた。周りを見渡せば更に十数体程の亜人達の死体が見受けられる。

本来であればそのまま放置しても問題無かったのだが、先のアンデッド騒動の後ではそういうわけにはいかない。また1万体のアンデッドが発生しないとは限らないのだ。

神官団がやって来ると死体が転がる周辺一帯の魔法による浄化作業が始まった。

「よし。亜人どもの死体から装備品を剥ぎ取れ」

調査隊護衛部隊の指揮官であるイサンドロが部下達へ鹵獲作業の命令を下す。

亜人達が装備している武器や防具などの大半はまともに整備されていない物ばかりなので売り物にすらならない。しかし、放置していても他の亜人族がいずれ回収してしまう為、それなら再利用されないよう回収した方が良いという判断のもとで行われている。回収された装備品は事前に用意していた荷車へ次々と運び込まれた。

死体から剥ぎ取った装備品の中にはマジックアイテムや上質な武器も稀にだけ見つかる事もある為、決して無駄では無いのだ。

そんな彼らの一連の行動をモモンは離れた所から見守っていた。彼の隣にはパベルが佇んでいる。

「今のところ襲撃はありませんね。出会う亜人部族はどれも死体ばかり。事前に伺った情報には亜人部族が徒党を組んでいると…」

モモンの質問にパベルは答える。

「仰る通りです。ですが、元々亜人部族は『自分達こそが最強』と信じて疑わない野蛮な連中ばかりなのです。幹部級なら兎も角、アレらのような下っ端達は未だに他の部族との縄張り争いを続けています」  
「なるほど。まとめ切れていない、と」

「はい。手柄欲しさに蹴落とし合い、出し抜き合いは当たり前。そんな連中ですから」

聖王国の派閥争いもそうだが、亜人部族達も決して例外では無かったと言う事らしい。『力がある者が絶対』の弱肉強食・実力主義が大半の亜人にとっては当たり前なのは知っていた為、あらかた予見はしていたもののコレは想像以上に酷い。だが、亜人部族が徒党を組んだ際の兵力は10万以上である為、数の暴力は馬鹿にできない。

自分であればレベル的にも雑魚ばかりなので烏合の衆でしか無いが、現地の人々からすれば十分過ぎるほど脅威だ。ただでさえ亜人種は人間種よりも身体能力が優れている為、10万の兵力は今の聖王国の現状を考えればかなり絶望的と言える。

(確かに。下手に弱味は見せられないな)

更に『十傑』と言う存在。聖王国にも『九色』がいるのだが、全員が戦闘能力に優れている訳ではない。中には長年の功労者故に下賜された者、優れた芸術家として下賜された者だっている。

純粋に考えて単純な戦力差で言えば圧倒的に不利だ。それに『九色』の1人であり、戦力としても優秀だったオルランド・カンパーノが辞職している。政府は未だに公表していないがそれも現状を聞けば仕方の無い事だと理解出来る。

暫くした後、調査隊は更に歩を進めた。

◇

調査隊一行は緊張の面持ちで公道を進む。神官団や斥候部隊は勿論、護衛の聖騎士団さえ額から流れる汗を拭っていた。

それもその筈。彼らが今通っている場所こそ、モモンが討伐したとされるギガント・バジリスクが出現した地点なのだ。

早速、隊は停止してその場の調査を始める。

「足跡：それから残骸となった荷馬車らしき物の一部だけ、か」

「亜人達が荒らした形跡もあるが：それだけか」

「積荷だけ他の荷馬車に移したらしいから盗める物も無かっただろうに」

調査の結果、確かにギガント・バジリスクはモモンの証言通りの場所に出現しており、その足跡やゴブリンなどのモンスターや亜人を食い荒らした形跡も近辺で見つかった。

そして奇妙な発見もあった。

かの伝説の魔獣は東方よりやって来た事も判明したのだがその痕跡を追っていくと、途中で不自然に途切れていたのだ。

まるでそこへ急に現れた様に、以降の足跡が無かったのだ。



「これは…なんと奇妙な」

パベルは足跡が消えた地面を指で軽く撫でながら思案する。

東方からやって来たとなればアペリオン丘陵を横断したと言う事になる。ギガント・バジリスクの様な伝説の魔獣となれば、亜人部族はかなりの騒動となっていた事だろう。しかし、亜人部族達が動いた形跡も無い。

それに道中で見つけた亜人同士の縄張り争いだ。ギガント・バジリスクほどの強大なモンスターが現れば、連中は自分達の縄張りで大人身くするのが普通だ。

パベルは更に注意深く周囲を観察する。

(近くに巣穴に使えそうな洞窟や穴蔵も無し。やはり此処へいきなり現れた、としか言いようがない)

痕跡と周辺の状態から彼が導き出した答えは――

「…召喚モンスターだとしても言うのか!？」

飽くまで仮説だがそうとしか考えられなかった。そして、それは決してあり得ない事も理解している。

(そ、そうだ。あり得るはずがない!!?)

まず召喚自体は聖王国では珍しくは無い。実際、神官団や聖騎士団サモン・エンジェル・3rdはへ第3位階天使召喚アーク・エンジェルフレームで炎の上位天使などの天使を召喚している。数は少ないが冒険者の中には『召喚者テイマー』の職業を修めている者は確かに存在している。

召喚そのものは問題ではない。

召喚する対象が問題なのだ。

ウルフグリズリー クロウ  
狼や熊、鳥など比較的危険度の低い魔獣を召喚するならともかく、ギガント・バジリスクのような超級に危険な魔獣を召喚するなど聞いた事も無い。

仮にそんな芸当が出来る者が居るとするならば、そいつは間違いなく英雄の領域に到達している存在だろう。だが、ギガント・バジリスクを召喚出来るほどのテイマーならば必ず話題になっている筈だ。

1体で街一つ壊滅出来る大戦力。

国はいかなる褒美を贈呈してでも召し抱えたいだろう。

「これは…一度3人で話し合う必要があるな」

パベルは薄らと気味の悪い感覚を抱きながらその場を後にした。

◇

その晩の調査隊の野营地。その中で一際大きな天幕の中では神官団の代表者と護衛隊隊長である聖騎士団副団長イサンドロ、斥候部隊隊長である兵士長パベルが会議を行っていた。3人で囲むテーブルの上には数枚の羊皮紙が置かれており、今回の調査の結果内容が書かれている。

「何とか一通りの調査は終わりましたな」

「ええ。幸いにも道中、危険なモンスターや亜人部族との衝突も無く最後まで遂行出来たのは斥候部隊の尽力あってこそ。深く感謝申し上げますが、まだ帰路がある故正式な御礼は帰国後で」

神官団の代表者とイサンドロからの言葉を受けて、パベルは小さく頭を下げた。2人が彼の返答を受け取った事を確認したパベルは話を始める。

「先ず今回の調査で判明した事は、先のアンデッド騒動に匹敵する事態は起こり得ないこと。そして、亜人部族達の活動が本格的に活発化

していること。最後が、ギガント・バジリスクが何処からやって来たのか不明だということ。以上の3点です」

「…ギガント・バジリスク。『黒』のパベル殿ですらその出処は掴めなかったと…」

神官団代表者の言葉にパベルは申し訳なさそうに頭を下げた。

「申し訳ありません。例のギガント・バジリスクが東方より来たと言う痕跡は見つけたのですが、辿る途中、痕跡が消えてしまっていたのです」

2人は羊皮紙の数枚へ目を通すと、その顔がみるみる青褪めた表情に変わる。イサンドロは胃の辺りを抑える始末だ。

「…そ、それで、そのギガント・バジリスクは召喚された可能性がある、と？」

「飽くまで仮説です。ですが、他に説明のしようが無いと、あの周囲で調べた中では断言させていただきます」

2人は額から嫌な汗を流す。

確かに、伝説の魔獣を召喚するなど到底信じられない。しかし、聖王国では右に出る者はいない野<sup>レンジャー</sup>伏職の彼がここまで言うとなると、その可能性は十分あると捉えるべきだ。

「…………このまま調査を続行しますか？」

パベルの凄みのある視線に身じろぐ2人は互いに顔を合わせた。

謎を追求しようとしたらまた新たな謎が出てきたのだ。それも下手に軽く流せる様な事態でも無い為、より確実な情報を手に入れるには調査の続行は必要だろう。

調査できる機会があるならなるべく実施するべきである。場合に

よつては国家の危機に匹敵する事態になり得るかもしれない。

「……それが良いでしょう」

「しかし、此処はアベリオン丘陵とほぼ隣り合わせ。亜人部族との衝突のリスクを考えても、あまり長居は出来ません」

「承知しております。延長滞在は長くても1日。もし亜人部族との衝突が起きた際は直ぐに調査を中止して撤退を最優先とします」

パベルの言葉に納得した2人は大きく頷いた。

この何とも気味の悪い調査任務はまだ少しだけ続きそうだ。

◇

野営地から少し離れた小高い丘の上にモモンは佇んでいた。

「なるほど。もう少し護衛依頼は続くってワケか」

実はモモンは、〈パーフェクト・アンノウアップル完全不可知化〉を使い、今回の公道調査依頼の責任者3名の会議を盗み聞きしていた。少しだけ罪悪感はあるが、やはり気になるものは気になる。相手のプライベートを侵害する訳ではない為、大目に見てほしい。

「しかし、ギガント・バジリスクって、この世界では本当に危険なモンスターなんだなあ」

もうこの世界に来て何度目になるか分からない、価値観のズレを改めて感じる。

「それにしても、興味深い話を聞いたな」

モモンがああの会議の中で特段興味を引かれたのは、自分が討伐したギガント・バジリスクは野生ではなく、誰かが召喚した可能性がある

という件である。もしそれが事実なら何者かが故意に自分に、そのギガント・バジリスクをぶつけた事になる。

問題はその狙いだ。

(レベル100の俺を本気で倒す気なら、最低でもレベル90以上は無いとほぼ無理だろう。まあ召喚モンスターにもよるけど、もしその気ならギガント・バジリスクなんて雑魚を使う意味が分からない)

つまり相手はギガント・バジリスクなら粗方倒せると自負している存在：現地人である可能性が高い。

『ユグドラシル』のプレイヤーなら、余程の初心者で無ければ先ず選ばない。更に加えると、天使系最上位の熾天使セラフイムが相性的に良いだろう。流石のモモンでもセラフイムが出てきたら最悪、逃げに徹する必要がある。

(やれやれ。なんかきな臭い感じになってきちゃったかなあ…つと、誰か来たか)

モモンが考えに耽っていると、パベルが此方へ近付いている事に気付いた。

「此処においででしたか、モモン殿」

「ええ。少し夜風に当たりたくて。お疲れ様です、バラハ殿。会議の方はよろしいのですか？」

「はい。……モモン殿、実は公道調査なのですが、あと1日ほど、延長する事が決まりました。モモン殿にはまだ少しだけ、負担を掛けてしまいますが…」

申し訳なさそうに口にするパベルだが、モモンは気にするでもなく応えた。そもそも盗み聞きしていたのでとつくに知っていたなど言えるはずもないが。

「いえ、お気遣い無く。少しでも公道の安全を確保する為に必要な事  
でしようから」

「御理解頂きありがとうございます。モモン殿は誠、寛大な御心をお  
持ちで」

「そんな、大袈裟ですよ。このぐらいオリハルコン級冒険者として当  
然のことです」

一言、二言と言葉を交わした2人は、暫く無言のまま夜空に覆われ  
たアベリオン丘陵の景色を共に眺めた。お世辞にも緑豊かとは言え  
ない丘陵地帯だが、それでも満天の星の下であれば中々見応えのある  
景色だとモモンは染み染みとそう感じた。

「それにしても、良い星空ですね」

パベルが夜空を見上げながら話しかけて来た。

「ええ、本当に見事な星空です」

「この丘陵地帯も半年前には1万体のアンデッドが薙き合っていたと  
は…中々信じられません」

「そ、そうですね…本当に信じ難い出来事でした」

「貴方もそう思いますか、サトル殿」

「ええ、そう思います」

「……………えっ?」

モモンの『精神抑制化』が働き、間の抜けた声が漏れ出てしまった。

「やはり…貴方でしたか」

パベルはその凶悪な眼光をモモンへ向けた。

そして、懐に手を忍ばせながらゆっくりと歩き、距離を詰めて来る。

(……やらかしたなあ)

モモン——鈴木悟は心底、残念そうに深い溜息を吐いた。

こうなつては仕方がない。

ありのまま受け止めよう。

そう思った。

## 第20話 I believe in you

◇

人が本気で焦った時は思考が停止する。

鈴木悟はかつてのギルドメンバーの1人に言われた言葉を再び思い出していた。これまで彼は幾多の危機的状況を奇跡的に回避してきたが、今回に限りそれは難しそうである。

(えっ? い、いつ…バレたんだ? バレる要素なんて何も無かったじゃないか?)

その通り、自身の正体がバレてしまったのだ。

相手はこの世界に来て初めて接触した現地人であり、『九色』の『黒』を下賜されているローブル聖王国兵士長のパベル・バラハである。

気が付けば精神抑制化が発動していた。

幸か不幸か、冷静になった途端、脳裏に過ぎつたのは『殺す』という選択肢だ。種族特性とカルマ値極マイナスがその選択を迷いなく支持するが、瞬時に彼はそれを否定した。

それを選んだら最後、自分は二度と『鈴木悟』へ戻れなくなる。心身ともにアンデッドになる事を彼は恐れたのだ。

(……やらかしたなあ)

こうなったら仕方がない。

ありのままを受け止めよう。

そう思った。

パベルは彼の目の前まで近付くと、懐に片手を忍ばせた状態で止まった。相変わらず此方を睨み付ける視線は恐ろしいが、状況が状況故に彼から目が離せなかった。

油断出来ない、緊張で張り詰めた空間が二人の周囲を覆う。



(一体…何をする気なんだ?)

彼の脳裏に浮かんだのは自分のようなアンデッド種に効果的な信仰系マジックアイテムである。この世界のマジックアイテムを基準に考えるなら彼の脅威となり得る代物は出て来ない様に思えるが、可能性はゼロじゃない。

伝説級以上が出て来る可能性だってある。

(そうなる、物によっては無傷では済まないかもしれないな…)

当然、身の危険が及ぶ事態となれば彼とて無抵抗と言う訳にはいかない。その場合、彼には一時的に気を失って貰った後に

〈コントロール・アムネジア記憶操作〉で自分と出会ったあの日を一部改変させて貰う。

するとパベルは懐からある物をゆっくり取り出した。

それは一つの小さな空瓶だった。

「…それは?」

「私の…御守りです」

パベルは震えた小さな声で答えた。

意味が分からない悟は、目に涙を溜めるパベルと彼が見せている空瓶を交互に見た。そこで漸くその空瓶が何処かで見た記憶のある物である事に気付き、思い出した。

「マイナー・ヒーリング・ポーション下級治癒薬…!」

あの時、死に掛けていたパベルへ手渡したユグドラシルのポーションだったのだ。

下級治癒薬はユグドラシルでは何処でも手に入るゴミアイテムだったので、別に使った後どうなるかが知ったことでは無かったし考えてすら無かった。偶々、アイテムボックスに大量に入っていた物

で、彼のレベル的に見ても丁度いいと思い使ったに過ぎなかったのだ。

まさかあの時の空瓶を彼が大事そうに御守りとして持っているとは思わなかった。

「やはりコレはポーションの類だったのですね。まあ何はともあれ、私が貴方に救われたのは事実です」

パベルは微笑んでいる。その目は変わらず凶悪だが、敵意は微塵も感じられない。

彼は下級治療薬の空瓶再び懐へ仕舞い込むと、躊躇いもなく悟の手を取り力強く両手で握った。

「あの時の御礼……今ここで申させて欲しい。ありがとうございます……!!?」  
そして、大分遅れてしまった非礼を……お詫び申し上げる……!」

パベルはポロポロと涙を零しながら、何度も何度も感謝の言葉を小さくも力強い口調で述べ続けた。そして、彼の感謝の言葉はまだ終わらない。

「それに、貴方は私の愛娘ネイアも助けて下さった。貴方が居なければ……今頃ネイアは……ネイアは……うう……うう……!!?」

半年前、父親の身を案じたが為に家出をしたネイアはカリンシヤで途方に暮れていた所、人攫いに遭ってしまいが、モモンと名乗る漆黒の全身鎧を纏った冒険者が彼女を助けたのだ。それを知ったパベルは直ぐにモモンと名乗る冒険者を探そうとするが、行動を起こすよりも前に彼は見つかった。

1万にも及ぶアンデッドの大群をたった1人で殲滅した新米冒険者……それがモモンだった。

無論、彼は直ぐにでも彼の下へ訪れて娘のネイアを助けてくれた件に対しキチンと礼を言おうとしていたのだが、昨今の情勢から中々その機会は訪れなかった。また、時間がある時に訪れようとしたのだが偶然、商隊護衛の依頼に出ていた為、会う事は叶わなかった。

「え、えつと……そのお……」

一方、悟はまだ困惑していた。精神安定化が発動しない程度だが、それでも頭の中はパンク寸前だった。様々な疑問が頭をよぎるが先ず先に聞きたいのは“どうやって自分の正体が分かったのか”である。

「な、何で……私が……鈴木悟だと……？」

漸く涙を止めたパベルが彼の質問に答える。

「……瞬く間に数々の偉業を成し遂げ、名声を高めた冒険者モモン。貴方がアベリオン丘陵に現れてから彼も現れた……コレは偶然にしてはあまりにも被り過ぎていると思いました。当然、単なる偶然である可能性もありました。しかし、貴方に会ったことで可能性が確信へと変わりました」

「えっ?」

『声』ですよ。初めて会った時の貴方と先日、モモンとして初めてお会いした時に聞いた貴方の声が全く一緒だったのです」

自身の迂闊さを改めて痛感させられる。

確かに彼と出会った時に会話をしており、レンジャー野伏と言う職業上彼が自分の声をハッキリ覚えていても不思議ではない。もしかすると、喋り方や動きの癖なども彼は直ぐに察知していた可能性だってある。

(いやいや、こればっかりは仕方ない。声から正体がバレるなんて想

像付かないし：うーん、何か対策は：まあ無い事は無いけど、貴重なユグドラシル金貨を失う羽目になる」

尤も死の支配者の自分を知っているのは彼だけなので、バレてしまった以上対策も何も必要無いとは思うのだが声を変える手段は確かにある。しかし、それは口唇蟲なるユグドラシルの弱小モンスターで、装備すると自身の声を変更する事が出来る特殊なモンスターだ。しかし、口唇蟲はアンデッド種ではないのでユグドラシル金貨による召喚が必要になる。

ユグドラシル金貨は最終日に買った大量の花火によって殆ど無い。召喚しようと思えば出来なくはないが、ユグドラシル金貨はほぼ完全に消えてなくなるだろう。

一先ず、口唇蟲の件は置いておくとして、もう一つの疑問点を口にする。

「私の正体が分かっているのなら……何故貴方は、逃げ……いや、攻撃しようとしませんか？」

少しずつ冷静さを取り戻した悟が一番感じた疑問だ。自分はアンデッドの最高位種族である死の支配者で、この世界の価値観で考えるならアンデッドは生きとし生けるもの敵であり忌避すべき存在だ。

（油断を誘っている？ いや、そんな風にはやっぱり感じられない  
…）

普通に考えるならパベルがこうして気さくに話し掛けてくること事態が異常である。

「アンデッド騒動の件もです。私の正体をご存知であるなら、私を先に疑うべきでしょう」

ほぼ投げやりな気持ちで核心的な疑問をぶつける悟だが、パベルの表情は変わる事は無かった。

「ええ、理解してます。全ては『ズーラーノーン』によるものである事は判明しています。貴方は彼らに狙われていたのですね?」

(…えっ?　　ず、ズーラー…?…何でアイツらが出てくんの?)

悪の秘密結社『ズーラーノーン』。突如、その名前が出てきた事に焦る悟は、それと自分に何の関係があるのかサッパリ分からなかった。

「半年前、アベリオン丘陵で『死の螺旋』を実行したズーラーノーンの目的は強大な負のエネルギーを生み出し、死の大地へ変えること。第二のカッツエ平野を生み出し、新たなアンデッドの巣窟を創り出そうとしていました」

悟は「え?　　そうなの?」と思ったが、よくよく考えれば彼らに〈記憶改変〉を施したのは自分で、『あの騒動はこの一帯を死で埋め尽くすのが狙い』と言う体にしてあるのを思い出した。

「では何故、彼らがそのような計画を練り、そして実行したのか。何故アベリオン丘陵なのか…その答えは貴方と言う稀有な存在アンデッドが関係しているのだと分かったのです」

「わ、私…ですか?」

「強大な力を持ち、尚且つ友好的なアンデッドなど彼らが黙って見過ごす筈がありません。そして、アンデッド騒動を引き起こした動機を考えると、彼らの狙いは貴方を負のエネルギーで誘き寄せることである事は明白」

啞然とする悟だが、彼の眼は真っ直ぐだ。恐らく冗談を言っているつもりは一切無いのだろう。しかし、何故こうも自分を「害あるアンデッドではない」と決め付ける事が出来るのだろうかと疑問に感じて

しまう。

「何故…そこまで私を…信じて下さるのですか？」

「貴方が私と、娘のネイアを助けたからです。ただのアンデッドがこのような善意ある、正義を行う筈が御座いませぬ。貴方は私にとって返し切れない大恩人であり、アンデッドだからと言う理由で迫害や傷付ける真似を私は決して致しません」

熱意のある言葉だ。

やはり嘘を言っている様には思えない。

しかし、彼は何とお人好しなのだろうか。恩人だからという理由だけで簡単に人…アンデッドを信じるなど危険極まりない。

（もしその行動全てが、貴方を抱き込むための工作だったらとは考えないのか…）

だからなのだろう。悟の彼に対する好感度はかなり高い。種族の垣根を超えて、ここまで素直に相手を信じる事が出来る彼の心を純粹に尊敬するし、少し羨ましいとさえ思う。

対して自分はまるで猜疑心の塊だ。

何事にも裏はある、企みがある、損得勘定で相手は動いているなど相手を心の底から信じ切れずにいるのだから。

唯一彼が信頼出来る存在と言えば、それはかつてのギルドメンバー達だろう。逆に言えばギルドメンバー以外、誰も信用出来ないとさえ言える。

注意力や警戒心を抱く事は決して悪いことでは無いし、寧ろ自分の身を守る為には必須である。しかし、少し…ほんの少しでも相手に対し心を開く余裕はあっても良いのかも知れない。

「私は…ただの偽善者ですよ。周りが言うような英雄でも何でも無いです」

「そんな事はありません。少なくとも私にとって貴方は英雄です」

「私は：聖王国の人達に嘘をついているんですよ。バレるのが怖くて、ずっとずっと嘘を貫き通している卑しいアンデッドです」

「私は決してそのように思ったことは御座いません。それに貴方は、それでも人が住まう世界で暮らしたいからこそではありませんか？

確かに見た目はアンデッドそのものですが、不思議とその性格は普通の人間と変わらない気がしてならないのです」

悟は何を言っても自分を肯定して受け止める彼を見て、感動と同時に何処か可笑しく感じてしまい小恥ずかしそうに兜越しに頬を掻いた。

「ハハハ、やっぱり自分は変ですかね？」

「フフ、そうかも知れませんね。ただ私も変わり者ですから、この外見も相まって、どこか親近感の様なモノを感じているのかも知れませんね」

気がつくとも緊張の糸が緩んだ、砕けた空気が2人の周りを包み込んでいた。

多少の誤解はあつたが、それでも自分の正体を知って尚信じてくれる人がいる。それが分かっただけで何故心が軽くなったように感じるのだろうか。

「私は貴方に出会えて良かった。そして、私の名誉に賭けて誓います。決して貴方の正体を他者に告げるような事は致しません。この事實は墓まで持っていきます」

パベルの自分の手を握る力が僅かに強くなる。

彼の決意は本物だ。

それなら自分も彼を信用しよう。

## 第21話 巫人襲来

◇

野营地から少し離れた丘陵沿いの小丘で鈴木悟——モモンとパベルは語り合っていた。いや、『語り合って』いたは些か語弊があるかも知れない。正確にはパベルの一方的な語りである。

「……つてな事があつてだな。ネイアは私に匹敵、いやそれ以上に野伏レンジャーの素質があると思つてるんだ」

「なるほど。それは確かに自慢ですね」

「おお！ やはりサ…モモン殿は理解してくれるか！ だが、当の本人は聖騎士になる事を目標にしていってだな。あつ、ネイアが聖騎士に憧れたキツカケなんだが、実は私の妻が元聖騎士で——」

まるで子供のように嬉々として話す彼だが、その話の内容は自分の家族自慢…特に娘のネイアに関わるものばかりである。これが知る人ぞ知るパベルの娘の自慢話である。喋り出したら中々止まらず、適当に聞き流すものなら「じゃあもう一度」と相手がキチンと理解するまで何度も話を繰り返してしまう。

ここ最近、娘の父離れが顕著になつてしまったが為に話の長さが一層エスカレートしており、彼の娘自慢に付き合わされた相手は半分のイローゼ気味になると言われている。余程の卓越者でなければ彼の話の乗り切るのは困難を極める…のだが——

「……ふうむ。話を聞く限りだと、お嬢さんは父であるパベル殿レンジャーの野伏職を色濃く受け継いでる様子ですね。ならばやはり、パベル殿と同じく弓矢や野伏職レンジャーに関する訓練に重点を置いた方が良いでしょうね」

「やはりモモン殿も同意見ですか。私も再三に亘り忠告はしている…つもりではあるのですがなにとも」

「確かに必要最低限の近接戦闘術を習得する意味では剣を用いた訓練



も無駄とは言えませんが、やはり彼女には彼女に適した職業をキチンと教えるべきかと思えます。仮に聖騎士になれたとしても、不適合な職を得てしまったが為にいざ実戦となれば他の聖騎士の方々にも一歩も二歩も後れを取るのは必然です。そうなれば戦場に命を落とすリスクもまた高くなります」

パベルの表情が一層険しくなる。別にモモンの言動で気分を害したのではなく、キチンと諭さなければ愛娘が命を落としてしまうという状況を改めて理解したからだ。

「それにしても、パベル殿とお嬢さんは本当に目がそっくりですね」「ええ、そうでしょうとも!!? まああの本人にとってはありがた迷惑のようですが…それでも可愛いでしょう? 本当に自慢の娘なのですよ!」

「そ、そうですね…」  
「おおお! やはりモモン殿はよく分かっているらしい!!?」

あの凶悪な視線で嬉しそうに語ってくる姿は絶妙に悍ましいモノではあったが、彼の心情も理解出来る。彼にとって娘のネイアはかけがえの無い自慢の宝物同然なのだ。自分が心底大事にしているモノを誰かに自慢したいと言う気持ちは、モモン——鈴木悟がかつての間達と共に築き上げた『ギルド：アインズ・ウール・ゴウン』を誰かに自慢にする事と同じなのだと思うた。

つい自慢したくなって、つい嬉しくなって、つい夢中になってしまふ。そんなパベルに共感してしまっていたのだ。

(もしこの世界にナザリックがあつたら、俺はきつとこの人みたいにかつての仲間達と築き上げたあの居城を自慢しまくるんだらうな)

しかし、そのナザリックは…ギルド：アインズ・ウール・ゴウンは此処には無い。かつての自分の生き甲斐であり、青春であり、生きた

証そのものである思い出の居場所は何処にもないのだ。

しみりりとした気分が沸々と湧き上がり、思わず視線をパベルから逸らしてしまう。自慢するモノがある彼が少しだけ羨ましく思えてしまった。

そんな自分勝手な傷心を、パベルは何を思ったのか話を中断し心配そうに声を掛けてきた。

「い、如何されましたか？」

「あ、いえ…。お嬢さんは幸せ者ですね。こんなに愛してくれる親を持って」

「い、いや、そんな……」

モモンとしては話題を戻したつもりだったが、パベルは何か勘違いしてしまったようで何処かバツが悪い…。気まずそうに苦笑いを浮かべていた。何故そのような反応をするのか分からず、モモンは首を傾げる。

「あのオ……」

モモンが声をかけようとした瞬間、パベルは急に立ち上がり背後へ体を向け始めた。何事かと思ったモモンだったが、彼の表情が真剣そのものであった事から緊急事態なのだと瞬時に理解する。

「モモン殿…此方へ近付いてくる足音が多数。踏み込み具合から察するに亜人でしょう。少なくとも二足歩行型です」

モモンも立ち上がり背中の上の2本の大剣を引き抜いた。

「パベル殿、どんな亜人か分かりますか？」

しやがみ込んだパベルは自らの片耳を地面へ当てて、此方に接近し

て来る亜人達に探りを入れる。

「……蹄の足音、恐らく山羊人バフオルクでしょう」

「なるほど。貴方と初めて出逢った時に遭遇した連中と同じですね」  
「しかし、数はあの時の比ではありません」

あの時は15体だったが今回はそれよりも多い数らしい。しかし、モモンにとって山羊人は脅威となり得ない存在だ。レベルはせいぜい12前後で何か特別な特殊技術スキルを持っているワケでも、魔力量が低レベルに反して高いワケでも無い。

それでも亜人は身体能力が人間よりも優れている為、現地人から見れば十分脅威と言える存在である事に違いはない。

(お出ましか……ん?)

暫くした後には武装した50体ほどの山羊人達が2人の前へぞろぞろと現れた。以前出会った時と変わらない簡素な装備ばかり身に付けていたが、モモンはその中で違和感を覚える個体を1体見つけた。その個体を視認したパベルは警戒のレベルを一気に跳ね上げ、手に携えていた矢をいつでも弦に掛けられるようにする。

「ライフ・エッセンス生命の精髓」マナ・エッセンス「魔力の精髓」

直ぐにその個体へ向けて体力H<sub>P</sub>と魔力M<sub>P</sub>を探る情報系魔法を掛ける。横でパベルが何やら此方の行動を気にしている風だが今は気に留めない。

(体力的に見てレベルは20以上25未満ってところか。魔力は0だから魔法を使って来る心配は無し……だが、この世界には未知の能力が沢山ある)

明らかに他の個体よりレベルが高く、凶体も頭1つ分大きい。装備も他と比べてかなり充実している。鉄製の鎧を身に纏い、両の手で鈍重そうな大斧を携えており、右目は戦いか何かで負傷したのか粗末な眼帯を装着している。自信満々で堂々とした態度だ。

(まさかコイツが「豪王」バザーか? 『十傑』の1人の)

その個体が進む方向に居た雑兵山羊人達が慌てて左右へ避けて道を作る。

「ほう。これはこれは、なんとという僥倖」

そいつは口元を歪ませながらそう呟いた。

巫人の表情はイマイチ読み取り難いが、言葉の意味から察するにこれはニヤついているのだろう。

「偶然見つけた聖王国の斥候を、本隊の襲撃前にそのまま始末してやろうかと思っていたのだが……フハ、フハハハハハ! まさか聖王国九色が1人、『黒』のパベル・バラハが居るとは思わなかったぞオ!!」

嬉しそうに声を上げるその強個体は確かにパベルを見ていた。他の山羊人達も下卑た笑い声を上げている。強個体が今度はモモンへ視線を向ける。

「だが、ソイツは知らんな。大層な武器や防具を身に付けているようだが……む?」

強個体はモモンの首に下げられている冒険者プレートを見て目を細めた。

「冒険者、か？　だが見たことのないプレートだ。ミスリル…とは違うな。何だ貴様は？」

「俺はカリンシヤのオリハルコン級冒険者、『漆黑』のモモンだ」

『漆黑』…モモン？　…知らんな。それにオリハルコンだと？

聖王国の冒険者は最高でミスリル級と聞いていたが」

強個体は怪訝に顔を歪めるが、直ぐに先程のニヤリと笑みらしい表情を浮かべた。

「フツハハハハ!!？　コイツはとんでもない大金屋を見つけたモノだ!!？」

強個体は声を上げて笑う。

「この2人を討ち取ればバザー様…いや、バザーを蹴落とし、俺が二代目『豪王』となるのも夢では無い!!？　そして、新たな『十傑』の1人となり、我ら山羊人こそ最も優れた種族である事を証明してくれようぞ!!？」

（ん？　って事はコイツはバザーじゃ無いのか。じゃあ以前話に出てきた幹部クラスってワケか。しかし、ベラベラと喋る部下がいたもんだな）

聞いたわけでもない情報を自ら話して来るこの幹部級の山羊人を中心の中で無能認定するモモンは、チラリと横にいるパベルへ視線を向けた。彼もモモンの視線に気付いたらしく、此方に向かって小声で話しかけてきた。

「(アレは名のある山羊人の英雄ですね。バザーほどでは無いにせよ、強敵である事には変わりありません)」

「(……そのようですね)」

モモンは「強敵」と言う言葉に若干疑問を感じるが、彼らからしたら十分強者なのだから仕方無いと気に留めず耳を傾ける。

「(不味いですね。幹部級に加えてこの数…それに本隊が居る野営地も危険です)」

「(敵の本隊、ですね)」

「はい。奴の言葉が本当ならこの数よりも多い山羊人が野営地に奇襲を仕掛けて来る筈です)」

パベルの懸念にモモンも同意する。

今回の公道調査団は護衛隊含め150名の大所帯だ。それほどの数を相手に襲撃を仕掛けて来るとなれば、山羊人は勝てる算段を持っているという事になる。尤も連中がそんな算段もなしに攻撃を仕掛ける程の間抜けであれば話は別だが、先遣隊らしき連中で50体もいる為、恐らくそれは無いだろう。

「(いくら2人がかりでもこの数を相手するのは不利です。それに今回は幹部級もいます)」

(え?…ああーそうか。あの時は15体の山羊人だけだったからか。まあ数の暴力が侮れないのは事実だし。俺なんかよりもパベルさんの方が心配なんだけどなあ。レベル的にはあの幹部も同じくらいだし、職業構成とか種族レベル的にみても、パベルさんの方が不利だ)

モモンとしてはあの程度何の問題も無く対処出来るのだが、彼自身モモンの実力を考慮しての危惧だろう。それどころか彼らとの戦いの中でパベルがうっかり死んでしまわないかが心配なくらいだった。

「確かに、野営地にいる本隊は心配ですね。アレら全部を相手するとなれば時間は掛かりますし)」

「え? いや、そうですが…」

モモンは小声をやめて、本隊の方が懸念すべき事態であると伝えるが、その話を受けたパベルは目の前に居る脅威を露ほども気にしない様子に困惑していた。しかし、それは一瞬だけだった。パベルは覚悟を決めた面持ちでモモンへ話しかける。

「なら話は早いですね。モモン殿は野営地へ向かって下さい。此処は私が引き受けます」

「え？」

「そして皆にこの事態を伝えて下さい。貴方ほどの人物が居た方が、本隊が生き残る可能性は高いです。大丈夫です、そう簡単に私はやられませんよ」

そう言つて笑い掛けるパベルの凶悪な眼に迷いは無かった。正直、先ほども娘自慢をしていた者の発言では無い。普通、家族のことを考える者は「自分が何があつても生き残りたい」と言うのがセオリーだ。

(確かにパベルさんの言つてる事は理に適っているかも知れない)

確かに此処から野営地までは少し距離が離れており、向こうも山羊人の軍勢が迫つて来ている事に気付いていない。このまま奇襲を受ければ悲惨な被害が待っているのは想像に難く無い。最悪、全滅だつてあり得るだろう。

だがそれは、今此処で囚役を買つて出たパベルだつて同じだ。

(死を覚悟してなお前に進む人の強い意志……強い眼だ。正直……憧れるよ)

最後に「怖いけど」と心の中で付け加えたモモンは、一つ頷いた後、パベルの側へ少しだけ寄つた。

「折角ですが、パベル殿。私は貴方の意見を受け入れる事は出来ません」

「ッ!? なっ—」

「自分で言うのも何ですが、私は馬鹿な人間なもので……」

「しかし、サト——」

パベルが反論するよりも前に悟は右手を伸ばし、彼の襟の部分を鷲掴んだ。

「貴方を此処で死なせる気はありません。ええ、これは自分のワガママです…ねッ!!!」

「ッッ!!!?」

そう言うなりモモンは彼を片腕で豪快に後方へ投げ飛ばした。宙を舞いながら飛ばされるパベルは、天と地が逆さになり、モモンと山羊人達との距離が見る見る離れていく。

「サ……モモン殿オオオー!!!?」

「此処は私が引き受けます!!!? 私よりも貴方の方が足が速く、皆の指揮も取り易いでしょう!!? 直ぐに追い掛けます!!?」

投げ飛ばさる最中、パベルはギリギリと歯噛みする。その後、地面へ転がりながら着地すると、一目散に野営地へ駆け出した。

モモン彼の覚悟を無碍にしないために。

「こ、このヤロオ…!!? 追え、絶対に逃すな!!? 折角の大金星だぞ!!?」

山羊人幹部が慌てて部下へ命じるが、彼らの前に漆黒の全身鎧を纏う戦士が立ちはだかる。



「チィ!!?      なら先ずは貴様からだ!!?      殺れエエ!!?」

激昂する幹部は部下の山羊人達へ向けて叫んだ。槍や剣を持つ山羊人が一斉にモモンへ襲い掛かるが、モモンは数の波をモノともせず右手に持つ大剣で横薙ぎの一閃を放つ。

「なっ!?!」

一度で5体もの山羊人がその餌食となり、周囲に赤い鮮血を撒き散らした。幹部山羊人は瞬間に部下が肉塊へと変わる光景に瞠目する。

「さつきまでの威勢はどうした?      まさか臆したのか?」

「このオ…人間がアアアア!!」

明らかな挑発を受けた幹部山羊人は大斧を振り上げながら突っ込んできた。目の前の得体の知れない存在に対する恐怖よりも、種族としての誇りが勝ったのだ。

モモンは何かしらの武技を上乗せしているであろう振り下ろされた大振りの一撃を片方の大剣で受け止める…と見せかけ、そのまま大剣で大斧の軌道を逸らし地面へ激突させた。

大地が抉れ土煙が2人の周囲に舞い上がる。幹部山羊人は自身の渾身の一撃を受け流され、僅かに姿勢を崩した。モモンはその場で跳躍し、大剣を幹部山羊人の首へ向けて振り下ろす。

幹部山羊人の首が胴体から切断され、赤い血飛沫を撒き散らした。

「なっ!?!」

「ひい…!?!」

自分達よりも強者である上官がいとも容易く討たれた事実には他の山羊人達は完全に怯み後退りしていた。完全に戦意は喪失している。

モモンは追い込むようにジリジリと歩み寄る。

「早急に片付けさせてもらおうぞ。〈絶望のオーラII〉」

モモンは自身の種族的特殊技術スキルの1つ、〈絶望のオーラ〉を発動させた。

〈絶望のオーラ〉は全部でレベルVまで存在し、レベルが上がれば上がるほど相手や周囲に対してより強いバッドステータスやペナルティ、即死効果を与える事が出来る。今回彼が発動したのはレベルII。相手は「恐慌」の状態異常となり、全力で逃げ出すことを要求される。

「ヒイヒイヒイ!!!」

〈絶望のオーラII〉を受けた山羊人達は武器を捨ててその場から大慌てで逃げ出した。

「ふう……受け流しはコツさえ掴めれば何とかなるもんだな」

モモンはカンパーノとの戦闘を思い出しつつ、経験値は得られずとも戦士としての経験は積む事が出来ると改めて確信する。

「……向こうも始まってるな。パベルさんは間に合ったかな？」

野営地の方へ目を向ければ既に戦闘は始まっているらしく、此処からでも喧騒や金属同士の甲高い衝突音があちこちから聞こえて来ていた。

「あまり遅くなるわけにはいかないな」

モモンは小丘から飛び降りた。そのまま地面へ着地し、戦闘が勃発

している野営地に向けて駆け始めた。本来なら〈ゲート〉を使いたい所だが、流石に人前で第9位階魔法を使うのは不味い。

正直、此処に来たばかりの頃の自分は迂闊過ぎたと猛省している。

◇

野営地では既に公道調査団の護衛隊と山羊人達との衝突が起きていた。しかし、完全な奇襲を狙っていた山羊人達にとって、聖王国の兵士達が迎え討つ態勢を取りつつあったのは大きな誤算だった。

お陰で奇襲はあまり意味を成さずほぼ正面からの衝突となつてしまったのだ。

聖王国側が混乱せずに対応出来た理由は、やはりパベルにあった。彼は慌てて野営地まで戻ると山羊人の軍勢が接近しつつある可能性が高い旨をイサンドロと神官団の代表に伝えたのだ。

「怯むな!!?」 神官団は天使を召喚し前衛の聖騎士達の援護をしろ!!?」

「斥候部隊は弓矢で援護だ!!?」

「負傷兵だ!!?」 回復魔法を!!?」

山羊人の数は100体以上で、護衛隊の数と比べれば数は少ないが、確かに奇襲を受ければこの数の差もあつという間に覆せていただろう。しかし、当初の予定と大きく計画が狂ってしまったえば、個としては高い身体能力を持っていても協調性に於いては人間種に劣っている為、優位と思っていたところから逆境に立たされると一気に瓦解してしまうのだ。

「今だ!!?」 分断して押し進めエエ!!?」

天使一体に聖騎士数名を最低限心掛けた集団戦法を徹底し確実に山羊人達を追い詰めていく。同族が次々と討ち取られ、押されている戦況に山羊人達は後退を余儀なくされていた。

一方でパベルも得意の弓矢を巧みに操りつつ、機動力を活かした戦法で山羊人達を次々射抜いていた。

(サトル殿はぐ)無事だろうか…)

彼の實力は重々承知している為、簡単にやられる事はないだろう。また恐らく彼の本職は魔法詠唱者であり、戦士としての技量が本当に無かったとしても勝算は魔法によっては充分にあるとも言えるかも知れない。

最悪、逃走は出来ると信じたい。

(早く援護に向かうべきなのだろうが、敵が―)

「<sup>サンドストーム</sup>砂塵嵐」

突如として彼の目の前に砂の壁が現れた。

視界が一瞬で遮られたパベルは当惑し、視界に広がる砂の壁からまた別の何かが現れた。

「壁…!?!」

咄嗟に叫んだパベルだが、それが壁ではなく自身の姿なら容易に隠せるほど大きなラージシールドだった。

「<sup>盾突撃</sup>盾突撃」

「うぐっ…!!??」

瞬時に身構えるが、避ける時間は無かった。

ラージシールドによる強打攻撃を全身で受けたパベルは派手に吹き飛ばされてしまい、地面へ叩きつけられゴロゴロと転がる。

(ふ、不覚…)

倒れ伏したパベルは何とか起きあがろうとするが、思っていたよりダメージは大きく、僅かに身体を動かすだけで全身に激しい痛みが駆け巡る。

「とんだ誤算だ。まさかこちらの手の内がバラされてしまうとはな…」

聞き覚えのない声の主がゆっくりと近づいて来る。

慌てて部下が駆け寄り、突如として襲ってきた敵から注意を逸らすべく天使達が援護に入る。しかし、天使達は瞬く間に消滅し、駆け寄ってきた部下達も敵の攻撃により豪快に吹き飛ばされてしまった。

「フハハハハ、だがまあ良い。こうして『九色』の1人を討ち取る事が出来るのだからな。いや…」

声の主は離れた場所で戦っているイサンドロへ視線を移す。彼もパベルの危機に気付いていたが、なかなか敵が多く接近を許してくれないのだ。

声の主はニヤリも笑う。

「2人、だな。これで俺は『十傑』の中で最も有力な王だと他の奴らに思い知らせる事が出来る」

パベルは全身が悲鳴を上げる中、声の主である方向へ顔を向けた。

そして、目を見開き驚いた。

他の山羊人は勿論、先ほどの小丘で見かけた強個体の山羊人よりも更に一回り大きい。銀色の体毛、ねじ曲がった大きな角、他にもマジックアイテムと思われる武器防具、装備品が多数見受けられる。

「ご、〝豪王〟バザー…!!？」

何とか絞り出した声で、眼前の脅威…山羊人の王、バザーを見据える。

「ふむ…貴様は我がコレクションに加えるには、ちと大き過ぎるな」

バザーは腰に下げている人間と思われる幾つかの頭蓋骨を撫でながら呟くと、右手に持つ大剣を振り上げた。

「だが…その首は非常に価値があるぞ!!？」

バザーは大剣をパベル目掛け振り下ろした。

## 第22話 VS 豪王

◇

バザーの振り上げた大剣が地面へ倒れ伏しているパベルの頭上へ振り下ろされようとしていた。先の奇襲攻撃を直撃では無かったにせよ、無視出来ないダメージを受けた今のパベルは身動きが取れない状態だった。しかし、彼は『九色』の1人である。

「〈痛覚鈍化〉！」

〈武技〉を発動させて全身に走り続ける痛みを無理やり抑え込むと、懐から片手で隠せる程度の小袋を取り出しバザーの顔目掛け投げ付けた。

「ぐうあ…!!?」

投げつけた小袋はバザーの鼻っ柱へ命中。中に詰め込まれていた怪しい色の粉が周囲へ激しく舞い上がる。予想外の反撃を受けたバザーの振り下ろした大剣がズレてしまい、何も無い大地を抉るだけとなった。

パベルはこの機を見逃さず、〈武技〉の効果が続いている内にバザーとの距離を取る。

「ぬう…?! は、鼻が…!」

「何種類かの強烈な薬草を調合した粉状のマジックアイテムだ…!」

鼻を押さええながら不快に顔を歪めるバザーから距離を取っていたパベルは、聖騎士や神官から治癒魔法を掛けてもらう事が出来た。

本調子とはいかないが戦闘に支障は無い。

「人間風情が舐めた真似をしてくれる。怯むな、同胞達よ!!? こ

ここで敵を殲滅し、アベリオン丘陵に在る他の種族共に我ら<sup>パフォルケ</sup>山羊人の精強さを知らしめるのだ!!?」

バザーが大剣を夜空へ掲げ声高に叫ぶ。

その途端、今まで劣勢で士気も下がりつつあった山羊人達が一斉に咆哮を上げ、なりふり構わずパベルら護衛団達へ突っ込み始めた。

「来るぞ!!?」

「備えろオオオ!!?」

野蛮な怒涛の津波となって襲い来る山羊人の軍勢を、召喚した天使達を活用した隊列を組んで真正面から迎え討つ護衛団。双方共に激しい喧騒と怒号が飛び交い始める。

「厄介だな。王侯<sup>ロード</sup>が持つ狂戦士<sup>バーサー</sup>化能力は」

「全くだ。しかしその分、統率の取れた命令は無くなり、影響を受けた者たちの防御力も下がる」

「イサンドロ、今のうちに強化魔法を俺に掛けてくれ。俺がヤツを仕留める」

「…死ぬなよ」

イサンドロはパベルの要請を速やかに受け入れ、部下達と共に出来る限りの強化魔法を掛ける。

「<sup>レッサ</sup>下級筋力増大<sup>グス</sup>」

「<sup>レッサ</sup>下級俊敏力増大<sup>デクスタリテイ</sup>」

「<sup>ハイスト</sup>加速<sup>ト</sup>」

「<sup>レッサ</sup>下級技巧増大<sup>ニカリテイ</sup>」

パベルが補助魔法<sup>バ</sup>を掛けて貰う最中、それを察知したバザーが大きな咆哮を上げると、十数体の山羊人達が一斉にパベル達の下へ突っ込



んで来た。

「クソツ！ こっちに気付いた……！」

バザーの狙いが何かを仕掛けようとしているパベルである事は明白だった。

怒涛の荒波となって押し寄せる山羊人の群れをイサンドロを始めとする聖騎士達、そして、神官団は第二位階の天使召喚魔法でエンジェル・ガーディアン守護の天使を召喚し、迫り来る山羊人達へぶつける。その隙を突いたパベルは、鬼気迫る勢いで両陣の間を持ち前の機動力で掻い潜り、バザーへ向けて駆け出した。

一方のバザーは鼻を利かなくされた分、視力でパベルを探さねばならなくなっていた。自身の咆哮で大勢の味方をぶつけたまでは良かったが、敵味方が入り乱れた状況でパベルを見つけるのは容易では無い。

「〈視覚強化〉」

未だパベルを見つけあぐねているバザーに対し、彼は〈武技〉により闇夜と敵味方が入り乱れる中でも迷う事なく、瞬時に背後へ回り込んだ。矢筒から毒を塗りたくった矢を引き抜き、弦に掛けて一気に引く。

「〈強射〉」

続けて発動した射撃攻撃を強化する〈武技〉を発動し、バザーの背後へ向けて毒矢を放つ。通常よりも速く鋭く強化された矢が飛来するが、間一髪で気付いたバザーは大盾を構え矢を弾いた。

「ぬう……惜しかったな——」

得意げに笑うバザーに気にも留めず、防がれたと分かるやパベルは懐から無数の薄汚れた小袋を投擲する。慌てたバザーは再び大盾を構えて、投擲してきた小袋を防いだ。

「ぐっ……これは煙幕か、クソ！」

大盾に小袋がぶつかった瞬間、煙幕が一気に拡散する。先程の鼻が利かなくなる効果とは違い単純な目眩しであるが、それでも小賢しい真似である事には変わり無く、バザーは苛立ちを露わにした。

「ええい、邪魔くさい!!？」

バザーは目障りな煙幕を払うべく、大剣を横一閃に振るつた。凄まじい旋風と共に煙幕が一瞬で晴れて、視界が元に戻った。しかし、やはりその場にパベルは居なかった。

「〈即応射撃〉」

〈武技〉発動の声を察知したバザーは慌てて自身の真上へ顔を向けた。そこには空中に跳んでいたパベルが弦を引いている姿があった。そして、すかさず放たれる矢は超人的な速さで一本、また一本と一瞬で5本の矢がバザーの真上目掛け飛来する。しかし、バザーは持ち前の身体能力と反射神経でギリギリ飛び退いた。

その内の何本かがバザーの頭部や肩、足を掠める。恐らく毒か何かが塗られていたであろう鏃だったが、種族的特徴である銀色の頑丈な体毛により傷を受ける事は無かった。

「邪魔な体毛だ……！」

「ハハハ！　今のは驚いたぞ、パベル・バラハ！」

地面へ着地し、手応えが無かった事にパベルは悪態を吐く。あの時

もう一つ〈武技〉を発動させれば倒せぬまでも多少の傷を付けられただろう。しかし、〈武技〉とて無限に使えるワケでは無い。今のパベルの体力と集中力を考えれば、良くてもあと2つが限界だった。ここぞと言う場面でなければもう〈武技〉は発動出来ない。

間髪入れずにバザーが大剣を振り上げて大地を蹴り、一気にパベルとの距離を詰める。背後へ跳躍して躲す彼をバザーは動きを読んでいたかの如く追撃をして来る。

「〈盾突撃〉！」

再びバザーが大盾を構えて突進して来た。

パベルは咄嗟に真横へ飛んで地面へ転がり、何とかやり過ごす。しかし、体勢を立て直すよりも早く、バザーが追加の〈武技〉を発動させて瞬時に追い打ちを掛けてきた。

そこへ2体の守護の天使がバザーの前へ立ちはだかる。奴にとつては何ら障害にはなり得ない雑魚であつても、一瞬でも気を逸らす事が出来ればパベルにとって優秀な盾役となる。

軽々と振るわれた大剣によって2体の守護の天使は消滅した。だが、バザーの先に居たのは距離を取り、弦を限界まで引いていたパベルの姿だった。

「シィツ!!?」

パベルの矢が離れたのと、バザーが大剣「砂の射手」サンドシューターを発動させたのはほぼ同時だった。目の前に現れた砂塵嵐の壁により、パベルが放った矢は阻まれてしまった。

舌打ちしたパベルは再び距離を取るべく、懐から煙幕の効果を持つ小袋を取り出す。しかし、砂塵嵐の壁からバザーが大剣を振り上げて迫っていた。

「〈素気梱封〉〈剛撃〉」

バザーが発動した〈武技〉により強化された強烈な一撃を、パベルは反射的に抜いた短剣で奇跡的に防いだ。だが、その勢いまで殺す事は流石に出来ず、そのまま十数メートル先まで吹き飛ばされてしまふ。

ゴロゴロと地面に転がって行く姿にバザーは舌舐めずりした。

「フハハハハー、今度こそトドメだ!!!」

バザーは大剣を引きながら駆け出した。地面に倒れ伏す彼に、その大剣を胴体に突き刺そうと考えていたのだ。彼との距離があつという間に縮まり、ピクリとも動かないパベルへ向けて大剣を突き刺そうと腕を伸ばす。

「〈痛覚鈍化〉〈肉体向上〉」

「なにイ…!?!」

大剣に突き刺さる瞬間、跳ねるように身体を起こしたパベルが血だらけの顔であつてもその凶眼で見据えながら弓を引き構えた。

バザーの身体能力を以つてしても避けるのは不可能な距離だった。

「〈超強射〉!!!」

命を落とす覚悟で3つめの〈武技〉を発動し、弦から指を離した。極限まで強化された彼の矢はバザーの胴体へ迷う事なく突き刺さった。

「がはッ……!」

驚愕に目を見開きながらバザーはその場に倒れた。一方、倒れたバザーをふらふらになりながらも見下ろすパベル。

「や、やった…のか…?」

「お、おおおおお!!!」

「ば、バラハ兵士長が…バザーを討ち取ったアアー…!!!」

勝敗は決した。

聖騎士や神官団達は自分達の確たる勝利に歓喜の雄叫びを上げる。山羊人達は自分達の王が敗れた事に混乱し、戦意は削がれかけていた。

「ふ、フフフフ…流石だなあ、パベル・バラハ」

聞こえてきたのは間違いなくバザーの声だ。しかし、彼は胴体を矢で射抜かれて倒れている。そんなワケが無い、と皆がバザーの死体に視線が集まる。

だが、バザーはゆっくりとその身を起こし立ち上がった。彼は死んでいなかったのだ。

「ど、どういう…!」

驚愕と混乱、そして絶望感に吞まれたパベルはこれまでの蓄積したダメージや疲労が一気に身体全身に降り掛かり、力無くその場へ倒れてしまうが、その目は今も仕留めたと思っていた敵の大將を見上げていた。

「先の不意打ちは見事であったぞ。流石に俺も死を覚悟した、だが最後はコレに救われたな」

そう言うバザーは自身の鎧を撫でた。

パベルは目を見開いた。突き刺さったと思っていた矢が刺さっていなかったのだ。矢はいつの間にか地面に鏝が欠ける事なくポトリと落ちていたのだ。

「まさか…マジック…アイテム…だったのか」  
「そういうことだ。コイツは射撃武器の威力を激減させる効果があるのだ。攻城用のバリスタでもコイツには通じんぞ、フハハハハハハハ!!!」

勝ち誇り高笑いするバザー、起き上がることも出来ず、ただ地面に倒れ伏すだけのパベル。先程とは真逆の光景に、聖騎士や神官団達は絶句し、山羊人達は再び殺意が戻り始める。

「さて、パベル・バラハよ。お前は人間にしては良くやった、山羊人の王であるこのバザーが誉めて遣わずぞ」

バザーは大剣の剣先をパベルへ向ける。慌ててイサンドロが駆け付けようとするが、無数の山羊人達によって防がれてしまう。

今度こそ自身の最期を悟ったパベルは、心の中で鈴木悟に感謝した。

(貴方がいたからこそ、死ぬ前に娘と仲直りする事が出来た。再び家族団欒の幸せを噛み締める事が出来た…貴方に会えて良かった)

パベルは静かに瞳を閉じた。

せめて最期は友を思い、感謝しながら迎えたいと言う彼なりの我儘である。

そして、バザーの大剣が自身の体を貫く――

「な、何だツ!？」

――事は無かった。

突如として聞こえた轟音と大地が揺れる衝撃、舞い上がる土煙の

中、バザーが大剣で突き刺すのを止めて狼狽える声が聞こえる。

「な、何事だ？」

パベルは薄れゆく意識の中、再び瞳を開ける。

誰かが倒れ伏す自分に背を向けて立っているのが分かった。彼は視線をゆっくり上へ向けた。

真紅のマント。

漆黒の全身鎧。

大剣を右手に持ち、そして大地に突き刺さっている大剣を左手で引き抜く男。

「クズ野郎…俺の友人を傷付けてタダで済むと思うなよ」

荒げた声では無い、静かな彼の呟きだが、確かにそこには計り知れない怒気が込められていた。

「申し訳ありません、バラハ殿。少し予想外の事が起きた為、遅くなつてしまいました」

「いいえ…かたじけない、モモン、殿」

安堵感によりパベルはそのまま気を失った。

意識を失う前、彼が霞む視界で見た彼の後ろ姿は間違い無く…『漆黒の英雄』そのものだった。

◇

大分手こずったが、漸く首級であるパベル・バラハを仕留め、この戦いに於ける勝利の雄叫びを上げようとしていた矢先に現れた謎の人物に、バザーは困惑と同時に強い苛立ちを覚えた。

そして、目の前の人物が只者で無い事も戦士としての直感ゆえ気付いてもいた。

「貴様あ、何者だ？」

「…ローブル聖王国のオリハルコン級冒険者『漆黒』のモモンだ」  
「オリハルコンだと…？」

バザーは少しだけ目元を歪め怪訝な視線を向ける。彼の知識によれば聖王国に存在する冒険者の最高ランクはミスリル級であると認識していたからだ。だが、この状況で彼が虚言を言っている風にも見受けられない。

「なるほど、確かにオリハルコンだな」

彼はモモンの首に掛けられている冒険者プレートへ目を向ける。そこに掛けられたプレートは間違いなくオリハルコンだった。

「つい最近昇級した冒険者というわけか。なるほど、それなら俺が知らなくとも無理は無い」

バザーは自身の推察に納得した。

これは持論だが、一族の王を名乗る者は武力だけで無く情報力と言う面でも優れていなければならないと考えている。そして、この丘陵地帯であるアンデッド騒動以降、積極的に行動をしているのは自分達山羊人のみである為、新たに現れたモモンなる脅威を知るのも自分のみ。

これを利用しない手は無いとバザーは思った。

（ここでヤツを我が同胞たち、そして、人間どもの前で一对一の対決の上で仕留めることが出来れば、『九色』を2人討ち取るだけで無く、聖王国最高位冒険者の首級ともなれば…フッフ、我ら山羊人こそ最も強く優れた種族である確たる証明になるな）



加えて自身の地位を狙う部下たちへの良い牽制にもなる。愚かにも分不相応な地位を狙う不屈き者を抑え込む意味でも良い案である。

「おっと、名乗るのが遅れたな。俺は誇り高き山羊人の王、『豪王』バザーだ」

「…そのようだな」

モモンは右手に掴む大剣をバザーへ向けて話し始める。

「我が友を傷付けた罪を悔やみ許しを請うか？　それともここで死ぬか？　好きな方を選ばせてやる」

「ハッ笑止！　王の名にかけて、平伏するのは一度で十分だ」

バザーがモモンの言葉を鼻で笑い、大盾を前に出して身を構える。モモンは右手の大剣をゆつくりと下ろし、それ以上は何も発する事は無かった。

「覚悟を決めたか？　では行くぞオ!!？」

声を上げてバザーは〈盾突撃〉の武技を発動させてモモンへ突っ込んだ。並大抵の戦士がまともに受ければ全身の骨が砕かれかねない突進攻撃を、モモンは2本の大剣をバツ印の様に構えて受け止めた。しかし、流石に止めるまではいかず、受け止めきれなかった勢いを背後に飛び退く事で殺し、難なく両の足で着地する。

「ほう。やりおる」

バザーは驚くことなくモモンに賛辞を送り、大地を蹴って振り上げた大剣をモモンへぶつける。対してモモンも振るわれた大剣を受け取るべく自身の大剣をぶつけた。

「ハーツハツハツハツ!!! 素晴らしい、素晴らしいぞ、モモン!!?!」

両者一步も譲らない、大剣同士を激しくぶつけ合う攻防。周りの聖騎士達や山羊人達も互いの各々の戦いの手を止め、その行く末を固唾を呑んで見守っていた。

だが、高速でぶつかり合う攻防戦の優劣は意外と早く見え始めた。バザーが徐々に押され始めたのだ。最初は笑っていたバザーの顔も今では余裕の表情はカケラも見えず、表情は苦悶に歪み始めていた。

「ぐ、ぐう!...ま、待て...ちよっ...!」

遂に大剣を振るう腕力に限界が来たのか、大盾を構え受け止め続けるだけになってしまった。拳句、攻撃を止めるよう情けない言葉が聞こえる。しかし、モモンは一言も発さず、息一つ乱れる事なく、容赦なくバザーが必死に身を隠し構える大盾に向けて、ワザと大剣をぶつけ続けていた。

「お、のれえ...!!? <砂塵嵐>！」

堪らずバザーは大剣に込められた魔法を発動させて、彼との間に大きな砂嵐の壁を発生させる。僅かだが、動きに隙が見えたのを逃さなかったバザーは直ぐに後方へ飛び退き距離を取った。

「<素気梱封>!!? <剛腕剛撃>!!?」

長期戦は不利と判断したバザーは一気にカタを付けるべく<武技>の重ね掛けを行う。仕掛けるのは自身の切り札とも言うべき<複合武技>である。

「かああああ!!!」

跳躍し、砂嵐の壁を突き抜け、その先にいるモモンに向けて最強化したとっておきの一撃を食らわせる。

「フンッ!!」

モモンはそれさえも2本の太剣で受け取める。ぶつかる金属同士の大げんか轟音。それはとても金属同士がぶつかり合って生まれる音とは思えない程の激音と衝撃だった。

「ハハア!!? やはり受け止めると思ったぞ!!」

バザーが勝利を確信した声を上げる。

これこそバザーが狙っていた一撃〈武器破壊〉である。〈武器破壊〉は相手の武器そのものに直接ダメージを与え文字通り破壊する彼の切り札だ。

しかし、いつまで経ってもモモンの太剣が砕け散る様子も無ければ、ヒビの一つも現れない。

「なっ、なぜ武器が砕けない!?!」

バザーは驚愕に目を見開き、自身の攻撃を受け止めている相手の太剣を見た。彼はこれまで幾つもの相手の武器を破壊してきた。それも砕いた武器を自身のコレクションにするほどに…だが、砕けないどころか、ヒビも入らず欠ける事すらないなど今まで一度も無かったのだ。

「そ、その武器は…何なんだ…一体…?」

「何だ? もう奥の手はお終いか?」

モモンは大剣を巧みに捌き、バザーの大剣を弾き飛ばした。腕力の疲労に加え〈武技〉の重ね掛けも相まって、彼の手から大剣はいとも

容易く飛ばされた。

「ああッ！」

情けない声を上げるバザーに向けて、モモンは片方の大剣を振り下ろした。バザーの右腕の肘から先が見事に斬り落とされると、夥しい量の血飛沫を流し、悲痛な絶叫が響き渡る。

「ぎいやああああー！！！！」

バザーは斬り落とされた右腕を押さえながら無様に地面をのたうち回る。

「何だ？　誇り高き山羊人の王は…『豪王』と謳われる『十傑』の一人は…この程度なのか？」

モモンは血が滴る大剣を地面に向けて下げながら、ゆっくりとバザーの下へ歩み寄る。

「ヒイイ！　ひ、ヒイイ、ゆ、許し、許して！」

「何だ？　降参か？」

「す、するする！降参する！するッ！するッ！！？」

モモンから少しでも逃れようと後退りながらバザーは必死に命乞いをしていた。その姿はとて『豪王』とは思えないくらい哀れであったが、それでもモモンの歩みは止まらない。

「命を奪うなら…自らも奪われる事も覚悟しなければならぬ。そうは思わないか？」

「は、はひい！　お、思う、あ、いや！　思います！」

「お前はバラハ殿…私のかげがえの無い新たな友の命を奪おうとした

ではないか？」

「そ、それは…わ、悪かつ、いや、申し訳なかった、です！ 私が無  
か、で、でした!!? ど、どうか慈悲を…じ、慈悲、を」

バザーは自らの鎧やマント、大盾を脱ぎ捨てて完全に抵抗の意志が  
無い旨を必死に伝える。

必死に命乞いをする自分達の王を周りの山羊人達は、不思議と彼を  
侮蔑する気は何ひとつ湧かなかつた。それよりも彼に対する哀れみ  
の方が勝り、そして、そんな彼に一步ずつ歩み寄るモモンに対し本能  
的な恐怖心を抱いていた。

その中の誰かは思った。

我らが王に迫るアレは…『死』である、と。

「そ、そうだ!!? な、何か欲しい物は!? お、俺が、か、必ずア

ンタの、いや貴方様の欲しい物を見つけて、け、献上いたします!!?

だ、だからどうか…ど、どうか…」

「欲しい物…だと?」

その言葉に僅かだがモモンは反応する。

必死に生き残る道筋を探っていたバザーはその反応を見過ごす筈  
が無かつた。

「はいい!!? こ、う見えて、俺は、色んな財宝、あ、マジックアイ

テムも、持ってます!だ、だからその中にきつと、貴方様のお気に召  
す物も—」

「そんな物…」

「…へ?」

僅かに見えた光明の一筋に全てを賭けた。

しかし、それは大きな間違いだった。

「そんな物…貴様如きが決して持つて来れるような物では無い!!!」  
「ヒイヒイヒイ!!!殺さないでエエエエ!!!」

大地を揺るがす怒号と共に一気に溢れ出るモモンのへ絶望のオーラⅡがバザーと山羊人達へ容赦無く襲い掛かる。バザーはこの世の終わりの様な悲鳴を上げ、周りの山羊人達は我先にと武器を投げ捨て、自らの王さえも見捨てて逃走を始める。

モモンは怒りに任せて振り上げた両の大剣を、顔と下半身から様々な液体を垂れ流し絶叫するバザー目掛けて振り下ろした。

刹那、彼の脳裏にパベルの姿が過ぎった。同じくして「精神抑制化」が発動し一瞬で冷静さを取り戻す。

鳴り響く轟音と地響き、水柱ならぬ土柱が舞い上がった。それだけでモモンの振るった両大剣の一撃が如何に強力であったのかが分かる。

「も、モモン殿……」

一連の出来事をただ見守る事しかできなかつたイサンドロ達は、山羊人が敗走した事による勝利を喜ぶ暇すらなかつた。

未だ吹き荒れる土煙の中からモモンが歩み出てきたのを見て、漸く我に返る。既に2本の大剣は背中に仕舞われていた。

「バラハ殿は？」

「ご、ご無事です。今は気を失っておられますが…」

「そう、ですか…」

つい先ほどまでの怒りが嘘のように彼の言葉は穏やかだった。そして、パベルが無事である事を知ると安堵の息を漏らす。

「あつ、ば、バザーは!?!」

慌ててイサンドロがつい先程までバザーが居た場所へ再び目を向ける。あの一撃を喰らって仕舞えば流石に『十傑』とて五体満足とは言えないだろう。既に片腕を斬り飛ばされてはいるが…。

土煙が晴れるとそこには仰向けで倒れているバザーがいた。しかし、斬り落とされた片腕以外はどこも無事な状態で、仰向けに横たえる彼の直ぐ近くの地面には大きな窪みがあった。

よく見るとピクピクと動いている。

さらには斬り落とされた片腕からの出血も無く、傷口も塞がっていた。

「い、生きてる…殺さなかったのですか!？」

彼の行動に驚いたイサンドロが慌ててモモンへ顔を向ける。

「ええ。ヤツを殺すより生かしていた方が色々都合が良いと判断しました。確かに許されざる者ではありません。しかし、だからこそ、敢えて生かしておくべきだと思います」

「ツ…い」

イサンドロは彼の意図を瞬時に理解した。

要するにバザーはアベリオン丘陵に跋扈する他の亜人部族に対する宣伝係、伝言板にしようと言うのだ。己を圧倒したモモンと言う存在が明るみになれば、再び活性化し始めている連中は警戒心を抱く事となり、その活動を大きく阻害することに繋がる。また、『九色』とは違う、新たなモモンと言う脅威を知らしめる事で抑止力にもなる。

彼はカンパーノが抜けて弱体化した『九色』、そしてこの国の戦力を思い敢えて自らの怒りを無理矢理抑えてくれたのだ。

(何ということだ。モモン殿はそこまでこの国の事を考えてくれていたというのか…!)

彼の強さ、思慮深さにイサンドロは感動した。そして、今も傷付き倒れている聖騎士や神官達へ駆け寄り、ポーシヨン（らしき物）を分け与えている。

（ああ…いつその事彼が新たな『九色』に就いていただけたら、どれほど心強いことか）

イサンドロは将来の聖王国を護る『九色』の姿に思い耽った。そのあまりにも頼り強い未来の光景は、決して夢物語では終わらないだろうと言う謎の確信を抱いていた。

聖王国の未来は明るい。

彼とその場にいた聖騎士団達は瞬く間に彼の虜になっていた。

その後、調査隊は何とか1人も欠けることなく任務を終えて帰国する事が出来た。イサンドロ達は顛末を全て上へ報告し、色んな意味でその場は大騒ぎになり、やがてそれは冒険者組合へ、そして、首都ホバンスからモモンが拠点にする城塞都市カリンシヤにまで及ぶ事となる。そして、モモンは衝撃的な言葉をカリンシヤの冒険者組合長から受けることとなった。

ローブル聖王国史上初となる  
アダマнтаイト級冒険者

『漆黒』のモモン

この情報は諸外国へ一気に広まった。



## 第23話 想定外の遭遇

◇

時はモモンが山羊人の隊長クラスを仕留めた頃にまで遡る。彼はこの世界に来て初めて己の素性を知った上でも受け入れてくれた、友人と言える存在のパベルの事が気掛かりだった。

(さて、他の雑魚もいなくなった事だし。早くパベルさんの所へ駆け付けなと)

調査隊の本隊へ山羊人の集団が急襲を仕掛けてくる旨を伝えるべく、モモンはこの場からパベルを逃していた。しかし、やはり気掛かりなのは本隊が居る野营地である。モモンは山羊人の主力部隊にバザーがいると睨んでいたからだ。バザーがどの程度の強さなのかは分からない。しかし、少なくともレベル20半ばのパベルが警戒する程の相手であれば少なくとも30は下らないだろう。

相手がモモンなら何の問題もなく仕留める事は出来る。しかし、パベル達のようなこの世界基準のレベル程度しかない存在にとってはやはりかなりの脅威となり得るのは間違いない。

(その前に、先ずはこの近辺にもう山羊人達が潜んでいないか入念に確認しておかないとな。問題ないとは思うけど、面倒な芽は早めに摘んでおいた方がいいだろう)

尤もその前にモモンがへ絶望のオーラⅡを発動させた時に大半が一目散に逃げ出して行った為、伏兵の心配は杞憂に過ぎないと思っていた。しかし、念には念をと言う。

早速、モモンは自身が覚えている限りでは上位の探知系魔法の1つを発動させて、周囲の索敵を始めた。

「…誰か居る?」

早速、感知した事に内心驚くと共に、此処から多少離れた場所に潜んでいるのを確認する。動物か或いはモンスターの類かと思っただが、明らかに此方の様子を伺いながら息を潜めている姿をしていた為、この辺りに住まう亜人か何かだと判断した。

モモンは続け様にフローティング・アイ〈浮遊する視界〉を発動させて、感知対象が潜伏している場所まで文字通りに視界を飛ばす。

(うーん、見るからにアンノウアップル〈不可知化〉を使ってるなあ)

彼は視界に捉えている存在を見ながら心の中で呟いた。〈不可知化〉は〈不可視化〉の上位互換であるが、モモンがよく使うパワフェクト：アンノウアップル〈完全不可知化〉の下位互換でもある。相手が何者であれ、本気で気付かれずに此方を探るつもりなら、〈不可知化〉程度の魔法を使うなど先ず考えられない。

(となると、コイツは〈完全不可知化〉を使えない。〈不可知化〉しか使えないと見るべきか。でも〈不可知化〉の習得レベルは60だったはずだ)

もし視界に映るコイツが純粹に〈不可知化〉を発動出来るのだとするなら、この世界基準で見ても破格の強さを持つ存在であり、自身にとっても脅威となり得る存在でもあると言うことになる。

「…敵か味方か。まあ覗かれている側としては、良い気分ではないな」  
覗き魔は此処から少し離れた先にある木の陰に隠れているのは既に判明している。

普通に此方から出向いては逃げ出してしまうのは何となく察しがつく。ならば逃げる暇すら与えなければいいだけの事だ。

少しだけ相手の度肝を抜く事にしよう。早速モモンは転移の魔法

を使い、覗き魔の背後へ移動した。無論、あらゆる不測の事態を想定した補助パフや罫は設置済みである。

（相手も敢えて〈不可知化〉しか扱っていない可能性だってある。少なくとも今回は情報収集のみに専念して、次回か…いや、そのまた次回で確実に勝てるようにしておかないとな）

少なくとも相手が仮にガチビルド構成のプレイヤー並みであったとしても逃げ切るくらいの準備はしている。情報収集に専念しようと心に決めた。

モモンは別段、戦闘狂ではないのだが、こういった身体を張った情報の探り合いのような展開は結構好きだったりする。

「グレイター・テレポーション  
上位転移」

瞬く間に覗き魔の背後から少しだけ離れた位置へと移動した。モモンは自身が行使出来る隠密系魔法の中でも最高位である〈パーフェクト・アンノウアブル完全なる不可知化〉は使わず、漆黒の全身鎧で仁王立ちの状態だ。此処で下手に手の内を曝け出しては不利になるのは此方なので敢えて姿は晒しておく。

覗き魔は直ぐに視界の先にいた自分が消転移したえた事に少しだけ動揺していた。その後、直ぐに背後の気配を察知したのか此方へゆつくりと振り返る。

（意外と落ち着いてるな。それなりに場数を踏んでると見ていいかも知れない）

覗き魔は声を上げるでも慌てふためくでもなく、此方へ視線を離さないままゆつくりと足音を立てずに忍び足で移動する。モモンは彼の動きに合わせて顔を動かした。

当然これは相手の姿は此方には分かっていると言うあからさまな

アピールでもある。もし相手が〈完全不可知化〉などの隠密系のスキルや魔法を隠し持っているのなら、頃合いを見て使うだろうし、無ければ別の手段を取るか若しくは戦うかを選択するだろう。尤も、これは何方にしても相手が更なる奥の手を使わざるを得ない状況へ持つていくモモンの策でもあった。

(ツ!!?)

姿がバレている事を察したのか、覗き魔はこれ以上動かずにアツサリと〈不可知化〉を解いてしまった。赤色の全身タイツに鎧を付け、更に複数箇所金属板を付けたアサシン風の男性らしき人物が姿を現した。

「……む?」

モモンはこの時、姿を現した覗き魔の装備を見てある違和感を覚えた。いや、違和感と言うよりデジャヴに近い。

(この世界では異質でも『ユグドラシル』ならよくある様なデザインの装備……もしかしてアレって)

モモンが気が気でない心境など他所に覗き魔が先に2人の間にあ  
る沈黙を破った。

「なるほど。これ以上は無意味という訳か。やはりあの時から気付いていたのか。末恐ろしいぜ、全く」

(『あの時から?』…あー、山羊人と戦っていた時からって意味か。そうか、あの時点で既に見られていたのか)

モモンは自らの迂闊さに改めてため息を吐きたくなる。しかし、相手は情報収集系の魔法やスキルを使ったワケではないので、モモンが

仕掛けていたカウンターが発動しなかったのも十分頷ける。今後は探索に長けたアンデッドを喚んで定期的に周囲を探らせる方が良いかもしれない。

覗き魔の男は両腕を上げてヒラヒラと手の平を動かした。

「まず初めに言っておく、俺はお前と敵対する気は全く無い。俺の十八番が効かないんじゃないやどうしようも無いしな」

「ほう。潔いんだな」

「事実だからな」

覗き魔の男——漆黒聖典第十二席次「天上天下」は肩を軽く竦めた。彼がここに居る理由は、言わずもがなローブル聖王国で久方ぶりに現れたオリハルコン級以上の冒険者である『漆黒』のモモンの情報収集である。彼の数々の偉業が果たして嘘か実かを確かめるべく、スレイン法国は特殊部隊『六色聖典』の中でも最強の部隊『漆黒聖典』に調査任務を下命していた。そこで、調査任務に派遣された隊員の中で最も隠密能力に長けた「天上天下」が主に行動をしているのだ。

彼は今まで多くの任務をこなし、当然数え切れないほどの場数を踏んでいる。自身の隠密能力に高い自信を有してはいるが慢心は無い。実際、彼の姿を見破れる者がいない訳ではないのだから。そして、その数少ない見破れる者の1人にモモンも含まれる可能性が高く、それは今しがた確信へと彼の中で変わった。

元々、モモンが何かしらの方法で此方に気付いたのであろう様子は今回の公道調査依頼の打ち合わせの際にあり、その時点でこれまで以上に警戒して尾行を続けていた。しかし、それも見破られてしまった。

(何らかのマジックアイテムか、それとも奴が持つ生まれながらの異能か。どちらにせよ、俺に取っては厄介が過ぎる)

逃走に専念すれば逃げきれなくもないだろうが、彼の力は未だに未知数な所が多く確信は無い。戦闘面に関しても「天上天下」自身、多

少腕には自信はあっても所詮は隠密職だ。モモン程の実力者を相手に戦い勝てる見込みがあるとは到底思えなかった。

下手に怪しい動きを見せたり、生半可な敵対行為ではかえって相手が強い警戒心を抱く事となりかねない。彼らの任務はモモンの調査であり、抹殺では無いし、そもそも此方からの接触は控えるべしとの命令である。そもそも本国が余程の事情が無い限り、戦闘行為も含めた彼との接触は許しはしない。当然、緊急事態は除いてだが、今がまさに緊急事態だ。しかし、この状況での戦闘行為が得策とは「天上天下」は思っていないかった。

では何が最善か。

「天上天下」が選んだのは『降参』である。

「敵対の意思はない、か。まあ此方としても争いは望んではない。だが、此方の問い掛けに幾つか答えてもらいたい。状況が状況だから手短にすませる」

「了解した。だが俺自身も答えられない事も多いから、そこは理解して貰えると助かる。俺にも立場ってモンがあるしな」

「…いいだろう」

モモンの言葉に「天上天下」は頷いた。半分賭けに近かったが、やはり彼は話し合いに応じられる理性的な人物らしい。

「先ず、お前は何者だ？」

普通に考えれば当たり前の疑問をモモンは問いかけて来た。そして、そこそが厄介な内容である。「天上天下」は必死に脳裏で考えた上で答えた。

「スレイン法国の者。それしか答えられない」

「天上天下」は何処の人間であるのかは答えることにした。しかし、

その国の何処に所属しているのかについては答えるつもりは無い。少なくとも法国は遅かれ早かれ彼と接触する必要がある筈であるから、スレイン法国の者である旨は伝えても問題無い筈だ。

「スレイン法国？ 聖王国の隣国が何故私を嗅ぎ回る」

「アンタの功績が聖王国だけで拡まってると思ってるなら大間違いだ。既に俺らの国は勿論、王国や帝国にだって、アンタの名前は届いてる」

「え？ そうなの？」

「なんだ知らないのか？ 王国の貴族あたりから是非お会いしたい。みたいな手紙とかは届いているんじゃないのか？」

モモンは腕を組んで首を傾げながらこれまでの冒険者稼業の記憶を思い出していた。しかし、生憎とそんな話や手紙が来た試しは一度も無い。

「いや、そう言った…と言うよりも、他国から手紙が届いた事は一度も無いな。言われてみれば、聖王国でもお偉いさんからの依頼や謁見の話とかもあまり無いな」

「天上天下」は彼の言葉に違和感を覚える。普通に考えれば短期間でオリハルコン級にまで到達した冒険者が現れたとなれば、貴族やらが接触を凶ってくる筈なのだ。それも数十年間ぶりに現れたオリハルコン級冒険者ともなれば尚更である。

素顔は兜で隠されている為、伺うことは出来ないが彼の仕草を見るにどうにも虚言を吐いてる様にも見えない。

(なるほど。聖王国が彼に他国へ関心を向けさせない為に裏で動いていたと見るべきか)

どうやら聖王国は何がなんでもモモンを手離す気は更々無いらし

い。それにこの国の現状を踏まえると、南部から届く彼宛ての手紙にも入念な監査が入っていると見て良いだろう。

一方のモモンは彼の思案など気にも留めずに「自分ってそんなに興味無いのかな」と勝手に地味な傷心に浸っていた。やがてこれ以上自虐的になるのは良くないと思ったのか、再び「天上天下」への質問に切り替わる。

「お前が使っていた<sup>アンソウアップル</sup>不可知化は魔法か？　それともマジックアイテムか？」

少しの間を置いて「天上天下」は話した。

「悪いがそれは答えられない」

「そうか。では、お前の名前は？」

「それも言えない」

「ふむ。他に仲間は？」

「残念だがそれも言えない」

「なるほど。まあ答えられないのも無理はないか。恐らく法国から密命を受けていたのだからかな」

「悪いな。だが、何度も言うようだがアンタと敵対する気は全く無い。これは本当だ」

モモンは腕を組んだまま考えた。恐らく彼に敵対の意思がないのは本当だろう。もし、敵対する気があるのなら、何処かに潜んでいるかも知れない仲間と共に何かしらのアクションは起こしている筈だ。しかし、まだ油断を誘うため潜んでいる可能性も否定出来ない。

それに彼に仲間がいる可能性も当然高い。近くに居るかどうか微妙だが、国の密命を受けているであろう人物が単独で動くとなれば諸々の事情を考えてもかなり効率が悪い。故に単独である可能性は低いと見て良いだろう。

彼自身の実力に関しては不可知化を魔法かスキルで使っている



なら少なくともレベルは41以上と分析して良い。しかし、マジックアイテムによるモノであれば何とも言えない。

(あーでも、扱える魔法やスキルを基準にレベル分析して鵜呑みにするのはあまり良くないよなあ)

『ユグドラシル』では見た事のない武器や儀式魔法などと言うモノがある位だ。何でもかんでもそうやって分析して決め付けるのは命取りになりかねない。

「それからその装備、なかなか珍しいモノを持ってるな。それは法国でもかなりの一級品なんじゃないのか？」

モモンが彼を見て真っ先に聞きたかった質問だ。彼の記憶が正しければ『ユグドラシル』で見たことのあるアサシン職専用の装備品である。

「悪いがそれも答えられねえ」

案の定の答えが返ってくる。

モモンが聞きたい質問は粗方終えたが、やはり殆ど答えてくれなかった。しかし、念押しに敵対意思はない事を伝えてくるあたり、本当に敵では無いのかも知れない。

(少なくとも「今は」が正しいか)

楽観視するつもりは無いが急いで突っかかっても下手に相手を刺激するだけである。モモンとしては冒険者ロールプレイを邪魔さえしてくれなければそれで良いと考えていた。

無論、彼らの監視が度を越えなければに限る。

「此方としては、そつちからの手出しさえなければ、法国がどうしよう  
と知ったことでは無い。当然、法国へ拠点を移す気は少なくとも今は  
無いと捉えて貰って構わない」  
「なるほど。理解した」

嘘偽りないモモンの訴えに「天上天下」は頷いた。返答は肯定では  
なかったが、少なくとも此方の意思は伝わったのだと信じたい。

すると、野营地の方から一際大きな衝撃音が聞こえてきた。どうや  
ら少し話をし過ぎてしまったらしく、モモンは心の中で舌打ちをして  
「天上天下」に背中を向ける。

「悪いがこれ以上は話す時間は無い。これで失礼させてもらおう。次か  
らは監視ではなく、普通に訪問してくれた方がコツチとしては助か  
る」

「…善処はするよ」

少し引つ掛かる言い方ではあったが気にする時間は無い。そうこ  
うしている間にも調査隊は山羊人の軍勢と戦っているのだ。もたも  
たはしていられない。

調査隊に多少の受傷者が出たとしても、モモンの無限の背負袋に  
はまだ下級治癒薬の予備は沢山ある為、神官達の治癒魔法で間に  
合わない分は惜しみ無く使うつもりではある。しかし、既に死んでい  
る者に対してモモンが出来る事は非常に限られてくる。

先ずモモンは種族がアンデッドであり、死霊系特化の魔法詠唱者で  
ある為、〈死者蘇生〉レイズデッドや〈蘇生〉リザレクションと言った信仰系魔法を行使するこ  
とが出来ない。他に蘇生する方法が無いわけではないが、非常に限ら  
れている。

一番はポーシオン類で済むことだ。

モモンはグレート・テレポーション位転移を使つて一気に野营地まで移動した。

その光景を間近で見ていた「天上天下」は声にもならない声を微か  
に漏らしながら驚嘆する。

「<sup>テレポーターシヨン</sup>へ転移」だど!? おいおい：第五位階魔法まで扱える戦士とか  
アリかよ」

本来であればこのまま彼の跡を追い、野営地での戦闘を観察するべきなのだが、普通にバレてしまった上に、「これ以上の監視はするな」と言われてしまえば下手に監視を続けるのは危険だ。

自分達に対する彼の印象が最悪なものになってしまいうリスクは冒せない。

だが、収穫があった。

「天上天下」は純戦士系の様に動きだけで相手の技量や強さを測る術に自信は無いが、少なくとも英雄級に匹敵する亜人を圧倒する実力と目撃したのはへ転移」だけだが、第五位階魔法を行使出来ることは判明した。

（『漆黑』のモモン：知れば知るほどトンデモない男だ。「一人師団」にもあとで無闇矢鱈に梟を飛ばさないよう伝える必要があるな）

対面し、話し掛けて改めて解ることもある。

彼の名と武勇は更に近隣諸国へ広まるのは明白だ。そして、益々諸外国は彼を欲しがり、聖王国は更に彼を手放さないだろう。

良くも悪くも彼は台風の目となる。

故に――

（是非とも人類守護の為、法国へ来て頂きたいものですね）

遙か上空を優雅に舞う真紅クリムゾン・オウルの梟を通して、一部始終を把握していた「一人師団」ことクアイエッセ・ハゼイア・クインティアは拠点としている宿屋の一室で静かに思索していた。

◇

「ささ、どうぞどうぞ！　　ごゆるりとお寛ぎ下さいませ、モモン様!!  
？」

「…いえ。お構い無く」

見事に公道調査隊の護衛依頼をこなしたモモンは、首都ホバンスに  
数日ほど滞在する事となっていた。

(うう…漸く慣れたと思ったけど、やっぱりこういうのは慣れない  
なあ)

モモンは戻って早々、ホバンスで最も高級な宿屋へ半ば強引に連れ  
て行かれていた。そこに出迎えてきた高級宿屋の案内人により、最も  
豪華な部屋へ案内された。彼の手慣れたおべっかは正直ちよつと引  
くレベルである。

明らかに調査隊の誰かがへ伝言か或いは早馬で知らせたのだろう。  
国の依頼をこなしたと言えど、ここまで高待遇にするのはやはり理  
由がある。

それも想定外の理由だ。

(バザー、だっけ？　『十傑』の1人を倒したのがやっぱり大きかつ  
たみたいだなあ)

モモンの読みは大正解である。

山羊人の軍勢による奇襲、それを指揮する『豪王』バザーの討伐。  
現在、国は調査隊からの調査報告を精査しまとめている状況である  
為、正式な発表こそまだ少し先にはなるものの、聖騎士団副団長イサ  
ンドロ・サンチエスと兵士長パベル・バラハラ『九色』が内の2人を  
筆頭に、調査隊全員から同じ旨の報告が上がっていた。

ここまで来れば単に金銭の支払いだけで済ませる訳にはいかない。  
しかし、祝杯を上げるにもその準備する時間がない。この首都で最高  
級宿へ招待する他に方法は無いのだ。無論、宿代など諸々の経費は国

が持つし、正式な祝宴はまた後日となる。

絶賛面倒臭いイベントが立て続けに起きる準備が大急ぎで進められている事に気付かぬまま、モモンは一先ず適当な机の上にバザーから剥ぎ取った装備品を並べ置いた。

因みにバザーの装備品の殆どはマジックアイテムなのだがイサンドロたち曰く、「討ち取ったのはモモン殿なので所有権はモモン殿にあります」とそのまま貰い受ける事となった。

これには色々な事情があるのだが、取り敢えずは割愛とさせて頂く。

(フッフ。何だかんだ言っても、アイテム収集は楽しいんだよな)

収集家魂コレクターに熱が入るモモンは、たとえ大した効果も無いゴミアイテムであっても、ユグドラシルには無かったアイテムを入手するのは非常に楽しいと感じていた。

可能ならもつと自由に世界を旅して、前人未踏の秘境や摩訶不思議なダンジョンなど、ユグドラシルとはまた違う冒険を楽しみたい。しかし、どういうわけかそれが出来ない状況になってしまっている。

「…あつ、アイテムと言えば」

ジワジワと憂鬱になる気持ちを振り払い、モモンは無限の背負袋から数種類の消費型マジックアイテムを取り出した。

今となつては希少なアイテムばかりである。

「中級〜下級アイテムはまだあるとして、上級以上のアイテムは心許ないなあ」

モモンは不安げにため息を吐く。特にレアリティの高い消費型アイテムを見てより一層不安が募る。

ユグドラシルなら適当な店や町、或いはフィールドを探索などすれ

ばそこまで苦勞せずに入手できるのが大半だ。しかし、ここは異世界であり、この世界で作られるアイテムなどは基本的に性能が頗る低い。そのくせ高い。

たとえ下級であってもユグドラシル産のアイテムは此処では未知の領域に属する最高品質。その最たる例が下級治癒薬のだが、要するにユグドラシル産アイテムに匹敵する代物は2度と手に入らない事が問題なのだ。

「不味いよなあ。結局、バザーを倒した時は偶然死者が居なかったから良かったけど、最悪死者が出てたらコレを使わざるを得なかったのかも知れないし」

眩きながらモモンは真なる蘇生ワンド・オブ・トゥルーパーザレクシヨンの短杖を手に取り眺める。

「アーティファクトを装備して漸く使える俺の数少ない蘇生手段。使い所は見極めないと不味い」

しかし、このまま問題を放置しておくのは自身の性分に合わない。

「やっぱりこの世界でも同品質のアイテムを作れるか試すべきか？」

この世界に来てやらなければならない事が山積みである事を改めて認識したモモンだが、悩ましい問題ではあるもののこれも一つの探究であると捉えている節があった。

そこへ扉をノックする音が聞こえて来た。

モモンは慌てて散らかしたアイテムを仕舞い込んでから、「どうぞ」と扉の先にいる人物に声を掛ける。

現れたのは先ほどの案内人だ。

「お寛ぎのところ失礼します。実はモモン様にお客人がお見えになってございます」

「お客人…?」

案内人が恭しく頭を下げながら引き下がる。

入れ替わる形で1人の女性が数人の男性を引き連れて入ってきた。

「失礼します。お疲れのところ、申し訳ありません。どうしても火急の用件がありましたので」

上品な佇まいで現れたのは公道調査の依頼主であるローブル聖王国神官団団長のケラルト・カストディオだった。後ろの男たちとは面識は無い。しかし、装いから見ても護衛では無いのは確かだ。では、一体何者なのだろう。

「これはこれは。お久しぶりで御座います、カストディオ神官団長殿」

モモンは内心かなり動揺している。出来る限りの平静を装うが、彼女ほど地位のある者が「火急の用事」で態々来たのだ。動揺するなど言う方が無理な話である。

一方、ケラルトは美しく整った微笑みを浮かべたままである。

「畏まらなくても結構です。突然、来訪したのは私わたくしどもの身勝手な都合によるものですから」

「身勝手などと…」

モモンは社交辞令として応対をするが、ケラルトは小さく首を左右に振った。

「良いのです。それよりも、此度は私どもの御依頼を見事に叶えて下さったことは感謝に堪えません。それも山羊人の軍勢を退け、かの『豪王』バザーを打ち倒したと報告を受けた時は大変驚きました。英雄が如き所業とはまさにこのこと。この様な形で申し訳ありません

が、皆を代表して御礼申し上げます」

ケラルトと後ろの男性たちは深く頭を下げた。

「近いうちに国を挙げての式典を開く予定で御座います。今回の依頼の褒賞も含め、その時に改めて御贈り致します」

「わ、分かりました。その時は有り難くお受け致します」

本来であればこのような地位のある者が国益に叶う働きをしたモモンに対し、非公式の場で御礼を伝えるのは普通であればあり得ない事だ。モモンの偉業を加味するならばもっと大々的な式典を開き、公的の場で感謝を述べる事が通例である。普通であればケラルトの行動はある意味では国の品位を損いかねない行為だ。

それでも、来訪したのにはやはりそれなりの理由があつた。それは彼女の背後にいる者達にも大きく関係している。

ケラルトはゆっくり頭を上げて、話を続ける。

「ご理解頂き有難う御座います。それと、今回来訪した理由なのですが…」

「はい」

「誠に差し出がましいことでは御座いますが、モモン様に1つお願いがございます。実は、モモン様が山羊人襲撃の際に、聖騎士達に使用した例の真紅のポーションを幾つかお譲り頂きたいのです」

「え？ あのポーションをですか？」

「はい。実は私の背後にいる方々はホバンスの薬師組合の組合長とその幹部達なのです」

ケラルトの背後にいた男たちは改めてモモンに対し頭を下げた。しかし、なぜ下級治癒薬を欲しがるのか、なぜ薬師組合のお偉いさんが来たのか、モモンにはさっぱり理解出来なかった。

彼の疑問を聞かれずとも答えてくれたのはやはりケラルトだった。



「今回の襲撃で誰一人命を落とすことなく依頼を遂行出来たのはモモン様を始めとする皆々の働きは勿論、真紅のポーションによるものが大きいと私たちは判断しました」

彼女の言葉を聞いて、モモンはようやく理解出来た。

確かにあの戦いで多くの聖騎士や神官たちが負傷していた。中にはパベルの様に深手を負っている者も少なくなかった。その為、モモンは下級治癒薬を惜しみ無く使いまくったのだ。そのおかげで数名完治とまではいかぬまでも全員の命を救うことが出来た。

神官たちの治癒魔法だけでは全員の治療など到底間に合わず、各々が所持していた青色のポーションなども殆どが既に使い切っていた。モモンがあの時、下級治癒薬を使わなければ少なくとも三分の一は命を落としていただろうと言われている。

(なるほど。ユグドラシルでは初期アイテムとは言え、この世界では破格の効果を持つ。なら、そのサンプルをなんとか手に入れて、国からのバックアップのもと薬師組合で造らせれば、戦場で兵士が死ぬ確率を格段に減らす事が出来る。やがては戦死した分、不足した兵力を補うために徴兵制を強化させる必要もなくなるし、そうなれば商業や農業の働き手が減ることも無い)

無論、これはモモンにとっても将来的に大きなメリットに繋がる。

ユグドラシル産のアイテムを現地でも造ることが出来るという実例が出来るのだ。当然、全てが上手くいけばの話であり、そこまで行き着くまで相当の時間を要する可能性も高い。しかし、もうこの世界では手に入らないユグドラシルのアイテムを作る事が出来れば、有限と言う心配に悩まされる事は無くなる。

(ゆくゆくは上級治癒薬や最高級治癒薬…いや、もしかすると賢者の秘薬も造れたりするかもしれない！)

ハッキリ言つてこの世界のポーションはかなり残念でシヨボい。その為、ポーション作成の技術自体はかなり低いのもかもしれない。その点、モモンは素人なので全くわからない。しかし、試す価値は十分ある。

「あれほどの効果と即効性のあるポーションの価値は重々理解しています。しかし、どうかこの国の未来の為にも、モモン様が持つポーションをお譲り頂きたいのです。当然、相応の対価を支払います」

いつにも増して真剣な面持ちで懇願してくる彼女に続いて、薬師組合の組合長たちもダメ押しとばかりに声を上げてきた。

「我々薬師組合からもお願いで御座います！ 是非ともモモン殿が

持つ件のポーションを……必ずや成果を見せてご覧に入れます!!？」

「何卒！」

「何卒!!？」

ケラルトはともかく、薬師組合の人たちは何処か職人魂的な熱意に満ちていた。やはりポーション作成にも携わっている仕事柄、惹かれるモノがあるのだろう。

無論、モモンの答えはとつくに決まっている。

彼は懐から下級治癒薬を3本ほど取り出すと、薬師組合の連中は「おお!!？」と声を上げながら目を爛々と輝かせ釘付けとなった。

「それがそうなのですね……話には聞いておりましたが、確かに初めて見るポーションです」

一方、ケラルトも専門職では無いため彼らほどでは無いが、見たこととの無い真つ赤なポーションを目の当たりにして目を見開いていた。

「ではサンプル用として3つほどお渡しします」

「おお……、これぞまさしく……!」

「で、伝説のポーシヨン……ッ」

「か、『神の血』……」

(え? 『神の血』? なにそれ?)

アンデッド種のモモンにとっては大した使い道が無いだけでなく、価値も下から数えた方が早いぐらいのアイテムでしかない下級治癒薬だが、やはり彼らにとつてはそうでは無いらしい。

(『神の血』つてワードも気にはなるけど……もう薬師組合の人たちはポーシヨンに夢中みたいだし、機会があつたら今度聞いてみよう)

彼らは恭々しく下級治癒薬を受け取ると、眼を血走らせてブツブツと聞き取れない程度で話し合いを始めていた。あとは専門職である彼らに任せて、今後の成果を期待したいところである。

「すみません、モモン様。つかぬことをお伺いしますが、あのポーシヨンは一体、何処で手に入れたのでしょうか?」

そそくさと隣へ移動して来たケラルトが、薬師組合の人たちに聞こえない音量で話しかけてきた。彼女の疑問は至極当然だし、モモンも彼女たちの立場なら同じように問い掛けていただろう。

しかし、どう説明するべきか。

(ユグドラシルの店で買ったとか、倒したモンスターからドロップした、なんて説明した所で理解なんか出来るはずも無いし)

そこで『モモン』という人物の設定を利用する事にした。

「私が南方から来たと言う話はご存知かと思いますが、その旅の道中

で偶然見かけた遺跡の奥深くで、大量の赤いポーションを見つけたのです」

「そうだったのですね。確かに南方の大砂漠は未知な土地ではありません……しかし、かの土地の遺跡からその様なポーションが見つかったのは驚きです。モモン様がアンデッド騒動で使った伝説のマジックアイテムも改めて納得がいきますね」

「もしかしたら、まだ他にも見つかってない遺跡があるのかも知れませんが」

「まだ他にも……なるほど」

気が付くと、ケラルトは右手の顎に当てながら静かに思案していた。

正直、今のでっち上げが果たして吉と出るか凶と出るかは不明だが、周辺諸国は南方について殆ど分かっていないという情報を信じる他無い。何かあったとしてもそこは完全に未来の自分に押し付ける事で無理矢理解決する事とした。

（うーん、南方か…行ってみたいなあ）

叶うことなら近い将来、南方へ冒険しに行ってみたいという呑気な思いを抱いていた。そう言えばこの世界へ来てからの冒険といえば、聖王国内が殆どだ。そろそろいい加減にまともな冒険をしてみたいモノである。

（今回の依頼の報酬にもっと自由に活動したい旨を伝えてみるのもありかもしれない。うん、そうした方がいい！）

数日後、モモンは首都ホバンスの王城へ招致される事になるとは露ほども考えていなかった。

## 第24話 アダマンタイト級冒険者



公道調査の護衛依頼から翌日の事。

モモンはバラハ家の邸宅へお邪魔していた。

「大したもてなしも出来ず、申し訳ありません。白湯でよろしかったでしょうか？」

「い、いえ。お構い無く…」

家に居たのはパベル1人で、娘のネイアは母親の買い出しの手伝いに出掛けているらしい。

尤もモモンにとってはその方が都合が良い。彼はモモンがこの世界に来て唯一と言って良い、自身の正体がアンデッドであることを知る友人だからである。しかし、だからと言って今の全身鎧姿を外すワケにはいかない。

パベルはテーブルを挟み向かい側に座るモモンの前に白湯の入った湯呑みを置いた。モモンは飲食不要のアンデッドである為、パベルがそれを知らずウツカリ用意したとは考え難い。

これは例え相手がアンデッドとは言え、友人であるモモンに対する礼儀であり心配りでもある。

そんな彼に内心感謝しつつも、モモンはこの場にいる状況が気が気でなかった。圧迫されそうな罪悪感の念に苛まれ、中々彼に視線を合わせる事が出来ずにいたのだ。

「何やら落ち着かない様子で？」

「あ…そ、その…」

こう言う状況に慣れていない為、中々踏ん切りが付かなかったが、彼の優しさに甘えて何も言わなければ、この先一生後悔するかも知れない。

モモンは意を決して顔を上げ、兜越しではあるが彼に視線を合わせる。

「本当に申し訳ありませんでした!!？」

頭を深々と下げて精一杯の謝罪を口にした。

周りくどい事は言えない、そもそも頭の悪い自分にはそんなの思いつかない。最もシンプルなカタチで謝るべきだと思ったからだ。

そんな彼の行動に驚いたパベルは鋭く眼を見開くと、その謝罪の意味をすぐに理解した。

「モモン殿が謝る必要はありません。貴方のお陰で皆が助かったので。勿論、この私も含めてです」

「…自分をもっと早くに駆け付けていれば―」

優しく語り掛けてくるパベルだが、その優しさが今のモモンには辛い。怖くないと言えば嘘になるが、それでもいつそのこと罵詈雑言をぶつけてきた方がマシとさえ思えてしまう。

それでも、やはりパベルは優しかった。

「良いのです。貴方が居なければ私はもうとつくに死んでいたのですから。寧ろ、私の方が貴方に感謝と謝罪を申さねばならない立場です」

今度はパベルが頭を下げて来た。

謝るべきは自分なのに何故彼が謝るのか彼にはサツパリ理解出来なかった。モモンは酷く狼狽えながら、席を立ち何とか彼に頭を上げるようお願いする。

パベルはゆっくり頭を上げた。

「では…受け入れてくれますか？」

モモンは些か納得はしていないが、これ以上友人に頭を下げさせるわけにいかない為、仕方なく受け入れた。

「は、はい。分かりました」

「ではモモン殿もこれ以上の謝罪は…」

「はい、もうやりませんよ。しかし、まさか『九色』を辞める事になるとは…」

「仕方の無いことです。遅かれ早かれでしたから」

パベルは事実上『九色』の座から降りていた。正確には次期候補者を見つけるまでは在籍する事になっているものの、既に戦力外となった状態ではカタチだけでもいいところである。

彼はバザーとの戦いで瀕死の重傷を受けるが、モモンから施されたポーションにより一命を取り留める事が出来た。しかし、後遺症が残ってしまったのだ。

彼の右腕は既に弓の弦を引く事が出来なくなってしまうのだ。

「確かにもう弓は引けません、日常生活には何の支障もありません」  
「ですが、パベルさん…」

「命があるだけ儲けです。こうして家族と平穏な日々を過ごす事が出来るだけで、私は幸せ者なんです」

右腕を押さええながら話す彼の表情は穏やかだった。だが、彼の十八番とも言えるべき弓矢が扱えなくなってしまう事にモモンは強い罪悪感を抱かざるを得なかった。

（俺があの時、下級治癒薬では無く、賢者の秘薬エリックサーあたりを使っていたら結果は違っていたかも知れない。クソツ、下級治癒薬あの治癒力だったから油断してた…）

仮に上級の治癒薬を使った時としてもパベルが後遺症も無く完治するという保証も無かった。しかし、モモンはあの時、上級の治癒薬等を使うという発想はなかった。「大量にある下級治癒薬で事足りるなら」という貧乏性が頭の中に浮かんでしまった結果である。

上級の治癒薬を使えば後遺症も無く完治できたかも知れない。しかし、その保障もない。もはや入手不可に等しい、数にかなり限りのあるユグドラシル産の消費型アイテムを使う事を天秤にかけてしまっている。

「実はですね。本音を言えば、一線を退いた事にホツとしてるんですよ」

「え？」

パベルは日光が差し込む窓を眺めながら、変わらず穏やかな表情で語り続ける。

「バザーに殺されかけてからと言うもの、私は暇さえあれば家族の事ばかり考えるようになりました。仕事柄、私たちはいつ死んでもおかしくありません。なので、家族と過ごす時間がとても愛おしく、儂く感じてしまうのです」

彼は視線を窓から自身の手へ向けた。

その開かれた手は僅かに震えている。

「怖いんですよ。家族を置いて死んでゆくのが。ハハハ、『九色』の1人に数えられている者が…本当に情けない話です。いつの間にか、戦場に我が身を置く事が億劫になって、今回の怪我を言い訳にして身を引こうと言うのですからね」

モモンは自嘲気味に乾いた笑みを浮かべる彼を兜越しに見つめる。



「私は…貴方を情けないなどと思っていません。私にも決して手放したくない、大切なモノがありますから」

「それは…モモン殿の故郷の事ですか？」

「…まあ、みたいなものです。いや、それ以上に大切な居場所です」

ギルド『AOG』——鈴木悟にとってかけがえの無い居場所である。しかし、そんなモノはもう此処には無い。かつてのギルドメンバー達もこの世界にいる可能性はゼロに等しい。

それでも「あると信じたい」と思うのは、執着心が過ぎるかも知れない。それでも彼にとっては人生そのものと言っても良い居場所なのだ。

(叶う事なら戻りたい…でも、ギルドメンバーが居ないAOGは、AOGじゃない。やっぱり、ギルドメンバーが居てこそそのAOGなんだ)

俯きながら思わず強く手を握りしめていたと気づき、ハツとしてパベルへ顔を向ける。

「す、すみません。つい考えごとを…」

「いえいえ。かつての居場所を想う事は悪い事ではありません」

「…えっと、『九色』を辞めた後はどうなさるおつもりで？」

懐かしくも寂しい思いを誤魔化す為、モモンは話題を切り替えた。

「知り合いの店を手伝おうと考えてます。ですが、それもまだ当分先かも分かりません。正当な次期『九色』の候補者を見つけて育て上げるまでは、一応『黒』のままです。それに…」

彼は椅子から立ち上がり、その場でピョンピョンと跳ねた。もう弓は引けずとも、脚の方は問題無いらしい。

「野伏レンジャーの技術まで失ったわけではありませんから」

そう語って笑う彼を見て、少しだけ罪悪感が軽くなった気がした。

(…ああ、俺は大馬鹿野郎だな)

自分の正体を知っていても尚、変わらず友として接してくれる。にも関わらず、自分はいつの間にかかつてのギルドメンバーとの再会を望んでいる。

余りにも失礼じゃないか。

彼の優しさと器量を踏み躪る行為だ。

(簡単じゃないかも知れないけど、少しずつでも良いから過去の事は忘れて、今を見て生きていこう)

最後に「アンデッドだけ…」と思いながら、自分自身もつと大人にならなければならぬと戒めた。

「それはそうと…モモン殿は聖王国以外へ足を運びたいとは思わないのでしようか？」

「え？」

「その…確かに国の事情もあるのは重々承知していますが、一言も愚痴をこぼさないと聞いておりました。なので、ちよつと気になって…無理をしてはいないか、と」

視線が泳ぎ頬を搔く彼を見て、モモンは『精神安定化』の効果が現れるくらい感動していた。

周りは自分を『英雄』と讃え、国から褒美を頂いても尚、モモンは未だに真に求めている『冒険』というものを堪能出来ずにいた。息が詰まりそうな日々を送り、黙って国から出て行こうかと脳裏によぎる

事もあるが、それによつて国が大きく混乱してしまう事態に陥るのはモモンの望むところでは無い。

ずっと妥協し、ワガママを押し殺し、窮屈で鬱屈とした日々だった。相談できる相手も中々居らず、周りは自分の本音など露ほども気に留めていない。

（うう、まさかパベルさんが俺の心境を真っ先に察してくれるとは……！）

感動の余韻に浸る間も無く、モモンはありつただけの不満を彼にぶち撒けた。

病み上がりの彼に不満を口にするなどおかしいと思うだろう、訳のわからない言葉もあつただろう、文脈的にも理解し難い話もあつただろう、それでもパベルは話を折らず静かに耳を傾けてくれた。

どれほど話していたのかさえ忘れてしまった。

しかし、心は軽く穏やかだ。

「すみません……愚痴ばかりで……」

「そんな事ありませんよ。大変でしたね」

「うううう〜パベルさん…ッ！」

「では、モモンさんはもっと世界の知見を広める為の『冒険』がしたい、と？」

「え、ええ…贅沢を言えば、ですが」

彼は迷惑どころか優しく微笑み気遣ってくれた。

正直、今のモモンは自分の望みが叶わなくても良いとさえ思っている。それくらい心は晴れやかだった。

モモンはパベル宅を後にした。

見舞いと謝罪を目的に訪問したつもりが、後半からは愚痴を溢すだけとなっていた。帰路に就くモモンは今頃になつて恥ずかしさがジワジワと湧き上がるが、決して不快では無かった。

(今度は俺がパベルさんの愚痴を聞ければいいな)

そんな事を考えている彼の背中を見送っていたパベルは腕を組み静かに呟いた。

「彼の望みが叶うかは不明だが…提案する価値はあるかも知れないな」

◇

昔、ギルメンの誰かが言っていた。

——人生とはその日の天候のようなもの、晴れる日もあれば曇る日もあり、雨が降ったり、嵐が来たり——

要するに何が起きるか分からないのが『人生』なんだと言いたいらしいが、随分とまわりくどい言い方を考えたものだ。

でも実際その通りだ。

一体誰が仮想世界ゲームのアバターで異世界転移する羽目になるなんて想像が出来るだろうか。

最初はかなり混乱した。しかし、意外とすんなり受け入れる事が出来た。

元々、仮想世界こそ自分の世界みたいな気概があった分、現実世界リアリティに対する思い入れとか未練とかが皆無だったのも受け入れることが出来た要因だったと思う。あんな荒廃ディストピアした世界、よほどの富裕層か、家庭に恵まれていなければ戻りたいとは思わないだろう。

ゲームのアバターの姿で異世界転移してしまったのならやるべきことは1つ……冒険だ。

生まれ変わったらこの姿で、この未知の世界を知り尽くしたい。自分の冒険は、本当の人生はここから始める…そんな風に考えていた。

(なのにな…何でこうなっちゃうんだよお〜)

鈴木悟——モモンは心の中で情けない弱音を吐きながら大きな扉の前に佇んでいた。彼が今いる場所は首都ホバンスの王城内で、玉座の間の扉の前である。

彼は公道調査の護衛依頼の最中、奇襲を仕掛けてきた山羊人の軍勢を撃退。率いていた「豪王」バザーを見事に討ち倒した事で大功績を手にした。

その結果、ローブル聖王国は彼の大功績に相応しい褒賞を与えるべく王城へ招き入れたというワケである。

(まあカリンシヤの時みたいに大観衆の前でやられるよりかはマシだけど、だとしてもだよなあ)

流石に聖王国側の都合上、城塞都市カリンシヤの時のような大観衆の前での祝典を開く準備は出来なかった。しかし、『聖女王』カルカを始めとする多くの王族貴族たちなどが目の前にある扉の奥に居るのだと考えると無いはずの胃にチクチクした痛みを感じる。

(でも普通に了承しちゃった手前、「やっぱり結構です」なんて言えるわけ無いしな。あく考え無しに受け入れるんじゃ無かったあゝ!!?)

後悔先に立たずとは正にこのことである。

もう引き返せないのなら成るようになれだ。

目の前の扉がゆっくりと開かれる。

(上手く凌ぎ切るしか無い…ええい、ままよ!!?)

この期に及んでモモンは少し先の未来の自分に全てを丸投げする事を選んだ。

開かれた扉の先にあった玉座の間は、元々使者を歓迎する為の空間である為、大した広さは無い。しかし、流石というべきか、壁に柱、窓ガラスの枠組みに至るまでの細部は見事なまでに精巧な装飾が施さ

れていた。窓から降り注ぐ陽光が良い具合に部屋全体を荘厳な雰囲気  
に仕立て上げている。しかし、今のモモンに感動する暇は無い。

玉座の前まで敷かれている真紅の絨毯の左右には歓迎用の礼装を  
身に纏った王族貴族達が整列しており、此方へ一斉に視線を向けてき  
た。

(うっ…上位物理無効化Ⅲと上位魔法無効化Ⅲは解除していない筈な  
のに全身に突き刺さるこの感じ)

早くも全身に嫌な汗をかいたような感覚になるが、このまま立ち止  
まっついては何も始まらない。意を決してモモンは歩き始めた。遅  
過ぎず、しかし、「早く終わらせたい」という気持ちに駆られて足早に  
ならぬよう注意する。

一步目を踏み締めた瞬間、王族貴族達からの拍手喝采が玉座の間全  
体に響き渡る。通り過ぎる度に時折聞こえる賛美の声も今のド緊張  
状態のモモンには全く頭に入っていない。

(精神安定化がずっと発動してるこの感じめっちゃ不快だあ)

周りには見えないだろうがずっと緑色に発光している。

緊張と鎮静を繰り返すこの何とも言えない不快感は恐らく同種族  
でも共感してくれる人はいないだろう。

(あー、もう玉座まで来ちゃうよ)

座具は三段型の壇上に設置されていた。その上には天蓋があり、  
ローブル聖王国の紋章と共に四大神信仰の紋章も掲げられている。

玉座には当然のことながら『聖王女』カルカ・ベサーレスが座して  
いた。如何にも清廉な聖女と言った雰囲気と慈愛と優しさに満ち溢  
れた微笑みを向けている。

心無しか少し頬が紅潮している風に見て取れるが、恐らく頬紅の類

だろう。

いつぞや見かけた聖騎士団長のレメディオス・カストディオを側に侍らせているが、神官団長である妹のケラルトは今回も見かけない。

(レメディオスと違ってケラルトは忙しいのかな?)

かなり失礼な事を内心考えつつ、壇上の近くまで歩いたモモンはその場で片膝を突いて跪いた。

「面をお上げください」

鈴を転がすような声がカルカから聞こえて来た。

「カルカ様より許可がおりた。モモン殿、面を上げられよ」

(あつぶね! 頭上げるところだった! なるほど、侍者の言葉が出てから頭を上げるのか)

次いで聞こえてくるレメディオスの言葉により、漸くモモンは頭を上げる事が出来た。正直、このまま頭を下げていたのだが言われてしまったのなら仕方ない。

モモンはゆっくりと頭を上げ、「ローブルの至宝」と謳われるカルカの尊顔に視線を向ける。

「ッ……あつ」

(えっ? 逸らされた?)

ところがカルカは此方と視線が合った瞬間、慌てて視線を横へ逸らしてしまった。

突然の拒否的行動に動揺するモモンだが、彼の同じく後ろの王族貴族達からも点々とだが動揺と声が僅かに聞こえる。

「(カルカ様?)」

「ツ!? ( な、何でもありません)」

同じく違和感に気付いたレメデイオスが小声で声を掛けると、ハツと我に返ったかのようにカルカは反応した。そして、1つ小さく咳払いをした後、再び顔をモモンへ向ける。

(さつきより顔が赤いような…大丈夫か?)

紅潮しているだけでなく、どこかソワソワした感じも見て取れる為、やはり彼女はどこか体調がよろしく無いのかも知れない。

ここは彼女を早く休ませる為にも余計な事は考えず淡々と済ませるべきだろう。

「此度の功績は他に類を見ぬほどの偉業と捉えても過分ではありません。『十傑』が一角、『豪王』を見事に討ち果たした事は、この場にいる皆々は勿論、多くの民に安寧を齎すものと心得ます」

「恐れ多くも過分なるお言葉。恐悦至極に存じ奉ります」

「いいえ、決して過分では御座いません。貴方の成し遂げた事は誠に大義あるものです。存分に誇るべきでしょう」

「…はっ」

先程の体調の優れなさそうな雰囲気から一変した切り替えの早さは流石と言う他ない。

「そこで、聖王女カルカ・ベサーレスの名の下に此度の功績に相応しい褒美を与えます」

カルカが淑やかに玉座から立ち上がり、壇上から降りて跪くモモンの目の前まで歩み寄ってきた。侍者が開いた小箱を持って現れると、カルカは中から1つの冒険者プレートを取り出した。



無論、ただの冒険者プレートではない。  
アダマンタイト製の冒険者プレートだ。

「城塞都市カリンシヤの冒険者組合より話は既に通しております。  
我々、聖王国政府としても満場一致で異議を唱える者はおりませんでした」

アダマンタイト級冒険者を示す冒険者プレートをカルカはモモンの首へゆつくりと掛けた。

「今ここに宣言いたします。ローブル聖王国史上初となるアダマンタイト級冒険者『漆黑』のモモンの誕生です」

再び玉座の間に万来の拍手喝采が響き渡る。

一見、微動だにせず跪いているモモンだが、その内心はかなり動揺している。と言うよりも、精神安定化が連続して発動している為、周りには見えないが全身緑色に発光しているのだ。

(アダマンタイトオオオ!!???) 幾ら何でも早過ぎじゃないかアア!!?)

今すぐ周りの目など気にせず頭を抱えながらのたうち回りたい気分だが、寸前の所で理性が働きストップを掛ける。

(オリハルコン級でも窮屈な思いをしてるのに、最高ランクのアダマンタイト級になんてなったらそれこそ胃に穴が開くレベルじゃないかアア!!?) 俺に胃は無いけどオ!!?)

今回の功績の褒賞としてモモンは国外への自由な行き来を申し立てる予定だった。精神安定化が働くとは言え、流石に冒険意欲を抑え込むのには限界がある。ストレスは溜まる一方だ。

それがアダマンタイト級になってしまったら国は益々自分を下手に国外へ出してはくれないだろう。

(ううう、何としても暫くはオリハルコン級で活動していくつもりだったのに…ヤバイ泣きそう。あつ、精神安定化が…)

其々の国に在する冒険者の最高ランクはある意味、国威の1つでもある。ローブル聖王国は今まで諸外国に大きく劣っていたのだが、モンと言う存在が現れてからその情勢も大きく変化した。

アダマンタイト級冒険者は多くの冒険者達と冒険者を目指す者達にとつては永遠の憧れのような存在であり、目指すべき存在なのだ。

最高ランクの冒険者が現れたとなれば、モンスターによる被害が大きく減る事は勿論のこと。新たに冒険者を目指す者達が自然と集まって来る。それは人々と往来が活発化し、都市や街の経済がまわり、何かしら優秀な人材が自国へ拠点を移すなど、アダマンタイト級が生まれ出た国や街に齎される恩恵は大きい。

故にアダマンタイト級冒険者に対し、他国はヘッドハンティングを狙うべく間接的に干渉したりアピールを仕掛けてくる。

ローブル聖王国に在する冒険者達は周辺諸国と比べてお世辞にもあまり強いとは言えない。

亜人部族が跋扈するアベリオン丘陵という地形的問題がある為、仕方無い事ではある。『九色』だけでは補いきれない今だからこそ、亜人部族に対する抑止力や騎士や民達に安心感を与えられる『英雄』が必要になる。

当の本人はそんな事情など知る由もないが…。

「ア、アリガタキシアワセ」

感情の無い言葉が出てしまう。しかし、心ここに在らずのモモンと違い、周りは初のアダマンタイト級冒険者誕生を心から祝福している。

「更に聞き及ぶところによれば貴方は多数の負傷した騎士や神官達に貴重なポーションを使ったそうですが？」

「ハイ。ですが、本来ポーションとはそういう目的で作られた物です。使わなければそれこそ宝の持ち腐れであります。人の命には代えられません」

「まあ……！　何と素晴らしき御言葉でございました」

カルカを含め周りにいる者全員が感嘆の声を口にする。

モモンとしては人命救助と言う目的は勿論のことだが、護衛依頼を受けた手前、多数の死者を出してしまつては今後の冒険者稼業に支障をきたす程の不信を買われてしまう恐れがあつたのも事実である。故に自分は単なる善人ではない、と割り切っているが、周りはそうではないらしい。

特にカルカに侍しているレメディオスは両方の口角を上げてキラキラとした目で此方を見つめている。

因みに使用した分の下級治癒薬マイナー・ヒーリングポーションの代金について、ケラルトからはしかるのちに支払うと言われたが、モモンとしてはユグドラシル産のアイテムを作ってくれるだけで十分なので「代金は不要です」と伝えてある。

これにはケラルトも大層驚いた様子だったが、流石に何も支払わないというわけにはいかないとの申し出を受けた。そこでモモンはポーション開発に於ける進展状況や試験的運用の優先権を出したところ、二つ返事で了承を得た。

「ところで、つかぬことをお聞きしたいのですが、よろしいでしょうか？」

「はい。何でもございましたら？」

カルカが少し躊躇いつつも口を開いた。

「モ、モモン殿には…い、許嫁などはいらつしやいますか？」  
「……はい？」

僅かに頬を赤く染めたカルカの口から思い寄らなかつた言葉が聞こえてきた。周りもギョツとした反応を見せるものもいるが、それ以上困惑しているのは言われている本人である。

いきなり「結婚を前提にお付き合いしてる人いますか」と言われて驚かない人などいるだろうか。

質問の意味をそのまま受け止めるなら、言わずもがな答えはノーである。異性と付き合った経験すら無く貞操を守り続けている。辛い。

「い、許嫁にございますか？」

「い、居たらで結構です。その場合は、許嫁の方を聖王国へ招待しようかと、思い、まし…て」

何とも踏ん切りの付かない喋り方に違和感を覚えるが、成程と彼女の意図に漸く気づいた。

よくよく考えればわかる事である。

(なるほど。設定上は放浪者だけど、何処かで恋人なりを作っている可能性を考慮して聖王国で纏めて保護しようって寸法なのか。確かに、そうした方がいつかその恋人がいる場所へ帰ってしまう事態を防ぐことが出来る)

見た目によらず中々抜け目の無い策を考えるカルカに強い感心を抱いた。

尤も彼女の考えは杞憂に過ぎないのだが、最高位冒険者を何としても聖王国に留めて置きたいという意味では正しい行為だろう。

(やっぱり若年で国のトップに立つだけの事はあるんだなあ。俺には無理だ、うん絶対無理。一国の王様とか絶対窮屈だし、そもそもそん

な器じゃないし)

そうになると彼女のソワソワした態度はやはり体調不良によるものが大きいのだろう。今も彼女は緊張した面持ちで自分の答えを待っている。

「恥ずかしながら、そのような方はおりません」

「ッ!!? ほ、本当にいらっしやらないのですね?」

「は、はい」

「(良かった…)」

やけに食い下がってくるなど思ったが、許嫁がいないと分かった途端、「良かった」という小さな呟きと安堵の溜息が聞こえた気がする。

(あー、なるほど。遠い南方から来た設定だから、恋人を探すための手間とか準備に時間を掛ける必要が無くなったからか。ん? だとしたらかなり失礼じゃないか?)

彼女は抜け目の無い策を練る一方で、やはりどこか抜けている所があるようだ。普通であれば多分、失言では済まされないのであるかも知れないが、幸い自分以外に聞かれている様子は無さそう。

それに彼女は恐らく体調が良くない。ここは自分も聞かなかったことにして水に流すのが『漢』と言うものだろう。

その後も続いた恩賜の儀礼だが、特に支障も無くスムーズに進んだ。心なしか聖王女のソワソワした態度もあまりしていない様に見える。

「モモン殿には、アダマントタイト級冒険者に相応しい働きを期待しています」

「ハッ。ありがとうございます」

終わった。やっと終わった。

少し困惑する事はあったが無事に乗り切った自分を心の底から褒めてやりたい。

カルカが再び玉座へ腰掛けようとした。

その時だった。

彼女は突然ふらつき、倒れてきた。

「ツか、カルカ様ツ!!?」

真っ先に反応したレメディオスが倒れる彼女へ手を伸ばすも僅かに届かない。

このままでは彼女は硬い床へ倒れてしまう。その場合、打ち所によつては傷が出来たり、最悪死に至る場合だってある。

しかし、彼女が床へぶつかるとはなかつた。

彼女が倒れた先にはモモンが居たのだ。

「おっと……!」

モモンは倒れて来るカルカを抱き止めた。

やはり体調が優れなかつたのだと思つたモモンは心配そうにカルカの顔を覗く。

「だ、大丈夫ですか?」

「う、うーん……」

モモンの呼び掛けにカルカはゆっくりと目を開ける。

視線の先には煌めく漆黒の両頬付き兜、クロイズド・ヘルム今自分は漆黒の英雄の腕の中にいる事に気付いた彼女は一気に顔面が紅潮した。

「ひゅ……ッ!」

「カルカ様ツ!!?」

「お気を確かに！」

「早く神官を呼ぶんだ！」

目を覚ましたかと思いきや声にならない悲鳴を上げて再び気を失ってしまった。

慌てて駆け付けて来る侍者たちが必死に声を掛けていたが、モモンは訳もわからず静かに狼狽えていた。

「退け！」

そこへレメデイオスが現れた。

彼女は群がる従者達を退かせると、彼の腕に抱えられていたカルカをソツと抱きかかえた。

「感謝する、モモン殿。後ほど改めて礼をする」

レメデイオスは後ろ流し目にそう言い残し、その場を後にする。お姫様抱っこの形で去り行く彼女の後ろ姿はかなりグツと来るものがあった。

(何だあのイケメンは)

モモンは片膝を突いたまま彼女の後ろ姿を黙って見送る。

以前、ギルメンの1人であるペロロンチーノが話していた「おっぱいの付いたイケメン」とは正に彼女の事を指すのだと理解出来る。

玉座の間は未だざわめきが続いていたが、その後に見えたカルカの兄を名乗るカスポンド・ベサーレスによる進行の下、無事に終える事が出来た。

◇

「ふう…疲れた」

最後までトラブル続きだったが何とか無事に事なきを得たモモンは、精神的に疲弊しながら国が用意してくれた高級宿屋の自室に設置されているベッドへ横たわっていた。

鎧姿のままなのはやはり油断ならないからである。先の法国の件も考えると、これまで以上に気を張り詰めて過ごさなければならぬのだ。

(あー、そう言えばこの鎧を着続けてどのくらい経つたんだろう？

臭いとか汚れとかの心配はしてないけど、気持ち的にはそろそろサッパリしたいところだなあ)

羽を伸ばしたい。

切実にそう願う日々が続いている。

(もういつそのこと。この国を出て自由気ままに人里離れた土地で過ごしてみよっかなあ)

自由と冒険、というこの世界に来てから兼ねてより望んでいた異世界ライフを未だ堪能していない。確かに全てを投げ捨てる覚悟であればそれも十分可能だろう。しかし――

(パベルさんに迷惑は掛けたくない。この前、愚痴をこぼしたばかりじゃないか……)

自分勝手をするのは簡単だ。だが、それによって彼との友情が壊れてしまうのだけは避けたい。

「何か良い方法とか無いかなあ……」

そこへドアをノックする音が聞こえた。



モモンは慌ててベッドから起き上がり、扉の先に居る人物へ「どうぞ」と声を掛ける。

「お休みのところ申し訳ありません。モモン様に面会したい方がお見えになられております」

使用人からの説明の後からフードを深く被った人物が1人だけ入って来た。見るからにお忍びと言った風貌だが得体が知れない。

「申し訳ありません。本来ならもつとしかるべき日時を事前に伝えただ上で訪問するべきなのですが、事情によりこのような夜分にお邪魔させて頂きました」

「いえ、お気になさらずに。失礼ですが、貴方様は？」

声質から男性だと分かる。男性の知り合いは確かに居るがそれでも数える程度な上、彼の声にはあまり聞き覚えが無い……と思う。

モモンの問い掛けに男性はフードを取り、その姿を晒した。

(ん？　この人見たことあるぞ)

見た記憶はあるが、どうにも臆げでよく思い出せない。少なくともごく最近である事は間違いない。

彼が思い出すよりも先に男が丁寧に答えてくれた。

「会うのはこれで2度目でございますが、こうして正式に言葉を交わし、自己紹介をするのは今回が初めてで御座いますね。私、ローブル聖王国貴族のカスポンド・ベサーレスと申します。知つての通り、カルカ・ベサーレス陛下は実の妹であり、故に私は王族出身の貴族でございます。今回は折り入って御相談があつてお忍びで参りました」

モモンは漸く思い出した。

(あー!!?) 式典に居た人だ! そう言えば聖王女のお兄さんって言ってたっけ。でも、なんでそんな人が俺に?)

モモンが疑問を口にするよりも先にカスポンドが周りに人がいない事を確認した後、神妙な面持ちで口を開いた。

「聖王国南部で蔓延る……悪党退治を依頼したいのです」  
「南部? 悪党退治?」

アダマンタイト級冒険者初の依頼が始まる。

## 第25話 アダマンタイト級初仕事

◇

時間は約数時間ほど前…モモンが儀礼を終えたばかりの頃まで遡る。

儀礼中、突如倒れ気を失ってしまった聖王女カルカ・ベサーレスは王城内の一室にて床に就き養生していた。部屋の中には侍者の他に聖騎士団長のレメディオス・カストディオともう1人、カルカの実の兄であるカスポンド・ベサーレスも居た。

「大事御座いませんか？」

既に目を覚ましベッドの上から体を起こしている彼女にカスポンドは一貴族として容態を案じる。

「ええ。今はもう大丈夫です」

「それは重畳。されど油断は禁物で御座います。恐らく過労による気疲れでしょう」

カルカはその言葉を受けて申し訳なさそうに俯いた。

「周りの皆に迷惑を掛けてしまいました。あの様な場で気を失うなど…なんたる失態」

「気にする事は御座いません。ここ最近色々な事が立て続けに起きましたから」

彼の言う通り、最近の聖王国内外では様々な事柄が起き過ぎていた。

国内税率と自給率、労働力の著しい減少、治安の悪化、増える国防維持費、南部保守派閥との関係悪化、アベリオン丘陵の亜人部族が徒党を組み軍を招集、それと入れ替わる様な形で現れた1万に匹敵す

るアンデッドの大群勢の出現、滅多に現れなかったギガントバジリスクの出現、『十傑』の1人である「豪王」バザーの討伐、『九色』2人の引退、聖王国史上初となるアダマンタイト級冒険者の誕生など悩ましい問題から心が晴れるような明るい話題などが上がる。

覚悟の上で国の最高責任者の座に就いたとは言え、カルカの心身の疲労は計り知れないものである。寧ろ、今日までよく倒れなかったと褒めるべきだとカスポンドは思った。

「カスポンド殿の言うとおりですカルカ様!!?」 多少休んでいても罰は当たりませんか!!?」 仮にそのような輩が現れるようならば、この私が斬り伏せてご覧に入れましょう!!?」

レメデイオスの声が室内に響く。

思わずカルカとカスポンドは互いに顔を合わせて苦笑いを浮かべた。彼女の裏表の無い実直な性格はカルカの心の拠り所となっている為、カスポンドとしては感謝しか無い。そのせいで苦労も多いがそんなことは今更だろう。

「カストデイオ団長殿の言うことも尤もです。今はゆっくり養生なさって下さい」

「…はい」

カルカの体調に大事は無かったが、あのような場で気を失い倒れたことを気に病んでいた。特にあの場にはカルカに不満を抱く南部貴族たちも集っていたのだ。余計な弱味を彼らに見せてしまった事で、今後の聖王国の運営に何かしらの支障が出る可能性がある。

カスポンドはそんな彼女の心情を察していた。

王と貴族という立場以前に2人は兄妹なのだ。傷心の実の妹を責めようなどは思っていない。寧ろ申し訳ないと言う気持ちの方が強い。

(私が王になる才能が無かったばかりに…過酷な運命を背負わせてしまった。裏工作を講じられない妹に譲ったのは間違いだっただろうか…)

本来なら古来の慣わしに従い兄であるカスポンドが先代に代わる新たな『聖王』となる筈であった。彼は決して無能では無い。逆に優秀な才覚を持つていると言っても良いほどであり、温厚で慈悲深い性格をしている。しかし、より優秀な妹には勝てないと彼自身が察したのだ。その為、彼は裏でできる限り妹を支えながら貴族社会で生きていく事を決めた。自身よりも遥かに優秀で、王としての素質もある妹に任せた方がこの国の為に良いと判断して王位継承権を自ら放棄したのだ。

王位継承権を持つ優秀な人物が複数存在するという事は其々を支持する派閥が生まれ、敵対する派閥同士による争い事が生まれてしまう。カルカとカスポンドの2人も例外では無かった。しかし、兄のカスポンドが王位継承権を自ら放棄した為、国を二分しかねない内戦を回避する事が出来たと言っても良い。

賢明な判断と言えるが、問題が起きなかったわけでも無い。

前例の無い女性の聖王よりも男系長子であるカスポンドこそ次期聖王に相応しいとする保守派の貴族や国民たちが反発の意を示したのだ。しかし、肝心のまつり上げる対象であるカスポンド自身が血族同士の争いを嫌っており、王位に立つ気も無いのだ。これでは武器を取ってカルカを推挙する敵対派閥と戦うのは難しい。そもそも先代聖王と神殿勢力からの強い後ろ盾がカルカにはあり、カスポンドには無かったのも内戦が起きなかった要因の一つとも言える。

こうして史上初の『聖王女』が誕生したのだが、そのお陰で保守派の多い南部の貴族たちからの敵意を買ってしまったのだ。アベリオ丘陵の亜人部族達との争い、増え続ける徴兵動員、疲弊する民達、不足する人材と物資…加えて保守派閥からの反発と妨害工作など、何枚もの板挟みに遭っているカルカは間違いなく精神的に疲弊していた。

（カストディオ姉妹の武威により何とか自身の権威と両派閥の均衡は保たれているが、いつ何がきつかけで崩れてもおかしく無い）

主に南部で活動しているカスポンドの大まかな役割は南部と北部：つまり聖王女派閥と保守派閥との調整役である。彼も色々と板挟みに遭う事も多いが過酷な貴族社会を生き抜いてきた彼の手腕は本物だ。

カルカはあまりにも真っ直ぐ過ぎる。カスポンドも遠回しではあるが彼女をサポートはしている。しかし、それにも限界はある。

（決め手に欠けたままでは不味い…『十傑』の一人を討ち倒したのは僥倖だ。アベリオン丘陵は再び落ち着きを見せつつある。ほんの一時でしかないだろうが、国内問題へ傾注出来る機会だ）

彼女の聖王国統治に於ける何かしら大きな功績を上げなければならぬ。カスポンドは侍者へ部屋から出るよう促した後に口を開いた。

「陛下。お疲れのところ申し訳ございませんが、申し上げたき儀が御座います」

「はい、なんでしょう？」

「南部の情勢についてです…」

その言葉を聞いただけでカルカの視線は細くなり、明らかな不安と不快感が現れる。当然これはカスポンドへ向けたものでは無い。

カスポンドも報告する中身なだけに本来ならば日を改めて場を設ける必要があるのだろうが、こちらの状況を察したカルカはそのまま話を続けさせる。この様な事態に備えてこの部屋を含め、王城内には防音効果のあるマジックアイテムを設置している部屋が複数存在している。

「南部に於いて実態を掴みきれていない犯罪が多数発生しております。窃盗や盗難と言った小さな犯罪から誘拐、人身売買など多岐に渡ります。無論、警備隊の増強や巡廻の時間を増やすなどの対応をしておりますが、どうにも此方が動くよりも前に逃げられてしまう事が多く、捕まえたとしても殆どが使い捨ての小物ばかりで、無罪放免として釈放される者も少なくありません」

悲痛な表情でカスポンドの話を真剣に耳を傾けるカルカと、その傍らではギリリと歯噛みして怒りを隠すでもなく露わにするレメデイオス。

色々と言いたい事はあるのだろうが、カスポンドは話を続けた。

「中でも酷いのは麻薬の蔓延です」

「麻薬……」

カルカは目を見開いて驚いた。

流石にそのような危険なシロモノまで聖王国内で蔓延しているとは想像すらしていなかった。

「浮浪者やならず者が犇めく治安の悪い下町を中心に蔓延しているように。麻薬を売り捌き、それが一般の民達の日常にまで浸透しつつある状況です。懸命に麻薬の押収などの対応はしておりますが、正直に申し上げますとイタチごっこも同然でキリがありません。麻薬の売買をしていた浮浪者から出所を探ってはいますが……状況は芳しくありません。出所を巧妙に隠しているようです」

「ああ……なんと嘆かわしい事でしょう」

「加えて……明確な証拠はありませんが、南部の冒険者組合とそれに属する冒険者達も、犯罪に「役買って」との情報も……」

「……頭が痛くなる話ばかりですね」

額に手を当て頂垂れるカルカを見て、カスポンドは心中を察した。

一難去つてまた一難。彼女の心労を考えるとこの様な時に話すべきでは無いかも知れないが、手遅れになる前に対処する必要がある為、そうも言つていられない。

それにもう一つ懸念すべき事がある。

「実は…数名の南部貴族がこの麻薬騒動に関わっている可能性が浮上しました。しかし、任意での聴取を彼らは拒否した為、執政官立ち合いのもと半強制的に聴取を行うとしましたが…十分な調査も無く無罪放免と相成りました」

「ふざけるなア!!」

レメディオスは怒りの形相で近くの壁に拳を叩きつける。壁は見事に凹んでしまつていた。

「何故厳正に調査しないのだ!? 正義の名の下に真実を明らかにし悪を罰するべきではないのか!!?」

彼女の収まり切れない怒りが爆発する。周りの物に当たり散らすのはいただけないが、彼女の気持ちはカルカも同意である。

「落ち着いて、レメディオス。先ずは彼の話を聞きましょう」

「……はい」

流石の彼女も怒りをぶつけるべき相手はカスポンドでは無いことは理解している。カルカに諫められ何とか怒りを抑えた彼女は身を引いた。

「ありがとうございます。先ず南部で起きているコレらの問題は、明らかに組織的なモノである可能性が高いです。それもかなりの規模です。少なくとも南部の司法、行政、恐らく商業に至るまで様々な業界までその魔の手は伸びていると考えるべきでしょう」



「既にそこまで……今の今まで気が付きませんでした」

カルカは露骨にショックを受けている。自分の統治が中々上手くいっていない事は理解してはいたが、ここまで謎の犯罪組織による侵食を許していたとは思ってもいなかった。

「無理もありません。私も関与の疑いのある貴族達が不当に無罪と判決されるまでは、つまらないゴロツキが組織化した程度にしか受け止めておりませんでした」

「……どこから手をつけるべきでしょう。単純に警備体制を強化したところで、犯罪組織と癒着している者達が証拠などを揉み消してしまうのは明白です」

「やはりここはカルカ様自らが動いて悪党どもとそれに手を貸す裏切り者どもを断罪すべきかと思えます」

自信満々で間に入るレメディオスに対しカスポンドは冷静に首を横に振る。

「それは剣呑でございませすカストディオ団長殿。ただでさえ折り合いの悪い南部貴族を中心とする保守派閥に、政治的仇敵と言っても過言ではない陛下を前面に出してしまつたら、一層強く反発してくる事は必定でございませす。失礼ながら……『横暴だ』何だと声高々に叫びながら陛下へ反旗を翻す可能性もございませす。最悪、聖王国が二分するキツカケとなるやも知れませせん」

「うぐぐ……その時は私が1人残らず斬り伏——」

「其は本末転倒。もしくは国内の動乱を絶好の機会とばかりにアベリオン丘陵の亜人部族がこぞつて雪崩込む事でしょう。要塞線の管轄は北部である為、南部がそう簡単に手を貸すとは思えませせん。国力が弱体化する事など目に見えているのに犯罪組織と手を組むような連中ですぞ。寧ろ、仇敵を背後から攻め込んでくれる者として手を組む可能性さえあります。そうなれば夥しい数の民草が命を落とすこと

になりましょう。無論、貴女様の實力を疑う訳ではございません」  
「む、むぐぐぐ……」

カスポンドから下手にカルカを表立って動かせない旨を冷静に説明を受けたレメディオスは、単純な武力だけではどうしようもない問題で、要するに何も出来ない事を無理矢理解させられた。齒軋りして怒りに肩を震わせながら両拳をミシミシと握る。

「だ、だがこのまま手を拱いているわけにはいかんぞ！」

「分かっているわ。要は出来るだけ騒ぎにならないよう穏便に事態の解決を進めれば良いのよ」

「なるほど!!？」 流石はカルカ様!!？ ならば隠密行動に長けた者を使えば良いのですね！」

「え、ええ……まあそういう事です」

カルカは理解力に乏しいレメディオスの為、今後どうすれば良いのかを簡単に説明した。しかし、やはり何処かズレた認識をしているらしく、「なら話は簡単だ」と言わんばかりに自信に満ちた顔をしている。

下手に彼女が暴走する前にカスポンドが話を続けた。

「実を申し上げますと、この話は既にケラルト殿へ伝えております」

「……ケラルトに？」

「むう？ カスポンド殿、それは幾ら貴方とは言え無礼ではないか。この一番に主君たるカルカ様へ報告するのが当然ではないのか？」

レメディオスの不満は尤もだ。

国の一大事となり得る事案の報告を、主君ではなく配下であるケラルトにのみ伝えていたのだ。普通であれば先に主君であるカルカへ伝えるべきであり、カスポンドの行動は主君を軽んじていると言われなくても仕方のない事である。

しかし、これには当然理由がある。

「レメディオス団長殿の仰せごもつともでございます。しかし、例の犯罪組織の息が掛かった者が北部に居ないとは限りません」

「か、我々が奴らと繋がりがあると言いたいのかッ!？」

「違います。レメディオス、貴女は少し黙ってて」

このままでは話が進まない。

カルカはやや強い口調で彼女を黙らせた。

「最初に此方が動くよりも前に連中は逃げていた、と申しましたね。

アレは麻薬の取り締まりも例外ではありません。それは——」

「内通者が居る、と言うのですね」

「はい、そう考えるのが妥当かと」

つまりは犯罪組織に此方の動きが筒抜けになつてしまう可能性が高い為、迂闊に伝令や手紙などのやり取りが出来ないのだ。確実な方は直接出向いて伝えると言う何とも手間暇の掛かる方法なのだ。あとは信頼に足る人物へ言伝を頼むという手段もあるが、例の犯罪組織との繋がりを虱潰しに調べる時間はハッキリ言つて無い。

南部に居を構えているカスポンドは北部とやり取りを行う際、否が応でも手紙や伝令などに頼らざるを得ない。〈伝言<sup>メッセージ</sup>〉を使う方法もあるが、アレはどうにも信用出来ない。

式典の為、首都へ訪れたカスポンドは幸運にもケラルトに会うことが出来た。その際に南部の状況について一通り伝えると、彼女は南部に蔓延る謎の犯罪組織の調査を隠密行動に長けた信頼出来る者達に依頼すると応えてくれた。

式典で彼女が居なかったのはその為である。

「実は陛下にお伝えしたい事がもう一つ：昨今の状況を垣間見た結果、陛下にもお伝えした方が良いと判断しました」

「何でしょう？　分かっているとは思うけれど、幾ら私でも南部情勢を無視してまで押し通せる事には限度がありますが…」

カスポンドはひと呼吸置いてから話を続けた。

正直、この話をした後の彼女の反応が少し怖いのだ。下手したらまた卒倒しかねない。

「アダマンタイト級冒険者へ昇格した『漆黒』のモモン殿を暫くの間、南部へお送りしたいと考えております」

「ッ!?　　そ、それは…!!?」

思わぬ人物の名前が出てきた事でカルカはベッドから立ち上がった。明らかに動揺しているがそれも無理もない話である。既に一部の者には周知の事実であるがカルカに恋心を抱かせてしまっているのだ。そんな彼が同じ聖王国内とは言え、自身の影響力が乏しい南部へ行ってしまふのは許容し難い事態と言つても過言では無い。

主君の意外な反応にレメディオスもギョツとしてしまい、その視線に気付いたカルカは何とか心を鎮めて静かに座り直した。

「ご、ごめんなさい…つい」

「いえ、お気になさらず」

「……」応聞きますが、彼を南部へ派遣する目的は言わずもがな、謎の犯罪組織に関わる事ですよね？」

「はい。巧妙に隠れている犯罪組織を炙り出す為に、モモン殿を利用するのです。聖王国史上初となるアダマンタイト級冒険者を『利用する』と言うのは些か気が引けますが、事は国の安寧に関わりません」  
「なるほど。貴方の狙いは良くわかりました」

カルカとて想い人が自身の手の及ばない危険な場所へ赴かせたくなど無い。彼女は心が引き裂かれる様な思いに駆られるが、国政と私

情は完全に別として捉えていかなければならないのだ。この切り替えの早さも彼女の強さと言えるのかも知れない。

「い、一体何が分かったのですか、カルカ様？」

案の定、レメデイオスは理解出来ていない。

果たして此処で彼女に伝えるべきかどうか少し迷うところではあるが、既にここまで話を聞いた以上は下手にはぐらかすと却って彼女による悪意の無い不測の事態が起きかねないので、カルカは優しく、そして出来るだけ分かり易く説明をした。

「南部に一石を投じるのです」

「一石？　石を投げるのですか？」

思わず「はあ？」と言いたくなる気持ちをカスポンドは抑える。彼女はふざけてなどいない。純粹に疑問を投げ返してきたに過ぎないのだ。

不敬ながらも主君の心労を察したカスポンドがここから説明を始めた。

「飽くまで例えです。具体的に言うとうと、モモン殿を何かしらの理由：つまり依頼を受けて頂き、南部で活動して頂くのです」

「むう？　つまり『犯罪組織の調査』を依頼するということ…なのかな？」

レメデイオスは頭を傾げながら呟くが、カスポンドは首を左右に振る。

「それでは彼が聖王女派閥に属する何者かによって遣わされたと認識されてしまいます。例えば『某貴族の館の護衛』や『街の治安維持』など、適当…：と言えば失礼かと思いますが内容は何でも良いのです。

あげた2つの例ですが、南部の治安はアベリオン丘陵の亜人部族との争いで疲弊している北部と比べても残念ながら治安は悪いです。それに貴族が自身の財産を守る為、冒険者を護衛として依頼する事は珍しくありません」

「…だが、それが何故一石を投じる事につながるのだ？」

眉間に皺を寄せて必死に整理しようとしている彼女を見て、下手に長くは話せないとカスポンドは察した。

『『アダマンタイト級冒険者』と言う存在は国威にも関わる存在である事はカストディオ团长殿も重々承知でしょう？ 聖王国史上初のアダマンタイト級冒険者誕生という一大事が南部全域に拡がるのに時間は掛からないでしょう。そんな人物が南部へやって来る…そうなる犯罪組織はどのように動くと思いますか？』

カスポンドの問いにレメディオスは暫く腕を組んで考えた。

「うーん……バレない様に隠れたり、活動を控えたりする？」

カスポンドは珍しく自信なさげに答える彼女に否定せず頷いてみせた。

「確かに。それで僅かな動きの変化を見抜き、隠れた敵を見つけるという手も考えられるでしょう。ですが、それだけではありません。恐らく連中はモモン殿に勧誘と言うカタチで接触してくるでしょう」

「何だ?!? それは…ま、不味いのではないか？」

「勿論、モモン殿には勧誘を受けさせるつもりは御座いません。要するに囮として活用し、連中の実態を探ろうというワケなのです」

南部の冒険者組合に属している冒険者達の内の幾つかが例の犯罪組織に加担している可能性が高いという報告が上がっている。中に

はミスリル級もいるのではないかという話も出てきている程だ。ここまで勢力的に冒険者組合にまで浸透してくるとなれば、聖王国史上初のアダマント級冒険者を彼らが放っておくはずも無い。アダマント級という称号により得られる恩恵は凄まじい。連中としてはなるべく早くモモンと接触したいだろう。アダマント級冒険者という戦力もさることながら、様々な業界や貴族社会、政商、政府との人脈構築に非常に役に立つ。

アダマント級になって日が浅いうちに是が非でも欲しいはず。

「陛下、ご許可を頂きたく」

カルカは顎に手を当てて思案し答えた。

「分かりました。国内を蝕む犯罪組織の駆逐は早急に取り掛からなければなりません。『弱き民に救いを、誰も泣かない国を』…必ず成し遂げる為にも」

◇

「……なるほど。事情は察しました。要するに囚捜査の様なものですね」

「理解が早くて助かります。アダマント級へ昇級したばかりである貴方にこの様な依頼を出してしまった事は誠に心苦しく思います。ですが何卒、この国の平和と安寧の為に……」

時は戻って首都ホバンスの高級宿屋の個室で、モモンとカスポンドは南部で蔓延っている犯罪組織の話をしていた。そして、モモンには『偽装依頼』を受けて貰い、その最中に連中と接触して欲しい旨を伝えたのだ。

（なんかたつちさんが好きそうなシチュエーションだなあ。でも、南

部ってそんなにやばい事になってたのか…魅力的な所も無かったしあんまり行きたくないんだけど、アダマンタイト級冒険者になったからには協力しないわけにはいかないかあ)

正直、いつぞや起きた冒険者組合での騒動がキツカケで自然と南部聖王国へ行くのが億劫になっていた。偏見もいいところだがやはり第一印象は大事だし、あんな連中をミスリル級にしている組合にも問題がありそうだ。

(でも、状況を聞くとこのままじゃ北部にまで連中は侵食して来そうだし、見て見ぬ振りには出来ない。やっぱり此処は――)

「つかぬ事をお伺いしますが、モモン殿は冒険者として国外へ赴きたいというご希望があるとか?」  
「え?..」

カスポンドの言葉にモモンは一瞬思考が止まった。別にバレたからどうという事はないのだろうが、何故ほぼ初対面と言っても良い彼が自分が今抱えている切実な悩みを知っているのかと言う疑問が過った。

「確かに本来は国の垣根など関係無く活動するのが『冒険者』です。従ってモモン殿が鬱屈を抱えながらも我々の事情を案じて聖王国内に縛られ続けるのは、我々としても非常に心苦しく思います」

申し訳無さそうな表情で頭を下げる彼にモモンは「そんなことは無いです」とは言えなかった。普通なら建前として相手を不快にさせないよう気を配る必要があるのだろう。しかし、モモンとしては「国外へも出掛けたい」と今まで言えなかった分、ストレスも溜まっていた。流石に精神安定化の効果で大爆発する様な事は無いかもしれないが、このまま本音が伝わらなければ互いの為にもならない。

モモンはコレが千載一遇の機会と踏み、批判覚悟で口を開いた。



「すみません……本当なら私の口からキチンと伝えようとは思っていたのですが、お手を煩わせてしまったようで」

「いえいえ、とんでもないことです！　我々は今までずっと貴方に甘えてきていました。ならば、我々も微細ながら貴方の想いに応えるのがスジというものです」

「では、許可して頂けると？」

少し身を乗り出して聞いて来るモモンに対し、カスポンドは頷く。

「直ぐにとは参りませんが、もし貴方様が今回の依頼を受けて頂けるのであれば、依頼完遂後には私が国へ便宜を図り、必ずやモモン殿の希望に応える事が出来るよう尽力させて頂きます」

モモンは俄然やる気が出てきた。

つまり今回の依頼をこなせば『自由』が手に入るも同然なのだ。この世界へ迷い込んで以降、待ちに待った『冒険』が出来る。そんな期待に胸を膨らませずにはいられなかった。

（多分、働き掛けてくれたのはパベルさんだろう。ふふふふ、やっぱり持つべき者は友達だな！）

モモンとカスポンドは固い握手を交わす。彼はカスポンドの特命とも言える依頼を受ける事を決めた。何なら自分一人で犯罪組織を壊滅させても良いとすら考えている。

「具体的にどうすれば？」

「私の息の掛かった有力貴族の護衛と言う事にして、一度南部要所のデボネという都市へ赴いて貰います。著しく治安が悪化している南部では冒険者に館の警備や護衛を依頼するのは珍しくも何ともありません。その貴族の領地はなかなかの郊外で耕作地帯が広がってい

るのですが、情報によれば妙なゴロツキが彷徨っているらしいです。彼の与り知らぬ所で何やら良からぬことを企んでいるのではないかと踏んでおります」

「なるほど。護衛や警備の範囲内であれば行動に制限は？」

「特にありませんが、あまり不自然な動きは控えて頂きたいです」

「偶発的な戦闘は？」

「……お任せします。が、出来れば生きてまます捕らえて頂きたいです」

その後、カスポンドは部屋を後にした更に数日後、モモンへ南部貴族からの指名依頼で館の警備とその貴族自身の護衛を受ける事となった。

アダマタイト級冒険者として最初の仕事と言う事もあり、組合から出る時は盛大な見送りを受ける事になってしまった。また、アダマタイト級となればその依頼料もオリハルコン級以下の比では無く、思わず目玉が飛び出る位の高さだったと言う。

（あんな金をポンと出せるって……これから来るかも知らない指名依頼は貴族や政商クラスになるのかあ……疲れる）

これから自分の今生を賭けたと言っても良い依頼へ赴くと言うのにテンションが下がってしまった。

「そう言えば、王国や帝国にも今の自分と同じアダマタイト級冒険者が居るんだっけか。もし何処かで逢えたなら色々話を聞いてみたいなあ。アダマタイト級ならではの悩みとかさ」

まだ見ぬ同級同業者との出逢いにちよつとした期待を抱きながら、彼は組合を後にした。

## 第26話 蒼の薔薇

◇

リ・エステイーズ王国の王都リ・エステイーズ。広大で人々が賑わう王都の中でも一際目立つ豪華絢爛な建物である王城のロ・レント城。

その中のある一室にて、複数人の美しい淑女達が一つのテーブルを囲い御茶会をしていた。テーブルの上に置かれた1枚の地図を眺めながら。

「舐潰しに『黒粉』の栽培地を潰してきたつもりだけど……まさか『八本指』がここまで勢力を伸ばしていたなんて」

美しい淑女の1人が真剣な表情で温かい紅茶の入ったカップに口を付ける。彼女は王国の貴族アインドラ家の令嬢にして王国が誇るアダマンタイト級冒険者チーム『蒼の薔薇』のリーダーであるラキユース・アルベイン・デイル・アインドラだ。王国の第三王女が『黄金の姫』と評されているが、ラキユースも決して引けを取らない美貌と魅力の持ち主である。また、彼女は神官戦士で水神を信仰する信仰系魔法詠唱者であり、四大暗黒剣が1つ『魔剣キリネイラム』を持つ戦乙女でもある。

今は普段の冒険者装備ではなく、御令嬢然としたドレスを身に纏っている。

『八本指』とは王国の裏社会に蔓延る巨大犯罪組織で、麻薬取引部門、奴隷売買部門、警備部門、密輸部門、暗殺部門、窃盗部門、金融部門、賭博部門の8つの部門から構成されている。全体として見れば1つの組織だが、元々は複数の組織の集まりであった為、各部門同士の折り合いは悪く、互いの利権を奪い合い、足の引っ張り合いなど日常茶飯事で行われている。

中でも麻薬取引部門は組織内で最も幅を利かせている部門である。

この部門は『黒粉』もしくは『ライラの粉末』と呼ばれる麻薬を大量に生産し、巷に広く出回らせている。大量生産を可能にしている分、安価で裏市場で出回っている為、安易に平民達でも入手する事が出来てしまう。何よりこの麻薬の恐ろしい所は禁断症状が弱く、違和感無く重度の中毒に陥ってしまう所にある。しかし、王国上層部はこれらの麻薬をほぼ黙認している。それは巨大過ぎる『八本指』の魔の手が王国上層部：貴族社会ほぼ全域まで広がっているからに他ならない。『八本指』は表裏社会だけで無く、政治にまでその影響力を及ぼしているのだ。そして、その影響力は深刻な域にまで達しており、王国の腐敗政治の根幹となっている。

「これは厄介」

「うん、面倒い」

ラキユースの言葉に続けて反応したのは双子のニンジャ、ティアとティナだ。この2人もラキユースと同じ『蒼の薔薇』のメンバーであり、外見や服装ともにそっくりである為、見分けが難しい。一応、頭に巻かれているバンダナと服装の僅かな紋様の色が青と赤で違う。

「どうする？　　鬼リーダー」

「面倒だけどやる？　　鬼ボス」

双子のラキユースに対する独特な呼び方は、本来ならここで軽く叱る程度で済ませるのだが、今のラキユースにはその余裕も無く悩んでいる。彼女が見つめるテーブルの上には地図は王国某所郊外が描かれており無数のバツ印が記されていた。

『蒼の薔薇』の皆さんには、本当に感謝しています。皆さんの働きがあったからこそ今の王国があると言っても過言ではありません」

中でも抜きん出た美貌を持つ女性がラキユース達に感謝の言葉を

述べた。彼女こそ『黄金の姫』と名高い王国第三王女のラナー・テイ  
エール・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフその人である。

「何を言ってるのよ、ラナー。貴女のこの国を救いたいという想いを  
無視できるワケないじゃない。それに私達だって、王国を救いたい想  
いで行動してるのよ。だから、感謝の言葉は不要よ」

「でも、それでは——」

「でも」も無しよ。私達は友達なんだからね」

ラクユースは指を一本立てて左右に振り、ラナーの言葉を止めさせ  
てから微笑を向ける。それに応えるようにラナーも微笑みを返した。

ラナーとラクユースたちは『八本指』を撲滅し、王国をなんとか救  
うべく行動している。尤も慈善活動のような生易しいものではない。  
文字通り命懸けの正義心を持って彼女達は行動している。

その活動が麻薬栽培拠点となっている畑を焼き払う事だ。

村落内で堂々と麻薬を栽培する。それぐらいこの国は腐敗し切っ  
ているのだ。仮にそれを真正面から咎めたところでその地を治めて  
いる領主は「知らなかった」でシラを切り、そしてそれが認められて  
しまう。まともにもやっても意味が無いのならまともではない方法で  
止めるしか方法は無い。

故に彼女達は村の畑を焼き払うという暴力手段を取っているのだ。  
しかし、この方法も結局は無意味に終わるだろう。決定的な麻薬流通  
の根絶など出来はしない。

テーブルに置かれた地図に記載されている無数のバツ印は『蒼の薔  
薇』がラナーの依頼を受けて焼き払った麻薬栽培拠点である。

「でも…どうするべきかしら。王国内だけでも手一杯なのに」

その地図の傍には小さなボロ切れ同然の羊皮紙が一枚あり、小さな  
字で何かが書かれていた。

彼女達が悩んでいるのはそれに書かれている内容についてである。

「王国以外の土地でも麻薬栽培を始めていたなんて……でも、一体何処の国で」

「恐らくですけど、聖王国ではないでしょうか？」

「聖王国？」

「はい。帝国は話を聞く限りでは上手く対処しているようですし、竜王国は入り込む余地が無いほどに戦乱状態で評議国と法国はそもそも『八本指』の活動を僅かでも許していない様子です。となると消去法的に見て残るのは聖王国のみとなります」

ラキユースはラナーの言葉を心の中で思索し納得する。

「確かに。聖王国はアベリオン丘陵の件もあつて不安定なのは変わらぬ、北部と南部では現聖女王派閥と保守派閥による喧嘩合いも続いている。北部は聖女王とその周りが有能な分、南部はかなりキナ臭いらしいから……なるほど、連中は南部で勢力を広げつつあるのね」

「ここ最近、聖王国へ直接通じる公道を頻繁に荷馬車が行き交っていると聞いております。その荷馬車が商人であれ何であれ、『八本指』の関係者である可能性は十分考えられます。そして見つかったこの暗号文……まだ下地を固めている段階のようですが、彼らの活動は概ね順調である事を示しています」

ラナーの言葉にラキユースは歯噛みした。

王国の裏に蠢く犯罪組織の運営が上手くいくほど腹立たしい事があるだろうか。それも此方の努力など露ほども気にしていないかの如く。

「『八本指』関係の荷馬車を妨害する？」

「でも中には普通に交易目的の荷馬車もある」

「つまり入念に事前に調べる必要がある」

「でもその時間もない」

「今でも手一杯。そこまで流石に手は回せない」  
「どうする、鬼ボス「リーダー?」?」

双子のニンジャが同時にリーダーであるラキユースへ問いかけて来た。心情的には聖王国へ勢力を伸ばそうとする『八本指』を何としても止めたい。しかし、2人の言う通り現実問題そこまで手を回す暇がない上に全てが『八本指』関係の荷馬車とは限らない。

連中もそれに紛れて下地を整えているのだろう。巧みに素性を隠す連中の事だ、生半可な調べで荷馬車を襲えば痛い目に遭うのは目に見えている。

「悔しいけれど、今はそこまで手を回せる状況じゃないわ。私たちは今できる範囲を精一杯やるしかない」

「今はそれが良いと思います。あれもこれもと手を出しては結果的に破綻してしまうのは目に見えているので、今の活動を地道に続けながら『八本指』の尻尾を掴める機会を探るべきです」

ラナーの同調する声にラキユースは頷く。

これまで親友であるラナーの天才的な頭脳と発想力には何度も助けられてきた。今回の件もそうだが、『八本指』の暗号化された文を彼女はいとも容易く解析してしまう。お陰で麻薬栽培の場所の特定も進んでいるのだが、結果は知っての通りイタチごっこも良いところがある。

「耐えるしかない、か」

『八本指』は決して一枚岩ではない。其々の部門が自身の利益拡大を図るために他の部門の何かしらの情報や証拠をワザと各拠点へ残したりする場合がある。

その情報を元に『八本指』を潰していくしかない。残念だがそれが今彼女達が出来得る精一杯なのだ。

それくらい『八本指』の根は深く、そして複雑だ。

「……どうしようもない事を悩んでも仕方ないわ。次は以前話していた村へ行くつもりよ。当然、全ての麻薬畑は燃やすつもりよ」

「優秀な暗殺者の腕の見せ所」

「腕が鳴る」

「ガガーラン達にはもう直ぐ、クライムが伝える頃合いね。2人に押揃われてなければ良いけど……」

ラナーは鷹揚に頷いた。

「では、もし何か暗号文らしきモノが見つかった時は……」

「ええ、その時はお願いね」

ラキュースのウインクにラナーは美しい笑顔で応えると、何かを思い出した様に手をパンと叩いた。

「そうでした！　実はラキュースに伝えたい事があったの！」

「伝えたい事？」

キョトンとするラキュースに構わず、ラナーははしゃいでいた。

「実は先日、聖王国で——」

◇

黄昏時になれば王都も昼間とはまた違う賑わいで溢れていた。今日の労働を酒の席でガヤガヤと騒ぎながら労い合う光景が王都の至る所で散見される。

人々で賑わう通りを間を縫う様に小走りで走る、短く切り揃えた金髪と太い眉と吊り上がった三白眼が特徴的な一人の少年がいた。

彼の名はクライム。



リ・エステイーズ王国第三王女であるラナー・ティエール・シャル  
ドロン・ライル・ヴァイセルフお抱えの兵士である。今彼は主人であ  
るラナーからの御使いでとある場所へ向かっていた。

暫く進むと彼はとある宿屋へ辿り着いた。扉を開けると一階が丸  
ごと酒場兼食堂になっており、複数人の冒険者達が其々の丸テール  
で談笑をしたり、次の仕事について話し合いながら酒や料理  
に舌鼓を打っていた。

クライムは他の冒険者たちには目もくれずに店の一番奥にある丸  
テーブル席へ歩を進める。

そこには2人の冒険者が居た。

1人は漆黒のローブで全身を覆い、朱の宝石が中心に埋め込まれた  
仮面を被った小柄で、もう1人は対照的に丸太の様に大柄な人物だ。

「よお、童貞！」

大柄の人物がクライムに気付くなり、右手を振って声を掛けてき  
た。クライムは自身の呼び方に敢えて気にしないふりをして大柄の  
人物に話し掛けた。

「お久しぶりです、ガガーランさん。それにイビルアイ様」

「ああ」

「久しぶりだな。元気そうじゃねえか」

ガガーランと呼ばれた大柄の女性とイビルアイと呼ばれた小柄な  
少女。この二人はアダマンタイト級冒険者チーム『蒼の薔薇』のメン  
バーである。ガガーランは巨石のような体躯を持つ正に鍛錬に鍛錬  
を重ねた女戦士と言った風貌を有しており、逆にイビルアイは少女然  
とした小柄な体格をしているがその言葉の節々からは貫禄が感じ取  
れる。

「何だ何だ？」

まさか俺様に抱かれに来たのか？」

「ご冗談を……アインドラ様からの言伝です」

「恥ずかしがんなよ、そんなんじやいつまで経っても——」

「ガガーラン、その辺にしろ。話が全然進まん」

アインドラとは『蒼の薔薇』のリーダーであるラキユース・アルベイン・デイル・アインドラの事である。因みにラキユースは貴族の出自で、第三王女であるラナーとは親友の仲である。その為、時折今日の様にラナーから私用で御茶会に誘われたりなどをしている。しかし、実際は単なる御茶会ではなく、王国が抱えている深刻な問題を打開しようと考えるラナーと友人として彼女に協力するラキユースたちの極秘会談だ。

クライムはそんなラキユースから与えられた言伝を留守役の二人へ伝える様に遣わされたのだ。

◇

アインドラからの言伝を済ませたクライムは、本来なら直ぐに主人の下へ戻らねばならないのだが、ガガーランがそれを制止して彼にある話を始めた。

「なあ、童貞。新しいアダマンタイト級冒険者が現れたって話聞いているか？」

「あ、新しいアダマンタイト級冒険者ですか!？」

「その反応を見るに知らねえようだな」

ガガーランはクツクツと笑いながら彼の反応を面白そうに眺める。

因みにこの席の会話が他へ漏れないよう魔法詠唱者のイビルアイがサイレンス〈静寂〉を掛けてくれている。

「まさか…帝国にですか？」

クライムは苦い顔をしながら新しいアダマンタイト級冒険者が誕

生した候補として帝国の名を口にする。とは言え王国と帝国は敵対関係であるが故に、帝国ではない事を期待したい。

「いや、帝国じゃねえ」

「では…王国でしようか？」

「アツハツハ！ 残念だが王国でもねえ。まあ『残念』つつても俺らからしたら商売敵にならねえからある意味有難いんだけどなあ！」  
「が、ガガーランさん…」

クライムをおちよくる彼女をこれまで眺めてばかりだったイビルアイが溜息を吐いて話に介入してきた。

「ガガーラン、その辺にしてやったらどうだ。勿体ぶらずさつきと教えてやれ。小僧だって暇では無いんだぞ」

「大丈夫だって、急いで戻った所で姫さんの側にはラキユースとテイアとテイナが居るんだぜ。万が一な事なんざ起きやしねえよ」

「まあ…それもそうだが」

要するにクライムは居てもいなくても変わらないと言っている。しかし、それはクライム自身が良く理解していた。自分は決して強くもなければ、特別な才能を有している訳でもない。だからこそ、彼は敬愛する主人を護る為に日々剣の鍛錬に励み続けているのだ。

「いいか？ 新しいアダマンタイト級が生まれたのは聖王国だ」

クライムはガガーランの言葉にあまりピンと来なかった。冒険者のイメージが聖王国には無かったからだ。しかし、徐々にそれが聖王国の誰を指していたのか気付いた。

「ローブル聖王国ですか？ 確か最近、久しぶりにオリハルコン級冒険者が現れたと聞いておりましたか…」

「ああ。そのオリハルコン級だった奴が、ついこの間アダマンタイト級になったんだとさ」

「そ、それは本当ですか!？」

「嘘言っつてどうすんだよ」

クライムが驚くのも無理はないと2人は思っていた。その話を聞いた時の『蒼の薔薇』のメンバー達は真っ先に虚偽の可能性が脳裏によぎったからだ。

普通に考えて先ずあり得ない。

どんな強さを持つ人物であっても長い年月を掛けて実績と経験、信頼を積み上げて漸く昇級試験を受けられるのだ。昇級し上位のプレートへ行けば行くほど報酬額も増えるが並行して難易度も上がりそれなりの時間は掛かる。つまり、その聖王国で生まれたアダマンタイト級冒険者はそれほどの偉業を成し遂げたと言う事なのだろう。

「まあ俺様もついさつきイビルアイからその話を聞いた時はマジで驚いたぜ」

「すまなかったな、言うのをすっかり忘れてた」

2人の会話を他所にクライムは手に汗を握るほどの期待と憧れ、好奇心で胸が熱くなっていた。その新しいアダマンタイト級冒険者は何者で、どんな偉業を成し遂げたのだろうか。

彼はそんな疑問を聞かずにはいられなかった。

「も、申し訳ありません。その聖王国で生まれた新しいアダマンタイト級冒険者のお名前は何とおっしゃるのですか? 一体、どのような偉業を成し遂げたのでしょうか?」

「あー、そう言えば俺も詳しくはまだ聞いてねえな。知ってんだろ、イビルアイ?」

イビルアイは咳払いをしてから話し始めた。

「確かモモンという名前だったな。聖王国では『漆黒の英雄』や『黒騎士』などと呼ばれている戦士で、チーム名は『漆黒』と呼ばれているようだ」

「ほへへ。んで、他のメンバーは？」

「いない。モモン1人だけだ」

ガガーランは驚愕と呆れが入り混じった顔で眉を顰めた。

「はあ〜?」 1人だけとかマジか? 駆け出しならまだ1人だけってのも納得するがよ……そのモモンとかいう奴はよっぽど腕っ節に自信がある馬鹿なのか? それ故にアダマタイトってか。はは、とんでもねえな」

クライムもガガーランの言葉に同意見だ。しかし、それでもアダマタイト級へ昇り詰めるほどの冒険者だ。それにこの情報を持ち出したイビルアイがガセネタを話すとも考えられない。

「それでそのモモンとかいう奴はどんな偉業を成し遂げたんだ?」  
「何でも2ヶ月程度の間でこなしたというが…」

イビルアイは淡々と説明を続けた。

「アベリオン丘陵に現れた1万體にも及ぶアンデッドの出現騒動の解決、ギガント・バジリスクの討伐、あとは『十傑』の一角を落とした、と聞いているな」

「『十傑』?」

「アベリオン丘陵に跋扈している亜人部族の10體の長達だ。噂では全員が英雄に匹敵する実力者揃いらしい」

「へえ〜そいつあスゲえや。しっかし、聖王国もウチに負けず劣らずで厄介なモン抱えてんだなあ」

「確かにアベリオン丘陵は200年前からモンスターや亜人部族が犇く場所ではあったが、英雄の領域に匹敵するほどの強者は居なかったはずだ。元々、独自の文化を築き得る亜人は、基本的に『強者こそが絶対』という価値観を有している。生存競争の中で自然と強者が生まれるようになったと言ったところか」

「ああ。そこが亜人の厄介なところだな」

クライムは息を呑んだ。

特に彼が最もイメージし易い偉業はギガント・バジリスクの討伐である。蜥蜴にも似た全長10メートルにもなる巨大モンスターで、石化の視線、体液は即死級の猛毒、分厚い皮膚はミスリル級に匹敵するという。1体で都市や街を壊滅出来るほどの実力を持つ伝説の魔獣を討伐したとなればアダマンタイト級と評されるのも無理はない。それもたった1人となれば尚更だ。

加えて英雄級の亜人族の戦士にも打ち勝ったとなればいよいよとんでもない人物である。

「なあ……イビルアイ、ぶつちやけその話ってどこまでが真実なんだ？

流石にギガント・バジリスクを戦士一人で討伐なんざ無理があるぜ。ありえねえよ」

やや呆れ気味に天井を見上げながら椅子に凭れ掛かるガガーランだが、イビルアイは人差し指を立てて「チツチツチツ」と左右に振る。

「これに関しては殆どが真実と見ていい。アンデッド騒動に関しては何人もの斥候が大地を埋め尽くす程のアンデッドの大群を目撃しているし、モモンが単身でアベリオン丘陵へ駆け付けて二本の大剣を振るいアンデッドを殲滅している姿を聖騎士団の連中が目撃している。それに奴は一万体にも及ぶアンデッドの大群を所持していた貴重なマジックアイテムを使用し、その大半を殲滅したと聞く。実際、アベリオン丘陵には大きなクレーターができていた」

「なるほど。アンデッドの件はマジっぽいな」

「それから、大量のアンデッドの発生は人為的な物だったらしく、その首謀者もモモンは捕らえたようだ。その首謀者が何者なのかは不明だが、ズーラーノーンではないかという非公式の見解もある。エ・ラントルのバレアレ薬品店の孫が拉致されたという事件にも関わっていたようだ」

「あー、確かあの婆さんの孫ってヤベエタレント持ってたんだよな。それを狙ってたってわけか……んで、それをモモンとか言う野郎が解決したってか」

冷汗を垂らすガガーランにクライムは問い掛けた。

「ガガーランさんでも難しいですか？」

「まあ……骸スケルトン骨や動死ゾンビ体程度なら1万体制でも突破は出来る。だが、その後にはズーラーノーンの、それも高弟級となれば無理だなあ」

あのガガーランでさえモモンと同じ成果を上げる事は無理だという発言にクライムは驚いた。しかし、そうなると益々モモンという戦士の実力が計り知れないものとなる。

「あ！ す、すまないな……1つ訂正がある。モモンは正確には『魔法戦士』らしい」

「魔法戦士？」

聞き慣れない言葉に困惑するクライムだが、話を聞いたガガーランは眉間に皺を寄せた。

「おいおい、イビルアイ。つーことはモモンは中途半端な実力者って事になるんじゃないかねえか？ 二つも職を修めたら専門職みてえに特化出来ねえから、戦士としての技量も魔法詠唱者としての実力も大した事がなくなるんじゃないかねえか」

ガガーランの言うように職業を二つ併用する者も数は少数ながら確かに存在するが、その特性上、どちらにも特化する事ができない為、基本その実力は中途半端に終わることが殆どだ。しかし、イビルアイは話を続ける。

「それがな。奴は第三位階魔法まで行使出来るらしい。そもそも戦士としての実力は『十傑』の一人を倒したのだから…まあ異質としか言いようがないな」

「第三位階ツ!? おいおい、冗談じゃねえぞ」

「よほどの天才か、それともタレントか、或いはマジックアイテムの力か…どちらにせよ聖王国はモモンを国内へ閉じ込めておくのに必死らしい」

「確かに帝国辺りならやりそうだ」

一部の天才でしか到達し得ない第三位階魔法を行使できる。コレがどれだけ凄い事なのかは魔法知識に疎いクライムでさえ理解出来た。同時に彼の中で嫉妬心が燦っていた。そのモモンと言う人物を自分は良く知らないが、少なくとも自分は護りたい人が、忠義を尽くしたい人がいるのにその為の才能を持っていない。イビルアイから一応、魔法の修行をつけてもらった事があったが結果は残酷だった。

——お前に才は無い、その分別の努力をしろ——

と、ハッキリ告げられてしまった。しかし、先ずは魔法の知識を学ぶべきだと助言された。知識を増やせば魔法を行使する相手の狙いが理解出来るからだ。厳しいことを言うようだが、彼女なりにクライムを気遣ったの助言である事は間違いなかった。

「ギガント・バジリスクに関して、護衛を依頼していたロフール商会のロフールが実際に奴が単身で討伐したのを見たという証言がある」



「ほー、あの豪商がねえ。つうことは、モモンは俺の凝視殺ゲイズ・ペインしと同じ効果の装備を持つてるのか？ アンデッド騒動でも強力なマジックアイテムを使ったらしいじゃねえか」

「常識的に考えればそうだろうな。いや、そうとしか考え付かん。何の考えも無しにギガント・バジリスクに挑むなど愚の骨頂だ。私でもアレが相手となれば本気で対処せねばならない」

「いやいや。イビルアイは魔法を使って遠距離から攻撃すりゃあ楽勝だろう？」

「いくら私でもそれは無理だ」

聞けば聞くほど凄い人物なのが分かる。

モモンと名乗る人物が王国の冒険者でない事が心底残念だが、もし彼と出会う機会があれば是非色々話を聞いてみたいとクライムは思った。

(漆黒のモモン：どんなお方なのだろう)

彼の中で思い描く英雄像を脳裏に浮かばせながら胸を昂らせていた。